THE CENTRAL REVIEW

中央公論

五月號

第廿八年第六號　第貳百九拾壹號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

蘆花 德富健次郎著

みゝずのたはこと

新刊

過る六年間土の洗禮を受けて武藏野の孤村に鍬をとれる著者が、折に觸れ興に乘じて筆を走らせし即興のスケッチ、短篇小說、瞑想、書翰、紀行等を集む。清新なる田園の小景、涙を含む笑に滿てる物語、平淡の中戰慄すべき恐ろしき說話、詩化せられたる教訓、有象より無象に通ふ神秘の暗示、卷中に充滿す。都會住者は讀んで麥の穗末を渡り來る暮春の薫風の如き自然の氣息に接せよ。田舍に住む人は之れに依りて新に吾周圍を見るの眼を開け。九葉の寫眞版は、本文を助けて、說話の舞臺を讀者の眼前に躍如たらしむ。

紙數八百頁 四六判クロース製本 定價金一圓五十錢 郵稅十六錢

發行所 東京市銀座大通新橋際 振替貯金東京二〇〇番 新橋堂出版部

▼賣捌所 東京市日本橋區吳服町八 振替東京二〇七七六番 服部書店

市内並に全國各地書店▼

東京市銀座 電話新橋一九一九 新橋堂家具部



組合せ本箱

▲某宮家、德川公爵家、大隈伯爵家を始め其他の諸名家より御注文の榮を辱ふする本箱!!

▲多數の優れたる特徴を有し現時歐米諸國に大流行を極め居れる本箱!!

定價 金廿六圓 檜製 / 金廿八圓 欅製 / 金卅圓 櫻製

運賃荷造費御自辨

目錄 往復ハガキにて御報次第送呈す

印刷

印刷の御需めに應ず

（特に）商品目錄並に營業案内の作製を其長所と致し候

（目錄無代進呈）

東京市銀座大通新橋際

新橋堂印刷代理部

電話 新橋一九一九番 ‖ 振替 東京二〇〇番

信用なき店舗及卑猥なる賣品廣告掲載は謝絶す

エマーソン原著

高橋五郎先生譯

處世論

是れ『コンコードの聖人』と呼ばれたる曠世の哲人エマーソンの名著『コンダクト、オヴ、ライフ』(處世論)の全譯なり、言々皆寶珠金玉何れか天來のものにあらざらん。苟くも書を讀まば、斯の書の如きを措きてまた何れにか求めん。

總クロース金字入 高雅美本 特價金壹圓 郵稅拾貳錢

(三版)

目次

- ◉運命論
- ◉修養論
- ◉餘論
- ◉勢力論
- ◉禮儀論
- ◉美論
- ◉富有論
- ◉禮拜論
- ◉迷想論

故田岡嶺雲著【三版】

數奇傳

▼序文 雪嶺博士外十五氏 ▼挿畫 未醒、芋錢、月村七枚

總クロース金文字入美本 全一册 正價金九十錢 郵稅金十錢

著者自ら序して曰く『數奇傳一篇、是れ予が生きながら屍の上に建てた自撰の墓誌也』と。著者病臥五年三尺の牀上を天地として纔に閑を筆硯に遣る、其轗軻數奇の半生を追懷して此篇を爲す、即ち戀あり、病あり、貧あり、放浪あり、下獄あり、觀戰あり、多恨善泣の著者が運命に泣き、運命と鬪ひ、遂に運命に安ずる波瀾曲折の閱歷は正に詩よりも多趣に小說よりも多奇也

戸川秋骨先生譯 ▼上下二册總クロース金字入美本▲

エマーソン論文集

上卷正價壹圓四拾錢 下卷正價壹圓貳拾錢 郵稅各一册拾貳錢

【五版】上卷目次

- ◉歷史論
- ◉自恃論
- ◉保償論
- ◉靈法論
- ◉戀愛論
- ◉友情論
- ◉細慮論
- ◉勇壯論
- ◉大靈論
- ◉圓環論
- ◉智力論
- ◉藝術論

【再版】下卷目次

- ◉詩人論
- ◉經驗論
- ◉人格論
- ◉作法論
- ◉進物論
- ◉自然論
- ◉政治論
- ◉名目論
- ◉改革論

發行所 東京市神田區雉子町 振替東京七九五番 玄黄社 全國書店賣捌

新刊 ▶三叉竹越先生著◀ 六版

讀書樓閑話

三叉竹越先生の文章、長篇は大河の如く短篇は谿流の如し、谿流の面白味は其の屈曲の多きにあり、此書は過去六七年間の出來事につき、先生が雅俗混淆の文體もて其意見を記されたる短篇集にして、政治、外交、軍備より人事百般に亘りて如何にもサッゼスチーブ、如何にも默示的にして、警拔云はん方なし。

洋裝金釘美本
四六版五百廿頁
定價金壹圓卅錢
郵稅小包八錢

惜春雜話

三叉竹越先生著

●東洋哲學曰　世の道學先生や成功家が、徒に過去を重んじ未來を重んじたる青年訓を說く時に當つて、これは現在の春を說く、「青年の春は惜むべし、人生の春は萬金も亦買ふ能はず、萬牛も止むる能はず、然れども唯希望だにあらば功名心だにあらば、吾人は永久に春と共にあり、又無限の青春を有するなり」と以下諄々十八項に分ち說く處平淡而も愷切、蓋し近來の快著とす、附錄として國際議院聯合會に臨むの記、英國皇帝に謁見の記、北京消息、漫遊記を載す、氏は言論の人、又筆の人、才筆流麗、現代思潮に溺るゝの人は取つて以て羅針盤となせ（九月十日）

洋裝金釘美本
四六版四百五十頁
定價金壹圓廿錢
郵稅小包八錢
（本書に對する各新聞雜誌の大評論は載せて卷末にあり）

東京市牛込區揚方町　二酉社　振替四七一〇番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

幸田露伴博士編著（川村精雄書伯裝幀）

日本精英

菊版洋裝本綴美麗紙數壹千六百餘頁

全二冊函入

正價金五圓

特價金四圓

小包料 内地二十四錢 臺灣、朝、清五十錢

特色特價提供期限 大正二年五月十日

特價提供

山秀水清是れ我國の精英なり、其間に生れて名聲を後昆に傳ふべき人、是れ我國の眞精英也本書は此眞精英たるべき偉人英傑千有餘名の逸話を蒐集す然れども漫に逸話を蒐集したるものといふを已めよ。古來の碩學が畢生の文才を注いで偉人英傑を傳したる金聲玉振の名篇より更に最も趣味ある個所を抜萃したるものなり。或は之を碑文に取り、或は隨筆に取り、或は自傳に取る其取捨の方法一定せず。之れ先生博學の致す所たり而して先生本書を編著するに數萬巻の古書斷篇に身を沒頭して幾十の門生を督し二年の歳月を費して成るの勞苦を嘗めらる。以て先生空前の大名著述とすべく、亦此種出版界の記錄を破りたるものといふべしいま上に内容の特色を列記す。

内容特色

■神武以還維新に至る迄其人物の歿年順を追ふて列序す

■人名辭書の如き乾燥なるものにあらず、又單なる逸話集の如き膚淺的のものにあらず

■天皇・大臣・英雄・僧侶・神官・操觚者・畫家・任俠等あらゆる方面を網羅す。而して娼や妓や氣骨あるもの其間に赫灼として時に妖艶の美化を開くあり。

■文章は最も名文にして最も趣味あるものを取る。而して可及的其傳すべき人物に最近き人の名作より取る例へば藤原鎌足は惠美押勝の家傳を取り、平將門は將門自身の陳狀に取り、武田勝頼は理慶尼の記文に取り、直江山城守は自身の『答讓光寺書』に取りたるが如し。すべて其人物の面丰風采を遺憾なく傳へんことを期す

■神武以還の文章の變遷を見るに於いて大文學史たるべく、各時代各人物の面丰風采を窺ひ得るに於て大裏面的歷史たるべし

■本書に要せられたる參考書數萬巻

此故に何人も一本を購ひて日本の精英に接し以て家寶とすべし。殊に教育家の資料となること多大なるを以て全國各小學中學校より注文山の如く來る

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 （電話下谷四〇七九 電話下谷一六七二） 聚精堂

文學博士 森鷗外先生著書

一幕物

菊判全一冊 八百參拾六頁
定價金貳圓、小包金拾四錢

海外近代戯曲を我邦に紹介したる最初の書。名曲すべて十四篇。其五曲は既に我が各劇場に上場せらる。有名なるサロメ債鬼等亦本書中にあり。

新一幕物

四六判全一冊 四百拾頁
定價金壹圓 郵稅金拾貳錢

新版なり。海外最新の六戯曲。ヂオゲネス馬盜坊の二曲逸早く實演に供せられ、觀客の大喝采を博したり。

我一幕物

四六判全壹冊 三百五拾八頁
定價金壹圓 郵稅金拾貳錢

博士の創作に成る七戯曲。浦島日蓮生田川など實演せられ、名作プルムウラ假面など亦本書の中にあり。

みれん

四六判全一冊 參百八拾貳頁
定價金壹圓 郵稅金拾貳錢

原著は「死」と題してシユニッツレルの名作なり。妻に對する夫の執着を題材とす。某夫人の來書に「みれん」は氣味が惡くつて到底讀續けることが出來ませんでした、とありたり。

青年

四六判全一冊 參百拾八頁
定價金壹圓 郵稅金拾貳錢

長篇。一青年あり、文壇の諸大家に見え、汎く百家の言說を聽く。現はれ來る人物悉く現今文壇の名士なり。

走馬燈 分身

四六判二冊揃
近刊

短篇集二冊。「走馬燈」は博士が自分の周圍を書いたもの。「分身」は博士が自分自身を書いたもの。自己と自己の周圍と二冊を姉妹篇として發行す。

東京京橋區銀座三丁目
大阪南久太郎町三丁目
京都祇園南側萬壽小路

籾山書店

（振替）東京二四一七番
大阪一三六八六
大阪二〇八九二

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 坪内逍遙譯

ショー傑作集第壹

ウォーレン夫人の職業

譯者逍遙博士我が文壇の泰斗たるもの卅年、而も未だ曾て現代社會を寫したるものに筆を染めず、翻譯を試みたることすらあらず、其之あるは實に本譯を以て嚆矢と爲す、劇文學にも劇術にも精通したる博士にして今新に處女譯を試む、何等か特殊の用意あり工夫あり特色あるべきは絮說を要せず、原作は世界的大家ショーが傑作中の傑作、社會問題を提供して海外文壇を騷したる名篇なり……

◉ショー傑作集第二「武器と人」印刷中……

洋裝全一冊 挿圖數葉入 正價六拾錢 郵稅四錢

早稻田大學教授 島村抱月譯

イブセン傑作集第壹

人形の家（ノラ）

◉世界の近代劇中最有名の作也◉婦人問題は今や世界の最大社會問題の一にして此劇は近世婦人問題の燒點を代表せる藝術也◉文藝協會公演に於てノラとマグダとは我新劇壇に空前の感動を與へたり此書其脚本也◉「新しき女」の問題はノラ及マグダの演劇より始まる◉卷首に此作の藝術論及來歷五十頁の長文を加ふ……

◉イブセン傑作集第二「海の夫人」印刷中

【附言】トルストイ作「アンナ、カレニナ」ゴーリキー作「其の三人」フローベル作「ボヴリ

總布製壹冊 挿圖數葉入 正價九拾錢 郵稅八錢

發行所 東京牛込早稻田 振替東京一二三番 早稻田大學出版部

（發賣所 東京日本橋本町 振替東京二〇番 博文館）

信用なき店舖及卑猥なる賣品廣告の掲載は謝絶す

中澤臨川先生新著（口繪名畫 一。レピン畫肖像＝二。トルベツコイ作馬上のトルストイ＝三。クレミヤ海岸のトルストイと夫人＝四。トルストイの墓＝五。ゲー畫書齋のトルストイ）

トルストイ

新版

菊判頗美製本約三百二十頁 壹圓卅錢 送費八錢

トルストイは死せり。されど、渠れは又長しへに生ける也。藝術に、宗教に、哲學に、將た道德に、トルストイを度外しては、斷じて近代の思想を解し得べからざるによりて、渠れの生けるは證せらる。此「人」としては餘りに崇高に、「神」としては餘りに野性に富める、世界が有せりし最も偉大なる人物を、夫れ吾人は如何に取扱ふべきか。本書則ち其出處修養、思想、作物、言行、感化を直寫解剖して長短美醜始めて明かに、一讀著者が造詣の非凡なるに驚倒せしむ。乞ふ、自己が精神生活の内容を豐富ならしめむと欲するの士は、來つて此ヤスヤナポリアナの大哲人を仰がれよ。

東京神田今川橋大通 **東亞堂** 電話本局八八四 振替東京一七一



中央公論第廿八年五月號目次



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

LA FEMME À L'EVENTAIL



VELAZQUEZ

中央公論



五月號
廿八年第六號
第二百九十一號

米國の不正不義

（一）

米國カリフォルニア州議會には多くの排日法案の提出せらるゝあり、若し其の成立を看るに於ては、啻だに同州に於ける我が國民の權利々益を全滅せしめらるゝに止まらず、又實に我が國民の名譽と我が國家の面目とを蹂躪せらるべし、而して其の根源一に米國一部人の不正不義に存する事疑ふべからず、故に吾人は輿論と共に、嚴格に之を全米人の良心に訴ふると共に、問題の眞相を詳明ならしめざるを得ず。

評論の順序上、先づ排日諸案を分類して逐次に之を叙し行くべし、現在の新聞紙に於ては餘に語りて詳らかならざるの遺憾なきに非ざるを以て也。

(二)

土地所有禁止法案として加州上下兩院に提出せられたるもの各四案あり、彼の州會は之を同一委員に附托し、便宜上一の委員會案（コミッティー、ビル）として本會議に提出せしめたるもの左の如し。

上院委員會作成案

(一)外國人は州内住居と否とを問はず、今後賣買其他により土地を所有し、又は土地に關する權利を享有するを得るも、一箇年以上の期間に渉るを得ず、未成年者は成年に達したる後一箇年限り享有するを得、期限後は總て官沒せらる。

(二)株式の大部分が外國人の手に屬する會社は、何れの國の法律に依て成立せるを問はず、州内に於て土地を所有し得るも、一箇年の期間に限られ、期限後は官沒せらる。

(三)外國人及び前記の會社に對する借地及び土地に關する權利に關係ある諸契約は、三箇年を限りとし、更改契約するを得ず。

(四)本法は市民たる意思の表示をなしたる外國人に適用せられず。

(五)本法の規定は、條約に依り享有する外國人の權利を侵害せず。

(六)官沒したる土地は、公賣處分に附し、費用を控除したる代金を所有者に下附す。

(七)本法條項中、憲法違犯のため、無效を宣言せらるゝことありとも、其他の條項は依然效力を失はず。

(八)本法は今後土地所有權の取得に適用さるべし。

下院委員會作成案

(一)一般外國人の不動産所有を禁ず、但し現所有主及び其の妻子の手にある間は、本法の適用を受けず。

(二)今後相續、賣買又は法律の結果に依り、不動産を取得したる外國人は一箇年間、其の未成年者は成年に達したる後一箇年を限り之を所有することを得。

(三)本法に違犯して不動産を所有する者は、裁判の結果公賣に附す、但し所有主が右一箇年の間に市民となり、又は第一歸化證を

得たる時は此限に非ず。

(四) 右訴訟の提起は檢事の責任なるも、若し檢事が其の義務を盡さざる時は、市民之を成すことを得。

(五) 外國人に對する五箇年以上に渉る農業用及び都市内不動産契約又は賃貸は無效とす。

(六) 歸化權なき外國人を過半數の持主とする會社は、外國人と看做す。

下院案は土地が現所有主及び其の妻子の手にある間は所有權を認むるも、三代の相續者には一箇年間の所有を許すのみ、上院案に至ては斯の如き條件すらなし、又借地は上院案にて三箇年、下院案にて五箇年を限るが故に、今後は加州に在留する日本臣民は、一箇年以上土地を所有する權利なく、又三年乃至五年以上土地を賃借する權利なきものと爲らざるを得ざる也。

試みに加州に於ける在留日本臣民の農業用としての所有土地及び賃借土地の面積を看るに下表の如し。

	所有地	賃借地
明治三十八年	二、四四二エーカア	五九、四一七エーカア
同　三十九年	八、六七一	八五、三二六
同　四十年	一三、八一五	一一六、八九六
同　四十一年	一五、一一五	一四二、一六八
同　四十二年	一六、四四九	一七六、六三四
同　四十三年	一六、九八〇	一七八、七六二
同　四十四年	一七、七六五	二〇一、九六九
大正元年	二六、五七一	二一九、一八二

昨年度に於ける在留日本臣民の手に收穫したりし農作物の價額は、實に二千一百餘萬弗（四千二百餘

萬圓）の多きに達したり、更に其の內の重要なる六種農作物に就て、カ州全體の產額と、日本人の手によれる產額とを表示すれば下の如し。

	全生產額	日本人生產額
菓實	一一、七七〇、〇〇〇	三、八六六、二八〇
甜菜	五、一五〇、〇〇〇	八七八、七〇〇
葡萄	一四、七三〇、〇〇〇	一、六八五、〇〇〇
馬鈴薯	三、三九九、九五〇	一、三三一、二〇〇
野菜類	二一、二九〇、〇〇〇	九、一五〇、〇〇〇
苺	一、五六〇、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇

菓實は柑類桃等にして三割七分、馬鈴薯は四割、野菜類は四割三分にして、カ州の名產たる苺に至ては、殆んど八割三分に上る、日本農業の盛大なる想ふべし、然るに其の土地所有權と借地權を剝奪せんか、此の事業は實に根底より覆滅せらるべし、假に二千二百餘萬圓の收得を資本の一割とせば、正しく二億二千萬圓の財產を剝奪せらるゝもの也、損害の輕微ならざる論莫きのみ。

カ州には今尚ほ荒蕪の地太だ多し、故に彼の國の土地所有者は、勤勉なる日本人の手によりて之を開墾し、以て其の地價の昂騰せんことを希望せざるは莫く、且つ其の結果として荒地を良田に變じ、有要なる產物を增加することは、天與の利源を開拓する所以にして、實に文明の進步に外ならざるに、獨り州會が此の勢ひを阻止せんと欲するは何ぞや、蓋し排日熱の起る最大なる根源は、實に在留勞働者にあり、カ州在留の勞働者は、大抵歐洲本國の生活に堪へざりし落伍者が、遠く漂寄し來れるものにして、

其の品性の劣等なる、到底勤勉にして且つ方正なる日本農夫と比較すべからず、彼等が懶惰にして地主たり小作人たる能はず、依然として勞働者たる間に於て、日本人が孜々勉勵し、其の效果によりて地主となり小作者となり、收穫の全部又は半部(小作人は大抵地主と收穫物を折半す)を得るは、彼等の平生嫉視に堪へざる所とす、然るに日本人は米國に歸化するを好まず、又歸化するに由なくして、政治上の勢力絕無なるに反して、彼等自身は容易に米國市民となり、選擧權(米國は總て普通選擧なり)を得て政治上に優勢を占むるに乘じ、州會議員を操縱して以て排日手段を執り、幾んど到らざる所なきのみ、現に加州投票の大多數は、實に彼等勞働者の占有する所なるが故に、州會議員たるもの勢ひ彼等の歡心を買はざる可らず、即ち心に排日の不正且つ不利(州全體のため)なるを知るも、有權者たる勞働者の意思に逆ふ能はず、强ひて排日案を支持する情勢にあり、勞働派等の有力者が常に州會の內外にありて議員の行動を監視し、苟くも排日案に反對するを許さゞる事實に視るも、蓋し思ひ半に過ぎん。

日米條約を精視するに、土地所有に關する何等規定あることなし、故に加州々會が法律を以て土地所有權を禁止するも、條約違犯と爲すことを得ず、勿論其の第十四條に於て、一種の最惠國約款の均霑取極とも視るべきものあるも、土地所有權の禁止が總ての外國人に涉る以上、奈何ともす可らざる也。

我が國にて刊行する外字新聞中、或は日本政府が外國人の土地所有を禁じ、且つ外國人の農業其の他の勞働を禁止するを以て、正さしく其の報復なりと論じ、以て暗に加州々會を辯護するものあるも、是れ太だしき誤解也、日本法律は今日現に絕對に外國人の土地所有を禁止せず、從前に於ても永代借地權

を承認して事實土地所有を承認したりし也、唯だ從前の居留地雜居地以外に於て、外國人が農業、漁業、鑛業、土木建築、製造、運搬、挽車、仲仕業其の他雜役に關する勞働（家事又は炊爨若くば給仕に從事するものを除く）に從事するには、廳府縣長官の許可を受けざるを得ざるの規定あるも、是は主として支那人朝鮮人に適用するものにして、歐米人に應用する目的に出でしには非ず、隨つて其の許否を地方長官に一任せしのみ、素より絕對に勞働を禁止せしには非ざる也、若し然らずといはゞ、歐米人は日本內地の何れの處に於てか勞働を許されざりし乎、其の事實を擧示し視よ、吾人の言の實際に謬まらざることは、此の一事に於ても明らかならん。

故に法律又は條約に據りてのみ本問題を爭ふは正當ならず、宜しく人道の正義に由て判斷すべき也、思へ、或る勞働者に依て其の荒蕪せる土地を開拓し、土地の開拓に由りて其の國民を利益し、文明の進步に貢獻し、而して其の結果として與へられたる土地所有權又は借地權を褫奪するが如きは、殊に一片法律の力を以て何等無害なる地主小作人の權利を褫奪するが如きは、果して正義人道に合せりとする乎、更に思へ、數十年前に日本を開放するがため、切々偲々に繼ぐに一種の威壓をすら以てし、由りて日本の文明を誘導し開發したりし米國人が、今や逆まに日本人を放逐して、一種の鎖國を實行せんと欲するが如きは、果して正義人道に合へりといふべき乎、吾人は先づ主として之を米國々民に問はんと欲す。

（三）

他の排日案は第一上院に提出して、第二讀會まで通過したる市民權なきものにに酒類販賣の鑑札を附

與せざる法律案、第二左の漁業に關する法律案也。

(其の一) 漁業鑑札料を現行市民二弗五十仙、外國人十弗なるを改正して歸化權ある外國人十弗、歸化權なき外國人百弗に改むる案(上下兩院に提出)

(其の二) 市民又は第一歸化證を有し、且つ一ケ年以上州内に居住したる者に非ざれば漁業免許狀を附與せざる案(下院提出)

(其の三) 現行の漁業及び野獸肉卸賣の鑑札料一ケ年市民五弗、外國人二十弗とあるを改め、市民二弗、外國人及び外國人の會社百弗とする案(上下兩院提出)

(其の四) 外國人の職業として狩獵するを禁止する案(上下兩院提出)

第三市民權なき外國人には機關師たることを禁止する法律案、第四市民權なき外國人に白色婦人を雇使することを禁ずる法律案、第五人頭稅增加の法律案等也。

桑港市に於ては、現に市民權なき外國人として日本人に酒類販賣の鑑札を與へざるを以て、日本人の料理店等は、公然客に酒類を提供し得ずといふ、然るに今や更らに之を擴張してカ州一般に然かせんとす、是れ明らかに營業の自由を制限する也、條約違反なるや明らけし。

カ州に於て日本人の漁業を營むもの少からず、現に十數隻の大なる漁業船を有す、然るに之を禁止又は制限し、内外人の區別によりて、鑑札料金を增加するは、亦明らかに條約違犯也。

日本人に機關師たることを禁ずるは、是れカ州に於て最も多く機關を使用する日本人の洗濯業を奪ひ、且つ伐木、耕耘等總て蒸汽機關を使用するもの丶職業を褫奪若くば迫害するもの也、最も不法にして且つ條約違犯たるや明らけし。

日本人をして白色婦人即ち歐米婦人を雇使すること能はざらしめんとするは、果して何の意義なりや、試みに思へ、日本に在留する歐米人に對し、日本の婦女を雇使することを禁止せば如何、歐米人は必らずや默止せざるべし、而して是れ亦條約違犯たるや言を俟たずとす。

米國の人頭税は一人一弗に限れり、然るに外國人たるがために之を增加せんとす、啻だに排外的非法たるに止らず、又全く條約違犯也。

日米條約第一條に曰く『兩締約國の一方の臣民又は人民は他の一方の版圖内に到り、旅行し又は居住し卸賣又は小賣商業に從事し家屋、製造所倉庫及び店舗を所有又は賃借して之を使用し、自ら選擇せる代理人を雇使し、住居及び商業の目的のため土地を賃借し、其の他一般に商業に附帶し、又は必要なる一切の行爲を爲すことに付、其の國の法令に遵由するに於ては内外臣民又は人民と同一の條件に依り之が自由を享有すべし、該臣民又は人民は何等の名義を以てするも内國臣民又は人民の納付し若くば納付することあるべき所と異なるか、或は之より多額なる課金又は租税を徵收せらるゝことなかるべし、兩締約國の一方の臣民又は人民は他の一方の版圖内に於て其の身體及び財産に對して常に保護及び保障を享受すべく而して内國臣民又は人民と同一の條件に服するに於ては本件に關し内國臣民又は人民に許與し若くば許與することあるべき所と同一の權利及び特權を享有すべし。』故に土地法案に由り、日本人の商業又は居住に繫る土地の借地權を制限する事も條約違犯也、酒類販賣を禁ずることも、機關師たるを禁ずることも、共に條約違犯也、狩獵を禁止し、及以漁業鑑札料を內國人より多く增加することも、人頭税

を內國人より多く徵收することも、共に明白に條約違犯也、彼の州會は何故に日米條約を無視してまでも、敢て排日を企つる乎。

吾人は現に漁業鑑札料に於て內外人の區別を設け、且つ桑港市に於て日本人に酒類販賣の鑑札を附與せざるを以て、條約違犯なりと判斷す、我が當局者が未だ曾て之を爭はず、而して在留の日本臣民亦曾て之に故障を與へざりしを遺憾とす、唯だ今日以後は、斷じて之を再びせしむ可らず、然かも況んや其の程度を擴張するが如きをや、我が政府及び國民は、斷乎として之を爭はざる可らざる也。

(四)

日本人を支那人と齊しく、其の兒童を一般の白色人兒童と區別し、別處の學校に於て敎育せんとする所謂學童隔離案も、上院に三案、下院に六案提出せられたり。

本案は先年世間の大問題となり、時の大統領ルーズヴエルト氏の盡力によりて阻止せられたりしもの也、大統領が之を阻止せるは、其の太だしく不正不義にして、著るしく日本人を侮辱したるものなるがためなりき、今やカ州々會之を再びせんとす、ルーズヴエルト氏以上に正義の志深き現大統領ウイルソン氏は、素より其の成立を承認せざるべし。

佛獨其の他との條約に於ては、明らかに修學研學の自由あることを規定せるに拘らず、獨り米國との條約に於て其の明文を缺けるは、惟ふに本問題の紛出する一原因なるべし、吾人は以て遺憾とせざる能はず、然れども旣に白色人の兒童に同一敎育を受けしむる以上、日本人の兒童も亦之に均霑すべきことと

は、最惠國約款の定むる所ならずや、吾人は本案を以てまた條約違犯なりと主張するに遲疑せざる也。

且つ米國々法は、米國の版圖内に於て生れ、且つ米國々旗を掲揚する船舶内に於て生れたる兒童には、總て市民權ありと爲すに非ずや、此の法の精神より推斷するも、日本人の兒童の如き、多くは米國の領土内に於て生れたるものに對し、殊に自國の兒童と隔離するの不法なる言を俟たずとす。

日本の小學校に於て、若し米國人の就學を拒絶したりとせよ、米國々民は以て如何と做すぞ、名を隔離に藉りて其の實普通教育の就學を拒絶するが如きは、實に言語道斷也。

（五）

排日問題を法律的に解決せんとせば、日本人をして米國に歸化せしむるの外あらざるべし、米國の歸化法には、白色人及び黒色人の歸化を許すに止まり、日本人の如き黄色人種は之に與からず、之がため東洋人の歸化を許さゞりし判決例も之あり、然れども一昨年二月締結せられたる日米條約第十四條には『本條約に於て別段の明文ある場合を除くの外兩締約國は通商及び航海に關する一切の事項に付其一方が別國の臣民又は人民に現に許與し又は今後許與することあるべき一切の特權、恩典又は免除にして若し右別國へ無償にて許與したるものあるときは無償にて、又若し條件を附して許與したるものなるときは同一又は均等の條件を以て之を他の一方の臣民又は人民に及すことに同意す』とあり、即ち條約は法律の拘束を受けざるの國際法則により、他國々民が米國に歸化するを得る以上、日本國民も亦同じく歸化するを得べきや言を俟たずとす、故に歸化權の取得に就ては、多く憂慮するの要あらざる也。

又米國の法律として、米國版圖内又は米國々籍に屬する船舶内に於て出生したる者は、其の父母の何國人たるを問はず、總て市民權を有するを以て、現に外國人の土地所有を禁止せる米國の或る州に於ては、其の市民權ある子の名義を以て土地を所有する外國人も少からず、日本人も亦宜しく之に倣うて可なり。然れども米國に在留する日本臣民をして、歸化權を取得せしむるがために、日本政府及び國民は毅として強く之を主張する能はず、日本に背きて米國人民となり、其の國に忠義を盡すことを誓はしむるが如きは、我が政府及び國民の忍ぶ能はざる所なれば也、國家及び國民としては、素より之を爲すべきに非ざれば也。

然れども米國に於て眞に利權を獲得し、且つ既に獲得せる利權を支持して、永久且つ圓滿に之を擁護せんとせば、日本人の如き宜しく進んで米國に歸化すること、猶ほ歐洲人の如くすべし、一面には彼等と齊しく其の利權を支持せんとしながら、一方には彼等と同じく米國に歸化せざるが如きは、理に於ても矛盾を免かれざるに非ずや、吾人は情に於て忍びずと雖も、敢て進んで之を忠告せざる能はざる也。

抑も我が人口の過剩年々五十萬人を下らず、之をして能く其の處を得て、向上し發展せしめんとせば、勢ひ海外に向つて平和的に膨脹するの外あらず、若し他の國を征服して新版圖を增加せば則ち論なし、然らずんば移住に由り、歸化によりて、以て平和に我が過剩人口を外出せしむるの外なきのみ、墳墓の地を戀ひ、祖國を忘れざるは人の美德にして、特に我が日本人の長所也、然れども長所は又短所也、個人の利福よりして廣く海外に發展し、新たに我が新天地を開拓して區々鄉土に執着せざるも、亦大國民の襟

度ならずんばあらず、海外に向ふ我が國民は、宜しく歐人の海外に移住するものと齊しかるべきを期せよ。

歸化權を以て外國と爭ふは國家の面目に非ず、又移民問題の如きものを以て國際上の爭議と做すも名譽にはあらず、若し條約なくんば則ち已む、既に條約あり、條約によりて歸化權を得らるゝ以上、海外移住者は深く考へざる可らず、假令國籍を轉ずるも、祖國の故人と永く親密なる交情を斷たずんば、則ち以て甘んずべきに非ざる乎。

* * * * * * *

今や我が國は、幸ひにして先進諸國の誘掖に由り、世界一等國の列に入るを得たり、此の時に方つて獨り東隣親交國の一部に於て、我が同胞を視下して劣等人種となし、有らゆる排斥法を施して以て之を虐過せんとす、是れ吾人の忍ぶ能はざる所也、凡そ移民が米國に於て虐待せらるゝは總ての國に對して然り、獨り我が日本人のみに非ざる也、故に一昨年締結せられたりし日米條約に附帶して、我が政府が『勞働者の合衆國移住に關し、過去三年間實行し來りたる制限及び取締を從來と均しく有效に維持するの覺悟なり』と聲明したるを非難せず、然れども如何なる結果にせよ、無害にして既に土地を貸借し、且つ各種の營業を爲して、明白に勞働者以上の高等なる生活を爲せる日本人に對し、唯だ歸化したるのみの劣等なる他の勞働者と相謀り、諸種の迫害を加へて以て日本人を排斥せんとす、日本政府及び國民は、果して能く忍び得るや否や、抑も又正義人道の承認する所なりや否や、然り吾人は斷じて否と言ふ、世界の公論は以て如何と爲す。

公論

政友會總裁を辭したる西園寺侯を論ず

爛柯人

緒言

昨冬以來の政變は未だ以て俄かに之を第二維新といふべからざるも、少くとも我邦政界に一の新時期を劃すと言ふを防げず。消極的方面より觀察すれば、多年政界の要部に割據したる元老輩は事實上凋落し盡して政界の主なる要素たりし其權能を失却し、而して多年閥族政治家の主張たりし超然内閣主義亦いよいよ死滅に歸せり。又之を積極的方面より觀察すれば、未だ多く建設の功を見るに至らずと雖も、民論勃興の一事は實に著明の新徵候といふべく、元老何物ぞ、閥族何物ぞ、軍閥何物ぞとの意氣は、今や社會の各方面に彌勃たり。一面國家の統一的制裁は稍々減少したるの觀あるも、又新時代の要求に應じて將さに新人物の出現を見んとするが如きの前景氣ありと言ひ得べからざるにもあらず。輿論が政黨内閣の實現を要望し、陸海軍官制及文官任用令の改正、行政財政の改革を要望するは即ち政界進歩の一階段たるに過ぎずして、前途尙甚だ遼遠なりと雖も、將さに着々進運の開展し來らんことは我等の信じて疑はざる所也。即ち一新時期を劃するものとして我等は樂觀的に今

口の政變を見るものなり。但だ此際西園寺侯が端なく政界を退隱せざるべからざる苦境に立ち至れるは、假令侯の退隱が永久ならず、再び君國の爲め其匪躬の節を効すの時あるべしとするも、兎に角近來の一大恨事といはざるべからず。蓋し侯の退隱は多年の宿志將さに漸く成らんとする曉に於て起れる珍事に屬し、恰かも瑞典王グスタヴス・アドルフスの戰傷に髣髴たり。歐洲三十年戰爭の初めに當り、新教軍の總帥瑞典王ガスタヴス・アドルフスは舊教軍の總指揮官ウアーレンスタインと獨逸ルッチエンの野に會戰せしが、戰勝の榮は已に新教軍の負ふ所たるや明かなるに際し、瑞典王は近視眼の爲めに誤つて敵軍に接近し、其狙擊に會うて落馬せり。王は實に一代の名將にして其威望北歐の天地を壓したり。之を失へる新教軍損害の大なる、三十年戰爭役後の經過によつて知られたり。西園寺侯が勅語一件より恐懼措く所を知らず、政友會總裁を辭し、政界を退くの意志を表明せる慘狀は、恰かも空鞍の白馬鮮血淋漓として後陣に逸走し來り、暗に瑞典王の戰傷を告知せしと略ぼ同一ならずや。但し西園寺侯をグスタヴスに比せば、桂公はワーレンスタインなりといふべし。ワーレンスタインの末路は桂公にとつて頗る氣の毒の感なきにあらざるも、兩者の對照比較亦自ら一種の面白味なきにあらず。而して我等は西園寺侯の退隱を以て近時の政界の進步に伴ふ一大犧牲なりと思ふ。然れども侯にして若し健康の許すあらば、或時會に於て再び要路に立つの時なしといふべからず。蓋し侯の負傷は決して致命傷にあらざればなり。

勅諚の顚末

西園寺侯の行動を以て違勅なりとし、亂臣賊子なりと罵らんとするに先ち、二個の事實を明白にするを要す。一は侯は果して勅語奏請の責を分つべきや否や、二は侯は勅諚の貫徹に對して果して誠意を缺きたりや否や即ち是れ也。若し侯にして豫め勅諚の奏請に同意したるか、又は其御趣意を徹底せしむるに一點不誠實の心ありしとせんか、侯の責は一層重大ならざるべからず。然れども予の調査したる限りに於ては、侯は二

つながら此責に與るの要なきが如し。先づ以て勅諚奏請に關しては侯は毫も關與せざりしこと明か也。即ち二月八日の桂公との會見に於ける談話の要領は、桂公は先づ侯に向つて若し閣下に於て内閣引受の意志ありとせば我は及ばずながら斡旋の勞を取るべしと告げ、侯は之に答へて更に其意志もなく、又其準備もなしと云ひ、桂公は然らば時局解決の方法として勅諚を奏請しては如何との相談あり。西園寺侯は之に答へて、詔勅に關する御相談は誠に迷惑とする所である。近頃詔勅濫請といふ事につき隨分世間の物議もありとて密かに公に注意する所あり。よつて桂公は然らば此談話はお互兩人丈けの内談にして之を他に洩らさゞる事にしたしと告げ、而かも時局解決の方法何とか別にあるまじきやと懇談ありしにつき、然らば尚松田、原とも相談の上御返答に及ぶべしとて別れたりと云ふ。而して西園寺侯は九日の午前に侯を訪問せる加藤高明男に對し、種々熟議したれども時局解決の法なきとを告げたりしが、其午後に至て桂公の參内となり、引續き西園寺侯亦召され遂に勅諚を拜したり。事こゝに至りては侯が一大決心を以て聖旨の貫徹を期し宮中より退出せしは想像するに餘りあり。九日夜には殆んど徹夜して各領袖との協議を重ね、十日午前十時本部に代議士會を召集し、侯は自ら出張して全力を盡して御沙汰の貫徹を期せしも、此間に於ける形勢の變化は遂に其志と違ひ、代議士會は全會一致を以て不信任案を決議し、從つて桂内閣の瓦解を見るに至れり。蓋し若しも九日の午前九時十時の間に山本伯が突如として舞臺に出動することなかりしならば、或は政局の推移は侯が豫期せる如くなりしならんと信ずべき理由あり。而かも意外にも山本伯は桂公に嚴談を開始し、其行動の不誠實を詰責し、若し議會を解散して多數を得るの見込あらば解散も可なり、然らざるに於ては斷然辭職すべしと忠告し、議論簡單明快、桂公も遂に屈伏したり。而して伯は西園寺侯を政友會本部に訪問し、爾後更に使者を遣つて交渉する等の事ありし爲め圖らずも政友會の硬論に氣勢を添ふることゝなり、不信任案は到底撤回す

べからざるの情勢となれり。但し山本伯の出動は桂、西園寺何れも意外とせし所にして、蓋し伯の氣象として西園寺が昨冬以來桂の術策に弄せられ、遂に散々の苦境にありしに同情し、桂の仕打に憤慨し、徒らに舞臺面に飛躍し來れるものなり。爲めに少からず假定の劃策に狂ひを生じたるは止むを得ざる也。斯くて西園寺侯は御沙汰を空ふしたるを痛く恐懼し以て今日に至れり。侯の心事に至ては恐らくは天下擧つて之を諒とする所なるべく、明治維新の際、徳川幕府が表に攘夷の勅を奉じ裡面には其實行に誠意を缺きたりしと全然科を異にす。勅諚の旨を貫徹し能はざりしを以て西園寺の無能を責むるは可なり。之を違勅といふは大いに語弊あり。西園寺侯の場合に於ては決して違勅の文字に聯想さるるが如き意味あることとなし。況んや桂閣辭職後の善後策については　陛下より西園寺侯を召されて御下問あり、侯は元老と内議し山本伯を推薦し、而して遂に伯に内閣組織の御下命ありしは世の知る所、且つ今日山本内閣成立して遂に桂閣が勝手に呼び起したる政界の混亂紛擾は全然鎭靜に歸し、以て二月九日勅諚の御旨趣は、種々迂餘曲折を經たりとは雖も兎に角終に貫徹し得られたりといふを妨げざるをや、事の眞相已に斯くの如しとせば、當時西園寺を傷けんとして種々の誣説を流布し、(例せば侯が豫め勅諚に内諾を與へたりといふが如き)且つ其誣説に基き西園寺を呼ぶに亂臣賊子を以てする大隈伯の如き吾々は實に其無責任に驚かざるを得ず。若しも勅諚一件を以て西園寺侯を責めんと欲せば、先づ以て之を奏請せし當の責任者を責めざるべからず。桂公は其辭職は勅諚に對する責任也と辯明し居るが如きも、モト之れ都合よき遁辭のみ。當時の形勢より察すれば民黨側の不信任案決議に對し、内閣は行詰りの結果瓦解したるに外ならず。勅諚に對する引責の方法としては別に何等かの手段を取るべきは至當ならずや。

不信任案と西園寺侯

桂派の論者は西園寺侯は其辭職するに際し、桂公を推薦せし行掛り上、桂閣死活の問題に對しては侯は桂

閣を助くるの義理ありとなし、決議案を撤回せしめざりしを以て表裏反覆の行動なりと論ずるものあり。我等の考ふる所によれば、西園寺侯の長所は其心事の公明なるにあり。私憤に殉じて公事を害し、又は表裏反覆の行動をなすといふが如き事は侯の最も屑しとせざる所也。思ふに西園寺侯は其辭職當時より其後任者が何人たりとも、自ら主として意趣返し的に之に喰つて掛るを欲せざりしは明白の事也。然れども黨員は總裁の如く度量洪大ならず、侯も亦黨員の不平を察するが故に、同じく部下が反對せんとするも桂ならば寺內などよりも餘程鎭撫し易かるべしと思惟せるなるべし。此故は援けらるゝ丈けは援けて、御新政の初めに當り、不吉の政爭を避けたしと希望せしや言を俟たず、但し今より之を見れば流石に聰明なる西園寺侯も大いに時勢の觀測を誤れりといはざるべからず。去秋以來桂公一派の陰謀に對する政界の憤慨は案外に激甚なるものあり。山縣公が初め兩度の西園寺侯の交涉に對し、財政の餘裕なしとせば二師團增設は見合はするも仕方なからんといひながら、最後の交涉に至り增設止むを得ずといひ、陸相後任は到底なり手なからんと冷然答ふるなど、其心術の如何は肘度の限りに非ざるも、表面西園寺侯を賣りたるの形ありたるは免るべからず。此事實を耳にしたるものは何人も隨分の仕打なりと評せざるものはなかりし也。而して此間に於ける桂公自身の態度如何といふに公は一方山縣に對しては暗に强硬の態度に出づべしと慫慂したるものゝ如く、一方西園寺等に對しては同情あるが如き風を示し調和を勸めたり。而して其調和とは如何といふに、西園寺內閣をして二師團增設を承認せしめたる上の調和にして、山縣公も桂公も遂に同腹となつて園閣を壓迫し、而して遂に軍人勝利の鬨の聲を擧げんと欲するにあり。即ち陸軍の主張を貫徹すると同時に世間に於ける園閣の信用を奪はんと計りしなり、其魂膽は何人にも見え透きたり。桂派の論者は園閣は素より財政の運用に窮迫し、早晩瓦解を免れざれば寧ろ人氣ある二師團問題を捉へて之によつて玉碎せるなりといふ。即ち西園寺の內閣

投出しは元老の意外とせる所なりといふも。是れ事局紛糾後に案出せし申譯のみ、彼等は二師團增設と云ふ白刃を園閣の胸邊に擬して曰く、此の一刀を受くる乎然らざれば辭職せよと云へり、即ち園閣の辭職は素よりその期せし所に外ならず。且つ夫れ桂派の策士等は昨夏の頃より絶えず流言を放ち、園閣は必ず十一月を以て倒るべしと豫言せり。初めは豫算實行難を盛んに吹聽して財政の爲めに瓦解せしむべしと期せしが如きも、二師團問題の起るを見て乍ち奇貨措くべしとなし、大に陸軍側の煽動に努めたり。此等の事は公然の秘密にして、西園寺自身こそ超然として意に介せざりしが如きも、政黨部内に於ては多大の反感を喚び起せり。加ふるに桂公が内府に入りてより未だ數ヶ月ならずして出でゝ總理の印綬を拜し、頻りに勅語若くは勅諚を奏請するの狀は、如何にも天下は我物なりとの振舞をなすに等しく、國民をして益々不快の念を釀すに至らしめたり。尾崎行雄氏が、皇室を胸壁として反對黨を狙擊するとの一言は一般に同情を惹けり。蓋し桂に對する國民の反感は、公が多年の幸運に對する嫉妬心も稍々伴ふべきも、多くは義憤に基くといはざるべからず。七分三分にして義憤七分と見るを至當とせん。元來不信任案は感情問題也。故に詔勅濫請とか、閥族專橫とか、非立憲とかの理屈を構成して之を唱へたれども、事理は必らずしも一貫し居らず。其理屈について見れば、西園寺の聰明を以てせば缺點として認めたるもの少からざるべし。然れども元來が感情の問題也。國民感情の馳する所容易に制止し難く、西園寺自らは左程に重大視せざる事柄に對しても部下の疑惑を釋くとは彼の最も困難とせし所也。而して部下にありては寧ろ西園寺總裁を以て餘りにお人好しとなし、毎々桂に致さるゝものとして憤慨し、サッサと行くべき所にまで馳せ行けり。一月廿日の少し前に彼が沼津より歸京せし頃には既に大勢奈何ともし難きに及び居れり。況んや此頃西桂談話の覺書なるものを發表して西園寺を制肘せんと試みしが如きは頗る手段拙劣にして、流石の西園寺にも不快の念を催さしめしなるべく、是れ

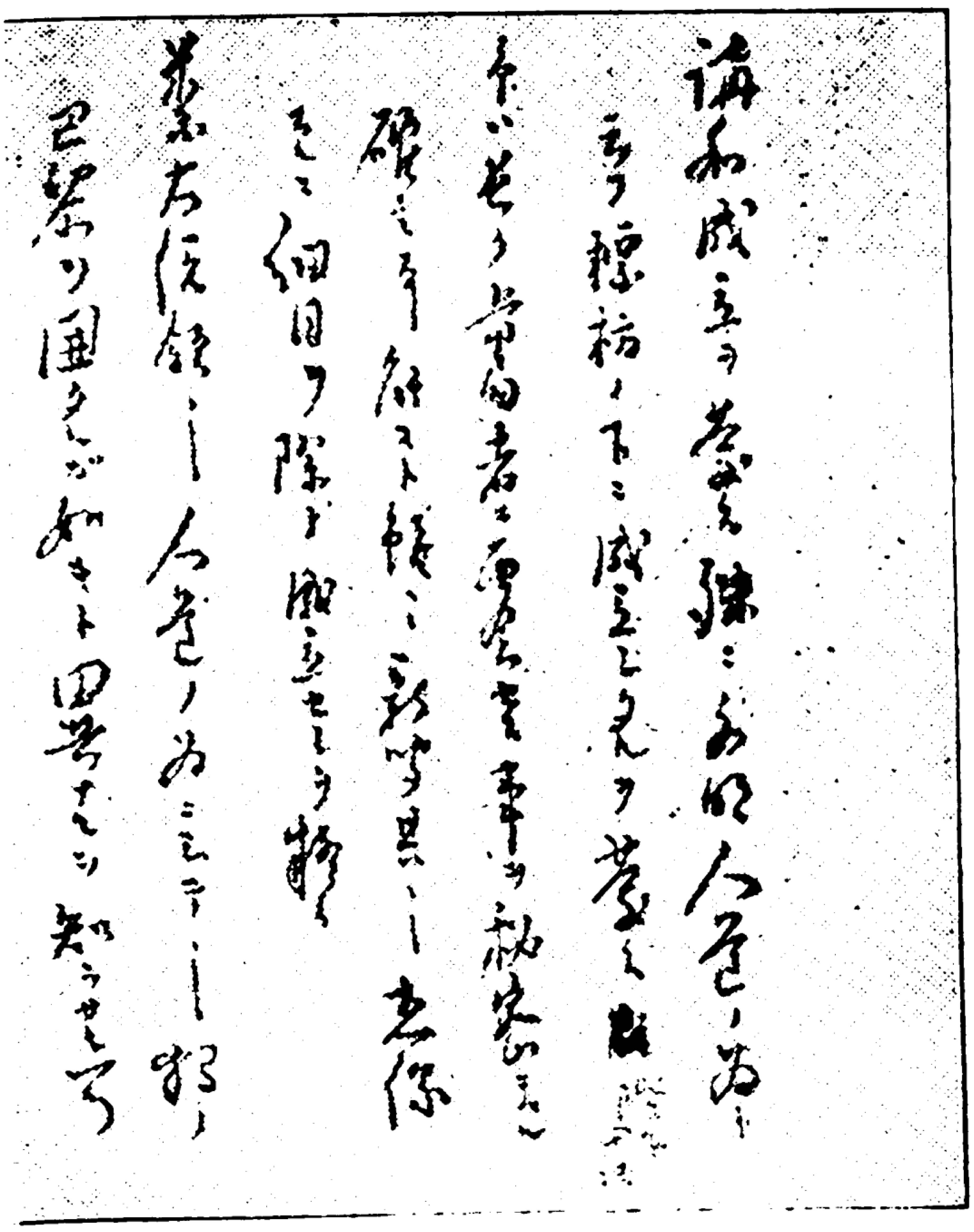
決して其高誼に訴ふる所以にあらざりしなり。此の仕打に對しては世人も怒れり、黨員も憤れり。而して形勢益々不穩なるに際し、桂公が非立憲の誹を免れんと欲して新政黨組織を發表せしは將に燃んとする積薪の火に石油を亂注するなり。形勢茲に一變調を來せり。新政黨組織發表の爲めに幾分か非立憲の非難を避け得たりとするも、他の一方には政友會及び國民黨とは黨略上停止し難きの紛爭の幕を開けり。即ち一月二十日に議會を停會し、二月五日に再び停會の命あり、此間に於て盛んに新政黨の爲めに勸誘を試みしが如き、政友會中八十人の札附議員ありと聲言せしが如き、決して政友會と妥協の幕を開かんとするの途行にはあらず。何處までも戰爭を繼續するの意志を表明したるものといはざるべからず。然るにも關らず西園寺の曩日の挨拶一言を質として決議案撤回を迫るが如きは横着も亦甚しからずや。桂派の策士輩は鎧袖一觸すれば政友會の一角忽ち崩壞すべしと放言せしも遂に其一角は崩壞せず。解散風を吹かすれば民軍の臆病者等は忽ち萎縮して閥族の軍門に降服すべしと思惟せしも、却て民軍より解散を迫らるゝの奇觀を呈し來れり。最後に議會に對する大詔煥發を劃せしも果さず、窮餘の極遂に勅諚を重臣たる西園寺侯に賜ふべく奏請をなしたり。而かも機會は幾度か過ぎ去つて又挽回すべからず。解散して多數を得るの見込なく、畏多くも勅諚さへ遂に効なく、遂に總辭職をなすの止むを得ざるに至れるものなり。其死際の醜さ加減亦憐むに堪へたり。然れども死際にも尙愚痴を零し、西園寺が桂閣を救はざりしは不德義なりと誹謗するに至ては愚も亦甚しからずや、要之、西園寺侯は當初よりして桂公を援けんとするの意思なきにあらざるも、桂派の行動は日一日と民黨の反感を激發し來り、遂に奈何ともすべからざるの時勢に至れるものなり。

侯の政治的功績

斯くて西園寺侯は目下政界より退隱したるの形式となり居れるが、其過去幾十年間の政界に於ける勳業如何といへば、特に具體的に指して論ずべきものなきが

如し。例へば伊藤公の憲法起草に於ける、陸奥伯の條約改正に於ける、桂公の日英同盟、朝鮮合併に於けるが如き、同一の意味に於て西園寺の功績として之に對照すべきものなきに似たり。而かも侯は明治年間政界の一方に於ける理想の首唱者也。伊藤公が官位爵祿を拋ち、政黨組織に身を投じたる場合の如き、冥々の裡に西園寺侯の慫慂助力に俟つ所多かりしは否むべからざる事實にして、而して伊藤公が一度餘儀なき事情の爲めに政友會を去らざるべからざるに至るや、侯は其樞密院議長の椅子を公に讓り、自ら公に代つて政友會を總裁し今日に至れり。

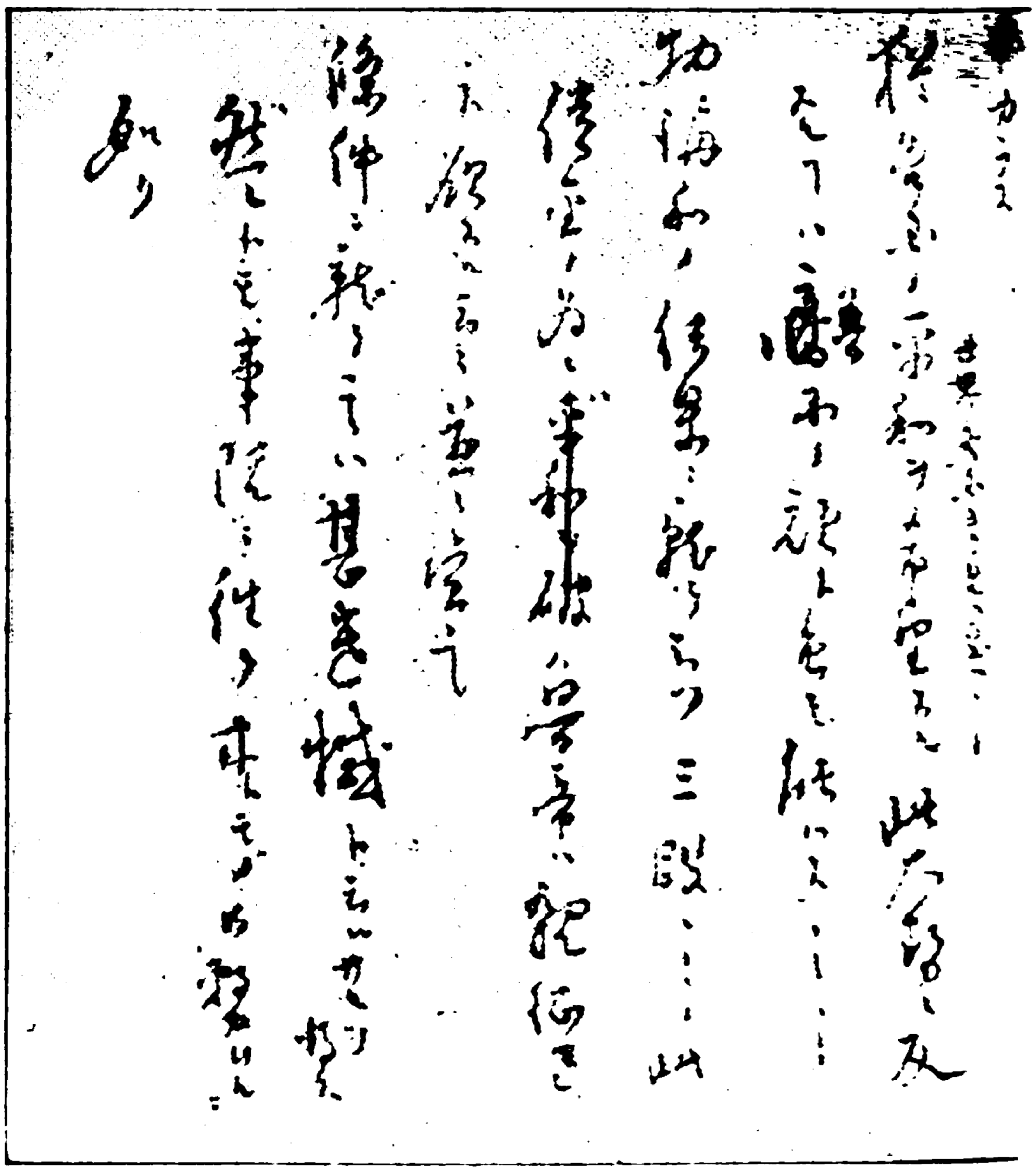
即ち西園寺侯の事業は憲政運用上に於て大いに之を認めざるべからず。



（西園寺侯が某氏をして宣苛書

侯は實に伊藤公在世中より最も信頼せられ、敬畏せられし最高顧問たり。公が西園寺侯を政友會總裁として推擧するの演說中『異體同心』の人と云ひ『我親友にして且尊敬する所の人……憲法の大義主旨に於て何時も我と渝るなき人』と云ひしは決して過稱と云ふべからず。而して西園寺侯が公に代つて政友會を率ゆるや、事に處して明斷勇決、十年の久しき常に黨員をしてよく穩健の態度を持して國政の重きに任ずるを得せしめたり。而して爲めに政黨なるものが初めて我國の上下より信頼せらるるに至りしは實に西園寺侯の勳功として特筆すべきにあらずや。世間侯の妥協政策を非難するもの多し。妥協は西園寺侯に於ても頗る不本意なりし

に相違あるべからず。然れども當時國家多難、且つ內、閥族の勢力尚旺盛にして政黨の根據甚だ薄弱なるに際し、政界縱斷の策を劃して政黨主義の樹立を期せんとするに於ては、當時の妥協亦實に止むを得ざるものあり。貴族院が今日漸く政黨內閣に同情するに至れる。桂公自ら政黨主張者となるに至れる、公自らは妥協の苦き經驗によれりと放言するも、其實は情意投合によつて大政黨の有難味を解せしによらずんば非ず。內に於ては政界の紛擾を防遏し、戰後經營の功を完ふし、外に向つては國勢の發展を助成し。遂に十年の苦節空しからずして政界の形勢今日の狀態を呈するに至



(を起草せしむる時の侯直筆の覺書)

れるもの、主として西園寺侯の政黨の指導、其宜しきを得たるによると斷ぜざるべからず。

侯の明斷勇決の一例

日露戰役の終るに際し、ポーツマウス條約に反對するの議は全國に鬱勃し、遂に日比谷の大暴動を見るに至りしが、此時西園寺侯は挺然獨り起つてポーツマウス條約贊成の宣言を發表せり。當時國論擧げて條約の破棄を叫び、識者と稱する者も或は實際の形勢に通ぜず、偶々之を知るも衆論を恐れて附和雷同し、或は桂內閣を苦しむるの手段として不本意ながら反對を主張したり。此際西園寺侯の宣言書は九月二日を以て發表せられた

り、人道の爲め講和成立を慶賀すといひ、我軍連戰連勝するもモト獨逸軍の巴里を包圍せる狀態とは仝じからずといひ、條約の條件については遺憾とするの點あれども、今日となつては事已に逝く、又如何ともすべからず。寧ろ之に贊同し、而して戰後の經營に國家の全力を傾注せざるべからずと結論せし此宣言は、實に頑迷の政論に對する晴天の霹靂たりし也。加藤高明氏の如き當時侯の宣言を一讀して啞然たり、是れ果して西園寺が正氣の沙汰なりやといへり。此宣言の爲めに當時の政府は百萬の援兵を得たるの感ありしなるべく、世論も亦自然に鎭定して幸にして國家の大計を誤らざりし也。此時侯の身邊には頗る危險の虞ありしも侯は平然たりき。

侯の經歷及び人格

西園寺侯は實に明治聖代の奇才也。維新の際年僅かに廿一、參與に任じ、後山陰道鎭撫使、又北陸道征討總督として山縣參軍などを率ゐて越後口に出張して功あり。參與在職中伏見の開戰あり、幕軍大擧して將に京師に迫らんとするを思ひ、朝廷震駭廟議其決に迷ふ。其際末席にありし侯は一聲高く呼んで「若し幕府を朝敵ならずといはゞ誰をか朝敵とするや」といへり。岩倉公上席より聲に應じて叫んで曰く「小僧よく出かした」と以て侯が少壯時代より眼中人なきの槪ありしことを想像すべからずや。侯は大臣家たる清華の家に生れ、才氣衆に聳へ多く並ぶものなし。從つて自ら標致する所甚だ高く、容易に人に下らず。侯の炯眼は又よく人の弱點を捉へて之を揶揄諷刺し、密かに樂むの癖あり。此點に於ては侯は故勝海舟伯に酷似せり。又一代の天才ヴォルテールの如きも頗る此の癖ありきといへり。蓋し之れ天才の特權なるか。彼等は世の凡物を以て彼等の笑草たるの運命を有するものと思惟するが如きも、サテ其凡物の身にとつては頗る苦痛にして、虛榮心ある者、自負心ある者、又た愚にして其愚を知らざる者の如き、往々侯の門より遠ざかるものある亦宜なりといふべし。

然れども西園寺侯は勝伯の如く物に執着ならず、又

陰忍ならず、寧ろ洒々落々として甚だ利名に淡泊也。而して此點は侯が政治家として一の缺點として常に人に指摘せらるゝ所也。若し之を缺點とせば此點こそ侯は頗る故横井小楠に似たるが如し。或人嘗て小楠の執着心に乏しきを以て政治家の要素を缺けりとして勝に訊す所ありしに海舟は之に答へて「あゝやうに先きが見えては堪つたものでない」といへりといふ。西園寺侯も餘り聰明なるが故に未練がましく物に執着すること能はずして、一方より見れば其出處進退の跡頗る公明にして美事なるも、時には功名を取り逃がすことなきを保せず。如何となれば人生の事は假令其成行全然見透し得らるゝが如き時も後日に至り意外の變調を來すことあれば也。盲目蛇に怖ぢずして却て怪我の功名あるは之が爲め也、西園寺侯の如きは怪我の失策少なきと同時に怪我の功名も亦甚だ多からず。此他明治年間の政治家中に於て西園寺侯と横井小楠とは幾多の類似點あり。何れも學者にてありながら大に學者振ることを嫌ふことも其一也。或人太政官に於て頗る小楠に敬服の餘り「先生は平生如何なる書物を讀まるゝや」と問ひしに小楠は「私の愛讀書は爲永春水で御座る」と答へたりといふ。西園寺侯の如き大なる讀書家なるに拘らず、其客間に至り見れば嘗て書物一卷を備へざる也。其居間に於てさへも、小さき机の上には、硯と筆と墨と卷紙とを置くの外、書物一冊も見るべからず、以て其氣前を見るに足れり。更らに識見一代に卓越して、常に理想に生きる所、伊藤、陸奥と雖も到底及ぶべからず。此點に於ても亦獨り小楠と酷似せり。思想純正にして人と功名を爭はず、功名は何人の手に歸するも可なり、國家の福利が第一也と思惟する點も兩者亦よく相似たり。松平春嶽嘗て西園寺侯に向ひ頻りに侯の奇才を賞し「大切の御體なればあなたによき先生を御紹介申上げん」とて小楠の名を告げしといふ。而かも當時兵馬倥偬、西園寺は鎭撫使又は總督として東奔西馳し、小楠は刺客の手に倒れ、遂に兩者相見るの機會無かりしものゝ如し。

西園寺侯の巴里に在るやモト法律學研究の爲めなり

しも、法律學の範圍内に齷齪たるは侯の屑しとせざりし所なるが如く、博士アコラスに私淑し、大いに「其名著「個人主義論」などを研究したるものゝ如し。侯が光明寺三郎、中江篤介などゝ、意氣投合したるも一に彼等と理想のよく一致したるが爲めなるべし。アコラスとは頗る親密の間柄なりしものゝ如く、或時話の序に、侯はアコラスに向ひ、日本に歸つて身を政界に投ずるは考物なり、如何となれば我國に於ては政治家となれば往々虚言を吐かざるべからざれば也といひしに、アコラスは、扨は貴國は幸福な國也、我佛國に於ては政治家たるものは往々どころでなく二六時中嘘ばかりを吐かねばならぬと答へたりといふ。侯三十年來の政界の經驗に顧み、アコラス翁との對話に對して感慨果して如何。

西園寺侯の理想家たる其朝夕の行動にも之を見るべし。其服裝の如き時流の粹を極むるを常とす。侯嘗て人に語つて曰く、若し第一等の衣服を着し得ずんば寧ろ最下等のものを可とすと。巴里遊學中には隨分豪遊を試みしことありといふが、カフェーなどに行きても必らず第一等のシャンペンを飲むを常とし、若し第一等のを飲むの金なければ更らに遊ばざるを可とすといへりしといふ。

侯はモト大器也。夙に岩倉公に知られ、明治十四年歸朝後に至るまで因縁頗る淺からざりしかども、侯は岩倉に私淑するに至らざりしものゝ如し。蓋し侯は氣粹にして權謀を好まず、岩倉の往々奸雄視せらるゝの嫌あると自ら全く性格を異にするものあるによらん。侯は寧ろ初めに大村益次郎と相識り、後に伊藤及び陸奥と親みたり。自ら大器を抱けるを知りながら其志を得ざるも毫も恨むる色なく、悠々自適せり。其獨逸公使を罷めて賞勳局總裁に任ぜられし時の如き、閑職最も可なりとて欣々たりしといふ。政友會創立の當時侯は已に隱然副總裁の位置にありしも、韜晦して名聲を求めず、星亭氏の如きは政友會日々の出來事につき必らず西園寺侯の門を叩き之を報告するを常とする程なりしかども、世間にては左程に侯を重視せず、寧ろ凌

邊無邊の下風に立てりと思惟し、甚しきは伊東巳代治氏などゝ並稱せり。而かも侯は平然たり。嘗て中江兆民侯を訪ひ、侯が權勢に淡泊にして大いに雄飛せざるを遺憾なりとし、頻りに慫慂する所あり、而も侯は毫も辯解に努めず幾度か「さういうても仕方がないぢやないか」と答へたり。但し其腹中には自ら抱負のあるありしは疑ふべからざるも、之を辯明するが如きは侯の屑しとせざる所なりしならん。右の會見は恐らくは中江との最後の會見なりしかと思ふ。中江は此時已に咽喉癌を煩ひながら頻りに葉卷を吹きつゝありたれば、侯は喫烟の病に害なきやを中江に注意したりしに中江は「之からは葉卷が强きか咽喉が强きか二者の綱引なり」と云ひ呵々大笑せりと云ふ。

斯くて西園寺侯は自ら韜晦すること幾十年、而かも時一度到れば伊藤に代つて内閣總理大臣を代理し、又大政黨を提げて起ち、其統率宜しきを得て遂に天下の形勢今日あるを馴致するに至れり。最後の局に至りて測らずも奇禍に罹り退隱を餘儀なくせられしが如きも、侯若し健在せば必ず出廬の時あるべし。故陸奥伯嘗て侯を評して一代の高人といひ、又天下第一の腦髓なりといへりと聞く。蓋し知言なりといふべし。（完）

國防大觀

法學博士 戶水寛人

近時の我論壇を支配するものは、民力休養とか軍備縮少とかいふ消極悲觀に傾いた題目であつて、而してそれが却て一時の苟安小康を貪らんとする俗衆の喝采を博し。眞に帝國の威信を中外に張り、大和民族の發

展興隆を世界の各方面に實現せんとする積極樂觀の思想を抱く者を目して、國を憂ひ民を愛する志なきものと解するが如き風あるは實に嘆惜に堪へざる次第である。

民力休養固より結構である。減租減税も亦甚だ歡迎すべきことに相違ない。然し國防の問題は、國の死活の問題である。殆んど絶對の問題である。此の絶對の、國の死活の問題の爲めには、國民たるものは多少の犧牲を拂ふのは止むを得ない。今日世界の大勢を察し、特に我と最も利害關係切なる支那、露西亞、亞米利加等の情況を考ふる時は、我軍備を縮少せんなどいふことは、眼光豆よりも小なる愚見者流のいふべきことで、苟も多少の經綸を藏し、多少の識見を有するものゝ口にすべきことでない。否な我輩の見る所を以てすれば軍備は啻に縮少すべからざるのみならず、大いに擴張しなくばならぬと思ふ。陸軍も海軍も雙方共擴張しなくてはならぬと思ふ。

我陸軍は何の爲めに必要であるか。いふまでもなく大陸に於ける我利權を維持擴張し、併せて東洋の平和を確保せんが爲めである。大陸に於ける我利權を維持擴張せんとするに當つて、之が正面の故障――若くは妨害者となるものは露國である。露骨にいへば、今日の我陸軍は露國を第一の相手として編成せらるべきである。然るに露國の極東に於ける陸軍力は、日露戰爭以來長足の進歩をなし、西比利亞鐵道の複線工事も略ぼ完成に近づいて居る。黒鳩公將軍の言によれば、此複線工事成るの日は、露國は一ヶ月間に六十萬の兵を極東に送ることが出來るのである。すれば百萬の兵は二ヶ月を費さずして送ることが出來ることになる。之は固より糧食其他一切の軍需品をも入れてのことである。日露戰爭當時に於てさへ、戰爭の終り頃には其兵數は凡そ百萬に達したと、黒鳩公の「回想錄」に書いてあるから、今日複線工事出來上つたならば、百五十萬の兵を極東に送ることは恐らく易々たるものであらう。勿論之は其時の歐洲の形勢によることとて、西境に事あれば斯くの如き大兵を極東に送ることは困難であ

らうが、然しあの大陸軍國であるから、百萬以上百五十萬までは確かに送れるものと思ふ。

我日本の兵數は如何といふに、之も二年兵役の結果日露戰爭當時よりも殖えて居る。又大陸に出兵するにも餘程の便宜が增して居る。ザット日本の實力を計算して見ると、現役兵に豫後備を加算すれば八十萬乃至百萬位は出せるものとして差支あるまい。然し之を露國の極東に於ける兵力と比較する時には甚だ心細い感じがするではないか。我國に於ては二師團增設をさへ無用の如くいふものがあるが、我輩から見れば、二師團位ではまだ〳〵足らない。五師團も六師團も增したいと思ふのである。然し固より財政上の都合もあるのであるから、當局者にして二師團計畫を立てたなら、之を助けて實行させるのが當り前と思ふ。之を無用の者の如くいふのは殆んど國防問題について何等の智識なきことを證するに過ぎぬのである。

然らば何が故に我は露國の陸軍に向て準備せねばならぬかといふに、我が陸軍にして露國より弱き時は、我の大陸に於ける利權を喪失し、又露國の極東に於ける野望を抑ふることが出來ず、支那問題に對する我の優越なる地位も利益も拋棄せざるべからざると同時に、國際上に於ける信用も全く滅却して了ふからである。勿論目下に於ける日露の關係は極めて親善である。又益々親善を加へつゝある。露國の若い士官の中には日本に對する復讐戰を望む者もあるといふ話であるが、兩國の識者には、日露の再戰は兩國に禍するものであることがよく分つて居る。それで戰爭はないものと信じても間違はない、然し戰爭のないのは兩國の兵力が均衡を保つて居るが爲めの結果であつて、若し我軍備を縮少して其均衡の破れる日には何人と雖も平和の保障をなし得るものはない。それに元來露西亞といふ國は誰も知つて居る通り、隨分亂暴な國である。傍若無人な國である。他の國に向て機嫌氣褄をしたり、遠慮會釋をしたりする國でない。其意が動き其勢が可なる時にはどんな事でもずん〳〵遣り出す。現に今、蒙古に向ては其フォー、ハンドが動きつゝある。蒙古

の所謂活佛（ツエブツンタンバ、フトクト）は中華民國の詰問に對して妙に底力のある返答をなして居る。そして其底力なるものが背後なる露國の力から出て居ることは何人も認めて居る所である。然し我輩の見る所では、露國は決して蒙古丈けで滿足して居るものではない。追々と陝西から山西、そして遂には直隷までも手を延さんとするのは必定である。支那は今中華民國として列國の承認を求めて居るが、果して何れの日に獨立國の實力を備ふるか未定である。露國が極東に手を延すことと斯くの如くにして、而して支那の狀態斯くの如しとすれば、此露國の野心を抑へて、東洋の平和を確保するものは何人の任であるか、殊に又我現在大陸に有する利權を維持擴張するの途は果して如何にすべきか。陸軍擴張の止むべからざる三尺の童子と雖も分りさうなものである。陸軍擴張には固より金がかかる。國家の歲計は膨脹する。然し大陸に於ける我利權にして擴張すれば、日本人民の大陸に於ける活動も利權も擴大するではないか。蒔いたものは刈られ、費つたものは戻されるではないか。國の爲め即ち民の爲めである。帝國の爲め即ち大和民族の爲めである。眼光豆よりも小にして目前の小利害のみしか見えない論者は實に憐むべきである。

陸軍擴張の異論反對多いに比して、海軍擴張には國論概ね贊成を表して居るやうであるから、海軍擴張の事は別にいふ必要がない。然し今度の加州土地禁止法案はどうであるか。あんな極端な排日案は固より通りはしまい。我輩は多分今回は何とか纏りが着くだらうと思つて居る。然し何時までも之を抑へ得るか否かは疑問である。遠からずして又再び燃え上るに違ひないと思ふ。其時には加州に於ける日本人は屹度團結して反抗する。すると米人の虐殺が初まる。三四十人位の日本人は虐殺される。サア其時だ。回向院の角力ぢやあるまいし、そんな國辱を受けて、獨立國たるものが、待つた〳〵などいふ事をいはれるものでない。其時に我國の海軍が果して米國のそれに比して充分なる勝算ありや否や。現今に於ては米國の海軍力は決して優る

るに足らない。海軍々人の氣格、熟練共に我に較することが出來ぬ。然し新型の大艦をドシ／＼製造し來るに於ては、我今日の海軍力では到底之を擊退することが六つかしい。海軍擴張も亦止むべからざる所以である。只然しながら米國と戰爭をするに方つては、我は何處までも正義に據らなければならぬ。直は我にあつて曲は彼にあらねばならぬ。然らざれば世界の同情を我に得ることが六つかしい。世界の同情が我になければ、我は只好戰國好亂者として目せらるゝ危險があるからである。それで我は決して米國との開戰を希ふものではないが、米國の態度にして今の如くならんか。我は獨立國として默止することが出來ぬ。日米戰爭は先づあるものとして我海軍の擴張を計らなければならぬと思ふ。

世間或は我輩の陸海兩軍擴張論を以て、到底國力民力の堪ふる所にあらずとなすものがあるけれども、現に獨逸の如きも同じ事をやつて居るではないか。獨逸の陸軍は其常備數六十萬にして日本は現役兵二十四萬である。殆んど獨逸の半數以下である。而して人口に於ては我の五千萬に對して彼の六千萬、極く僅少の差である。海軍に至つては固より比較にならぬのである。獨逸は最近十年英國と競爭して海軍の擴張に腐心したが、英國は更らに獨逸の向ふを張つて擴張に全力を盡し、今より七年ばかり後即ち千九百二十年に至れば、英國の超ドレッドノート艦は四十五隻（内加奈陀の分三隻）となり、獨逸の超ドレッドノート艦は廿四隻となり、獨逸は如何に努力しても到底も英國とは競爭出來ぬと思つたか、近頃は海軍擴張を弛めて陸軍擴張をなさんとしつゝある。現に近い中に十數萬の兵員を增す計畫を立てた。之が爲めに佛蘭西も亦陸軍擴張の計畫をなしつゝある。それで世界の大勢からいへば、今や海軍擴張競爭より陸軍擴張競爭に移りつゝあるのであるが、獨逸は海軍擴張を弛めたというても固より我國などは比較になるものでない。而して人口に比して我の二倍に當る陸軍を更らに擴張せんとして居るではないか。我國の軍備が多過ぎるなどゝいふ音は何處を

押せば出るのか殆んど了解に困むのである。固より獨逸の富力は我よりも遥かに多い。而し生活費は我よりも高いのであるから、人民の軍事費負擔の程度は我より少いとはいへぬのである。我國が興國の氣運に當つて國も民も大いに發展活動せざるべからざる秋に於て、早く已に悲觀消極の弱音を吐くやうでは實に情けない事である。我國の税も決して安くない。然し國の爲め、民族の爲め、我中流人士が自己の贅澤を止めて努力する積になれば、税はまだ／＼出せるのである。目前の小康を得んが爲めに百年の大計を誤り、千仞の功を一簣に缺くが如きは深く戒めなくてはならぬと思ふ。

新らしい女と卵細胞

薄井秀一

文明國に於ける婦人が次第に男子の領域に這入り込んで、男子と全等の位置に立たんとして居る事は最近に於ける著明な現象である。思想的に新しき女、放たれたる女が生れると共に、經濟的には男子の職業を奪つて其椅子を占領する者がだん／＼增えて來た。吾人は我國に於ける所謂新しき女に就ては餘り多くを知らぬけれど、所謂新らしき女以外の婦人からも時々「私共はモウ男子の玩弄物ではない」とか「貞操に於ては男女同權である」とか「私共は男の前に服從する義務は少しもない」とか『私は男の力に依らずして獨立しやうと思ふ」と云ふ樣な言葉を常に聞くのである。我國に於ては歐洲の文明國に於けるが如く女子參政權運動や婦人の社會的事業は少いけれど、高等教育を受けた多くの女子が從來の因襲から脱れて、新しき道を見

出し、そして女子其物の地位を高めんとしつゝある事は爭ふ可からざる事實である。文明の進步するに從つて我國の女子も今後益々其地位を高め、家庭に於ける母とならずして、男子と共に社會的地位を獲得する者が次第に增加するに違ひない。

世の學者、教育家及び經世家は斯くの如き傾向を如何に見るてあらうか。吾人は屢々教育家及び教育に關係ある學者から之に關する意見を聞いたけれど、其多くは何れも道學的か然らずんば抽象的議論て、智識の進んだ若い女子を衷心から會得せしむるに足る根本的解釋を與へて吳れる人が甚だ少い樣てある。思ふに婦人に關する從來の歷史や道德は解放された新しき女に對して何等の價値も權威も無いてあらう。何となれば彼等は既に歷史や道德から脫れて新時代の自覺したる女性たらんとして居るからてある。吾人は妄りに女權論者や新しき女の主張及び態度に贊成する者てはないけれど、單に女子の美德は柔順なりとか、女は斯くあらざる可からずとか云ふ樣な抽象論にも同意する事が出來ぬ。モウ一層具體的に女權論者は何故に起りしか、新しき女は何故に生れたるかを社會學上から又經濟學上から十分研究する必要があると思ふのてあるが、其前に女子の本性は何てあるか、男性との區別は何處てあるかを科學的に研究したいと思ふ。

一、生殖腺の移植と性的變化

極端なる女權論者は恁う云つて居る。曰く男子と女子との區別は唯其生殖器のみてある。即ち女子は女子生殖器を有する男子てある。だから今後の女子は其教育及び地位生活に於て全然男子と同一てなければならぬと。成程男女兩性は其生殖器に依つて最も明かに區別される。そして兩者から生殖器を除去する事が出來たら女子てもなく男子てもなく、又之を女子と云ひ男子と云つても差支あるまいと思ふ。然し乍ら男子の生殖器を有する事に依つて、又女子の生殖器を有する事に依つて、男女兩性は生理上及び心理上にも種々の差違があるのてはあるまいか。之を研究するのは最も大切なる事て、之が解決されゝば、外形的の區別ばかり

てなく其内容も其立場も更に一層明かに區別さるゝに違ひない。

獨逸のエー、スタイナッハ氏は先頃河豚及び鼠に就て生殖腺の機能及び意義に關する面白い實驗をし、隨意に男性のものを女性の特徴及び精神狀態に變化せしむる事を得た。ス氏は先づ男性動物の睪丸を摘出して、之に女性動物から取つて來た卵巢を移植したのである。すると移植した卵巢からは内分泌を生じ其動物の體格はだん／＼女性的になつた。そして乳房が著しく發育すると共に身體は肥滿し終に精神狀態も亦女性的に化するのを認めたのである。又卵巢と一緒に喇叭管及び子宮角部を男性動物の腹腔内に移植した處が、是等の器官は漸次其處に於て發達し、よく内分泌を營む樣になつたと云ふ事である。之に依つて見れば動物試驗に於ては生殖腺を移植する事に依つて男性を女性に變化せしむる事が出來るのであるが、人類に於ては果して何うか。勿論未だ實驗されて居ないから學術的に證明する事は出來ないけれど、若し斯くの如き方則が生物の全部を通じて應用されるものならば、甚だ面白いと思ふ。何となれば、スタイナッハ氏の實驗に於て生殖腺の移植に依り男性動物の精神狀態が女性化した如く人類も亦生殖腺の移植に依つて其性を變化せしむる事が出來るからである。

勿論人類に就てス氏の實驗をする事は極めて困難でもあり、且つ實驗し得たとしても人類の如く種々の機關が複雜に進歩して居る高等動物にあつては、下等動物に於ける如く迅速に其精神狀態まで變化するか何うかは疑問である。然し支那に於ける官宦が去勢に依つて男性とも就かず女性とも就かぬ一種の中性的精神狀態に變じ、又は子宮を切取した女子が軈て精神的にも變化するのを見れば、ス氏の實驗が人類に應用されぬと斷言する事は出來ぬ。其處で假りに生殖線の移植に依つて其性を變化せしむる事が出來るとすれば、少くとも男女兩性の區別は其生殖器だけではないと云ふ事が分るのである。何となれば茲に一人の男があるとする。そして此男の睪丸を取り去つて女子の生殖腺を

移植すれば生理的にも心理的にも女性的に變化するのだから、全く同じ價値を持つて生れた二人の人があつても、異つた生殖器を所有する事に依つて、生理的にも心理的にも異つた發達を遂げる事は明かな事實である。して見れば男女兩性の區別は生殖器のみではなくて本來其區別に伴ふ生理的及び心理的の差異があるのだ。果して然りとすれば女權論者の所謂女子は女子生殖器を有する男子なるが故に男子と同等でなければならぬと云ふ論は極めて薄弱になつ來る。

二、生物學上より見たる區別

女子が社會に立つて男子と同等の地位を占めんとするには、先づ第一に體力及び智力に於て男子と競爭しなければならぬのであるが、之に就て新しき女の或者は下の如く云つて居る。曰く從來の女子が體力及び智力に於て劣つて居たのは其天性と云ふよりも寧ろ歴史てある。即ち從來の女子は常に男子の爲に壓迫されて、社會的活動をする事が出來なかつたので其天分を十分に發揮し得なかつたのである。我々は此因襲を破つて努力さへすれば其體力に於ても智力に於ても決して男子に劣るものではないと。若し左うならば新しき女は今後大に男子の領域に向つて突進す可きである。けれども如何に歴史を無視し因襲を破つたとした處て、女子は男子と同じ方面に進んで同じ地位に立ち得可き素質を持つて居るであらうか。甚だしき疑問である。

少くとも過去及び現在に於ける女子の有する體力が男子に比して著しく劣つて居る事は爭ふ可からざる事實である。中には或男よりも優れた體力を有する女もあるであらうが、大數の上に於て比較すれば其細き骨組、其小さき體格は到底男子と競爭する事が出來ぬ。而して此劣りたる體力は、女子の原始的本性であらうか、又は新しき歴史に依つて造られたるものであらうか、若し歴史に依つて造られたるものとすれば、今後の努力と修養とに依つて男子と同じ程度にまで進み得可きものであらうか。此點も仔細に研究して見なければならぬ。而して此問題を研究するには人類の歴史に遡つて兩性は何故に生れたか、兩性の本能及び自然史

に就て調べなければならぬが、それよりもモット簡潔に解決しやうとすれば、他の動物を背景に置いて、生物學上から之を見るのが一番便利てある。

各種の動物に就て調べて見ると中には雌雄の區別が判然と分らないのもあれば、又雄は唯生殖の本能を果すだけて何の活動もせず、雌の身體に寄生して居る如き變態な動物もあるけれど、雌雄を判然と區別し得る動物に在つては其大部分は雄が活動的て雌が靜止的てある。從つて其體力も雄の方が優つて居る。此現象は生殖上の必要から自然に斯うなつたのて之を一面から見れば分業の結果てある。原始時代に於ける生物が始めて雌雄兩性に分れた際には或は何れも同じ體格を持つて居たのかも知れないけれど、雌が卵を産み或は生んだ子を育てる間、雄は常に之を保護し或は之を養はねばならぬ。斯うしてだん／＼進化する中に兩性の仕事は分業となり、從つて雌が靜止的となり、雄が活動的となつた事は明かてある。勿論卵を生むだけて少しも哺育の任に當らない動物にあつては兩性の間に著しき相違を見る事が少いけれど、苟も卵を孵化させたり、或は幼兒を哺育する動物にあつては何れも雄の體格は雌に優り且つ活動的てある。

人類に於ても男女の體力が現在の如く優劣を生じたのは、他のあらゆる動物と同じ樣に姙娠及び哺育の必要から來た自然の結果てある事は云ふ迄もない。即ち女子は常に母となつて哺育の任に當り、男子が野外或は社會に於ける活動に對して、女子の仕事は多く家庭に於ける靜かなそしてこまかな事てあつた爲てある。だから此差別は原始時代から永續しつゝある自然史の造つた結果て、女子が生殖を免るゝ事の出來ぬ間、女子が嬰兒を哺育する責任を有する間、女子は到底體力に於て競爭する事が出來ぬてあらう。勿論生殖を避け嬰兒哺育を避けて特に體力の養成に力むるならば其一時代に於て或は男子と競爭し得るかも知れぬが、其本性と其子を生める母の弱き體力は必ずや永久に遺傳さるゝに違ひない。殊に近來學者の報告する處に依れば文明國に於ける婦人の骨盤は次第に狹窄となり、文明

の進歩するに從つて難産の數は增して來る。斯くの如き境遇にある女子は何時の日か體力に於て男子と競爭し得るてあらうか。

三、女性の根本は卵巣

先年物故したウヰルヒヨウ氏は『女性の根本は卵巣てある。卵巣に依つて女性は造られるのだ』と云つたが、スタイナッハ氏の實驗に於て生殖腺の移植に依り、男性が女性化した處を見れば、ウヰルヒヨウ氏の言は慥かに眞理てある。然らば女性の根本をなして居る卵巣とは何んなものてあるか。そして之を男子の精蟲と比較して見るのも甚だ面白い事と思ふ。組織の極めて簡單なる下等動物にあつては生殖作用を營む事が其全部てある樣なものもあるが、其卵細胞は常に營養分を貯へて精蟲の來るのを待つて居る。而して下等動物から高等動物とあらゆる動物に就て調べて見ても其卵細胞が受動的にして且つ保守的なるは全く其軌を一にして居る。之に對して精蟲は如何にも活動的て、常に卵巣に向つて突進しつゝある事は、是又あらゆる動物を通じて精蟲の有する性質てある。斯かる現象は植物に於ても同じ事て、假りに一つの花を取つて研究しても、雄蕋の有する花粉は甚だ活動的て自ら動いて雌蕋に進むのてあるが、雌蕋から雄蕋に向つて進むものは全く無い。

之を以て直ちに精蟲の性質が男子の本性てあり、卵細胞の性質が女子の本性てあるとは云ひ難いけれど、生殖に於て女子は本能的に男子を惹き付けんとし、男子が主動的に女子に向つて進むのは此處に基くのてあらうと思ふ。元より人類は最も進化したる動物てある。生殖は極めて大切な事てあるけれど、高尚なる理想を有する人類は生殖の目的のみを以て生存して居るのてはないから、文明國の男女が必ずしも生殖器を中心とせる原始的の本性を持つて居なければならぬと云ふ理由は少しもない、されば進んだ女子は男子の來るを待たずして反對に突進する者もあるけれど、生物學的に云ふと斯くの如き女子は一種の畸形兒てあると云ふ事が出來る。思ふに人類も原始時代に於ては精蟲と

卵巣とが兩性の中心であつたかも知れぬ。だん〳〵進化するに從つて種々の組織は複雜になり、其精神狀態も變化したのであらうが、元來主動的活動的なる精蟲を有する男子は何處までも其性を維持し、受動的靜止的なる卵巣を有する女子は矢張り今に至る迄其性を受け繼いで來たのであらう。現在に於ても多くの女性が男性に比して甚だしく非活動的なるは此處にも胚胎するのであらうと思はれる。

ウヰルヒヨウ氏が「女性の根本は卵巣である」と云つたのは更に他の意味を含むのかも知れぬが、生殖腺の移植に依つてさへ其體質及び精神狀態が變化するならば、兩性が互に精蟲及び卵巣の先天性を特有する事は云ふ迄もない。果して然らば女權論者は無益な運動を開始する前に、生器器の交換に就て外科醫に相談した方が賢明ではあるまいか。

四、女子の生理的障碍

生物學上より見たる男女兩性は僅かに顯著なる區別を示し男子に比べて女子の非活動的なる事を證據立てて居る。そして女子の異れる心理狀態及び劣れる體力は、新しき歴史或は男子の壓迫に依れるものではなくて、生殖の必要上から來た分業の結果で、生れると共に得た本性である。斯くの如く女子の體力は其本來に於て男子よりも劣るのであるが、更に月經と云へる大なる負擔を持つて居る事は社會的活動に際して甚だしき弱點である。

女子は假りに其希望或は意志に依つて結婚を避くる事が出來るとすれば同時に妊娠の煩ひを避ける事は出來るのであるが、月經に至つては如何にしても之を避くる事の出來ぬ負擔である。月經は女子の少女時代から殆んど老年時代に入るまで凡そ三十年の間毎月四五日宛起る處の生理的現象で、此期間に於ける女子が生理的變化と共に心理的にも種々の變化を來す事は種々の方面から立證されて居る。例へば忍耐力の減少する事、一時的に平素と違つた性格を現はす事、或は犯罪行爲の多い事等は其著しい例であるが、此外にも月經時には種々の變化が起るのである。鵜飼文學士は女子

大學生十四名に就て月經時に於ける變徴を調査し次の如く報告して居る。

身體異狀の著しきものは頭痛あり腹痛を覺え全身の疲勞を感じ盛んに睡氣を催ふす事である。中には胃の不消化を來すと云ふ者もあつた。十四名の中頭痛は七名、腹痛は四名、睡眠を催ふす者五名の割合である。精神作用の中智的作用に關しては一名は注意集注が容易なりと答へ、他の一名は月經前後一週日位は非常に精神全體の能力を增進する樣に思はるゝと答へたが、其他は總て智的作用に最も必要な注意力の減退と思考力の缺陷とを訴へて居る。感情作用は興奮するかの如くにあるが、所謂感動し易くなるのであつて、一名を除くの外皆一樣に憂欝に傾くと答へて居る。

一名は月經中は感情が興奮して萬事ハキ／＼するのを好むと云ふのである。意志作用に關しては明確なる答案を得て居らぬが、大體に於て不活潑で、行爲が不規律になり我儘になり易い樣である。(下略)

女子の最も活動す可き青春及び壯年時代に於て斯くの如く生理的にも心理的にも變化を來す月經を負擔しなければならぬのは慥かに女子の弱點である。若し夫れ一度結婚するに及んでば姙娠と育兒とは共に避く可からざる負擔であり、義務でなければならぬ。姙娠及び育兒は女子の負擔或は義務と云ふよりも、女子生殖器及び乳房を有する女子の本能であると云つた方が適切であらう。然らば新しき女の云ふ如く今後の努力に依つて女子は體力及び智力共に男子と同等に進み得たとしても、月經及び姙娠を避くる事が出來ない以上、到底男子と同等の地位に立つて同じ社會的活動を續くる事は不可能である。

五、男女兩性の心理的差違

前に述べた如く男子と女子は其先天性に於て、又其體力に於て著しき相違がある。更に之を心理學上から見るのも重要な事だと思ふ。或る學者は斯う云つて居る。人間の根本は男女の二元素から成つたもので、Aを男としBを女とすれば、其性の中に男は必ず三乃至四のBを所有し、女は必ず三乃至四のAを所有して居る。だから男女の差は唯一乃至二のAとBとの相違だけであると。然らば一乃至二の相違とは何であるか。ハイマン氏は男子と女子との心理を比較して凡そ次の如く述べて居る。

男子と女子との間に存する精神的差異は、決して其性質若くは之を支配する法則の差異ではなくて殆んど

凡て量の差異である。兩性の間に存する差異が必ず價値の差異でなければならぬと豫想するのは甚だ危險な事で、すべて事實上の差異は必ずしも價値の差異を伴ふものではない。又男子は一般に思索の世界を以て固有とし女子は一般に感情の世界を以て固有とする如き、或は男子は全世界に於て活動分子であり、女子は感情的分子だと云ふ如き前提に立つ研究も甚だ危險である。此思想は其一部分に於て眞理かも知れないが、斯くの如き全く相反せる特性を有するのは、眞に正當なる男子並に女子に於て然うであるか何うか甚だ疑問で、唯女子よりも男子の方が思索力が大きいとか男子よりも女子の方が感情が強いと云ふに過ぎないのである。事實に於て斯かる差異は全く程度的性質を有するものだから、有無の二つに歸す可きものではなくて多少の程度に歸す可きものである。同時に斯かる差異は統計的性質を有するものだから、平均的男子又は平均的女子に就いて云ふ可きもので、一人一人の男子或は一八一人の女子に就て云ふ可きものではない。此立場から云ふと女子は平均し情緒的であると云ふ事が出來る。即ち女子は興奮せられ易く感情及び感覺の深さ及び強さは比較的大きいのである云々。

ハイマン氏の云つた如く男女兩性の心理的差異は慥かに其性質ではなくて其量の相違である。或學者が男女の差は唯一乃至二のAとBとの相違だけであると云つたのも此意味であらうと思ふ。又ウレシユネル氏は、心理學的實驗及び觀察に基づき男女兩性の心理的差異を次の如く述べて居る。

感覺 の領域に就て云へば、女子の方が男子よりも刺戟波が低い、そして視覺及び聽覺は女子よりも男子が優り且つ區別感覺も大きい。

運動機 の領域に就て云へば、男子は各種の刺戟に應ずる事及び運動の補助に依つて應答す可き事項の實施等は女子よりも確實で且永續的である。

注意 の領域に就て云へば、女子は具體的感情的であるが男子は抽象的算術的である。

記憶 の領域に就て云へば、女子は視覺的記憶が強く、男子は聽覺的形容的記憶が強い。

觀念聯合 に就て云へば、女子は反跳的で表象變換を好み反應の緩徐なると共に主觀的である。之に反して男子は集中的で反應が迅速なると共に客觀的である。

ウレシユネル氏は之を概括して曰く男子が抽象的學術的であるのに對して女子は直觀的、感情的、藝術的てある。男子は運動、判斷、意志に於て優り、女子は知覺、記憶、感情に於て優ると云つて居る。此比較も勿論統計的差違であるから兩性の一人宛に就て比較したら中には女よりも感情的な男があり、男よりも意志の强い女があるかも知れぬ。然し大體に就て云へば男女兩性の心理狀態は凡そ前に述べた樣な相違があるのである。而して之に依つて見れば、男子の心理狀態が社會的活動的なるに對し、女子は著しく劣つて居る事が分る。

六、文明は本性に反かしむ

吾人は科學上から見た男女兩性の差違に就て大體上に述べた。然し兩性の間に於ける差違が必ずしも價値の差違でない事はハイマン氏の云つて居る如くてある。何となれば女子は社會的活動に於て男子に劣るからと云つても、他の方面に於ける種々の長所は十分之を償ふて餘りあるからである。例へば男子の如く劇しき勞働には堪えぬけれど、其體格は胎兒の保護に適し、男子の如く思索的事業に於て成功する事は出來ないけれど、其濃やかなる愛情は最も慈母たるに適して居る。

之を要するに生理學上から見ても、心理學上から見ても、男女兩性は其間に著しき差違がある。而して此差違を一言にて云へば、男子は社會的活動と其思索的能力とに於て文明に貢獻し、女子は其本性に依つて人類の繁殖と進歩との爲に努力す可きものである。思ふに兩者の有する特性は何れが優り何れが劣ると云ふ樣な問題ではなくて、各々絶對の價値を有するものてある。殊に女子の存在は生産力即ち分娩と哺乳とに於て最も大なる意義があるので、單に人類の繁殖のみならば、或下等動物の如く男子は精蟲として存在して居ても足るのである。大自然の與へた女子存在の意義は僅かに此處にあるのだ。若し分娩と哺乳とを忘れ、之を了解しない女子があるならば、それこそ女子たる價値はないのである。何となれば分娩を怠つて唯働く丈なら、此方面に於て一枚上手の役者たる男子が雲の如く

控へて居るからである。

斯う云つた處で吾人は女子に向つて徒らに分娩のみを強い、其向上及び發展を拒むものではない。世の中の進むに從つて女子の向上及び發展する事は吾人の衷心より希望する處であるが、同時に科學的見地から其本性を自覺して貰いたい。そして自然の與へた存在の意義を忘れて貰いたくないのだ。今や世界の文明は非常な勢を以て進みつゝあるが、之と共に男性化する女子は文明國の特産物なるかの如く、次第に增加して行く。けれども女子の男性化するのは眞の文明を意味するものではなくて、混沌たる文明の過渡期に於ける惡弊たる事を知らねばならぬ。眞の文明は男女兩性何れも其特性を發揮する事にあるのは云ふ迄もない。

然し乍ら吾人の茲に最も注意しなければならぬ事は、現代に於ける一部の女子が何故に其存在の意義を了解せずして男性化せんとするか。又何故に女子の特性を忘れて男子と競爭せんとするかである。生物學上に於ける女子、生理學上に於ける女子、心理學上に於ける女子は到底男子と競爭す可きものではないのだけれど、事實は之を否定する事が出來ぬ。現在の經濟狀態及び社會組織は何時の間にか一部の女子を驅つて此處に趨らするのである。

日米國交の危機

（排日問題の根本的解決如何）

マスター、オブ、アーツ　米田實

米國加利福尼亞(カリフォルニヤ)州の排日問題は愈重大なる形勢を發生せしむるに至つた、目下約二萬六千五百英町(エーカー)の土地を所有し、借地、請負等を併せて合計二十五萬英町(エーカー)の農園を經營し、年々發展の勢を示せる在留邦人五萬の運命は、非常なる危險に會して居る、明治三十八年勞働者連の日韓人排斥會桑港に出現せる際、「彼等能く何をか成さん」と嘲笑した我が官憲が、最近狼狽成す所を知らざる醜態は、洵にお氣の毒と言ふ外は無いのである。

如何にして排日問題起りたるか、第一は日本國の向上に對する恐怖若くは嫉妬である、即ち日清戰爭以前に於ける米國人の加州日本人に對する態度は、「憐れむ可く愛す可き小さい民族」「ペルリが開いた國から來た若者連」として之を愛する風であつたが、日清戰爭で日本の實力を認むると共に、少くとも一部米人間には幾分恐怖の念を萠して來た、然るに三十七八年の日露戰役の結果、日本は世界が恐れて居る露國を擊破したので、之等米人の感情愈一變し、恐ろしい隣國と言ふ感想が餘程高まつたのである、第二は在加州日本人の發達である、抑も日本人の加州移住は古くからあつた、徳川政府の末路、和蘭人スネールなるもの（幕府に仕へて松平の姓を賜はれるもの）、幕府に望みを失ひ、日本農夫二十餘名を率ゐて渡米を企て、明治二年桑港に到着した、又明治七年領事代理高木三郎氏の報告には「加州在住日本人數男六十八、女八、幼兒四、合計八十名」とある、以て日本人移住史の長きことを知るに足るが、其數量及事業共に發達を見たるは最近十五年の事である、但し其前半は統計が不完全であるから最近七年間の發達丈けを紹介しやう、

年度	加州日本人所有地（單位英町）	日本人經營農園（所有及借地）
明治三十九年	八、六七一	九七、四五一
明治四十年	一三、八一五	一三一、三九二半
明治四十一年	一五、一一五半	一五五、五八一
明治四十二年	一六、四四九半	一九五、九四八半
明治四十三年	一六、九八〇半	一九四、七四二半
明治四十四年	一七、七六五	二三九、七二〇
明治四十五年	二六、五七一	二四五、七五三

之等の土地は無論果物、甜菜、馬鈴薯、苺、其他各

種農作事業に充てられ、之に依つて日本人は多大の富を造りつゝあるのてある、然かも白人連は日本人が勞働者たる地位に滿足せず、刻苦黽勉、着々土地所有者となり、向上の勢盛なるを見、將來の加利福尼亞州は日本人の天地てはないかとさへ想像し、大に狼狽し、迫害を加ふるに至つたのてある。此外にも種々の原因があるに相違無い、即ち民主的共和國の常として、勞働者の勢力強く、政治家も其競爭者たる日本移民の制限及び迫害を企て以て之が歡心を買はんとしたのも其一てある、又九年前より無教育の布哇日本移民が多數加州に轉航し、多少米國の風習を無視し、爲めに一部白人をして、東洋人同化の困難を思はしめたことも其一てある、(但し此程度は日本の基督教徒等が稱する程甚しいものては無い)、又學童問題當時などは、駐米英國大使ブライス氏新たに赴任し、英米同盟説もあつたので、獨逸及愛蘭人等は此同盟成立の妨止に努力し居り爲めに學童問題も「日米の隔離は日英の疎隔なり」との意味て、彼等に利用せられ排日の勢を高めたとも其一てあると思ふ、併し一言にして盡せは、根本は矢張り人種的僻見に在りと言ふ外は無いのである。

已に人種的僻見が本てある、從つて其行ふ所、企つる所、皆な偏頗を極め、不條理を極めざるものは無い、唯だ加州人民は一八八〇年頃盛んに人種的感情に依つて、支那人を迫害し、排斥し、遂に一八八二年國會に迫つて支那人排斥法律を通過せしめた民てある、人種的迫害にかけては、言はゞ百戰老功の兵てある、其行ふ所も頗る巧妙て、中には露骨な排斥もやるが、亦た表面上公平の姿を示して、實際偏頗なる遣り口が少くないのてある。

二

然らば加利福尼亞州民は如何なる排斥方法を執つたかと言ふに、第一は桑港日本人隔離學校設立の問題てあつた。之は明治三十九年に起つたのである。

從來桑港の支那人等は白人の小學校に通學すると能はず、彼等のみの隔離學校に通はざるを得無かつたが、日本人は之に反し白人の小學校に通ひ、白人兒童と同

樣就學するとか、出來て居た、然るに桑港市は急に日本人をも隔離學校に通學せしむることとし、白人小學校通學を禁止せんとしたのである、其日本人排斥の意味なることは言ふ迄も無い、而して此點につきては已に加州法律の規定があつて略之を許して居たのである即ち加州政治法規千六百六十二條に曰く

「學校管理員はインヂャン兒童、若くは蒙古人或は(即ち)支那人血系に對し隔離學校を設置するの權能を有するものとす、斯くの如き學校設立せらるゝ時はインヂャン、支那人、蒙古人兒童は其他の學校に通學するを得ず。

而して從來桑港市ては支那人隔離學校ありたれど、之を支那人のみの物と解釋し、日本人を含めなかつたのである、之れは法文の蒙古人(モンゴリアン)なる文字を以て唯だ支那人の意味に解釋し、Mongolian or chinese を蒙古人即ち支那人と言ふ意味に見て居たからである、然るに三十九年桑港學務局は急にorを「或は」と解釋し、日本人に適用せんとしたのである。此計畫は大統領ロオズヴエルト氏の干渉と日本政府が布哇日本人の大陸轉航禁止を交換問題としたる爲め、一應中止せられたが、此度加利福尼亞州議會に提出せられた隔離學校法案は、蒙古人云々の規定を不十分とし、明確に「日本人」なる文句を法律に入れんとするものに外ならないのである。

第二に起つたのは日本人土地所有權禁止法案である明治四十年二月加州々會下院を通過したる法案は下の如きものであつた。

加州に在る日本人及支那人は五年以上土地を所有することを得ず。

日本人及支那人か土地を所有したる後五年以内に市民權を得る能はさる時は地方檢事は其所有財産を公賣に附するものとす

市民たるを得たる外國人は一年以上、土地耕作請負又は借入契約をなすを得ず

此法案は大統領ロオズヴエルト氏の斡旋と州知事の盡力て間も無く破壞されたが、四十二年加州々會開會するや(加州々會は二年一回開會の規定なり)、又々排日的土地所有權禁止案出て、一昨四十四年にも同一の法案を見たのである、併し前には大統領ロオズヴエルト氏後には大統領タフト氏の盡力て、首尾善く破壞さ

れたが、今年は愈々容易ならざる形勢に立ち至つたのである。

何が故に容易ならざる形勢に立ち至つたか、第一新大統領ウヰルソン氏は中央集權主義の共和黨に反し、黨祖ジエフアソン以來州權尊重を主義とする民主黨出身て、州の政治に干渉すること困難なる立場に居るものである、第二ロオズヴエルト、タフト諸氏執政時代には、大統領、加州知事、州會皆な同じく共和黨てあつたが、今度は大統領のみ民主黨て、他は皆なロオズヴエルト派たる進歩黨てある、即ち加州々知事ジヨンソン氏は昨年大統領選擧の際、ロ氏の相棒として進歩黨副大統領候補となつた人てある、又加州州會上院の黨勢は進歩黨二十七、民主黨十二、共和黨一、下院は進歩黨四十六、民主黨二十五、共和黨八、社會黨一てある、從つてウイルソン氏も黨勢を利用して干渉することが出來ないのてある、況んや亦加州の民主黨は、排日派て、排日を綱領として居るものてあるから、ウ氏は實際此少數の味方を動かし得るかさへ疑問てある。これはウィルソン大統領に執りても遺憾てあらうが、我國民に執りては最も殘念千萬な次第と言はざるを得無いのである。

然らば目下加州々會が行はんとする日本人排斥案は如何なる性質なるかと言ふに、土地所有禁止を第一とし略下記の如きものである。

△土地所有禁止　市民たる意志を發表せず若くは市民たるを得ざる外國人の土地所有を禁ずると、猶外人の所有せる土地は之を公賣に附すると（但し土地案種々あり、中には將來の土地所有を禁止する丈けの案もあり）

△漁獵業禁止　市民に對しては漁業税を五弗とし、歸化するを得ざる外國人に對しては百弗を課す、又歸化するを得ざる外國人は狩獵業に從ふことを嚴禁すること

△人頭税增加　市民には二弗の人頭税を課せるも、市民たるを得ざる外人には之れより多額の人頭税を課せんとする案

△隔離學校案　前に説けり
△機關師免狀拒否　外人は機關師免狀を受くることを得ず
△酒販賣禁止　外國人には酒販賣鑑札を下附せざること

以上は加州々會に提出せられたる各種排日法案の內容である、何人も之を讀んでその暴戾止る所を知らざるに驚かないものはあるまいと思ふ、殊に我が同胞は何人も在米邦人の苦境に對して一掬の涙無きを得ないのであらう。

三

然らば則ち此排日問題の解決策は如何、世上或は日米人間の調和、意思疏通を根本案と説くものがある、予も斯くの如く信ずる一人ではあるが、併し今日の形勢では、時期少しく後れた感がある、之れ丈けでは迂遠な嫌がある、無論意思疏通は結構で今後大に勉む可きとだけれど、之を唯一の方法とし進む譯には行かぬのである、此策のみに依れば意思疏通出來ざる內に取り返しもつかぬ運命に陷るかも知れ無い、然らば最も有効なる排日問題解決策は何ぞ、在米日本人をして歸化權を獲得せしむることと是である。

予は明治三十三年頃以來、米國に在つても、日本に在つても歸化權獲得の議論を主張したが、排日熱の勃興は、益同權の必要を大ならしむるに至つたのである他無し、第一最近加州等の排日運動を見るに、大抵日本人に歸化權無きを利用して之を排斥せんと試みて居る、例へば最初土地所有權禁止法案等も明かに日本人排斥を明記して居たが、之では明かに日米條約の均等待遇保障に背く爲め「市民たる意思を發表せざる外人の土地所有を禁止す」と言ふ風に改めて、何とか逃路を造り、一般外人に適用する法律案なるがの如く裝ふて居る、其他の排日案も大抵同樣である、然るに市民たる意思を發表するには、市民となり得る資格が必要である、又其意思發表とは漫然たる意思發表の意味にあらずして第一歸化證を得ることである、（第一歸化證を得たるより二年の後、第二歸化證を得て始めて市

民となるの規定たり、從つて第一歸化證丈けでは、市民ではないのである)、而して英獨佛露伊墺其他歐洲人は、皆な歸化する資格があるから、市民たる意思を發表して、土地所有が出來るけれど獨り日本人は出來無いのである、其他各種の外人排斥案(加州議會に出て居る如き)も歸化權ある歐洲各國民に影響無く、獨り日本人に影響あるものである、然るに若し日本人にして歸化權を得たりとせん乎、日本人が歐洲人と均等なる待遇を受くる方法確立して、加州政治家は之を排斥する方法を奪はるゝのである、殊に日本人市民とならんか、政治家連も日本人の投票が欲しいので、之が排斥を叫ぶこと能はず、却て之に阿諛するに至るや疑ひ無き所である。

次ぎに此歸化權の附與は、米國憲法第一條第八款中の規定に依り、全然米國中央政治機關の權限に屬し、一州は何等の權限を持たないのである、即ち排日の本場たる加利福尼亞州の議會若くは知事が容喙する能はざる性質のものである、從つて加州の州權を尊重する立場より、日本に對し國際的義務を果行する能はざる苦境に陷れる米國中央政府も、之には充分盡力し得る筈である、要するに予は一時手段としてこそ加州々會に泣き付き、排日の機會を延期せしむるも善いと思ふが、今年助かつても、明後年再起し、然かも中央政府は州權の爲めに思ふ程盡力し得無い以上、之等は所詮根治策と言ふこと能はざるものである。

(備考、米國中央政府及議會は憲法に明記しある權限を與へられ、其他の權は州に在り、大統領は州知事に命令する權能無く、州立法部の法律を否認する權能無し、米國憲法本文及ひ補則第十條參照。)

從つて予輩は、是非日本人排斥問題解決の良法たり、然かも中央政治機關の權限に屬する方法即ち日本人歸化權獲得策を最大要件と確信するものである。

四

然らば如何にして歸化權を獲得する乎、世上或は日本人が現行歸化法の下に同權を有する旨を說き、裁判を提起して、米國大審院の判決を仰がんことを主張する人もあるが、予は遺憾ながら之に同意することを得

ないものである。

試みに現行歸化法を見よ、由來米國歸化法は之迄頻々修正せられ、明治三十九年大修正を見たが、之等は大抵手續に關するもので、人種的制限に至ては未だ曾つて廢棄せられことが無いのである、人種的制限規定とは何ぞ、改正法國法規二千百六十九の文句である、曰く、

本題の諸項は白人たる外人及び阿弗利加出生の外人阿弗利加血統の人物に適用するものとす

The provisions of this title shall apply to aliens being white person and to aliens of African nativity and to persons of african descent

顧みるに一千八百七十年以前は白人に對してのみ歸化權を許して居たが、北部の人道論者は、奴隷癈止、南北戰爭の餘勢に乘じ、歸化權を白人のみに限らず、黑人にも與へよと呼號し、遂に一千八百七十年修正の結果、右の如く白人及び黑人に歸化權を許したのである、知らず日本人は白人か、將た黑人か、その孰れにもあらざることは言はずして明かな點であると思ふ、殊に立法者の意思を明證するものは當時の議事錄である、一千八百七十年七月二日米國上院に於て上記歸化法案討議中、マサチユセッツ州選出議員サムナー氏起ち歸化權につきて一切皮膚、人種の別を置かず、何人をも歸化せしめんと說いたが、反對論は飽く迄白、黑人以下の人種を排斥せんことを主張し、遂に上記の如き法律制定を見たものである、而して其後米國裁判所の判決例も、最高裁判所のものでこそ無いが、淸人オー、ユフ事件（ソーヤー判決錄五卷）、齋藤對合衆國事件（聯邦判決錄六十二卷）等皆な此意味を聲明して居る、唯だ多少學者を誤らしめたのは一八八二年支那人排斥法律通過の際、特に支那人歸化權禁止を規定したことである、之が爲め日本の學者間には支那人こそ歸化を禁ぜられ居るが、日本人に就ては規定が無いと言ふ議論が起つて來た、併しこれは日本の學者が善く研究せ無い罪で、此點につきても當時米國議會の議事錄は、最も明かに立法者の意思を示して居る、即ち一八

八二年四月二十五日上院議事錄を見るに、議員ファレー氏起立し「斯かる規定は繰り返しに過ぎないけれども、現在誤つて支那人を歸化せしむる法廷があるから矢張り此新規定を通過せられ度し」と懇說し、其結果二十六對三十二の多數で、之を可決したのである、又日本の學者中には「米國はモンゴリアンの歸化を禁じて居る丈けだから、日本人はモンゴリアンで無いとの立場で爭へる」と言ふ人もあるが、モンゴリアンなど言ふ規定は一切無い、即ち之等の人々は自ら蜃氣樓を書出し、之を本として奇論を逞うするものに過ぎないのである、要するに米國の歸化法は白黑人のみの歸化を承認して居るものであるから、歸化權獲得の方法は裁判でなくて、新歸化法制定の實行に外ならないのである。

然らば則ち我が政府は、宜しく米國政府をして歸化權を邦人に附與せしむるやう盡力す可きである、世上或は政府をして自國民を他國民たらしめんと力む可きで無いと說くものもあるが、之れは舊思想である、民族發展と言ふ大眼目を忘れたものである、世界の大勢に適はない議論である、殊に米國の排日問題は容易ならぬ形勢を發生し、大問題となつて居り、然かも他に好良なる解決方法無く、此儘にて進まば將來或は勢ひに驅られて、日米間の禍機を醸すやも知れぬのである依つて此際國家の利害を打算し、世界の平和を想ふても、宜しく之に盡瘁す可きではあるまいか、殊に歸化權たるや、外人たる日本臣民が有する權利の問題にして、之が有無は日本臣民の權利の有無に外ならないのである、而して米國中央政治機關も、此件に對しては多少面倒と困難とに會するに相違無いけれども、兎に角その權限に屬することであるから、日米間の禍機を避くる方法としても、宜しく盡力す可きことである、と思ふ、然らずして、歸化權獲得出來ず、排日問題の解決を見る能はずば如何、世間の事はすべて調子物也、勢ひ也、遂に如何なる悲慘事を見んも知れ無いのである、要するに予は切に日米兩國當局が日本人歸化權附與策を講ぜんことを切望して止まないものである。

誤解されたる政事家事業家

松井柏軒

（一）

人の評は棺を蓋うて後に定まるといふも、未だ必らずしも然らざるあり、クロムエルは幸ひに炯眼なる史家によりて其の眞價を發揮されたるも、他に尙ほ冤を蒙むりて永く地下に罵らるゝものなきに非ざらん、若し眞に人民史を著はすものあらば、彼の北條義時の如き、如何の批評を受くるやまた測るべからず。

棺を蓋うての後すら然り、何ぞ況んや現に生存して將來の豫斷しがたき人物に於てをや、動もすれば僞物にして君子と看られ、仁人にして姦佞と呼ばるゝの多きや言を俟たざらん。

凡そ憐れむべきは誤解せらるゝものより太だしきは鮮し、淑女私かに操貞を守るも、其の良人を始め一族之を認むるに至らず、傑士偉材を懷くも時に逢はざるがために俗の嘲を取くるに止まらず、日夕側侍する妻兒すらも之れを知らずして、尋常一樣人と做すが如きは、其の人に於て頗ぶる痛むべし、然れども是れ尙ほ可也、誤解せらるゝがために其の材を用ひ能を伸す所なきに至ては、幾んど忍ぶ可らざる也。

世事畢竟人力に由る、適材適處に任て其の能を用ゆれば功擧り事成りて、延きて一代を利すべきに、然らざるは事のためにも世のためにも惜むべし、世には千金を死守して其の愚を笑はるゝもの少きも、曠世の才を懷きて用ゆるに處なく、用ふるも處を得ざるもの鮮からざるべし、斯の如きは實に人物不經濟の極にして、猶ほ土中に萬金を埋むるに齊し、巨資を庫中に深藏して之を利殖することをせず、又用ゐて事業を成すなきものあらば、世を擧げて其の不經濟を罵るや必せり、

然れども人材の空しく膝を抱いて用ゆる所なきを怪まざるは何ぞ、未だ人材の偉大なる力を知らざるが爲め乎、抑も又適材を適處に置くの人世に於て重要事なるを知らざるがため乎、將た人物を誤解し、誤解の極、材能を伸ばさしめざる乎、此の點よりいへば、人物批評の重要なる、多言せずして明らか也、而して今の如く人物批評の振はざる、實に以て慨すべき也。

（二）

吾人は前月の本誌に載せられたる無名氏の手に成れる桂公の經歷を讀過して、實に無限の感に堪へざりき、思ふに世間誤解を招くの深きもの、啻だ一桂公のみに止まらざらん、政事家として多く誤解を受くる者山縣公の如き先づ第一に指を屈せらるべし、世多くは公を以て陰險なる機略家とす、機略は軍人の長所とする所にして、軍人は動もすれば目的のため手段を擇ばざるの習癖あり、兵を詭道として苟くも敗れず勝を全ふするを以て君國の爲なりとするに急なる、戰時公法に觸れざる限り何樣の手段を用ゆるも辭せず、卑むべきスパイの如きまた缺く可らざる一作略とす、此の習癖あるがために、政事家としても往々常軌を逸して權道を走ることなきに非ず、然れども大體に於て武辨に過ぎず、其の志の忠良にして苟くも私心なきは、素より言を俟たざるに、他を擠するに陰忍到らざるなしといはれ、殊に去冬の政變以來、憲政を賊すとまで罵られて、其の筆蹟の値すら頓に下落したりといふが如き、誤解も茲に至て言語に絶すと謂べし、公や老來其の晩年を汚さず、以て先帝の遺臣として節を全ふせんと期するに、斯の如き汚名を受くるは太だ悲むべし、寺内伯の如き亦之に亞いで誤解せらるゝ一人也。

必らずしも誤解さるゝに非ずと雖も、大に其の材を伸ぶる能はざるもの、政治界に在ては伊東巳代治、末松謙澄、金子堅太郎の三子、都築馨六男、安廣伴一郎氏等を算すべし、餘素より非ならざるも、經驗識力群を拔くもの多きに、事局擔當の任に當らざる、定めて髀肉の嘆あるべし、之を政治界に用ゐざるも、尙ほ孰れか用ゆるに適處なき乎、英雄首を回せば乃ち神仙た

いふ、政治界より一歩數歩を轉ずるも、材幹は尙ほ用ゆるに足らずとする乎、抑もまた政治界にのみ用ゆべしとするも、其の黨人たらざるがために材を伸すに由なしとする乎。然らば則ち政黨政治なるものは、人物經濟に於て頗ぶる硏究せざる可らざる也。

伊東子以下は姑らくいはず、山縣公が多く世に誤解せらるゝに至りしは、故伊藤公との關係實に多きに居らずんばあらず。故公は其の生時頗ぶる世の詆嘲を受け、殊に黨人よりは往々聽くに忍びざる詬罵を蒙むれるも、人情は洵に妙也、其の哈爾賓に於て刺客の兇手に斃るゝや、同情靡然として之に向ふの極、生時の詆嘲詬罵變じて讃美咏嘆となり、延きて故公と對峙し、若くば反對の側に立つものを憎惡するに至れり、乃ち故公を以て憲政第一の殊勳者と呼做すものは、併せて山縣公を目して陰險老猾なる藩閥の巨頭と爲せり、而して桂公の如きまた其の餘波を受けて、憲政破壞の權變家と稱せらるゝに至り、頓に排桂の風氣を增長せしめたる形迹あり。

現に吾人の了解する所によれば、桂公が初度の內閣組織に方りて意外の成績を舉げしことは、故伊藤公の自負心に少からざる刺激を與へしが如く、殊に日英同盟に於て、日露同盟派の巨魁たりし故公(栗野、都築等の外交家中には、日露同盟の主張者少からず、井上侯の如きも亦一時之に左袒したりしが如し)が、桂公に好意を有せざりしは勿論にして、海軍擴張の財源たる地租案に對しても、對韓諸問題に就ても、故公が是れ日英同盟の結果、日露開戰自然の成行なりと唱へて、桂公を苦しめしこと一再に非ず、然るに世を舉げて多くは桂公の權變却つて故公を苦惱せしめたりと做し、其の政友會を去れるを視ても、亦桂公の政略に陷れるものと做すが如き、且つ故公が韓國併合に反對し、其の哈爾賓客死の年の春に至て、始めて同意を與へし事實も、多く世に認知せられず、事每に桂公に致されて常に其のため火中の栗を拾ふものゝ如くに思ひ做し、隨つて故公の變死を悼むの情を移して、非桂の氣勢を煽するに至れり、是れ公の誤解されし第一也。

（三）

去年八月十一日朝、桂公が急遽露都より歸京するや、西園寺侯は自から之を新橋停車場に迎へて曰く『親しく大問題の計るべきあり、元老列席の上に於てすべし』と、公未だ何の故たるを知らず、三田の邸に入るに及び、更に或る方面の使者として某氏至り、公に告げて曰く『足下入て新帝に常侍し輔弼すべし、是れ幾んど確定したる所也』と、公は容を正して曰く『是れ豈臣子の叨りに決すべき所ならんや、況んや先帝大故の秋なるをや』と、裝を更めて參內し、先帝の御遺骸を拜し、又三陛下の御沙汰を拜して歔欷堪ゆる能はず、更らに午後山縣公邸に至れるに、席に西園寺侯あり、主公と共に告げて曰く『足下宜しく內府に入るべし、是れ確定の事實也』と、公辭すれども許さず、翌十二日正式に元老會議を以て之を定め、十三日親任式を行はれたり、世の公を目して自から宮中に入り、新帝を擁して威福を張るものなりとするの誤解たる、此の事實に徵して明白なるべし、西園寺侯にして若し桂公の如く誤解さるゝ人ならば、其の政治上の競爭者たる桂公を宮中に封鎖せる陰謀家と視做さるゝも測る可らず、勿論侯の人格の崇高なる、斷じて斯の如き心事なしと雖も、單に其の結果より推斷すれば、斯る誤解を招き易き事實ありし也。

公が宮中より出てゝ三び內閣を組織せるも、亦西園寺侯の推擧及び元老會議の結果に外ならず、然るに世また目して自から西園寺內閣を倒し、代はるべき松方侯を排して竟に大詔を掲げて顯はれたりと爲せり、之を聽く、公は自から當時の事を語りて『我れは眞に愚者なり、國家のためと信じて宮中に奉仕し、また國家のためと思ふて內閣組織の大命を拜して以つて失脚したり、我れ洵に世のいふが如き智者ならば、兩つながら固辭して出てず、假令宮中に仕ふるも未だ半年ならずして出づるが如きことをせざりしなり』と嘆ぜしといふ、或る人曾て公を評して曰く『彼れ本來情に脆き律義人也、唯だ故伊藤公及び政友會等に苦められて、以て應酬に巧みに、權略を解するに至れるのみ』と、

少くも大半眞相を穿てるものなるべし。

西園寺侯勅諚を遵行して政友會を鎮撫する能はざりしがために、政友會總裁を辭せりと爲すものは、之を以て公が辭職の時に放　る陰謀なりといひ、公また侯を毒殺す、實に人道問題なりと稱す、然れども公をして言はしむれば「西侯却つて余を毒殺せり、二月十日の朝、侯は余に電話を通じ、午前十時政友會員鎮撫の演說を爲すべし、其の結果議會自から休會し、十二日までは不信任案撤回の運となるべしと告げ來れり、然るに山本伯の檄より現はるゝや、一種模稜の演說を爲し、形勢を急變して余を辭職せざる能はざらしめしに非ずや、毒殺の下手人は寧ろ彼れ西園寺なり」と做すも或は測る可らず、而して是れ亦少くも事實を曲げざる一半有理の言說也、然れども世の多くは寧ろ公を目して侯を陷れたる陰謀家とす、是れ亦誤解の一ならずんばあらず。

（四）

桂公は新政黨組織に於ても、亦近く誤解の濃霧中にあり、其の政黨組織は一時の機略に出でゝ根底ある決心よりせしに非ず、殊に政權を離れたる以上、遠からず之を放棄すべしと做すもの其の一也、大隈伯を捨てて今日の境遇に至れる國民黨と西園寺侯に去られて前途危惧に堪へざる政友會とは、新政黨が獨り儼然たる黨首を戴くを嫉みて、故意に斯の如き傳說を爲すも、亦世間の誤解を深くする一原由ならん、此の誤解は蓋し深く公の性格を知らざるに出づ。

第二は新政黨、寧ろ總ての政黨の將來成立するものなるや否やを懸念し、桂公をして樞密院其の他に入らしめ、以て其の末節を全ふせしむべしと做すもの是れ也、素より公に對する好意に出づと雖も、誤解たるや言を待たず。

第三は全然政黨を有害なるものと確信し、此の前提よりして桂公を不忠不良の臣たらしめざるがため、強いて其の手を引かしめんとするもの是れ也、同じく公に好意を有すると雖も斯の如き誤解の一部に行はるゝや事實也。

或は宮中に於公の政黨に干與するを好ませられず、其の待遇を中止せらるべしといふ者あり、宮中の事案より臣下の豫察することを能はざる所なりと雖も、公たるもの何ぞ之がために其の初志を翻へす可けんや、故伊藤公すら政友會を組織する初めに方り、一切の官位を抛つ決心なりしといへり、故公の後に出で、故公成敗の跡に鑑み、深思熟慮の餘、茲に七十に近き老齢を提げ、憲政のため敢て新政黨の組織に着手せしもの、權勢に離れ、又は困難多きがために、其の初心を變ずるの輕擧を敢てす可らず、否公の性格に於て斷じて之あらず、之ありとするは實に誤解也。

公は權勢に戀着せざるも政治に執着す、換言すれば勢位に淡なるも事業に濃す、而して政事家として技倆當代に匹儔多からざるは、公の敵人と雖も認めざる能はざる所なり、然るに之を誤解の雲中に封鎖して、其の材力を伸さしめず、人物經濟に於て寧ろ惋惜に堪ゆ可けんや、

（五）

現に鬼怒川水力電氣會社の長たる利光鶴松氏も、亦太だしく誤解さるゝ一人にして、而して其の眞價の未だ汎く知られざるは、寧ろ桂公以上にあり、人物批評に忠なるものにして茲に着目するに至らざるは恠むべし、

彼は前科者也、然り、市政に關する或る種の犯罪のため、一たびは牢獄に繫がれたりしとあり、故星亨氏を助けて自由黨に辣腕を揮ひ、後に實業界に入れるも尚ほ株式界に雄視し、頗ぶる世上の注目を惹けり、此等の事實よりして、一般に世の眼上に映ぜる彼れは、道徳法律をも憚からざる、豪膽且つ辛辣なる恠人なりき。

一昨年除日、電車々掌運轉手等のストライキを行ひ、往來最も繁かりし東京市の最便なる交通機關を阻止するや、彼れ猛然蹶起し、自から得べき前東京鐵道會社よりの配當金全部を提供し、由つて以て即時に事を治めたりき、其の快駿にして而して潔白なる、實に意料の外にあり、吾人は當時彼を以て疑問中の一人物として

りき。

吾人の知る所によれば、東京市電氣局にある井上敬之郎氏は、異彩ある一人物也、大體に通じ、且つ平生國事を忘れざるに於て、實に斯界の一珍たり、安藤保太郎氏に至ては勉强備なく、且つ其の職務に精苦する洵に倫を絶す、而して人格また頗る高し、然るに此の二人者の彼れ利光氏を視る、恰かも怙恃の如く、傾倒到らざるなしといふ、吾人は更に之を以ても亦彼を謎の人物とせざる能はざりき。

鬼怒川水力電氣の工事設計は、主として廣川工學博士の手に成る、博士は篤學にして事に忠なる人也、平生書齋の鍵を一令孃に托し、斷じて他人を入らしめず以て日夕孜々として其の學と業とに精勵す、彼れ曾て博士に進言して曰く『幸ひに先生の設計豫期の如く成功せば、願くば萬金を呈して歐行の資と爲さん』博士斥けて曰く『設計豫期の如くなるは當然のみ、而して是れ我が責を果すに過ぎず、何ぞ別に禮を受くる理あらんや』彼れ深く博士の人格に推服し、爾後一切之に信賴して寸毫も疑ふなしといふ。

千代田瓦斯會社は彼れら發頭し、彼自ら長として成立し經營せるもの也、彼れ曾て顯言すらく、茲に至れるは競爭に由て瓦斯料金を低廉ならしめんがためのみ故に斷じて東京瓦斯會社と合同し、以て獨占を敢てするが如きを莫かるべしと、然るに合同の議竟に起るや彼れ唯々として多く爭はず、人あり、之を詰責すれば彼れ答て曰く『鬼怒川水電は我が全力を盡すべき主業なり、今若し千代田の合併を拒まんか、兩社の大株主たる神戸金子の一派は延きて鬼怒川の前途をも阻止して以て報復を圖るなきを保せず、是れ實に深憂也、故に今忍んで一歩を讓れるは、鬼怒川に於て斷乎讓るなからんがためのみ、且つ合同するも、瓦斯料金低廉の實効を擧げば、多く初志を捨つるに非ず』と。

彼れ曾て曰く『事業を成すものは、猶ほ一宗一派の開山たるが如し、利害損益の外に超越せざるべからず營業にして利益を主とするが如き目的にては、到底事業を成すに足らず』と、是れ彼が信念する事業觀也、

茲に至つて彼の面目は、漸く躍する所あらんとす、彼が尋常一様の事業家にあらざること、蓋しこの一隻語能く之を證す。

（六）

或は鬼怒川水力電氣の株式價格が拂込額以下に落込むを難じて、彼の信用を危ぶむものあり、彼れ嗤つて曰く『若し株式の昂低を以て信用厚薄の標準と爲さば、天下隨一の富豪家三菱の經營せる猪苗代水電株と雖も其の最高價額未だ我が先年の鬼怒川株の最高額に及ばざるに非ずや、我が信用果して以て三菱の上にありとする乎、社會の評言の恃むに足らざる斯の如きのみ』

平沼延二郎、半田庸太郎等始め鬼怒川大株主たり、二人失敗するに及び、其の所有株一萬六千、處分株として市場に出づ、彼れ悉く之を占取す、後に人に語つて曰く『我れ實に株式によりて益を得んとせば、鬼怒川權利株の高價なりし時、之を賣飛ばさば勞せずして巨萬を益せし也、平沼半田の處分株を引取りし後も、尙ほ機を視て賣買せば、また巨利を得られざりしに非ず、而して之を爲さず、爲めに自から二十萬圓の債務を負へる所以は他なし、區々株式によつて利する志なければ也、余不敏と雖も株式によつて利せんとせば、世の成金たる太だ難からず、然れども二十萬卅萬の端た金を獲るも、果して何をか成さんや、成金氏たるが如きは余が欲する所にあらざるのみ』と、彼れの志の小ならざる想ふべし。

彼れは今や全力を鬼怒川水力電氣の成功に捧げ、其の政治上の羈絆をも斷絶して一顧だもせず、自由黨以來政友會中に舊友多きも、一切往來せず、松田原の諸老入閣せるも、一葉書を贈らず、一名刺を投せず、全く風馬牛相關せず、常にいへらく『我が眞價は我が歿後始めて世に認めらるれば可也、東京鐵道の如き幸ひに今や市有となり、市民を益する少からず、瓦斯料金の聊かにても低廉なるを得たるも亦些か酬ゆるあり、若し更に鬼怒川水電を完成し、由て以て裕かに電力を供給し、市の電車電燈を益し、延きて惠を一般市民に及ぼすあらば、我が素志始めて酬ひらるべく、我が事

業亦始めて成らん、而して世之を認むるに至らば、余は死するも以て瞑するに足る、區々の利益を心とし、區々の負債を意とするが如きは、余の敢てせざる所なり」と。

彼れの鬼怒川水力電氣事業は、創立以後約二ヶ年間に一千五六百萬圓の資本を投下したが、凡そ水力電氣業は、其の工事を完成するにあらざれば電力を供給するを得ず、隨つて全資本を使消するに非ざれば一の收入を得ると難し、之を以て數哩數十哩の工を竣るに隨ひ逐次營業し、逐次收入を得る汽車電車と同日に視るべからず、抑も我が國に於て、二年間に一千五六百萬圓の巨資を使用し盡せるものは未だ多く之あらず、日本郵船會社は有數の大會社なるも、全資本二千二百萬圓に過ぎず、而して其の事業二十餘年、寧ろ三十餘年に涉る、市の電車の如き三社分立時よりするも、總資本三千萬圓に過ぎずして、然かも十數年の長日月を閲せり、瓦斯會社然り、電燈會社然り、唯だ鬼怒川が僅々二年間に一千五六百萬圓を使用し盡せるは、假令時勢進步の結果といふと雖も、亦以て彼が事業家として規模の小ならず力量の微ならざるを察するに餘あるべし。

且つ我が事業界の情勢を通覽するに、多くの資本を要するもの、必らず財閥の支配に屬するか、然らずんば其の多大なる援助を受けざるは莫し、故に事業を營まんとするもの、如何なる場合にても財閥の鼻息を窺はざるはなし、財閥とは何ぞや、曰く三井也、曰く三菱也、曰く安田也、我が實業界の少しく目立つ事業にして、此の三家の全部若くば一部の支配又は援助を藉らざるは絶無也、然るに彼れの鬼怒川水電を經營するや、毫も之と相關せず、否、瓦斯事業のため斯界人望家の泰斗たる澁澤男に睨まれ、水力電氣の競爭者として三菱の猪苗代及び三井家を代表せる園田一派を敵に廻し、安田派の桂川をも敵と爲し、四面吶喊の間に立ち、眇たる一書生上りの身を以て、敢然として屈する色なく、動もすれば之を一蹴する概なきにしもあらず噫吁彼の意氣の壯なる、誰か手を拍て快哉を叫ばざらんや、新人を歡迎し、新人に由て世の沈滯を救ひ、以

て益々進歩を促んとする吾人は、主義としても彼れが新鋭の志氣を稱せざる能はざる也。

若し彼をして偉大なる財力を有せしめば、彼れの事業の程度の如何は殆んど測る可らざらんとす、彼れ恐らくば三菱、三井、安田等の大財力を擁しながら、能く成すなき無能無智を冷笑すべし、三大財閥及び其の範圍内に立つもの、彼れの壯心に刺激せられば、宜しく應さに一代の智勇を傾倒せよ。

吾人は前科者として問題たりし彼れが、其の實一個の事業家、殊に一宗の開山たる精神意氣を懷抱して利害の外に超越し、一意事業を本位とする豪爽且つ熱烈なる事業家たるを知り、而して世間誤解の濃霧その四邊を蔽ふを惜み、桂公と併せて玆に少しく其の眞相の解明を試む、亦唯だ人物經濟のために慮りて也。

（七）

同病相憐れむといふ、果して然らば政界に於て最も多く誤解せらるゝ人と、事業界に於て最も大なる誤解を受くる人とは、應さに相同情する所深かるべき筈也、而して其の實然らざるは何ぞや。

利光氏が桂公に對する感想は吾人未だ聞く所あらず然るに道途の傳ふる所によれば、桂公後藤男等一派は彼を以て實業界の風氣を壞亂する佞人と爲し、其の實は虛業家にして漫りに政權に夤緣し、以て實業界の秩序を紊るものと做し、曾て私かに之を芟除せん志あり、現に西園寺內閣の原敬氏が、東京市の百萬燈計畫を阻止して以て暗に東京電燈を援けたるに對しても、鬼怒川水電を打擊する所以にして、乃ち彼を苦むる一策なりと做すがために、密かに之を是認したりといふ、公男等が財閥と親善なるより推すに、自然に彼れを好まざる傾向あるとは之を推測するに足るも、道途傳說の信僞は吾人素より之を保證する能はず、思ふに公等は未だ彼れを熟知せざるべし、若し彼れの力量を熟知せば、其の材を求むるに急なる公等、如何ぞ之を禮せずして之を排するが如きとあらんや、畢竟するに公等また彼れを誤解するのみ。

彼に在ては、自由黨以來の舊友に對するが如く、公

等に對しても亦寸分だも干むる所なかるべし、是れ彼の志也、然れども新人の材力を重んずる公等にして、淘に能く彼れに對する誤解を釋かば、之を芟除せんとせずして、寧ろ大なる同情を以て之を敬重するや必せり、吾人は唯相共に誤解せらるゝ人が、相共に誤解するを視て兩ながら之を憐れむのみ、吾人の志は唯だ誤解の雲霧を一掃し、有能者をして總ての方面に其の智勇辯力を傾倒せしめて以て一代の進歩を促すに在り。



山本内閣の内閣振りを評す

△案外有望な内閣

仙朶翁隠士

多年政界の表面から退いて居つた山本伯が、今度の政變に於て突如として舞臺の眞中に飛び出して來て、遂に内閣を組織するに至つたといふ事は、世間の多くの人が意外とする所であるけれども、私の見る所を以てすれば少しも意外とすべき事でないのみならず、是非此際にはこう出て來なくてはならぬ運命若くは成行になつて居つたと思ふ。

近時の日本の政界に於て、實際政治の局に當つて國政を料理し得る人間―即ち際望あり、手腕ある所の人間は、桂、西園寺を除いて外は山本伯である。さもなければ寺内伯である、とかういふ順序になつて居る。然し桂か西園寺かのどつちかゞ手傷を負うて政界から退くにあらざれば、山本も寺内も、いくら出やうとしても出る能はざる事情になつて居つた。然るに去冬以來の政變に於て、自らは少しも手出しをせぬのに、流矢を負うて引込で了つたのは寺内である。「具足を着たものは此幕に出る能はず」と山縣公自らが引導を渡した。そこで桂が其所謂七十日内閣を組織して、恰かも那翁のウオートルローの敗北に比すべき大敗北をとつた。而して其最後に於て、此敗北をして眞の敗北たらしめたものは即ち山本伯であつて、恰かもプロイセンのブリユーヘル將軍が、援軍を率ゐて夕方にウオートルローに出かけたと同じである。那翁がブ將軍の顏を見て其運命を諦めたが如く、桂も山本の顏を見て、我事已んぬとして内閣を投げ出した。順序からいへば桂のあとは西園寺が引受くべきであるが、勅諚一件もあり、陸軍との行掛りもあり、殊に西園寺には毫も内閣組織の意がなかつたから、そこでどうしても山本が出なければならぬ事になつた。伯は勿論最初から自分で内閣を組織する積りで出て來たのではなからうが、然し殆んど十年間政界を退いて、閑居の中に大いに其力を養うて居つたのは、即ち今日の如き時局に立つて一腕揮はうといふ權兵衛式の野心あつたが爲めであらうと思ふ。彼は平常酒も飲まず、煙草も吸はず、食物に注意し、運動を怠らずして所謂十年一劍を磨して居つたのである。それで私は此局に於ては山本は必死の力を盡して仕事することを疑はない。世間では一遍總理大臣になりたくてなつたとか、薩閥の後押から勸誘されて止むなく出て來たとかいろ／＼な事を云ふけれども、

私は權兵衞といふものを、も少しゴツイ人間、も少し膽力もあり、志も大きい人間と見て居る。

政局に立つてからの其遣り口を見ても、なかなか讓る所は讓り、讓らぬ所は決して讓らない。例せば犬養の入閣問題の如きは、松田や原は極力之を勸めたけれども山本は頑として應じなかつたと聞いて居る。犬養は人格として尊敬するが、國民黨と政友會とは多年の行動、性質を異にする。自分は今度西園寺の勸誘によつて政友會と手を攜る積りで出て來たが、國民黨とはまだ握手する考がない。犬養を尊敬するの途は別にあらうから、入閣丈けは斷じていけぬ、といふて斷乎として拒んださうだ。其事の善惡は別として、一旦讓らぬと決心した事は決して讓らぬといふ事は此一事でも分る。又讓るべき所は思ひ切つて讓るといふ事は、例せば、政黨出身以外の閣員を入黨せしめた事や、陸海軍官制の改正、文官任用令の改正、行政財政の整理を公約した事などである。世間では伯の誠心誠意といふのを笑ふものもあるが、私は、彼にとつては決して空言でも誤魔化しでもあるまいと思ふ。

世間で最も批難する所は、現内閣は總理大臣の山本が政黨員でないから、眞正の政黨内閣でないといふ事にあるらしいが、然し若し山本が辭職した時には誰が其後を引受けるか。桂は殆んど致命傷を負うて退いたし、西園寺は恐懼して京都に隱れた。すれば其外に寺内か、平田か、原、松田か、清浦か、但しは犬養自らであるか、然し此等の人に持廻つて誰が總理大臣になつても、首尾よく時局を切り拔けることが出來るかどうか疑はしい。で、此内閣の一つの缺點は、形式が眞の政黨内閣でないといふ事であらうが、然し其實質と内容に至ては略ぼ完全に近いものと思ふ。

山本伯の人格や人物については好き嫌ひはあらう。勿論私にもある。然し今日の日本の時局を料理するには此人を措いては誰も適任者がなく又此人が引受けなければ、あのゴダゴダがなかなか容易に收らなかつたらうと思ふ。すれば此人は現國政を料理するアヴエレーブルマンであり、一歩進んでいへばインデスペンサブルマンといつてもよい。

世間では豫算編成の爲めに、十一月頃には内閣を抛け出す云々といつて居るものもあるが、之は事情を知らない人か、若くは同志會とか國民黨とかいふ反對黨のいひ觸らす策に過ぎまいと思ふ。若し豫算編成が困難といへば、何人にも困難なのである。桂公が局に當つたら來年の豫算が編成出來るといふなら、山本伯にも出來ぬ事はない。日本の國政にはちやんと筋道があつて、誰だつてさう飛び離れた豫算が出來るものでない。それで十一月の瓦解説もアテになるものでない。私は思ひの外永續しさうに思ふ。そして又永續すべきものならば永續さして、憲政を發達させ、國運の發展を計るのが日本の爲めだらうと思ふ。それで私は極めて樂觀的に此内閣を見るものである。

△現内閣の働き振はスフヒンクス

田川大吉郎

○山本内閣の内閣振を評するにはまだ早い、出來てから僅に二ヶ月有餘まだ出來たてのほや〳〵である、それが善く働くとしても、何もしないとしても、しないのにも容赦すべき理由はあらう、働くのにも然あるべきの事情はあらう、要するに一時的の現象と見るべきである、或は永續性其中に存すとするも、必らずしも存すとは謂へないのである、その存する部分は、更にその場合の評隲に讓り、今に於ては、先づ〳〵一時的の現象と視て、褒むるにも早い、貶すにも早い、成敗、利鈍、いづれにもせよ、之を彼の時間の經過に委せねばならぬとするのが、穩當の見だと信ずる。

○新聞を見て、山本伯に對する僕一流の滿足は、その恪勤の噂である、内閣に出るのに、午前八時にかつきり出て、午後四時前には滅多に歸らぬらしい、それを一概にいゝと謂ふのでは無いが、たゞ世界的競爭が年ごとに激しく、事務の分量は著るしく殖へて來た、本氣にかゝる人は、どうしても、朝から晩まで、所謂晷を以て日に繼いで勉强せねばならぬ、世界の政治家の中、日本ほど無性の政治家は無い、世界の敎育家の中、日本ほど不親切の敎育家は無い、世界の會社長銀行頭取の中、日本ほど贅澤にして、自墮落にして、不勉强の會社長銀行頭取は無い、曾て告ぐる者があつた、米國の某所の銀行では、頭取が一番先に銀行に出て、一番後まで殘つて居るのを見た、その用意の程度が、日本のとは遙に異つて居たと、此樣な評判を人に聞いたり、心靜に思ふたりする時、日本の政治家、敎育家、銀行頭取等の態度に、思はず激憤の情を沸かすのは、蓋、人生共通の公心であらう、僕は此感じを少からず刺激されつゝあるものだ、此際、山本首相の態度は一寸氣に入つた、若し首相が、自ら早出をする割合に、人手を勞せず、例へば自分が居殘りをする場合には、事に用なき他の吏員、給仕、小使、門番の類は、サツサと返して仕舞つて、自分と直接其事に關係ある吏僚とのみ殘るといつたやうな注意深き思ひやり深き態度に出てくれたら更に一層愉快だと思ふ。

◎三鞭酒を廢しやうといふ動議も山本首相の口から出た、これも贊成だ、些細な事かも知れないけれど、些細の事も善美の功を成す、されど善美の功は些細の事にあらずといつた古哲人の敎へは、如何なる場合にも行はるべき、弘まるべき眞理である、僕は、事の多寡大小を以て、事の功過を論ずる標準とはしない、それだけ、かゝる用意にも、相當の敬意を拂ふて居る。

○去り乍ら、山本首相に關する新聞紙上の噂が、僅に此樣の事に限られて居るのは遺憾である、これは新聞紙の罪か、傳ふべきを傳へざる新聞紙の罪か、否かは知らない、たゞ、僕等の聞く所少きを遺憾とする、久しく長派に握られた天下である、人心の著るしく長派にあいた時勢であ

る、山本伯にして爲すあるの才を抱き、爲すあるの時を疑ひ、而して今漸くその機會を捉み取つた譯なら、今は爲すべきの事業あまりに多きに過ぐるを憂ふ、決して少きを患へない時機では無いか、ずん〳〵施設したら可からう、否、それには時を要すとする、思ひ切つて、その施設の規模、方針を、高處より立て、大處より視、一代の困頓、沈滯したる意氣を、先づ以て作振するの計を成したら可からう、それには、好機の議會であつた、天の與へたる好機の議會であつた、君子は口訥にして行ひ敏なりといふけれど、思ひ内にあれば、色自然に外に現はるゝ、經綸ある者は、その言葉が自然に外に現れねばならぬ、議會はそのための議會である、憲政はそのための憲政である、無い袖は振れぬ、無い考は言はれぬが當り前だけれど、有るならば言へ相なものだ、言ふべき筈だ、顧みれば、議會の議論は、陸海軍大臣の官制をどうするかと曰ひ（現在の陸海軍大臣が惡いと謂ふのでは無い、官制は如何に改まつても、現在の陸海軍大臣は陸海軍大臣である、その儘である、その儘居据りである）文官任用令の改正をどうするかと曰ひ、若くば輸出入の不平均をどうするかと曰ふの類で、いづれも、小さく、せゝこましく、堂々たる男兒の雄心を躍らす底のものでは無つた、十年雌伏したる山本伯、そんな事は、詳しく知らぬ、追々考へませうとでも、切つて抜けて、去り乍ら、日本の世界に於る位地、世界の今日に於る趨勢は、此うである、あゝである、明治維新以來の文化の狀態、政爭の沿革は、此うである、あゝである、日本は此際、從來の圏套を脱出して、更に溌剌たる大規模の、それには、此うした、あゝした經濟計畫を必要とすといつたやうな大運動を試みたらどうであつたらう、此くして黨人の迷夢を醒まし、議會の沈滯を破り、而して自ら閥族の圏外に出て立つ公然たる思想主義を以て、小さく言へば自ら示すのである、大きく言へば天下を率ゆるのである、そのやうな堂々たる地歩を占め本領を發揮したら、どうであつたらう、當時の首相は此に出てずして、せゝこましき間に、せゝこましき答へ、その答へも一度なら宜しい、二度の答へ、二度の答へも問ふからには答へねばならぬ、答へたのは惡くは無いが、意味の無い答へ、氣の無い答へ、外觀は答へたのである、內心は答へないのである、そんなやうな胡麻化しの答へ、形式の答へ、不實の答へをして、たゞ一時を糊塗する、僅ばかりの議會である、一ケ月あるか無いかの議會である、その議會を短しとせず、長しとしたやうな、早く終つてくれがしと祈つたやうな經過終末を見たのは、太だ遺憾であつた、これも止むを得なかつたらう、尋常の人にして然り、多年、此位地を待ち望んで居た有爲、有能、有力の政治家の態度としては、殆んど受け取れない始末であつた、僕は、此點より視て、山本伯の、大政治家としての抱負、器量、發展に疑ひがある。

◎何といつても、內閣の重鎭は、外務と財務であらう、牧野さんの外務は早くも腕組外相の名がある、善く考へるとの意か、本氣に、誠實に考へるとの意味か、それとも、知慧足らず、分別に惑ふとの意か、何となく芳しからぬ香ひのするのは遺憾である、遺憾千萬である、山本内閣は此點に一大弱點を有して居る、高橋藏相は、議會に何も知らない藏相と

いはれた、傲岸が取柄である、それも眞に傲岸かどうか分らない、傲岸らしい容姿、風采の賤相だといはれ、敬せられずして輕んぜられた、但本人としては、牧野外相のそれよりも、いろ〳〵爲して見る氣、爲し得ると信じて居る氣が强からう、而して一二の外債募集、それを以て乃公の力、乃公の信、乃公の功、乃公の界と心得て、之を誇り衒ふのであらう、得意の境失意の因を含む、山本内閣は、此點にかても弱點を有して居ない、それだけ、首相山本伯は、此兩所に對し、いろ〳〵氣を揉むことであらう、而してその働きの巧拙優劣は、これぞ始めに申した時間の問題である、徐ろにその經過に待たねばならぬ。

○山本内閣は、文相の位地に於て、稍强點を有して居る、奥田君は、衆田君の後を繼いだだけ、極めて仕合せである、更に山本伯の總顧問の位地に居るだけ、大いに仕合せである、然ししつかりせぬと、世間では小松原君を口で惡くいふた割合に心では惡く思ふて居ない、歷代の文相中で可成り勉めた文相、眞面目に思ふてくれた文相と思ふて居る、その以後は、即ち福原君の評判である、長谷場君の評判では無い、その邊の事を斟酌してかゝらぬと、奥田君とて萬全ではあるまい、此くして、山本内閣の働き振は、今、全然スフヒンクスである。

△手腕あるは原と奥田丈け

早川鐵治

山本内閣の遣口を批評しろといふのか。一體行政財政の整理などいふものは餘り困難なものでない。我輩は久しく政界を遠ざかつて居つて、今度十數年振りで、豫算をひろげて見たが、實に膨脹したものだ。こんなに膨脹した豫算案なんだから、これから五六千萬圓を絞り出すのは極めて易々たるものだ。此間山本さんは政府を引受けてから一ト月か二ト月しか經たぬから整理の額は幾らとは明言が出來ない、只誠意のある所を認めて貰ひたいといふお話であつた。成程山本さんは行政官をされた事があるけれども、それは海軍部内ばかりの事で、行政各般の事には曉通して居られぬから、さういはれるのも無理もない。然し山本さんの内閣には官務に通じて居る奥田義人といふ人も居る。又原敬といふ人も居る。誠意に任せて吳れとお頼みだから、貴族院でも衆議院でも、官務に曉通されぬ山本さんの意を諒としてお任せ申したもの丶、實は一ケ月もあれば出來るのである。私共は確かに整理が出來ると信じて居る。それで同志會でも五千萬圓とか六千萬圓とか、去年の國民黨の例に倣つた天引論者もあつたけれども、私共は政友會時代から、さういふ無責任な論では行けぬと思つてゐたものだから、今度もこれ〳〵のものを整理しろといふ具體的の案を具して反對することにした。議員は款項に亙つて彼此いふべきものでないとの論もあつたが、無責任な議論よりもいゝとい

ふので、さういふ事にした。そして之は勿論大體についてだけれども、二日か三日で調べた。それで一ケ月ては調査が出來ぬといふのは山本さん一人については誠意であるかも知れぬが、原とか奥田とかの居る内閣としては少し不誠意でないかと思ふ。

行政財政の整理は今言つたやうに極く樂なもの、又税制の整理も左程六つかしいものでないが、案外面倒なのは陸海軍官制の改正とか文官任用令の改正とかいふものだ。此等の問題にはなか〳〵小姑が多いから餘程面倒であらう。例へば陸海軍の方には軍事參議官とか、元帥府とか、又樞密院とか種々の關門がある、樂に見えて居つて其實容易でない。行政財政の整理は朝飯前だ。それが出來ぬと政友會の顔が立たず、又山本さんも辭すより外はあるまい。然し兎に角、原、奥田などいふ官務に通じた人があるから、眞に遣る氣になつて遣ればやれぬことはないと思ふ。

然し原、奥田を除いた外の人は、如何にも未だ事務に慣れてゐない。大藏大臣の高橋男の如きは、もう少し分つた人かと思つたら誠に氣の毒な程だ。高橋とは幼年の頃に師弟の關係もあつてよく知つて居つたし、又顔附きもなか〳〵よいから少しは遣るだらうと思つた所が丸で分らない、之が日本の財務當局者かと思ふと心細い。アレでは何程の整理が出來るか疑はしい。牧野男も多年外交の經驗あるといふが、今度の米國の土地所有權禁止問題などは随分と難局だ。これを旨く切り拔けられるかどうか。私共はエライ適任者とは思はない。

要するに折角政友會内閣が出來たに拘らず、相變らず輸入大臣を澤山に持つて來るのは、政友會としては心外千萬であらう。あの輸入大臣位の人物は、政友會にだつて居らぬ事はない。役人から出た人でも鶴原定吉とか日下義雄とか田中隆三とか一廉の仕事が出來る人が居るぢやないか。如何に黨員を操縱することは出來ない〻、野田大塊とか奥繁三郎とかいふものを大臣にすることは出來ぬだらうが、砥原などは立派な大臣だらうと思ふ。田中なども、大臣の相場が下落して、仲小路とか若槻とかの大臣になる世の中だから、大臣になれぬ事はない。強い天飛入りの銀行屋などを引張り出して來る必要がないのだ。兎に角山本さんも折角こゝまで漕ぎつけたんだから、精を出してウンとおやりなさらんことを希望する。

△危惧多き内閣

大観迂人

凡そ内閣とか政黨とかいふが如き公器に對して批評を試みんとするには全然感情といふものを除いてかゝらなければ、正鵠を失ふの虞あると思ふ。山本内閣を批評するものが往々にして山本伯の出處について批難を試み、延いて内閣の性質についても批難を加ふるものが少くないやうである。然し斯くの如きは矢張り一種の感情論であつて、内閣其物の正當なる批評といふ事が出來ないと自分は考ふるのである。成程仔細に山

本伯の出處を點検すれば頗る當を缺いて居る點が少くない。山本伯は何故に、昨年十二月の政局の混沌たる場合に於て勸誘を受けながら衝起せなかつたか。而して何故に、桂公が不信任案に困しむに當つて、突然蹶起したかといふ事について、内部に流れた所の暗流に向て詮索を試みて其出處を研究すれば、如何にも人の疑惑を禁じ得ない所の事情が多々あるやうに認めらるゝ。

然しながら之は感情論である。眞に山本内閣を批評せんとするならば山本内閣が果して適當に日本の行政を導き得るかどうかといふ事について微細なる批評を試みなくてはならない。處が今日に至るまでの所に於ては、山本内閣は未だ之といふべき政策を施して居らんのであるが故に、お尋ねに對して山本内閣を批評するといふ事は、自分は有體にいへば出來ないと思ふのである。さりながら山本内閣は斯くの如き政策を行ふなるべし、斯くの如く行政を導くなるべしといふ假想の下に批評するといふ事は必らずしも出來ぬことではないのである。

目下政治問題として懸案となつて居るものは、一に行政財政の整理である。一に民力の休養である。一に外交の刷新である。尚此外に幾多の微細なるものを舉げ得るけれども、重要なる問題は此三つにあるといつてよからうと思ふ。

行政の整理といふ事は、我國の如き行政の組織並びに豫算の編成法を採つて居る國柄に於ては、どうしても數年に一回は整理をなさゞるを得ぬ狀態にあるといつてよいのである。山本内閣も亦此整理をなすことを公言して居るが故に、必ずや相當の整理を期待し得ると思ふのであるが、さりながら之は一つの程度問題である。結局如何なる程度に之を行ふならば與望に副ふことが出來るか、又財政と經濟との調節を計る助けとなり得るかといふ點に存するのである。今日の狀態に於て財政の基礎を鞏固ならしめんと欲せば到底西園寺内閣が行はんと欲したるが如き小規模なる行政整理を以てしては其目的を達することが出來ない事は大體に於て認められて居る。山本内閣も亦西園寺内閣の整理以上の整理をなすことを聲明して居る以上は充分にやることであらうと思ふのであるが、然しながら果して其れ丈けの手腕を財政當局者並びに總理大臣が持つて居るかといふ事が問題であると思ふ。此點に於ては山本首相は之を桂公に比すれば少しく下れりといはざるを得ない。又高橋藏相も若槻前藏相に比して下れりといはざるを得ないと思ふのである。然し之は只手腕を大ザツパに比較したるに止り、結局何處まで其手腕を揮ひ得るかに歸着するのであるから、未だ整理の途中にある時に於て、兎てもよう揮へまいといふ事を豫想して批評するのは少しく早いと思ふ。

次に財政の整理といふ事については、之は餘程思ひ切つた斷然たる處置を取るにあらざれば其目的を達することが出來まいと思ふ。此點について山本内閣は議院に於て甚しき抱負を述べて居らぬと見るのが先づ適當である。如何となれば山本内閣は議院に於て將來に亘る財政計畫なるものを示して居らないが故に、如何なる方法を以て將來の財政を運用する趣意であるか判斷が出來ぬからである。財政の問題として意を留むべ

きもの甚だ多いのであるが、其中でも將來に對する財政計畫を定めて、よつて以て、財政の基礎を安固なる地位に置くといふ事が最も必要な事である。又公債の信用を堅うして國家並びに公債所有者の損失を少からしめるといふ事が第二の要點である。政府所有の正貨を充實し、兌換の基礎に危害を及ぼさず、よつて以て財政の經濟を壓迫するの途を防ぐといふ事が第三の要點である。國家の用合といふものを改善して大藏省證券の發行を多からしめずして、財政の經濟に對する壓迫を除くのは第四の要點である。尙此外幾多の必要なる條項が存するであらうけれども、斯くの如き幾多の財政上の事項に對して、現內閣が聲明して居る所、又は聲明せんとするの意ありと測らるゝ所によつて判斷して見るのに、現內閣は斯くの如き問題に對して甚だ多くの意見を持つてゐないやうに思ふのである。之は自分共の現內閣に對して頗る不滿とする所である。苟も進んで難局――殊に財政の非常なる難局に立たんとする所の人が、財政上の抱負を持たずして出て來て、ゆる〲研究した後に之を行はんとするが如き狀態では頗る心細き感を持たざるを得ないのである。此點に於ては世間が果して桂內閣に置いた程の信用を現內閣に置いて居るや否や疑問であると思ふ。桂內閣に對する批難は其成立の不可なるにあつたのである。何人も內閣が財政上の抱負を行ふの力なきものと認めて攻撃を加へたものを見ない。而して山本內閣に對しては、其成立の不可については多くは批難をせずして、果して財政上の問題について適當なる施設をなし得るや否やといふ點について危惧の念を持つて居ると判斷するを公平なる見方と思ふ。それ故に山本內閣たるものは此點を最も勉强して、先づ速かに財政の計畫を定めて他の諸般の事項に及ぶことを要し、最早や一日の遲延を許さぬと思ふ。若し此點にして成功すれば山本內閣は先づ第一次に於て成功を贏ち得たものといつてもよいのである。只果して其能力を有するや否やは問題であつて、只我等は今日は危惧の念を以て見て居るといふのが最も正直な告白であらうと想ふ。

外交の不振といふ事は從來屢々其聲を聞く所であつて、西園寺內閣の時然り、又山本內閣についても成立僅かに二ヶ月にして又其聲を聞くといふ有樣である。外交の事たるいふ迄もなく帝國の利權の消長に關係すること深きが故に、固より輕率なる行動をなすを許さゞることと勿論であるが、さりながら其れが爲めに遲延逡巡し、遂に機を失することと西園寺內閣の當時の如くんば、只國民の不信を招くの外なからうと思ふ。山本首相は身、軍事參議官にある時に於ても、常に海軍の關係より多く、支那の外交の事に對しては注意を拂つて居つて、西園寺內閣の外相內田子に對して屢々忠言を試みたといふ位であるからして、必ずや外交上の抱負を蓄へて居ると思ふ。然し只外交は前に述べたが如く、機を失せざるを以て最も要とするが故に、只愼重一點張りで以て事に當る場合に於ては或は再び西園寺內閣の時と同じやうな批評を受くるに至りはせぬかといふ事を憂ふるのである。現任外相たる牧野男は外交上の經驗も淺くない人であるが、世間又之を目するに愼重に過ぎて却て機を失するの憾なきかと危んで居る次第である。故に此點についても亦現內閣は國民の危惧

を釋く丈けの機敏と愼重とを以て外政を處理するの責任があると思ふ。

それから民力休養といふ事は、戰後の政治の一つの重大なる題目である。戰爭前は僅かに二三億に止つた歲計は今は六億近くの歲計になつて居つて、國民の負擔は決して輕くないのである。戰後多少の減稅があつたけれども、民力を休養するに足る丈けの減稅は未だ行はれて居らぬ。固より國民の負擔力も國民の勉强と事業界の進步によつて增加して居ることは認めらるゝけれども、僅かなる歲計の大膨脹に對しては長く其負擔に堪ふる丈けの程度まで發達して居るとはいへないのである。夫れ故に減稅をなして民力の休養を計るのが目下の急務なることは申すまでもない。戰後地租を輕減したけれども、尙他の諸稅については多くは未解決である。此度所得稅並びに鹽の賣下價格の引下げをやらうといふので多少輕減を見る次第であるが、尙之を以て足れりとする譯に行かないと思ふ。そこで民力休養といふ事は尙引續き政治上の問題として殘るといふ事を認めなければならぬ。此點について山本內閣はどういふ方法で、どこまで進み行けるかは矢張り疑問の一つである。已に提案したものに於ては民論に副ふものとは認め難い。今一層の英斷を施さなくてはならぬと思ふ。然し其英斷をなし得るや否やも是れ亦我等の危惧の念を以て見る所である。

之を要するに行政整理の如きは之を行はんとする決心があれば、又首相が閣僚を率ゐて萬難を排して進むの概さへあれば容易に出來る事である。さりながら財政（民力休養を含む）と外交の事は決意丈けでは行かぬ、大いに手腕を要することである。其決意と、其智識と其手腕とを現內閣が完全に有するや否や、我等は之を判斷する充分の材料を持たぬけれども、今日までの處では、未だ其手腕を示さず、未だ其智識を示さず、而して未だ其決意さへも充分に示さゞるを以てすれば、我等只危惧の念を以て之を見るの外なきは又止むを得ざる所であらうと思ふ。

△惡評するは時機尙早し

子爵 秋元興朝

山本內閣に對しては、世間には好評よりも惡評の方が多いやうに見える。そりやまア其筈で、同志會の方で之を褒める氣遣はないし、又國民黨にしろ政友俱樂部にしろ、惡評するより外仕方があるまいと思ふ。又新聞にしろ、雜誌にしろ、當局者を攻擊批難した方が多くの局外者の歡心を得て賣行がよいといふやうな事もあるでせう。又政友會側の人にした所が、今日實行といふ事を構はずに、其方に何等の責任を負はずに、只純理論からいへば、或は惡評する餘地があるだらうと思ふ。然し之は山本內閣に限らず、何時の內閣でも、――又恐らく日本ばかりでなく、世界何れの內閣でも――只理論的の方面からのみいへば、總ての人の好評を贏ち得る內閣はあるべき筈がないと思ふ。

山本內閣は成程理論一點張りからいへば隨分論ずべきものもありませう。けれども實地の方面から見れば、先づあれより外に仕方がないので、

山本内閣が出來るより外に途がなかつたのだらうと思ふ。之も今初つたのでなく、實にずつと過去から續いて居る積弊なんだから、どうも世間の希望するやうに一足飛びに飛び超えて了ふといふ事が六つかしい。矢張り一歩一歩、歩みを運ぶより外仕方なからうと思ふ。日本の過去の政治歴史を見ずして、形式上より此内閣の成立を論ずれば、議すべき點があるにしても、少しく過去の實情を知つて居るものは、矢張り止むを得ざる事情を諒とせねばならぬし、又其成績の方からいつても、ヤツト議會が濟んだ許りであるから今から惡評するといふのは少し早過ぎはしないかと思ふ。

若し山本内閣をわるいとして、此内閣が辭職したとすれば、そんなら誰が之を引受けるか。又誰が之を引受けて好評を博し得るか。そんな事を考へると、山本内閣の出來るのは止むを得ぬのである。だから今後は憲政の上に一歩一歩進んで行ける見込さへ立てば、世人は先づ之を助けて、日本の憲政の有終の美を收むることに協力した方がよからうと思つて居る。

王政維新の頃は、今とは時勢が違ひ、國民が一般に政治と關係なき時勢であつたから、餘り議論はなかつたものゝ、實はあの時のも、議論としては完全でない。一貫してゐない。あの時の所謂尊王攘夷の論――尊王は結構だが、攘夷といふのは實は無謀だ。あの時には攘夷は到底も出來るものでない。尊王攘夷論者もそれを知つ居つたのだ。それを知つて居つて政略上之を尊王と結び附けて徳川幕府を倒したのだ。幕府を倒すには幕府のやり得ぬ事を強いるのが最も有効であつたに相違ない。然し理論としては出來ぬ相談である。其證據には、幕府が倒れても攘夷をやらぬ。直ぐに開國をやつた。思ひ切つた開國をやつた。それであの時代のモツトーも尊王が主で、攘夷は政略であつたのだ。今度の政變運動も憲政擁護丈けだと誠に結構であつた。それに閥族打破といふ恰度攘夷に當る字を附け加へたが爲めに、桂内閣を倒すの効は大であつたが、山本内閣も矢張り其トバツチリを喰ふことになつた。

其處で普通ならば西園寺侯が引受くる順序で、それが出來なければ理論上からいへば、松田なり原なり、若くば犬養なりが總理大臣になればいゝ譯であるが、實際上それが出來ぬといふのは前にもいつた、過去の政治歴史がある爲めである。さうすれば此内閣の出來るのは止むを得ぬ事で、先づ此上は行政財政の整理とか、陸海軍官制の改正とか、文官任用令の改正とかいふ實際の問題に對する其成績手腕によつて批評しなくてはならぬと思ふ。反對黨の理論を極度まで推し詰れば、現内閣が如何によく以上の實際問題を解決しても、閥族内閣であるからいけぬといふ事になるだらうが、さうなれば最早や理屈であつて政治でも何でもない。それだから我々は反對黨の議論は價値なしと見て居る。然し度城を弘くして見れば、かういふ議論も當局者に對する一種の鞭撻となるから政略としてはよいかも知れぬ。只之を眞面目に受取るのは出來ぬ相談を持ちかけるといふに過ぎない。

山本伯も誠心誠意局に當ることを宣言し、又閣員もすべて行政財政の

整理其他に骨折つて居るやうであるから、其結果も分らぬ中は悪評するのは時機が尚早い。いよ〳〵遣つて見て、其遣り方が如何にも姑息であつて、憲政の上に効がないといふ事が分つたならば批難するのもよいが今の處は先づ虚心平氣で其遣り方を見て、而して助くべき所は助けた方が憲政の爲めであらうと思ふ。

△取柄は御馳走振り

伯爵　大隈重信

山本内閣が、成立してからまだ間も無いとであつて、如何程の働きを有するか、一向活動振を見せてゐないから批評する程の價値もない。果して何れ程の手腕を有つてをるか。今日迄の處では窺ひ知るとが出來ぬ。唯一つ取立てゝ言ふならば、それは御馳走振であらう。彼方へも御馳走、此方へも御馳走で、御馳走振りには中々の手際があるらしく拜見される。

△境遇より生れたる内閣

島田三郎

山本内閣を一言にして評すれば、曰く混沌内閣である。境遇より生れたる内閣である。之を政黨内閣と言ふも不可、之を純然たる藩閥内閣と見るも不可。乃混沌内閣、境遇内閣と呼ぶ所以である。

集まれる元素は、久しく政權と離れたりし薩摩系統の者より成つてをる。玆に溯つて薩摩系統の歴史を觀やうと思ふ。

何と言つても維新の大革新は、薩長の力與つて甚だ大なるものあるは、何人と雖も之を否認せざるを得ざる所である。其の初めに方つては兩者均等の位置に在つた。大村木戸が文武の兩權を掌握して長州を代表し、薩摩は西郷大久保に依つて代表せられた。此等の人物は確かに時流に傑出し、時勢を誘導したる獻身的國士である。如何に藩閥を非難する者も此等の人の人格と其功勞とは之を賞揚するに躊躇しないであらう。實に維新の大業は、此等の人を中心とし、下に第二流第三流の人が働きて共同盡瘁したる結果である。人材輩出の數も兩者殆ど相匹敵してをつた。

然しながら彼等は時勢と共に消長した。薩摩の衰へるに至つた原因は實に西南戰爭に在つた。大久保が西郷を破つて、西郷及西郷の部下にあつた人材は、哀れ城山松の下露と消えて了つた。而して大久保も亦西郷の後を追うて此世を去るに及んで、薩摩の人材は西郷大久保に比ぶ者無きに至つた。

然るに長州は伊藤公文治の方面に於て先輩を凌駕して勢威を張り、武力の方面では山縣公其全權を掌握し、或は内務に入り、或は司法に據り、其羽翼の下に後進養成を怠らなかつた故に、政界に於ても其勢力遙かに薩摩を凌駕し壓倒した。尤も晩年伊藤、山縣兩公の間に隙を生じ、之に屬する第二流の面々も相率ゐて反目分離するに至つたけれど、長州とい

ふ廣い圏內には薩摩の勢力の及ばなかつたのは明白なる事實である。其間に薩は武力を揮つて陸軍に基礎を延べんとしたけれども、川上死して遂に達せず。今日實に薩長の勢力の消長は九段坂上の品川川上の銅像に因つて誠に能く代表せられてゐる。

斯くの如くなるの時、更に桂公は長州の系統を受けて、身陸軍より出でゝ、後政界に投じ、長州は彌々益々其勢力を政界に張るに反し、薩人は纔かに海の一局面に封鎖せられて、陸軍に於ける恬淡なる大山は政治の野心なく、日本海の海戰に赫々の名聲を世界に轟かしたる東郷の如きは、其人飽く迄も純然たる航海の人にして、政界に於ては些かの勢力をも有してゐない。

斯くて長州は純長州系の者を以て相俱に八方に勢力を扶植した。初めには樺山の總督たりし臺灣も、後には長州人の支配に歸し、滿州も長州人の支配下に屬し、朝鮮の併合も同じく長州系內閣の時に行はれた。乃多年政界に力を揮つた長州人は更に餘力を實業界の方面にも揮ふやうになつた。

茲に於て四方に散在せる薩摩系の壯年政治家の希望と野心は之を達するの機會を得ず、久しきに彌つて彼等は髀肉の嘆に堪へなかつたのである。それに加ふるに世人も亦餘りに久しく長州系の政權を持續するに倦焉の情を抱くに至つた。且桂公は藩閥の第三代目に當つてゐる。木戶・大久保・西郷を初代とすれば、伊藤・山縣・松方・大山・井上は二代目である。而して薩の川上、長の桂は年代、段階に於て相當したる第三代目である。

然るに桂は井上を凌ぎ、松方を超えて嶄然公爵に昇げられたのは、少くとも世の耳目を欹たしめるに充分であつた。所謂美服人の譏りを受ひ、高明は鬼神の惡みに迫るで、彼の境遇は世人の耳目を驚かした。昨年の西園寺內閣の辭職と共に成立つた桂內閣は實に此事情の中に在つて、一方は長州に對する社會の反感と、一方には久しく政權に離れたりし薩摩系の乘ずべき機會を見出したるとに依つて短命の運命を以て生れたのであつた。冷靜なる眼で見れば昨年の元老會議が桂內閣を作り得なかつたのは、其體力に於ても其氣力に於ても已に其終焉を證して餘りあるものである。

茲に境遇の爲めに喚起された桂內閣は、時代の要求の有る所を察し、藩閥の歷史を切斷して政黨の人と成つた。多年藩閥の寵兒たりし桂公が時代の趨勢を察し、民論を容れて敢然新たなる政黨の生涯に入り、內政の改革を實行するの任を負ふたならば、茲に政界の廓清は平和の裡に遂げらるゝことゝ桂公自らも信じ、我等も亦か信じたのであつた。

然るに多年欝積せる國民の反感は此仕事を容れなかつた。或は歷史家よりして之を觀れば、長州系が有つべき必然の結果であるかも知れない。之を歷史の引續きとして見れば山本內閣の成立は毫も怪しむに足らぬ事情の產物である。政權と結んで生立つた政友會は一日も之と離れて孤立する事は出來ない。若し桂內閣が政友會と妥協の甜餌を投くるとしたならば、依然として情意投合の歷史を追うたであらう。然るに桂公は、之を謝絕した。そこで復讐的反對の意味も加はつて今度の政變を惹起したの

である。當時西園寺侯は漸く政權に倦み、煩雜なる政務を厭うて、總裁の地位を辭せんとする意あり、政友會は密に之に代るべき人物を物色してをつた。此時に方つて、永らく政權に遠ざかつてをつた薩州の軍人にして政治の趣味を解する山本伯が起つて内閣組織の大命を拜受することとなつた。茲に於て久しく寂寞を感じて髀肉の嘆に堪へなかつた薩摩出の人物はこゝに中心を得て爭つて馳せ參じたのも勢の然らしむ所である、乃混沌たる混合内閣は生れたのである。下一般國民の意嚮に背いて純然たる藩閥内閣を組織することも出來ず、さらばと言つて素より純政黨内閣を作る意志の無い彼等は、外は政黨を裝ふ爲めに一夜作りの政黨員を以てし、極めて不眞面目なる薩閥と政友會との渾合内閣を作つた。

然しながら彼等は政治意見に依つて集つたのではなく、四邊の境遇に依つて生れ出でたのである。故に其内閣の事情の下に主義政權を定め、右顧左眄して八方を撰返らねばならぬ。時代の要求が内治の改革、財政整理にあれば名義だけでも其主義を採らねばならぬ。誠に勞多く煩に堪へざる内閣であると思ふ。

然しながら兎も角も此政變に依つて藩閥の基礎は已に破れたるものと見てよい。政友會が獨り起つ能はざる如く藩閥も長州系は桂公に依つて政黨に沒入し、薩州系は山本伯の内閣に依つて、本人假令好まずとするも事實に於て政友會と抱合するに至つた。今後の發展は國民の進歩に依り、更に國民化して政界の廓清を圖らねばならぬ。凡そ一國文明の程度は、其國民の智德の程度と比例する。議會が善くならなければ眞の憲政は賴み尠い。議會を善くするには議員其者が善くなければならぬ。善き議員を作ると否とは偏へに國民の智德に係る。眞正なる選擧が六ケ敷しい間は純立憲は前途尙識者の指導と啓發と、國民の智德の進歩に俟つ所多い。但し何れの場合に於ても正義公正の力に依り、互に勵み努むれば自ら進歩するであらう。此處に一つの航海會社が有りとして、航海者は必ず此會社に依らねばならぬとすれば、或は乘客を虐待し、或は高價な賃銀を貪つたりするであらう。而して此弊は二會社の競爭に依つて救はるゝ如く、智德の進歩は亦競爭の結果に俟たねばならぬ。一政黨が絕對多數を擁し、絕對の權利を制して、少數者は只評論家としてのみ存在し、國民は多數に依つて虐待せらるゝ如きは、航海業者の獨占にも増して害毒を與ふるものである。狷介の人は孤節を守り、薄弱なる人は屈從し、爲めに政黨は腐敗して、憲政の實求めて何處に得んやうもなく、之と相對抗する一大政黨の樹立は刻下の急務であつた。即桂公の新政黨は此非政友を聯合した形式に於て表れたのである。山本は政友の人であり、桂は非政友の人である。此際國民は此二大政黨の對立を益發達せしめて、政界の進歩改善を圖るべきである。暗中の微光は此變化に依つて點火せられた。吾々は今後益々憲政の美を濟すとに勵まねばならぬ。



交詢社論

鵜崎鷺城

一

○從來交詢社の知られしは一小部分の範圍に止まり、智識ある階級に屬する者にして全然之を知らざりしあり。單に交詢社なるものあるを知るのみにして、未だ其來歷及び性質を審かにせざりしあり。斯くポピユラーならざりし交詢社の俄に世に著聞し、交詢社といへば必ず一種の興味を牽くに至れるは政變以來とし、又た實際最近の政變に淺からざる關係あり。

○交詢社は故福澤翁が時事新報記者並びに慶應義塾校友會の爲めに起したるものにして、三田と離るべからざる關係を有し、其名稱は社員互ひに智識を交換し、世務を諮詢するを目的とすといふに出づ。

○既に世務を諮詢すとある以上、娯樂本位とのみ看るべきにあらず。其半面には政治的意味をも含み、世間普通の倶樂部と少しく其科を異にす。

○食事・圍碁・球戲・謠曲等を社員日常の課程とし、毎月一回淸友會と稱して演藝會を催うし家族と倶に娛む。

○會員六百人。是れには勿論三田以外のものも交り、頗る雜駁なるかに見ゆるも、幹部は然らず。現に常議員會長の林董といひ、常議員副會長及び幹事の鎌田榮

吉といひ、其他常議員三十六名はいづれも三田出身を以て充て、一人たりとも他系のものを加へず。

○三田出身者は財界の各方面に分布され、大學・早稲田及び高商閥に對して三田閥を形造れるが其最も勢力の伸びたるは三井とし、殊に中上川彦次郎の同家を支配しゝ時代の如きは三田派にあらざれば人にあらざるかの觀を呈し、益田孝を頭目とする高商派は南風競はずして雌伏せしが、中上川の歿後漸く勢ひを盛返し、最近に至り益々頭を擡げつゝあり。

○されど今も尚ほ交詢社と關係の深きは三井にして、恐らく會員の過半まで直接間接の緣故あり。三菱に三田派の豐川良平・莊田平五郎等あるも、三菱と交詢社とは沒交渉に幾し。

○交詢社を論ずるに當りて、他の社交團體に說き及ぼし、之を對照するは啻に興味多きのみならず、又た極めて必要のことに屬す。第一に擧ぐべきは東京俱樂部なり。

○東京俱樂部は洋人七・和人三の割合を以て成り、洋人は外交官多く、和人は三菱を中心として保險會社・農工銀行の重役・華胄の公達・商家の若旦那を重もなるものとし、其御定連ともいふべきは、貴公子に西園寺八郎・廣澤金次郎・柳澤保惠・柳原義光・伊藤博邦あり、若旦那に田中銀之助・今村繁三郎・赤星鐵馬あり。

○會員中多少の識者なきにあらざるも、外人の手前もあれば露骨なる談論を避け、務めて辭令を外交的にし、政治のことに言ひ及ばず。隨て此俱樂部に遊ぶも政界の機微を窺ひ知る能はず。

○佳肴美酒命ずるに任せて食卓に上り、家屋の構造・室内の裝飾亦た頗る貴族的にして、第一流の高等俱樂部なり。一言にして悉さば東京俱樂部は富と人爵を代表する社交機關なり。

○東京俱樂部に亞ぐの位置にあるを交詢社とす。中等階級の上の部に屬する紳士を網羅し、政府に關係あるもの尠く、いづれも政界及び財界に活動しつゝある『時の人』なり。其品質に於て民間第一流の社交俱樂部たるを失はず。

○第三位にある日本倶樂部は阪谷芳郎・奥田義人・岡野敬次郎・伊東巳代治・松崎藏之助等を中心として官場の人大部分を占め、總て官僚的なるは、交詢社の平民的なるに比して絶好の『コントラスト』を成さずや。

○同氣倶樂部は其名顯著ならざるも可なり古き歴史を有す。中流人士を羅致し、時として相場師・藝人も出入し、其中に婦人會などありて其分子の雜駁なるだけ品質甚だ劣る。

○倶樂部類似のものには風月會・中央亭會の如きあり。風月會は稍や高尚なるものに屬し、毎日風月堂に至り晝餐を喫するものを以て組織し、中に交詢社の社員も交れり。高田釜吉・岡田治衞武・岡崎正也・内田銀之助・野間五造・宮岡恒次郎等を定連の主もなるものとし、富井・巨智部・岡村の三博士も時として來る。

○中央亭の繁昌は最近日の出の勢ひを以て漸進しつゝあり。亭は八重洲町の一廓所謂三菱長屋内にあり。此一廓は俗に會社小路と稱し、會社の數大小七十餘に及び、七十餘の會社員を中心として東京府市高等吏員・警視廳高等官及び帝劇重役等中央亭に聚まる。乃ち中央亭の會の盛んなるは一面に於て會社小路の發展を意味せずや。

○亭の定連は三菱の豐川良平・桐島像一・仙石貢を筆頭とし、加藤正義・林民雄・飯田新七・利光鶴松あり。三菱に關係ある外國人亦た多く此に出入す。

二

○交詢社の中心點は、門野幾之進・朝吹英二・鎌田榮吉にして、此三人の合議に依り總てのことを議す。即ち幹部中の幹部にして交詢社の閥族なり。

○林董の常議員會長に推されしは夙に故雪池翁と親交あるに加へ、家嗣福澤一太郎の舅氏たる關係よりす。第二西園寺内閣組織に際し、世間皆な林董を以て外務大臣たるべしと思惟したるに、獨り時事新報は其遞信大臣たるべきを報じたるが如き、又た同氏が西園寺内閣時代に他よりも早く官邊の事實を知るの便ありしは林董といふ有力なる材料供給者あればなり。

○門野は元と慶應に教鞭を執り、故小幡篤次郎の後を

承けて塾頭たり、今は千代田生命を宰す。次弟重九郎は大倉組常務取締役、末弟純八郎は三井銀行營業部長にして、棣鄂の情、一門の繁榮共に人の羨む所なり。

○朝吹は故福澤が三國一の東牀として其女を配したるもの、前に三菱に入り後ち三井に轉じ、財界に於ける三田閥の耆宿たり。政治を解し、書畫骨董を愛し、殊に刀劍に關しては嘗て鑑定所の看板を揭げたる程の天狗にして、其趣味の廣き尋常一樣の實業家と選を異にす。

○鎌田は門野・朝吹よりも後輩にして、門野の辭後塾頭に推され現に其職にあり。私學を代表して貴族院議員に勅選されたるもの彼れ一人とし、議員としては格別勢力なきも輕んぜられず。政治の系統は政友會に近きも、官僚・閥族に反對する點に於て國民黨と一致せざるにあらず。

○人物は三人中門野を以て第一とし、風貌の溫平なる、人格の崇高なる、世間皆な君子人を以て許せり。朝吹之に亞ぎ、鎌田に至ては器小にして俗物に近く、學校經營の上に於ても時として非難の聲を聞かざるにあらざれど、金錢に澹泊にして且つ事に當りて熱心なり。學問は三子者中第一に居り、演說亦拙なるにあらざるも何となく臭味ありて聽者に快感を與へず。

○此機會を利用して少しく山本達雄に言及し置くの必要あり。政友會が山本の入閣を以て一に交詢社即ち三田派の御機嫌取りに出づるが如く吹聽せるの一事は如何にも滑稽に感ぜらる。蓋し山本は三田出身にして、交詢社員に相違なきが、三田に關係なきも同然にして、三田派は寧ろ彼を惡めり。然るに交詢社緩和の意味に取るは誤解にして、猶ほ故鳩山和夫を政友會に入黨せしむれば、早稻田派を操縱し得べしと思惟せしと同じく、却て三田派の感情を害せり。

○政治方面の人にして交詢社の定連ともいふべきは、政友俱樂部及び政友會に尾崎行雄・竹越與三郎・菊地武德・井上角五郎・渡邊修あり。國民黨に犬養毅・箕浦勝人野間五造あり。是等はいづれも古參株に屬し、其中犬養・尾崎・竹越・井上は常議員たり。

○新議員には政友倶樂部の小山完吾・平出喜三郎・牧野彥三郎・林毅陸・福澤桃介あり。政友會の堀切善兵衛・清埜太郎あり、國民黨の鈴木梅四郎・相島勘次郎・增田義一あり。岡崎邦輔は定連にあらざるも時々來りて食卓を共にす。

○政友會の鶴原定吉・望月右内・元田肇・伊東要藏・板倉中・原田十衞・渡邊勘十郎・長島鷲太郎・山本悌二郎・佐竹作太郎は會員なれども、唯だ名のみにして從來顏を出せしを看ず。純官僚派の岩下淸周・根津嘉一郎・柴四朗・三浦逸平等も亦未だ嘗て來らず。其來らざるは根本の性質を異にすればなり。

○社員にして新たに桂の麾下に趨走せしは箕浦と町田忠治の二人にして、爾來、交詢社と絕緣の形なり。

○新聞記者の定連は時事新報全部の外に本田精一・光永星郞・竹村良貞・弓削田精一・高本利太あり。新井由三郞・永松達吾・足立莊等も嘗て文筆を以て立ちしもの、中に就き新井は鬼瓦の如き面構へをなし、一見蠻氣に滿てるが如きも家に萬卷の書を積んで常に眼をこれに曝し、學問・識見・人格の點に於て一頭地を抽く。福澤に聘ばれて時事に入りし前朝比奈碌堂時代の東京日日新聞編輯長として手腕を發揮したり。

三

○故福澤翁は世界的智識を日本に輸入するに努めたる先覺者にして、我邦風氣の開發は翁に負ふ處少からず。唯だ餘りに黃金を重んずるに傾きたるより、極端なる物質主義者の如く貶せられ、其門より出てたるもの亦後に至りて多くヤンキー流の思想に囚はれ、詩を作るよりも畠を造り、政治よりも牙籌を喜ぶの風あるを以て、町人を養成するに專らなりし如く誤解するものあり。

○されど翁は何よりも政治を愛したる點に於て天成の政治家といふべく、隨て大隈・後藤等と親善なりしも、薩長閥族と絕對に相容れず、隱然一敵國の觀をなしにき。

○是を以て初期の慶應義塾は政治家を造る學校なりき。當時三田に學びし者の多くは滔々相率ゐて天下國

家を論じ、實業界に身を投ずるを以て恰も穢多村に籍を置くが如き思ひをなせり。而して福澤は是等の政治志望者を後藤若くは大隈に托したり。

○交詢社が大正政變の原動力となり、飽まで憲政擁護の志を失はざるは、官尊民卑を攻撃し、獨立自尊を鼓吹したる先師の遺志を體するよりす。殊に、憲政運動の主人公たる犬養といひ尾崎といひ、共に門野・朝吹等と同窓の友人にして、平素親類交際をなす間柄なれば、一臂の力を藉して其志を成さしめんと欲するは自然の人情にあらざるか。或者は交詢社の活動を以て福澤の幽靈が憲政の危機を救はんが爲め熱心に出動せるなりとさへいへり。

○客臘閥族の毒計に依て西園寺内閣の倒れたる前後より、毎日交詢社に會して國事を談ずるの一團あり。其顔觸れは前記の宗連の外、池田成彬・波多野承五郎・高橋義雄・阪田實・山名次郎・磯野長藏・池田寅次郎・團琢磨・名取和作・村上定・矢野由次郎・松方乙彦・朝吹常吉・藤原俊雄・藤山雷太・富田信次郎・堀江歸一・田中萃一郎・青木徹二・木村清四郎・岩村周作・望月小太郎等とす。いづれも自活の心配なく、時間を都合して顔合はせを爲し得る當代の紳士なり。既にして内閣組織の大命桂に下るや、交詢社内の物論は更に一段の喧囂を加へにき。

○某の日犬養・尾崎・竹越・菊地・福澤・岡崎・野間・相島・本多等の一連は築地精養軒に會して時局に處するの計を議す。是れ憲政擁護運動の發端にして、旬日の後ち各派に案内を發し、始めて第一回の相談會を開く。彼等は精養軒を商議の場所としたるも、必ず交詢社に會食するを常とし、斯くして交詢社は純然たる政治倶樂部となれり。

○當時侃諤の議を唱へ交詢社の過激黨と呼ばれしは、門野・朝吹・鎌田の三元老を始め、伊藤欽亮・岡本貞烋・北川禮弼・高橋正信・戸張志賀之助・和田豐治等にして、いづれも政黨に關係なき人々なれども、餘りに熱心なるより政治狂に近しと冷評するものさへありたり。

○伊藤は操觚界の元老にして勢力あり。時事を去て後ち日本銀行に入り文書局長たりしが、過ぐる年日本新

聞を購ひて以來苦心經營の狀あり。政變以來頓に紙數の增したる、即ち憲政擁護軍の急先鋒として立ちたればなり。

○長人にして長人と相容れざるもの軍人に三浦觀樹あり、政治家に佐々木照山あり、學者に江木冷灰あり、操觚者に『日本及日本人』を經營する井上龜六、外交時報を宰する大庭柯公あり。伊藤の如きは蓋し長人中の非長人として旗色の最も鮮明なる者。

○岡本は交詢社創立當時の幹事にして、又た福地櫻痴條野採菊・寺家村某と共に舊時代に於ける東京總新聞倶樂部の幹事なりき。今や豐國銀行・鐘紡取締役たる外二三會社の重役を兼ね、操觚界の活ける元老の一人なるのみならず、交詢社に於て、准元老の位置を占む。北川も今日財界に入れるが、元と時事の筆政を宰し政治上の意見あり。古き定連の一人に數へらる。

○高橋は久しく横濱正金の出納課長たりしが、昨年辭職し今や閑散の境にあり。性來政治に趣味を有し、過般憲政擁護會を改造するに當り、新たに評議員に選ばる。戶張は時事の出納部長にして同社元老の一人たり。

○和田も交詢社の准元老にして福澤と郷を同じうす。幼時醫家の玄關番たりし時より今日に至るまでの路蹟は悉く奮鬪の歷史にして、財界の戰士と稱せらるゝ所以も亦此にあらん。往に身を挺して富士紡績經營の難局に立つや、時として自ら職工と伍し、時として暴力の迫害を受けつゝ、終に之を危機より救ひて今日あるに至らしめたるの一事特筆するに値ひす。

○桂は和田の財界に勢力あるを知り、之を藥籠中に收めんとて興銀總裁の椅子を與へんとせしも、交詢社かぶれせる和田は如何んぞ斯かる香餌に囚はれんや。

○濱口吉右衞門が桂のニコポン劑の爲めに骨を拔かれて、僞黨謳歌の檄を配布するや、豐國銀行に關係あるものは一齊に起ちて其不都合を詰め、新政黨と惡緣を絕つか、頭取の職を退くか、二者其一を選ぶべしと肉迫し、終に濱口をして豐國を去るの止むを得ざるに至らしめたり。而して濱口退治の運動の張本人は和田なりき。

○蓋し彼は力の人たると共に人格の人なり。義侠心に富み、人の舊恩に報い、未だ嘗て自家の利害の爲めに人間道を沒却せしあるを聞かず。木堂學堂に同情して後援を惜まざるは、將來純民黨として立たんとするに出づ。彼が如きは士魂商才の典型といふべきか。

四

○築地木挽町に『一葉』と稱する待合あり、待合としては必ずしも第一流にあらず、其誇りとする關西料理は必ずしも珍とするに足らず。然るに最近其名の世に著聞じ、殊に政治家の間に傳唱さるゝは何ぞや。

○交詢社と一葉との關係に入るに先ち、事の順序として交詢社と帝劇及び歌舞伎との關係につき、少しく說明せざるべからず。

○毎月一回開く處の演藝會は役者・藝人の出入し、聲妓舞姬を傍聽人とし、淸友會の夕に副はざるより、一時可否の論喧しかりしが、演藝方面を擔當したる一代の粹士大河內輝剛の、さる野吞論を叩き伏せて以來、當時の不粹家も漸次粹化して、今日は家族と共に賤業婦と伍するを怪まざるに及べり。

○初め交詢社と歌舞伎とを結びつけたるものは大河內なりしが、現に井上角五郎・岡本貞烋の同座に關係するあり、殊に定連の一人たる三宅豹三の總支配人たるあり。隨て二者依然として親密の干繫を維持す。

○帝劇には福澤捨次郎關係し、勢力家なりと稱せらる西野恵之助の專務となり、山本久三郎の支配人となりしは一に彼の援護に出づ。乃ち交詢社と歌舞伎と兄弟の關係ありとせば、帝劇とは正に親子の關係ありとすべく、現に交詢社に於て帝劇の入場劵を購ふを得るの便あり。

○『一葉』の現はれしは女優界の干繫に出づ。蓋し主婦下山京子は多くの友人を女優に有し、帝劇の大勢家にして交詢社の准元老たる福澤捨次郎は一葉の『覆面せる主人公』なればなり。女優は頻々一葉に出入し、帝劇關係者も此に遊び、殊に交詢社員の資格ある者は舞臺上の名花を擁して春閨夢裏の人となるの好チャンスあり。桃介の如きはチャンスを捕ふるに最も熱心なる

一人なり。

○下山京子は抑々如何なる女性なるか。東京に生れ、高等女子師範豫備校に學びしといひ、一通り文才ありといひ、萬更素姓も學問もなき婦人なりと惟はれざるが、捨次郎に寵せられて小星となりしは時事の婦人記者時代とす。

○肉體的にも精神的にも墮落せる一種の婦人を以て所謂る『新しき女』とせば、京子の如きは確に新しき女の名を冠するを得べし。今日上流の婦人・良家の處女が一種の虛榮心より新らしき女と呼ばるゝを喜び良妻賢母たるを冀はずして墮落婦人の轍に傚はんとするの多きは社會風敎の爲めに慨すべきの至りとす。青鞜社の一連の如きは矢場女の少しく文字あるものに過ぎず。

○余の勃窣なる未だ一葉なるものを知らず、一日友人に伴はれて至る。亭婢皆な京都大阪の茶屋女に傚ひて赤前垂を膝にし俗惡堪ふべからず。既にして京子の座に現はるゝを看れば、其服裝といひ、容貌といひ、待合の女將といふよりも女優といふに幾し。世間の噂に擬れば絶世の美人の如く想像さるゝも、來つて實物を見れば、名其實に過ぐるの嫌ひなからず。

○交詢社に綠屋組と一葉組とあり。高田信次郎・磯野長藏・松本隆治・青木徹二等は前者に屬し、一葉の定連には福澤一門の外に菊地・小山・小阪・野間・堀切・名取あり。是等はいづれも一葉の草分にして、漸次顧客を紹介し、犬養・尾崎・岡崎等も牛に引かれて善光寺參りをなすに至れり。

○今一人一葉の大熱心家として知らるゝは竹越三叉なり。文章・演說其他行くとして可ならざるなき才人は、近頃淸元に淫し造詣する處深しといふ。初め望月小太郎を一葉に伴ひしは彼れなり。

○望小太は氣障と滑稽を搗き交ぜたる『妙な男』なり。彼の自ら誇りとする演說について噴飯すべき奇談あり。或時福井三郎と共に某地の演說會に臨むや、三郎は元と專門の講釋師だけに巧みに望月の態度・口吻を其儘眞似して前席を勤め、代はりて望月の得意となりて辯じ立つるや、聽客は三郎の眞似をなすものとして

一齊に罵り笑ひ、折角の名演說も臺なしに終はりて大に面目を損じたり。初め望月は何の故なるかを知らざりしが、後ち三郎の惡戯に因るを知るに及び、地團太を踏みて口惜しがれり。

○一葉に於ても人の惡戯の爲めに、一笑柄を殘せり。竹越は名取と諜謀し、望月の財豪にして且つ大政治家なるを吹聽し、特別の待遇を與ふるの一葉の爲めに利なる所以を京子に說き、一方望月に對しては京子の彼に意あるを告げたり。京子の待遇尋常一様ならざるを見て、己惚心强き彼は屢次行きて甘たるき言を吐き、果ては情人氣取りにて帳場に坐りて餘計の世話を燒など、京子も煩に堪へずして竹越・名取に愁訴するに至れり。

五

○桂內閣は國論の急追擊に堪へずして辭職し、山本權兵衞出てゝ後繼內閣を組織す。閥族非なりとせば長も非薩も非、何ぞ一を罪して一を謳歌すべき理あらんや。

○政友會の長魁を葬るに全力を傾けしは大に可し。されど薩魁を迎へて奴顏婢膝するに至ては大なる矛盾に陷れり。道理を以て始終せざるべからざる立憲治下に於て斯くの如き不合理の手段を許さゞるなり。

○幹部腐るも黨員全體の腐れるにあらず。二十四便派の處致は久しく政友會の現狀を慨し、黨人の無氣力に愛憎を竭したる國民に取りて、淸風故人來るの感なからんや。

○初めより純理の上に立ちし交詢社の先輩は、前に硬にして後に軟なる能はず、權兵衞の出づるに及びて益益硬化せり。現に門野・朝吹等は三田系の代議士を一人づゝ面前に呼び、恰も教師の生徒を試驗するが如き態度を以て其所存を質し決心を促したり。

○故に政友俱樂部の出現せしは交詢社の定連たる尾崎竹越・菊池・小山・福澤・林・牧野・平出等相約して其中心となりたればなり。最近岡崎の越島南枝に集ふの情に堪へずして連盟を脫するや、信州の小阪が鄉國の事情止むを得ずして殉じたる外、交詢社組は固く結束して動かず。

○交詢社組中聊か傳ふべきは菊池・小山・林の三人なり。菊池は青森の人、政戰に立つこと五回、二回落選し三十六年門司より出て、三十七年青森より出て、四十五年弘前より出て、議員としては新顔にあらず。

○菊池を喜ばざるものは武德にあらずして不德なりと貶するも、政變以來の態度は極めて立派にして、忽ちにして民黨の名士となれり。東北出身の彼としては原の麾下に屬するの一身に利なるに拘はらず、反對に立ちしは、原に對する反情とあれど、職として『理の人』たるに因らん。

○小山は福澤一太郎の女婿にして、同時に林董の孫婿なり。其關係より從來時事新報紙上に於て政友會内閣を援けたれば大に西園寺に愛せられ、何時にても而會するの特權を得たる位なり。

○一見ハイカラなる如くしてバンカラの點あり、利かぬ氣だけに人と爭ひて屈せず、時として蠻行を演ぜざるにあらざりしが、今日は自重してさる振舞に出でず。

○されど議論辯ありて如何なる問題にも意見を出し、多辯往々人を惱ます。牙籌の人よりも新聞記者に適し、新聞記者よりも議員に適し、政治家として將來有望ならん。

○林は慶應義塾教授としても新聞記者としても從來餘り其名を知られず、議員としても政友會の新參者にして毫も重きをなさゞりき。今回の如き政治上の變動なかりしならば、恐らく二三年は無名の陣笠たるを免ること難しとせんが、討閥運動に加はりし爲め一躍して政場の花形となり、議會に質問演説を試みて以來益益世の人氣を 聚むるに至れり。

○人物溫和にして多く語らず。其演説亦其人の如くにして辯難攻擊に適せざるも、比喩に富み、條理一貫し且つ音吐の朗々たるあり。議會の新人として大に望を囑するに堪ふ。

○當然政友會を脱すべくして脱せざりしもの之を堀切善兵衞とす。其脱せざりしは鄉情の許さゞるが爲めなりといふも、議員中の最年少者を以て誇りながら、選

學區の事情を顧慮して進退を誤るとは何たるタワケぞ。況んや彼は憲政運動の初めに當りて一人前の硬論を口にせしをや。

○爾來交詢社に於て彼の評判甚だ惡く、他も亦懐に省みて恥づる處あるにや顏を出さず。慶應義塾に於ても頻に後指をさゝれ、學生は延て彼の擔任する經濟學の講義振りを貶するに至れり。

○蓋し彼は其名の示す如く善人なり、故に事勿れ主義を執り甚だしく女性的なり。今日已に斯くの如しとせば歲を經るに從ひて如何許り引込思案となるか行末の想ひやらる。『若き老人(ヤング・オールドマン)』とは蓋し善兵衞の如き人物の謂か。

○最後に記すべき一事あり、交詢社組は政友會を脱するに當り精養軒に於て表向のことを議しゝも、實際の相談は多く一葉茶屋に於てせり。交詢社と一葉との關係淺からざるの一證とすべし。

○從來三田よりも早稻田の評判遙に好かりしに、伯大隈の誤まられて新政黨の味方せし以來、後者は頓に入學志望者を減じ、之に反して前者は著しく之を增加し、人心に影響する所大なるあり。豈に鑑みざるべけんや。

杜鵑に關する研究

法學士　川口孫治郎

一、觀察の目的となりし杜鵑

ホトトギスに就いては、文學上では、杜鵑、時鳥、不如歸、杜宇、子規、穩者鳥、田植鳥、シデノタチサ、郭公、霍公などさまぐの文字が宛てられて居る。併し動物學上では、郭公(霍公)といふのは別の鳥だ。而して本當のホトトギスの中にも種類がある。唯、玆に觀察の目的となりしは、日本に於ける昔から杜鵑の名所たる山城地方、特に近江にかけた比叡山中に少からず棲息する種てある。

二、觀察の時と處

去る明治四十二年五月より同四十五年春までの間、洛南なる宇治、淀伏見より、東山一帶にかけて、洛西は嵐山附近から、洛北上加茂にかけて、注意觀察したが、今にして思へば其四ケ年拂つた努力に比して、受けた報酬は誠に貧弱なものであつた。唯嵐山で日中の觀察中、氣付いたことが、後に役立つべく豫備となつた位のことに過ぎなかつた。實際手にとるが如くに觀察の出來たのは、昨年五月初旬から八月下旬まで僅四

ヶ月許、比叡山中に立籠つた間のことである。此鳥は、實際、京洛地方に少からず徘徊して居るけれども、市では勿論、里近くでも、容易に觀察出來ないことは、古來何人も傳ふる處だ。唯山中に籠つて割合に容易に屡々觀察することが出來て、私自身には趣味ある事實を發見した。

序にいふ、此觀察の一伍一什を、其九月に發表せんかとも思つたが、又、寧ろ之をホトトギスの盛に動作を始むろ次の季節を待つて發表した方が、比較的多くの研究觀察家の注意を強く惹いて、以て私の觀察以外に何ほ幾多の新事實を見出す機會を多くするに便ならむ、と思ひ返して今日まで控へて居つた次第である。觀察は、九月から翌四月末までの間では如何に熟練した鋭い觀察眼を有する人でも中々に出來難いが、五月から八月末までは山中では左程其困難を感ぜずして實見するとの出來る鳥であるからである。

三、鳴く時刻

杜鵑の鳴く季節は、前述の如く五月より八月末までである。之は書物にも書いてある。

然らば、一日中で、主として鳴く時刻は何時かといへば、

子規大竹藪をもる月夜　　芭蕉

何方に鳴きて行くらむ杜鵑
淀のわたりのまだ夜深きに　　失名

時鳥鳴きつる方をながむれば
ただ有明の月ぞのこれる　　後大德寺

ほとゝぎす〳〵とて明けにけり　　千代

斯ういふ古人の遺されたのが、先入主となつて、且つ實際に里でも町でも夜に入つて以後に聽くのみだから、動もすれば此鳥は夜中に鳴く鳥だとのみ思込まれ易い。

ところが嵐山で日中にケタヽマシク鳴くのを容易に聽くことが出來るので、

時鳥なくや田植の尻の上　　許六

朝田夕田晝田又田や時鳥

などの句が生きてくる。更に、比叡山中では、晝の眞ッただ中に、五月雨の霧の裡で、彼方でも此方でも、盛に叫ぶ。而して夕暮から夜中は勿論曉にも一向鳴かない。即ち山中では專ら日中のみ叫ぶ鳥である。といふことを確かめた。而して夕方から其勁健な翼に任かして一氣に、里に向つて遠征を企つるやうであることもわかつて來た。

四、飛び方に就き

私が幼時木の國の深林の片端に居つた頃、六月の或朝ォノ〳〵に、倉庫の雨垂れ落ちの處に、一羽の見慣れない鳥が隱れて居るのを見出した幼心にも非常に興味を感じて、夫れを手にしたが、形は鵯ぐらゐで羽色

は小鷹に似て稍淺く、尾は割合に長い、足指が二本は前に二本が後に並んで前後相向つて居る、何處にも負傷して居ないやうだが、唯嘴の齊根に血がにじんで居る。父や先生に示したが、何れも即座に、杜鵑だ、と斷定した。而して其斃れた原因は、昨夜は月明であつた爲に、過日來左官が丹精を凝らして塗り上げた倉庫の白壁が月影に見わけ難い、之に向つて杜鵑が遠方から非常な速度を以てぶつ付かつて、イヤといふ程、其鼻を突いたに起つたものだらうといふことであつた。杜鵑の飛び方の凄じいものらしいことは此時私の頭に強く響いた。

爾來、軸物や何かで杜鵑の繪畫を觀ても、大抵は弦月か、朧月夜かの空を、斜に彼の鎌型の翼をシッカと引締めて、風を切つて射るが如くに翔ける有樣が描かれて居るのを認められた。

右、幼時の經驗と、繪畫から養はれた先入の觀念とで、杜鵑の飛び方は彼の燕の翔け方の一層力強いもの位に思つて居つた。又實際月夜に彼の飛翔するのを洛中で觀ても、殆んど眼にも留らぬ位の速度であることを經驗した。

ところが今や、山中では意外にも、甚だ緩やかな飛び方を見るのみだ。谷から谷へ叫びながら移る其飛び方の速度は、鴨の飛び方を少今し緩やかにしたやうなものであつた。其經過も鴨のとる波狀の飛び方を佝ほ少し平凡にしたやうなものであつた。

實は山中に籠つて注意したに拘らず始めの二日間は彼方此方で盛に叫ぶ聲は倦きるほど聞くが、姿は一向見付からなかつた。三日目に頭上の杉の茂みからバサバサッと柔らかに飛び出して、緩ろく向ひの溪の茂みに飛び行く鳥がある。夫れが途中で盛に叫び出したので、始めて杜鵑はあんな飛び方をするものかといふことを發見した。

之がわかつた以來は、觀察に非常に自由と便利とを得た。出發點、途中、到着點などにつき苦もなく觀察することを得た。

五、樹間に於ける行動

叫びながら飛んで來るのを待受くることが出來るやうになつたから、間違なしの觀察が出來た。人違ひ、否、トリ違ひの懸念なしの觀察が出來た。全體山野の禽獸の自然の行動を觀察せんには、勿論、觀察者が其場所に主たる形勢に居らねばならぬ。客となつて禽獸を附け狙ひ追廻して居るやうでは精細な眞相がわかるものでない。大凡そ、此邊に目指す禽獸が來るだらうと見込みが付いたら、觀察者は恰も野蠻人の爲すが如く其處に潜伏して辛抱強く其目的物の來るを待つに限る。之は決して迂愚な遣方でない。私の次に述ぶべき巣の問題も之に依つて解き始めたが玆に述ぶる樹間の杜鵑の行動も亦此方針をとつて觀察したのだ。

之に據れば、杜鵑は啄木鳥ほどに敏捷に行動しない。勿論、幹に對して、縱にも通ひ、横にも廻はる。併し其動作がノロイ。枝にとまつても何だかタヨリ少く見ゆる。枝から枝に移るのも恰も纏綫するが如く滑らかに行く。勿論、之等の行動は常に地上より高き茂みの間で演ぜらる丶のだ。

六、杜鵑の巣及育雛に關する傳説
及び學者の説

（一）傳説に就いて。

私は、紀伊、信濃、備前、伊豫等で、『杜鵑は其卵を鶯の巣の中に生みて鶯をして養はしむと云ふ』といふ傳説のあることを親しく聽いた。言海にも右の如くにかいて居る。康熙字典等にも、不能爲巣、居他巣生子とある。

今を距る六年前、私は『野の鳥と親心』と題して、二拾種餘りの鳥の親子關係に關する實驗の一端を、某雜誌に載せた。其時、杜鵑については實驗がないから、右のやうな例外的の傳説をば、眞とも僞ともいへぬ、と斷つておいた。ところが其雜誌の讀者の中の、長く高知に居つたといふ未知の篤志家から、態々手紙で、『高知では杜鵑を子飼にして居ることは少くない。而して其飼養者のいふ處によれば皆鶯の巣から捕つて來るのだといふ』と知らして呉れた。

併し、私にはどうも信ぜられない。元來、鶯といふ鳥は、誠に神經過敏な鳥で、人が其巣に些かなりとも手を觸れたなら直ぐに知覺する。卵などイヂツたならば、假令何等の香のない枯木の雨にサレた枝の先きでチョツと動かした丈けでも最早卵を見捨てゝ再び其巣に來なくなる。況して他の鳥が卵を生み入れた場合に、之を平氣に養育しやうとは、殆んど想像が出來ない。更に一歩を讓つて、鶯と杜鵑とは自然の大攝理に於て、俗にいふ合性(あひしやう)であつて、默つて温めるのだ、と推測せんとすとも、其不可能の證據がある。即ち第一、鶯の巣へは杜鵑が這入られない。雌は雄より稍小形であるが、夫れでも頭丈け入れたら巣に一ぱいになる。物理學上入ることの不可能が明だ。或は説をなす者もあらう、卵を生み落すには巣の大小は問題にならぬではないかと。併し之も机上論だ。何となれば、鶯の巣は他の多くの鳥の巣と異つて、出入口は側面に小さく出來て居る、上向きでなくて、横向きで何れかといへば下向に傾いて居る、こんな出入口から杜鵑が如何にして生み落すことが出來やうか、一寸想像だにも出來難いことであるから。

（二）學者の説について。

箕作理學博士の普通教育動物學教科書（三十三年十一月刊行）に、下の如くある。

ほとゝぎすの類は、最も横着なる鳥にして、自づから子を養育することをなさず、他の種の鳥の巣の中に其卵を産み置き、之をして卵を煖めしめ之を育つる勞を爲さしむ云々。

尙ほ驚ろくべきは、ほとゝぎすの雛が孵化するや否や未だ眼の明かざるに其養父母の實子を巣より外に逐ひ落し死に至らしむといふ、鳥とはいひながら實に恩を知らざる極端にして、之を憎まざらむと欲すとも得ざるなり。

と、之に據つてみれば、杜鵑は、自から巣をつくらず、又自づから卵を温くめず、且つ又自づから其雛を養育せずといふことを明言せられて居

る。

次に、丘理學博士の近世動物學教科書(四十四年出版)を見るに、

杜鵑は……自づから巣を造らずして、他の鳥の巣に產卵し、他鳥をして之を溫めしむ。

とある。平たき詞では、「溫める」といふ意味の中に、其卵を溫める外に孵化した雛を育つる意も含んで居るとも見らるゝが、或は、單に溫めて即ち孵化させるといふ意丈であるのかも知れない。兎に角、前の箕作博士の說よりは、多少寛めて居るやうにもに思はるゝ。

更に、石川理學博士は、四十四年四月雜誌『婦人界』といふのに、

殊に時鳥の如きは、雌は子を產むと、其子を雄に投付けて、一向に顧みないで、直ぐと又他の雄と交尾して、遠方へ逃げて行つてるものである。

又それのみでない、子を產まぬ前に、雌が雄を非常に酷めるものです、時鳥は全く女尊男卑の嬶天下です、此頃の世の中には斯らいふ時鳥のやうな婦人が大分多い。

と書かれて居る。此說の如くば、前の丘博士の說よりも一層平たく、卵の處分を雄鳥に一任するといはるゝのみで、他鳥に溫めさすとも養育させるとも謂はれてゐない。又巣のことに就いては何ともいつて居られない。

以上、三博士の說の外に、博物學研究會編纂の普通動物の觀察(四十一年十川出版)に、箕作博士の說の前半と同樣のことを書いて居るのを見た丈けで、雜誌では、動物學雜誌に(明治廿一年頃より引續刊行せらるるもの)の明治廿三年五月號に、野村といふ人が杜鵑について書いたのを見た丈だ。夫も聲音考と題して內容は文學的傳說が主で實驗的のものでない。私の寡聞なる、此外に、杜鵑に關する研究報告を見たことがない。

七、杜鵑の巣に關する實地觀察

以下、再び私の實驗に移る。凡そ禽獸の自然のまゝなる行動を觀察せんには、觀察者は巧に其地位的優先を占めねばならぬことは、前述の如くだが、鳥の巣の發見などには一入其必要がある。何となれば彼等の敵に對する用愼は巣を架くるに就いて特に著しく作用するものであるから。殊に喬木に巣くふ鳥の產卵後、溫めに入つて居る期間は、發見頗る困難である。唯僅に偶然の機會に發見する位のものである。例へば、親鳥が水を飲みに出るとか、敵の近寄り又は外物の觸れるなどに依つて飛び出るとかの場合に、偶然觀察者の眼が夫れに向つて而して注意を惹いた機會にのみ發見の緒につく位である。

比較的有力なる發見方法の第一は、始めて巣を構へる時期に、私の所謂潛伏的觀察方法をとることである。大抵の鳥の巣は之れでわかる。何となれば如何に用愼深き鳥でも巣を架くべき材料を運び來らねばならぬ、而して其運搬は二度や三度では果てない、そこに此方から發見の緒を握ることが出來るから。

發見方法の第二は、卵が孵化して後に例の觀察方法をとることである。此時期には發見餘程容易となる。何となれば、鳥類の種類に依つて雛に對する愛情に厚薄の差はあれど、苟くも孵育する以上は、雛に哺すべき材料をくはへ來つて巢に出入せざるを得ないから。但右兩方法とも觀察者の觀察眼が機敏に且つ要領を得て居らねばならぬことは勿論だ。

右兩法に要領を得、幾多の實驗の結果、『コツ』を覺えたならば、前に困難なりといつた溫めの時期中の發見も其困難を減じて來る。

私は、先づ第一方法を五月始から試みた。每日深林中を彼方此方、踏む足音をだに遠慮しながら探索し廻はつた。求めもしない各種の鳥の巢をかくるのを幾つとなく發見したが、當の目的たる杜鵑が巢を架くるのを、どうしても認められなかつた。尤も此鳥は產卵期が他の多くの鳥より稍遲いやうにも聞いたから其積りで注意したが併しわからぬ。その間に育雛の實例が起つたので、昨年の實地觀察では巢をかくるや否やは未確定であつた。

序に附記す、延曆寺山上事務所の常傭なる枝打ち山本甚七…如何なる大木にでも鎌二挺を手にして自由に攀ぢ登りて枝打ちをやる男…の經驗談に據ると、前後十年間許、每年五六月の交、此山中に就業中、杜鵑の巢を三度發見したさうで、其概要は後に育雛の條に於て述ぶる筈であるが、巢構につきては、杜鵑自づからするか、他の鳥のを借りるか、何れとも確にわからぬ、といつて居る。

又同じく枝打ち山田宇之助の一昨年の實見談に據れば、五月中旬の或日檜杉の茂みで、杜鵑とカケス(カシドリともいふ)とが互に激しく爭つて居る、夕方に至つてカケスが負けて退却したやうであつた、夫から越へて三日目に、枝打ちの碩が其檜杉にのぼつて來た、彼は双鎌を手にして其樹下に立つた、其時、彼の脚下に、カケスの卵が生々しく破れ潰れて散亂して居ることを見出した、更に彼は幹を攀づること十二間許にして枝の叢生した茂みに入つた、此時、彼の鼻の先きなる枝の間から俄に飛び出でゝ巧に枝の間を拔け去つたのは杜鵑であつた、跡を覗くと巢がある。內側は磨り鉢のやうな傾斜で、底近くなつて急に壺のやうに窪んで居る。全くカケスの巢だ、併し其中にある卵はカケスのではなくて、稍小さいまだ產むかも知れないが、枝打ちの爲に登つた職掌柄、止むを得ぬから、其枝を打ち落した、併し之れで杜鵑が他鳥の巢を奪つて其卵を跳ね出して而して自づからのを產むものであることを確かめた。といつて居る。

結局、『杜鵑は自づから巢を造らず、他鳥の巢に產卵する』といふ丈けに就いては、私自身で行つた實驗が未完であるし、又山田山本等の實歷談中にも參考すべき點もあり、從つて、右傳說及學說に對して何等新事實を加ふることが出來ない。但し其所謂他の鳥とは、世間に傳へいふ鶯や頰白の類でないこと丈けは明である。宇之助のいつたカケスは元來亂暴な鳥ではあるが夜襲の武力を有しないから、彼よりも體の稍小さい杜鵑に打負かさるゝこともあらう、從つて、カケスも被侵略者の一つであるのであらう。

八、杜鵑の雛の育ち方に關する實地觀察

六月三日午後四時過、今日も亦得るところなかりしか、と尋れあぐんで、西塔なる釋迦堂の前に出て、木立を背にして茫然として堂の彼方なる杉の梢の茂みに弱き視線を投げた刹那、一羽の鴨がピーッ！と叫んでそこに入らむとしたと見ゆるや否や、非常に慌てふためいて逃げ出すと同時に追つかけた鳥がある。鈍かりし私の眼も此一轉瞬に緊張した。追つた鳥は杜鵑らしいことを認め得た。而して不圖考へた、大抵の鳥は巣を架けて之に産卵すると其以後他の鳥が其巣に近寄るのを嫌ひ、之に向つて激しく突撃する鳥すらある、今の突撃も若しや夫れではあるまいかと。

乃で、翌日復た同じ處に隱れて觀て居つたが、暮方に同じ梢から飛び出したのをチラと認めた。翌々日の拂曉に三度同じ梢に入つたのを明確に認めた。併し私は尙ほ巣なりとは斷定しなかつた。何となれば、杜鵑が其棲息地方で飛び移る樹木は大凡定つて居る、從つて度々出入したからといつて夫れが即ち巣の所在を默示するものと認められないから。唯益々精察することに決心した。

越へて六月十日に至つて、杜鵑が何物かを銜へて例の茂みの隣の茂みに入つた。私は少なからず興味を感じた。非常に集中した注意をば、彼の今入つた茂みでなくて、前日來彼の出入した例の茂みに拂つた。何となれば大多數の鳥の巣は親鳥の入る場所に發見せらるゝことなくして、其出づる場所に發見せらるゝものであるから、其姿を巧に隱す杜鵑も矢張り鳥である。彼には嚴重な警察の網を潜ぐつて其蹤跡を巧みにくらます前科者ほどの狡智がない。果して私の待ち受けて居つた注目點から游るが如くに樹間を縫つて飛び去つた。愈大體の見込がついた。

其後、日日に彼の銜へて來る物が段々と大きくなつて來た。而して其來往の度數も日增に頻繁になつて來た。即ち、彼は自づから其卵を暖め且つ自づから其雛を育つる鳥であるらしいことを段々證明しつゝあるのだ。

乃て、愈、其巢を實驗することに決心した。何にしろ地上十三間許の杉の梢の茂みに在るのだから、容易でない。幸に過日來、釋迦堂裏に仕事に來る之も延暦寺雇屋根工松田庄次郎といふのが、互に山中無人の境の常として無聊のあまり話仲間となつて居つたから、先づ彼に相談してみた。即座に快諾した。而して仕事の都合上、翌々日即ち廿四日午前[illegible]に準備の上、攀登つて實相を見屆くることに約束した。勿論、場所は[illegible]獵區域內、目的物は保護鳥であるから、唯實地觀察する丈けであつて決して手を觸る、計畫でない。從つて敢て秘密にする必要も何にもない、唯強いて廣告するにも及ばぬ、といひ付けておいた。

約束の翌々日の最後の見屆けに幾多の希望を抱きつゝ、翌日も例の如く但時刻丈けが稍例よりも遲く觀察に出かけて行つた。思懸けなくも山中であまり聞かない小學兒童らしい喧しい聲がする。今廿三日は成程日曜日だ。散策の爲に登山したのだらうと思つた。近づいて私は何となく

不穏を感じた。彼等の一人は現に一羽の雛の絶息したのを取上げて一同は之を圍み見て居る。乃ち穏やかに申込んで借受けて實見した。夫は杜鵑の雛であることを確認した。と同時に、如何にして夫が手に入つた乎を聞くと、此上から突き落したのだ、と答へられた。之には流石に驚かざるを得なかつた。畳みかけて『一體誰から聞いた？』と殆んど將に發せんとして我ながら其愚を悟つて、左あらぬ態に更に、ドウして彼の高い枝まで登り得た？　と尋ねた。子供の智慧は大人よりも勝れて敏い。猿の如き彼腕白連の一人は例の大杉の傍なる割合に小さい樹に登つて、次に之に接近した稍大なる幹に移り、夫れを登つて更に又次の接近した一層大なる幹に移り、夫から愈々例の大杉に移らむとしたが、傳ふべき杉の枝は檜の枝とは違つて脆く折るゝ危險があるから、到頭、移り得ないで其處から巣のかゝつて居つた杉の茂みを、彼の竹（一丈足らずの細竹）で突きつけて、巣を突落した、雛の一つは直ぐ下の枝に乘つかゝり巣は中程の茂みに留まり、此一匹丈けが下に落ちたのだ。といふ。更ねて徐ろに、雛はそれ丈けであつたか、と尋ねてみたが、始め巣の將に落ちんとした時に這ひ出した雛が枝にかゝつたので、次に出たのは枝にかゝつて又更に落ちて來た、此二つの外には最早一匹もなかつた、と答へた。次に、一層、平たく、どうして巣のあることがわかつた？と聞いてみた。彼等は無造作に『他人から聞いた。』と答へた。

今度は更に一層何氣なき態にて、誰に聞た？と反問してみた。此問ひに依つて、若しや他にも發見者があつたなら其人に就いて聞くことを得て參考資料を得ることがあるかも知れない、といふ幾分の希望を抱いて居つたのだが、腕白連は相顧みて、ソロソロと氣味わるげに逃げ腰となり始めた。私は最早追究しなかつた。其追究よりも肝腎な親鳥の此際の動靜を偵察せん爲に、私は腕白等の去るのを目送して後、又叢生した矮木の間に潜んだ。親鳥は來た。一羽ではない。雌雄二羽たることを認めた。但し斯かる危難の場合には大抵の鳥は、隨分叫び廻はるものだが、杜鵑は平氣だ。加之、其轉がり出てゝ枝の間に乘つて居る雛を救はんともしない。其冷淡な態度は、彼土中に横穴を穿つて巣くふ翡翠の子に對する態度、及び葦中に巣くふ葦五位(俗にボンノーともいふ)のそれ等に似て居る。

翌日、念の爲に、松田と共に調査したが、巣殼は半ば壞れて居たが木の枝造りの粗末なものであつた。而して夫れが杜鵑自身の作か、將た奪取したものか精確なことは依然として不分明であつた。唯其上の枝に懸つて居つた雛の一匹が斃れて横はつて居つた。乃で雛が二羽であつたことが確實に分つた。

尙ほ雛の數に就いては、參考の爲に、前記甚七の實見談を附記しおく。同人の三回の遭遇中、二回が何れも卵二個宛であつた。而して後の一回即ち一昨々年の實見では雛が二羽であつた。而して其枝を落すに依つて止むを得ぬから、此雛二羽を綱もて巣のまゝ吊り下ろしたが、偶、京都から登つて來た客が彼等を譲り飼で飼育するからといふ懇望であつたから、其人に贈與した云々。

以上の如くにして私の實地に觀察したのは、例外の現象か將た原則的現象か未定であるが、例外としても有る事實は有る。私の今茲にいふは有つた事實を有つたといふに在るのだ。

其事實に據れば、學者の所謂『杜鵑の雌は卵を産む丈けで後は雄に一任する』といはれて居るに拘らず、杜鵑の中に斯かる新しき女に似たやうなものでないのがある。矢張り舊き女も彼等の中に確に在る。少くとも比叡山中に一羽丈け確に居つたことが、新らしき事實として現れたのだ。

又、學者の所謂『他の鳥をして溫めしむ』といふ說に對しても、親鳥自づから溫める新事實を證據立てられた。又學者の所謂『他鳥をして溫めしめ且つ之を育つる勞をとらしむ』といふ說に對しては勿論明なる異つた新事實を實證せられた。

尙ほ之に關して從來、私の他鳥に對する實驗の結果を記する必要がある。其實驗に據れば、自然界に棲息する鳥類の中には自づから知らずして他鳥の卵を溫める實例がないではない。

即ち、雀は頰白又は鶸の卵ならば二個位窃かに入替へられても平氣で溫める。雲雀の卵の如き其大さに餘程差のあるものでも一個位入替へた丈けでは平氣で溫めて且つ平氣で育てた。

燕の巢に雀の卵を一個入添へて試みたが、溫めたことは溫めたが雀のが先づ孵化して三日目に燕のが孵化した、之は産卵の時が一致して居なかつた爲でもあらう。卵の時代から其大さが隨分違つて居つたが雛となつて而かも日が前後したのだから甚しき大小を見た。翌日果して燕子の雀が巢外に投げ出されて斃れた。

右二例は、人家に關聯ある鳥の分だが、次に野の雲雀の巢に、雀又は頰白の卵を或は一個或は二個或は全く(雲雀の卵は六個が最多だ)入替へて試みたが、七ケ處の試驗の中で唯一場合のみ頰白の卵の一個入替へたのを孵化した。但し其雲雀は通常の期間よりも稍早く雛を巢立たしめ雛子の頰白を見捨て終つた。

次に林の松の老樹に架けた『雉鳩』の巢に、其二個の中の一顆を家鳩の一顆とを非常に警戒して窃つと入替へおいた。處が『雉鳩』の親は其翌日から全然巢を見捨てゝ來なくなつた。一方家鳩は雉鳩の卵を孵化し發育したが、雛は人に近づかず程なく何處かへまつて終つた。次に雉の巢(何の設備もない、叢生灌木の間に稍窪みをつけた丈けで、顆數は十二個を極限とするやうだ)を發見した後、早速、矮鷄の卵を三顆丈け入替へて試みた。處が程なく雌鳥が歸つて來て、自分のと鷄子とを區別せず溫く其翼中に掻き込みて橫になる。その雛の首を雌が銜んで引づつて移つて行く。驚くべし、全く引越しだ。燒野の雉、夜の鶴、しほらしくも又親馬鹿だ。他鳥の卵まで引き連れて行くのだ。右各種の實驗をした私は、杜鵑に對して下の如き推測をしたこともあつた。『杜鵑も他の鳥の巢に巧に一顆か二顆宛を彼の巢此の巢と産み落しに廻つて以て他鳥をして自覺せしめないで溫めしむるのかも知れない。大なる自然は他鳥をして杜鵑の卵を平氣で溫め育てしむるのかも知れない。眇たる人類の一員に過ぎない

私が、所謂人工で入替へてだに滞りなく孵化鞠育の勞をとる鳥の在る以上は」と。

併し、併し、今は其推測も要はない。何となれば、現に杜鵑は自づから其卵を温め、且つ自づから雛を鞠育する事實を確認することを得たから。

九、巣立後の雛の實況

次に、既に巣立ちした後の雛……幼鳥といふ方が妥當かも知れない……の發育の實況も、比叡山中では七月中旬以後には容易に認むることが出來る。實は其以前に既に巣立ちをして居つても一週間や十日間は人眼に直ぐに觸るゝやうな場所には出ない。出ても聲を立つることを控へ目にするからわかり難い。之は他鳥の雛でも同様だ。併し此頃からは追追に羽も利き方が確かになつて來るから、追々に大膽になる。流石に親の子丈けあつて哺を受くる時など随分喧しいものだ。此實況は、彼の巣での行動とは違つて、天下晴れての行動だから、苟くも從來他の鳥に關して此種の觀察に經驗のあつた人ならば必ず難なく確認することが出來る。私はこの觀察にさへ倘ほ冷やかに、之は甘い亭主が其山の神の御機嫌を伺ふのではあるまいかと疑つて凝視したが、矢張り雛であることがわかつた。後の觀察者の爲に參考にいふ、親杜鵑の鳴く音色に似て而して幼い聲の急がしく起る方向に鋭く注目すれば、倘ほ色薄き幼げな翼を搖ぶりながら眞正の親杜鵑から哺せられつゝある實際を容易に認むることが出來るだらう。斯くて、干載前に所謂、

ねぐら離れし杜鵑、子で子にあらぬみづからを、此年月の御撫育。

といふ名句も、實質的には、昔とはかはつて來た。そこに又別の趣味がないでもない。

序に彼の食物に就いて附記す。私は七月中旬の或日、安江學士と共に杉の木の間を戒壇堂の前に出て來た時、向ひの杉の高梢で、彼杜鵑がジイロイ泣いてゐる生きたまゝの蟬を、其嘴に喰はして居るのを目擊して共に其の亂暴に驚いた。

由來、杜鵑は、害蟲を喰ふから保護鳥に編入せられたものたるは勿論だが、然らば何蟲を食ふかといへば、私には從來其實驗がなかつた。唯其角の句に、

あの聲てとかげ食ふか杜鵑

といふのを文字で見た丈けであつた。處が前述巣に於ける觀察及巣立後の觀察で、各種の Worms も Insects も平らげることがわかつた。友人内田致驗の實見では、信州あたりでは、柞蠶の天然飼育せるを夜襲するさうで、防衛の爲に昔は鳥黐で彼を生捕つたさうである。前記、宇之助の實見でも蚯蚓を食食するとのことである。

十、約言

以上私の實地の觀察を約言すると、

(イ)杜鵑が自づから巣くはぬといふ學說に對しては、未だ何等確實

なる新事實を加ふること能はざること。

(ロ)併し暫く、他鳥の巣に産卵するといふのが事實なりとするも、他鳥の巣に産み放して之を他鳥に托するのではなくて、他鳥の巣を全く奪取するらしく推測すべき手がかりを得しこと。

(ハ)自づから其卵を温めることを確かめしこと。

(ニ)雛の養育も勿論自づからすることを確かしめしこと。である。

私の斯く確認することを得た杜鵑の親子關係は、前既に述べし如く、一般杜鵑の親子關係の原則であるか例外であるか、何れにしても事實であるから、事實として存在する。

此事實の發見に就いて、折々私と山谷の潜行を共にした某中學生某君は、之を其學校の博物科受持の先生に告げた、ところが頭から『異端を唱ふるものだ』と叱り付けられた、といふ滑稽談もあつた。併し、事實はSollenでもなければ、又 Müssen でもなく、唯So Sein だから、人類の我執を許さぬ。

尚ほ今後も引續き精察を重ねたいと思つて居るが、同時に、學者には勿論、特志の士の忠實なる觀察に依つて、杜鵑に關する更に新事實の發見せられむことを願はしく思ひ、且つ其發見の見込みの多きことを信ずる。

終りに問題外のことだが、山の根本中堂附近では、八月末になると柏や櫻などの濶葉の蟲に卷かれたのが、まだ綠の濃きに拘らず彼方此方に散落ちて居る。筒を覗くと中に主人公は居ない。此葉卷の筒をば、山の人々は唯『ホトトギスの落し文』と呼んで居る。何となく雅びて聞ゆる。今熟考すると或は杜鵑の遁つた後の落し文でないかとも思はるゝ。

最後に、比叡山上には、延暦寺の檀信徒宿院がある。由を告ぐれば檀信徒ならずとも、宿泊を承諾せらるゝ。杜鵑の研究にとりては、甚だ便利である。敢て特志の研究の士の爲に附言する。

「獨逸女優の日記」は頁數超過の爲めに之を次號の誌上に掲載することゝせり

最近人物の動靜

覆面冠者

△東京市長阪谷芳郎男は東京市の行政財政整理を行ひ、人員に於て一割三分を淘汰し、金額に於て四萬五千圓を節約したが、人に語て曰く、政府の行政財政整理も各省の當局者が本氣になつて之を行へば、決して出來ないことはないのだ、之を行はないのは行へざるに非ずして之を行ふの誠意がないからで有る。

△奥田文相は曾て箱根に入浴中、詩を朗吟して一穗の寒燈と云ふ句に及ぶや、一スイと言はずして一ポとやつたので、爾來奥田一ポ居士と云ふ異名を取つた人だから、此の人が文部大臣となつては今後書生の詩吟は無茶になるだらうと餘計な心配をして居る者が有る。

△元田遞相は議會閉會の前後から、盛に饗應政略を開始し、政友會代議士は申す迄もなく、遞信省の高等官一同迄を官邸へ招待して、盛宴を張つた、新に大臣になるとコンなに嬉れしい者かと、招待されたる一代議士が笑ひながら語つた。

△犬養毅君は坂本金彌君の事を辯護して居る、坂本君は桂公に依て其の平生の主張を行はんことを企て、之に付ては懇々と犬養君にも相談したさうだが、彼れが之れに應じないので、止むを得ず袂を分かつたのだ、犬養君曰く、坂本も今日となりては百事が意の如くならざるを見て、隨分當惑もして居るだらうが、然かし一旦乘りかけた船だから、アノ男の氣象として往く所迄往かねば止めないで有らう、但しソウ云ふ意氣で新政黨へ往つたのだから、彼れに對して變節とか賣節とか云ふのは酷で有る。

△鐘淵紡績の和田豐治君は、毎年花の開いた頃に其の向島の邸宅に友人故舊を招待して、園遊會を開催する

が、本年は洋行から歸つたのと先般電車から落ちて負傷したる傷の全快祝ひとを兼ねて、少しく規模を大きくしたる園遊會を開いた。

△其の席上に於て森村市左衞門君が來賓總代として演說をなしたる後、主人和田君と同鄕の先輩なりとて元田遞相が推されて演壇に出て、自分よりも先輩なりとて山本農相を推せば、農相は更らに同鄕の先輩ありとて朝吹英二君を推し、朝吹君は舊藩主奥平伯を推し、伯は豐川良平君を推し、豐川君は和田君と共に慶應義塾出身なればとて、福澤捨次郎君を推して演說は賑やかて有つた。

△和田君の邸宅は曾て有名なる實業家中村道太君の所有て在て、其の時代に植ゑたる海棠の花が、今年も大層美しく咲いて居る。

△岡崎邦輔君が議會閉會後に政友倶樂部を脫退したのは豫定の行動て有る、彼れが曩に政友會を脫退して、尾崎行雄君と行動を共にする時に、平生彼れと親交ある政友會代議士は多く彼れを訪問して、其の決心如何を聞き、次第に依ては其の進退を共にすべしと言つた者だ。

△然るに彼れは此等の友人に對して、其の心情を打明け、實は今回の憲政擁護運動に付ては自分が重大の關係を有して居る、尾崎君は最初は動く意思がなかつたのを自分が極力之を勸めてやらせ、犬養君も容易に動かなかつた者を自分が勸めたので動いたのだから、兩君に對する義理として其の行動を共にしなくてはならぬが、自分の本意は決して政友會を破壞するに非ず、唯兩君に對する情誼上自分一身だけ兩君と行動を共にする積りだから、諸君は成るべく政友會へ踏み止まつて活動して貰らひたいと言つたのだ。

△ソレ故に第三十議會が修了したら、彼れは兩君に對する一應の義理は濟んだ者として、政友倶樂部を脫退するに至つたので、當初から非政友聯合の運動に參加する意思はなかつた者だ。

△竹越與三郎君は嘆息して曰く、自分は立憲政友會創設の當初からの會員て有て、多年此の黨の發展の爲め

に勞したから、最早ヤツロ／＼收穫を得べき順番が廻はつて來るべき今日、之を脫退するのは單に一身の利害から言へば非常の損失で有るが、大義名分の上から止むを得ず脫會を決定した者だ。

△黎元洪が暗殺されたと云ふ上海電報が傳はつて、新聞が號外を出した時、守屋此助君は之を否認して曰く、自分は昨年支那を漫遊して、種々の人に會したが、袁世凱は暗殺さるべき性格の男だ、孫逸仙も亦危やふい、獨り黎元洪に至ては其の德春風の如く、決して人から暗殺される樣な人物ではないから、此の電報は蓋し誤傳で有ると、其の翌日果して其の誤傳たることが分かつたので、守屋君大得意で、ドウだ、自分の鑑定は當つたらうと鼻を高くして居た。

△女子大學校長成瀨仁藏君は昨年歸一協會の特派員として、歐米諸國に赴き碩學鴻儒の門を叩いて、宗教統一論を試み、約七ケ月を費やして此程歸朝したが、到る所意外の贊成を得た、佛國のベルグソン、獨逸のオイケンやヘッケルなどにも面會したさうだが、何れも歸一協會に贊成したと云ふことだ。

△濱口吉右衞門君は每年東京府下の多額納稅者を招待して、饗應をして居るが、本年も先日此の招待會を開いた席上、意外にも桂公が來賓として出席して居たので、列席した多額納稅者の面々は何れも一驚を喫した、然かしながら酒間色々公の說を聽いて、多くは公に傾いたさうだ、或る人曰く公も中々新政黨の擴張には務めた者で有る。

△後藤新平男か河野廣中、島田三郎、鈴木萬次郎其他の面々と共に、福島縣の遊說に出かけると、政友會でも默して居られないので、大岡育造君を筆頭に、日下義雄、松田源治の諸君を特派する、同地方の國民黨員は犬養毅君の出馬を要求すると云ふ騷ぎで、福島縣は三派の一大混戰地となつた。

△後藤男は福島の遊說から歸て來て、同地方の民心が大に新政黨に傾いた情況を報告すると同時に、島田三郎君の雄辯に感服して、其の演說の力はエラい者だと褒めて居るさうだ。

△長野縣知事千葉貞幹君は永眠したが、彼れの夫人は曾て松平子爵の夫人で有つた人で、有名なる美人で有る、一時貴婦人社會に於て、美人として評判を得たが、松平家を離縁になつて後、千葉君に再嫁した、當時千葉君は大分縣知事で有つたが、婚姻の後間もなく腎臓炎に罹り、長野へ轉任して終に今回の不幸を見た、彼女の如きは所謂美人薄命と云ふ世諺に漏れない不幸の人で有らう。

△昨冬赤十字社々長が交迭して、松方正義侯は其の任を退き、副社長の花房義質子が之に代はつたが、四月中旬に開いた岡山縣人の招待會席上、花房子は其の赤十字社に關係した由來を演説して曰く、明治十年西南戰爭の時に日本にも赤十字社と云ふ者が起つたが、自分は其の創立の當初から之れに關係した一人で有る、永く副社長の任に居るので、最早や大概にして御免を蒙むる積りで居た所が、松方が先づ退隱せられたので、暫らく此の任に就く事となつた、年も取て居るから永くは務められまいと思ふが、兎に角責任だけは務める積りで有る。

△政友倶樂部の代議士は岡崎邦輔、小坂順造、岩岡伊代治、木下成太郎、細梅三郎の面々が、續々脱退したので、最早や一團體として立つことが出來なくなつた、衆議院では二十五名以下の團體は、之を團體として認めないから、政友倶樂部も次の議會迄には何とか方向を定めなくてはならぬ事となつた。

△或る人の觀測に依ると殘つた所の二十名も今年の年末迄には、政友會に復歸する者や、新政黨へ走る者を生じ、尾崎行雄君は國民黨へ往くに非ずんば、花井卓藏君等と同一の中立團體へ放浪するの外なき運命で有らう、乃ち昨年來の政戰に於て、最も馬鹿な目に逢ふたのは尾崎君で有ると云ふのだ。

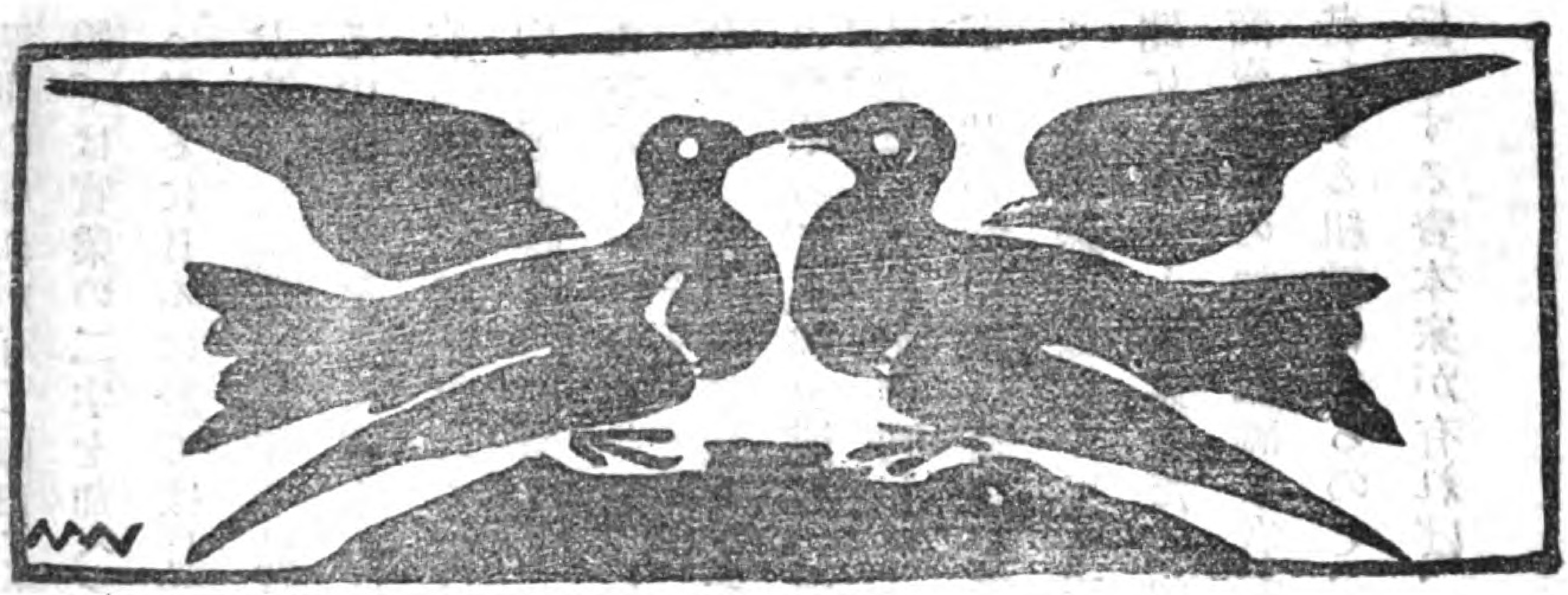
△支那に關係ある團體の多い中に、日華協會と名乘る者が二個有つた、一は秋元興朝子を副會長に戴き、松本君平君が幹事長でやつて居る者で、他の一は大井憲太郎君が創立し、松平正直、前田正名其他の名士が贊成して居る會だ、然るに同じ名の團體が二個有るのは、

混同の虞れが有て面白てないと云ふので、大井君の[illegible]議ては實業の二字を加へて、日華實業協會と改めた。

△然るに日本に於ては日華と稱しても良いが、支那人に向て日華と稱する時は、日本を上に置て、堂々たる中華民國を下に置くのは不都合だと言はれる虞れが有るので、松本君の方では、同じ團體の名を支那人に向て呼ぶ時は、華瀛協會と稱して居る、そこで大井君の方でも一考して、支那人に對する時には、日華を顚倒して、華日實業協會とすることにしたさうだ。

△藝者論て名聲を博し、保險業て金を蓄えたる矢野恒太君は、新聞を創刊したいと云ふ希望を有して居るが、其の新聞には論說記者を置かず、全紙を雜報として、其の雜報は遲くても正確なりとの評を得る樣な新聞にしたいと云ふのだ、勿論氣品の高い新聞にして、商賣新聞の如き低調な者てなく賣れても賣れなくても發行する組織にするので、誰れか此の目的を贊して後援をする資本家が有れば、直ぐに始めるさうだ。

黑頭巾氏の「明治政局の十幕」の續稿は次號より掲載せらるべし



女八人

松崎天民

「女八人」は、「板新道の一隅」、「最後の牛肉鍋」、「稲舟の四疊半」、「名代部屋の客」、「紫の風呂敷包」、「十萬圓の奥様」、「廊下の曲り角」、「荒物屋の二階」等、總て八篇より成る。中年の藝妓あり、流轉の姿あり、凄艷い女將あり、豐艷の娼妓あり、老孃の女敎師あり、悲慘の狂婦人あり、可憐の看護婦あり、妙齡の新女優あり。何れも、明治三十六年より四十五年まで、大阪、京都、東京に於て、著者が新聞記者生活の十年間に接觸したる婦人にして、其の個々の上に潛める運命を讀まんとするのが、「女八人」の使命なり。小說に非ず、雜報に非ず、これを空想と事實の中間を辿つて觀たる、「人生探訪の報告書」と見るも宜く、また著者が「自叙傳」の一節と云ふも妨げず。要するに、くだらないものにして、又つまらないものなれども、著者はこれを公にするに就いて、多少の自信無きに非ず。――四、一五――

四、名代部屋の客

一、此の一篇は、吉原遊廓京二で相應に大きな××樓に、一二年お職を張つて居る娼妓花里に關する日記やら書簡やらを、取止めなく集めたものである。

二、書いた男は吉村健吉と云つて、齡三十三四歲、××會社の庶務係を勤めて居るが、多少文筆の心得があると見え、書いてある事柄の意味だけは相應に合點される。

三、花里は靜岡の生れて、齡二十四五歲、最う一年で年期が明けると、淺草雷

門界限で飲食店でも開いて、「男に對する復讐」を、一生の仕事にすると云ふ女である。

四、天民は吉村健吉氏を知り、花里にも二三回逢つた事がある。此の一篇は、吉村氏の提供した日記やら手紙やらに、多少の修正を加へた、と云ふに過ぎないものである。

五、手紙は花里に宛たもの、友人に送つたもので、日記は飛々の月日になつて居る。こゝには便宜上これを三大別して、「花里に關する日記」を「上」とし、「友人に送つた手紙」を「中」とし、「花里に送つた手紙」を「下」として、多少の布置鹽梅をした。

六、書いてある事柄に就ては、天民の同感する點もあるし、全然反對の箇所もあるが、總て生地の儘に列べる事にした。勿論、不穩と認むべき項や、如何はしいと思はるゝ條は、天民の獨斷で以て抹殺もし改訂もした。この點に就いて、吉村健吉氏は不服を云ふべき權利がある まいと思ふ。

上、「花里に關する日記」

……月……日、晴、晴、日本晴。

七時起床、出社、三圓昇給の辭令あり。月給の昇つた奴と、昇らぬ奴とは、其の顔色を見ただけでも判る。木下、遠藤、林等の無口に反して、佐田、堀内、水野等の饒舌なる、さては三圓組五圓組かと可笑し、大に可笑し。

課長上機嫌、午前に誰か一度、午後に誰か一度と、一日に必ず二回は低氣壓が襲來する例なるに、今日はデスク一帶の警戒を要せず。久し振りに阿彌陀を遣つて、一圓で風月の洋菓子を買ふ。高談放語、課長の一聲一笑に依つて、我等は何うにでもなる動物かと思へば、果敢しとも果敢し。

四時退社、木下、遠藤を誘つて、松喜に牛鍋を食ふ。月給が上らうが上るまいが、我等の生活には大した影響なし。三圓五圓何うなつた所で、それが今日の東京生活に、何の足し前になるものか。と、それとなく兩

君を慰め顔に云ふ、自分自身の心が淺間しとも淺間し。大醉して十時に及び、兩君と左樣なら。

下宿に歸る氣持がせず。齡三十四歲にして娶らず嫁かず、未だ家を成さずして、夜の東京を彷徨す。余の如きは一種の「都會巡禮者」か。酒を飲めば、女の姿のみ强く眼に映じ、其の聲、其の動作に刺戟さるること多し。松喜の女中が步く度每に、紅の蹴出しをヒラ付かせ、白き脛もあらはなりし、忘るゝ能はず。兩君に別れてより、切に女を戀し女を欲りす。尾張町より淺草行の電車に乘れば、俄に世界が陽氣になつたやう。今日の事は今日にて足れり、明日は何うにかならうと思ひ、何うにかなる事を確信して疑はず。

雷門乘換、千住行の電車には、又別樣の氣分あり。吉原へ繰込む連中か、酒の香車内に漲り渡つて、都々逸、浪花節、女の話、金の話、譜面も糞もあつた譯て爲し、三味線持つた二人連れの路傍の音樂者、「俺等も昔は遊んだものだよ」と云つた氣の顏色して、車内を見渡して笑つた樣なれど、其の顏に淋しさ漾ひて、影も何うやら薄い樣に見えたり。

懷中には九圓あり、九圓の金は豪勢ならねど、一夜の遊興には事足るべし。下宿への借は無し、洋服屋の月賦も支拂たれば、殘らず費つても當分は困らざるべし。大門を入ればそんな事も何所へやら、さア浮いた〳〵の景氣、此の氣持は一ヶ月の給料を投ずるも購ひ難がらん。待合の酒にのみ醉つて、三流四流のヘボ藝妓を相手に、女を彼是と論じて居る輩に、此の吉原の景氣と云ふものを見せて遣りたし。

とは云ふものゝ、吉原も大に寂れたり。有りし昔の景氣は知られて、近き大火の前と後と、全體に格段の退步なり。それでも電燈に瓦斯の光、張り店の夜は、別世界に見る色彩あり、空氣あり、氣分あり、情緒あり。醉うて遊ぶに適く、唄ふに適い所か。

京二の××樓に登る。馴染があるでなく、知合が居るでも無いに、フラ〳〵と登樓す。引付けに入つた時、おでん屋の惡酒の醉一時に發して、昏倒せんとしたり。其の後の事を知らず、其の後の事を知らず。

……月……日、雨、休社日、吉原の宿。

終夜轉輾として眠られず。何んな女が敵方て、何んな部屋に寢たのか、朝六時、眼覺むるまて知らず。實は、吉原に來て居ると云ふ事さへ、案外な他人事の樣にて、昨夜の狀も二三年の遠い月日を隔てたやう。雨の音、曉の枕に響いて、何となくものを思はしむ。

女は花里と云ひ、こゝのお職女郎なり。齡二十四五、下新を二年の間勤めて、娼妓になつたのが五年前の二月、最う一年勤めさへすれば、年期が明けて、自由の身になり得れど、借金の上に借金の上塗、何時、空飛ぶ鳥になれるか、心細い身の上を嘆く類なるべし。

「僕は、君を見立て登つたんだらうか」

「いーえ、大變に醉つていらして、何が何やら始末に終へなかつたわ。そんな時の介抱役は、何時でも妾なんてす、これてもね」

「そんなに醉つて居たかい、馬鹿だなア」

「馬鹿ぢやないけれど、夜ッぴて苦しがつててよ。苦しい、死ぬる〳〵ッて……」

「馬鹿、そんな事を云ふかい。酒の一升や二升飲んだッて そんな弱いこと……」

「そんなに召上るんてすか、え、やらずの雨が降るわいな……。部屋の客、歸して了うから、今日は御ゆつくりね。流しても宜いんてせう、いろ〳〵お話しすせうよ」

「何うても宜い、獨身者だからなア」

「さう、嬉しいこと。妾も奧樣の第三候補者位には、なれないことないわねえ」

小柄なれども壯健な皮膚の色、五年の長き歲月を苦海に沈んだ女とは見えず。眼にも口許にも生氣が溢れて、過ぎ來し方の苦勞は忘れて、行末の幸福のみ夢みて居る樣なはしやぎやう。入毛の多い花魁髷に、友禪模樣の桂を着た姿よりは、縞の袷衣に飛白の羽織、廂髮に白い襟卷の似合い相な女に見ゆ。

一所に洗水を使つて、女の本部屋に入つて見ると、八疊に三疊の小間、床には紅葉に瀧の濃厚な軸物に、

洒の盆栽を置いて、其の傍には碁盤と闘球盤。新小說や婦人世界の中に、白浪五人男と云ふ講談本と、食道樂が一冊、雜然として置いてあり。座敷の一隅には赤い色の夜具を積て、衣桁には紅裏燃へる桂を掛けて、黑に白縞の博多の伊達卷、銘仙の男物らしい褞衣などが、未だ今朝の儘なる姿。部屋は南が開いて、明るくて心地好し。

三疊の方には長火鉢、茶棚、鐵瓶がグラ〱湧いて、景氣が好し。下宿の二階で、一片の炭を惜しむと違つて、下新は差當つての女中役。宛然、新世帶を持つた最初の朝と云ふ景色が、先づ何よりも氣に入つたり。

「おふ、波の花を入れておくれ」

「辛いのは藥ですつてね、毒除けだわ」

「お前のが傳染しない樣にね」

「憚り樣、そんなのとは違ひます。五年の間、一度も入院した事のない花里さんです。ねえ、お靑どん、鳥鍋でもお云ひよ」

二人て差向の鳥鍋、飲んだり食つたりして、十一時半に××樓を出る。雨尙ほ歇まず、雷門まで人力車、心身の疲勞一方ならず。

下宿に歸れば、國の父より來信あり……。

：日、曇、出社、無事、無爲。

花里より手紙來る。別に何とも思つて居ないけれど、逢ひたい樣な氣がします。お差支へがあつても宜い、今夜來てくれませんか。來るなら電話でさう云つてくれゝば、部屋を空けて待つて居ます。一度限りではヒドい、裏ぐらは返すものですわ。……と。

お前なんかに誰が心を動かすものか、何事も酒の上てしたことと云つたこと。この廣い東京に住んで居ながら、遠い吉原三界までノコ〱出掛けずとも、關所は幾ケ所にもある。氣が向いたら、來年の櫻花時にでも行かうと、思つて居ることを其のまゝ書いて、送らうと思つたけれども、止めにしたり。

夜、松本樓の同鄉人會に列席、所謂先輩連の政治談、處世論、成功談を聞かされて、靑年黨大にウンザリす。

配膳となつて、藝妓が出て、酒が廻ると、最う青年の天下なり。社長も課長も、先生も伯父さんも何の其の、放談縱横、高歌亂舞、飲まぬ者まで浮かれ騒いて、××縣の野性を遺憾なく發揮す。

お酌の藝妓中に、花里に似た芳子と云ふがあり。素人臭くて怜悧らしく、言葉つきのハキ〳〵したる、花里の妹かと怪しまる。

「おい、君に似てる女が居るよ、或る所に……。姿から顏から聲から、そつくりなんだよ」

「さう、他人の空似てすか。御馳走樣の口ぢやないてと、いゝ、素のろは罪ですよ」

この女を見てより、俄に花里に逢ひたくて堪らず。松本樓を出て、自動電話をかく。

下新のお淸どん出たり。部屋は最う駄目てすが、花魁が待つてゐますから、是非入らつしやいな。お金が無くば、妾が立引いても宜いわと云つて、ホヽヽと頓興に笑ふ。電話ては聲のみ、思ふに赤い舌をペロリと出したかも知れず。二人曳の車て威勢好く繰込む。

車代を拂つて、餘す所僅に五圓、これて裏のお客樣とは心細し。大門の中て下車、一巡廓内を歩き廻つて、おてん屋て飲て食つて、十二時××樓に登る。初會から今日が十餘日目、引付から直ぐ廣い十二疊ほどの座敷へ通されて、野菜物て熱い燗を飲む。

下新のお淸どん、頻に馴染を付けよと云へど、廓の戀は金が生命なり、五圓紙幣一枚の身代限りをして、今日はこれて勘辨してくれと云ふ。それても相應に酔へれるだけは飲めて、二三人から「只今は有り難う」とか何とか云はれて、いよ〳〵お引けとなる。

花里、今日はハイカラに結つて、少しも花魁らしからず。誰やらの細君に似たり。

「貴郎が來ると思つたから、わざ〳〵結つたんてすよ。似合ふてせう、ちよいと」

「さうして細君振りのお稽古だね。いゝ、しやぐまの方が、花魁らしくて宜いぢやないか」

「花魁らしいと云ふ、それが妾大嫌なんてす。すべた女郎の癖に生意氣云ふ樣てすが、妾、おいらんと云

はれるのが、最う厭て厭て……」

吉原遊廓にも、現代風吹き荒む。花魁がハイカラに結ふ様になつては、正しく吉原趣味の墮落なり。されど我が花里には、いゝじやぐまが似合はず、廂髪の似合ふを如何せん。

……日、風雨、大阪より歸京。

久しく花里に逢はず、獨り下宿樓上に寢そべりながら、花里の上を思ふ。――

花里は余が知れる女の中にても、著しく個性のある女なり。苦界五年の憂き苦勞にも、泥水の臭氣を厭つて、境遇に支配されず。××樓のお職てありながら、少しも花魁かぶれのして居ぬ點は、斯る類の女の中にも珍しからん。余は其の花魁らしからざるを珍重す。

花里は靜岡縣の生れなれば、江戸前の女に見る様な、意氣とか張とか云ふものは、或は無いかも知れず。然し初會のお客に對しても、馴染のお客に對しても、自分と云ふものを、心も身も投げ出して、少しも屈托の無い様子をして居るは、晴々として氣持が好し。

五年も花魁を勤めて居れば、大抵の女なら一種の氣質に養はれて、何所か斯う男を見る態度に、共通した鑄型が出來るものなり。されど花里は生れた儘の女、親の手に人と爲つた儘の女の様に見えて、其の態度の上には、少しも過ぎ來し方の苦勞が讀まれず。

十人並以上の美人と云ふにあらねど、女將(かみさん)よりは細君に出來た方の女なり。お客を面白可笑しく遊ばせるよりは、しんみりとした心持て、地味に遊ばせる女なり。藝妓幇間をあげて、浮いた〳〵の大騷ぎする客よりは、細く長く來るお客の方を喜ぶ女なり。

余は既に五六回の馴染を重ねたり。花里よりも美人にして、花里よりも面白く、花里よりも反撥性のある女は、何所に行つてもあるべし。されど余は、足一度大門に入る毎に、必ず花里の許に行くを例とす。花里は無技巧にして、男の心を惹付ける類の女なり。

花里の身の上話は、余の心を動かしたり。靜岡に生れて、高等小學校を卒業し、一家赤貧の犧牲になりて、

吉原に賣られたと云ふに過ぎねど、花里の前生涯には、若き娘の日記を彩るべき戀の一節あり。花里は此の戀の思ひ出に依りて、苦海五年の憂を忘れたるか。

花里の色香に迷へるに非ず、花里の一顰一笑に囚はれたるに非ず。されど何となく、花里の上を思ふ。花里を思ふ毎に、忘れたりし昔日の戀の傷痍、痛々しく余が心を悩ます。花里に戀の一幕ありたる如く、余にも少年の戀ありき。遂げざりし少年の戀は、淡き夢の如けれども、其の夢や、永久に忘れ難し。

同僚二三來訪、ビールを拔いて放談す。

日暮れて、風雨歇まず。下宿の六疊に孤影悄然、淋しさ四隅より襲來して、女戀しさの情に堪えず。ふら〱として外出す。

雨の夜の巷の景色は、しめやかなる中に陽氣なり。××樓に電話すれば、例のお清どんのはしやぎたる聲にて、余が心をそゝる。購ふべき品々に充たる金若干あり、何うにかなるだらうと思ひ、淺草行の電車に乘る。久し振に花里と語るの愉快に、心何となく浮き立つ。戀する男の、心理狀態なるべきか。

風雨の夜の吉原は、何となく落着いて趣致深し。相思の戀仲が、相抱いて不如意を嘆くには、斯る夜こそ相應しけれ。無理心中でもありさうな、風の響、雨の音。ぞめきの浮れ男も、雨の夜は絶え〱なり。

……月……日、出社、執務、平凡、無事。

××樓の總見、本郷座にあり、切符を五六枚お買なさいよ、と例のお清どんから、命令的の電話あり。人を馬鹿にして居やがる。

吉原も宜いけれども、徹宵四邊がさわ付いて、十分の熟睡が出來ぬのは、考へものなり。吉原に行つた翌日の疲勞は、二三夜の徹夜執務よりも甚だし。待合の静にして落着いたるには、到底及ぶべくも非ず。吉原は衛生的にも、非現代式の最も甚だしき所なり。

吉原の空氣は、一帶に何となく不安なり。女に狂ふ男にとつては、家を外なる放埓の心に、そんな事が判る筈なけれど、少しはものを考へながら、酒に煽られ

て遊ぶ余の如きは、獨身者てありながら、吉原の三層樓上に寢て居ると、不安の氣持に襲はれる事あり。

吉原に遊ぶ數多い男の中には、女郎の本部屋ならではは遊んだ樣な氣持がせぬと云ふ者あり。又、わざと本部屋を厭つて、何時も名代に寢る方が、落着いて宜いと云ふ男あり。本部屋と名代と何の選む所なきも、本部屋と名代とには、全然別樣の氣持なきに非ず。

本部屋は女郎の本城にして、謂ば家庭的の氣持が溢れて居る所。名代部屋は待合式にして、普通の家ならば客間とでも見るべき所。本部屋には簞笥、茶棚、長火鉢があつて、世帶の味があれど、名代部屋は置床の四疊半か六疊、軸物に活花があるばかり。

これから嫁ても娶つて、新世帶ても持たうと云ふ男は、本部屋の世帶染みたるを好む由なれど、獨身者の余は、本部屋の繁雜なるを取つて、名代部屋の簡素なるを愛す。花里さんのお客といふよりも、「名代部屋の客」と云へば、樓内にても離れ知らぬ者なし。

余とても、部屋が空いて居るに、飲食に不便なる名代を選んて、わざと入るほどの醉興ならねど、余の行く時、一度として本部屋の空いて居た事なし。馴染の數も最う十餘回、花魁の部屋に長火鉢の差向いは、決して悪い圖ならねど、何時も〳〵駄目の夜のみ。

名代部屋の味は、謂知れぬ所に面白味あり。殊に花魁らしからぬ花里と語るには、名代部屋の簡素なるを佳しとす。自分の部屋て寢る方が、馴れて居て寢心地が好いさうなれど、こゝへ來ると、何處かの旅宿て寢て居る樣てすとて、花里も笑つて語つた事あり。

花里を知ること深うして、その非凡なる一種の性格を、懐しむ樣になりたり。花里も亦余の長所短所を知り盡したりとて、何事も打明けて話す樣になりたり。戀仲に非ず、友人の親し味を以て、互に氣隨氣儘を云つては、笑つたり怒つたり泣いたりすること稀ならず。

世間體と云ふものが許すならば、花里を妻にせんと思ふ。國の父、大阪の叔父、東京の兄、會社の課長、友人の某々等、果して同意すべきや否、頗る心許なし。名譽と地位と、生活の保證を失つてまても花里を我が

妻にとは、……余に然る勇氣無きを恥づ。
花里より來信、病氣にて三四日休んで居るとのこと。餘り働き過ぎるからだ、身體を大切にしなくては不可ん、と論はがきにて。
あゝ、今日も亦、淋しく暮れたり。

中、「友人に送つた手紙」

K君、餘り吉原通ひが過ぎるとの御忠告、有難く拜讀、一々御尤の儀に奉存候。
不品行だと云ふ事が、會社内の輿論になつて居る由、社長や課長の許にも、種々の事を密告する馬鹿者がある由、四面何とやらの聲、大に謹愼いたすべく、悔悟いたすべく、改悛いたすべく候。小生にも多少の意見あれど、此の際は何事も沈默して、風評の犧牲になる覺悟に候。唯、君の好意を謝するのみ。
然し、小生の吉原通ひは事實に候。××樓のお職女郎に傾倒して居るだけは、何人の前にも、否定し能はざる事實に候。表面は品行方正の紳士然と構へて居るから、人知れず待合入りする男の多い世の中に、會社内の不品行者が、小生一人に止めを刺されたとは、近來の大滑稽、然し何事も申すまじく候。辯解がましい事は、一言も云はざるを以て、頗る怜悧なる態度と存じ候。これが此の際に於ける小生の至當の態度かと、僅に慰むる次第に候。
女房も無し子供も無し、下宿住居の獨身者と云ふ事が、女郎買の最大理由にならぬ如く、三十四歲にもなつて、女郎買をすると云ふ事が、攻擊される理由にならぬ事も、判り切つた道理に候。然し小生は、××樓の花里を戀いると云ふよりも、花里を中心として見たる吉原その物の空氣や色彩に就て、特種の興味を抱いて居るのかも知れず。こんな事を申し上げては、何だか辯解でもする樣にて、心苦しい限りなれども、全く小生は吉原の夜の氣分に懷しんで、其所を徘徊（うろつ）き廻る一種の漂客に過ぎず。其の邊の事に就いては、君にも經驗のあることなれば、多く申上げず候。
K君、吉原の特有趣味は、歲と共に破壞されつゝあ

り。一昨年の春の大火が無くとも、吉原は花魁の厢髪から、其の衰亡の機運を早めつゝあり。遠い昔の事は知らねども、吉原は世外の別天地、其所で飲み其所で唄ふ程の男には、他と異つた別様の感興を與へたものに候。三層樓に不夜城の壯觀、色彩濃き張店のさんざめき、新内の流節、おでん屋の匂ひ、鼻唄、夜警の金棒など、吉原には吉原特有の色と響とがあつたものに候。それが時世の變遷に連れて、寫眞店となり、鰕茶式部の張店となり、意氣と張とで鳴つた仲の町藝妓まで、引手茶屋でお客を取る世の中となり、謂ふ所の吉原趣味も、段々空乏に相成候。然も、長い歳月の因襲、習慣、歴史は、廓内の何所やらに潜んで、總てが現代かぶれした中にも、さすがに捨難い一種の地方的色彩を見る。之れが小生の吉原を懐しむ一理由に候。

二重にも三重にも、利益を貪らんとする複雜なる營業法、場所柄に反比例したる傳習的道德の存在、優勝劣敗、弱肉强食の狀など、吉原遊廓は考ふべく研究すべき大材料に候。花里の色香に迷つてのみ、吉原に出頭沒頭すると認められては、不本意千萬の限り也。其の内お閑もあらば、一夜御來訪を乞ふ。小生の吉原觀なるものを開陳して、人道問題、社會政策に及ぶべく候。匆々、右御返事のみ。

S兄、先夜は失禮いたし候。あれから一人で以て、××樓へ行つたとは、其の豪勢、羨望に價す。四十になつても、兄や眞に衰へず。

花里にも逢はれた事と思ふ。四五年も女郎を勤めて居る女は、身體が全體に蒼白くなつて、筋肉の張もゆるんでしまひ、髮の毛は艶を失つて脫け出す、眼の周圍は薄黒くなる。人を見る態度と云ふものが、何事にも疑ひ深くなつて、冴え／＼とした調子を失ふものだが、我が花里に限つて夫れが無い。何時見ても調子が好くて、少しも屈托氣の無い所は、小生が傾倒して居るのも無理はない、と思はれ候や。小生は兄の花里觀を、樂んで聞かんとする者に候。

然し、さすがに籠の鳥の女に候。風雨の一日、あの

女の部屋にて、箪笥の抽斗から手文庫や寫眞箱を取出して、彼れ是れと眺めて居る内、ふと一枚の白紙に大切らしく包んだ寫眞らしき物を發見いたし候。其の時、花里は顏色を變へて、

「そればかしは、見て不可い……」

と、奪ふ樣に膝の下に隱し候。斯うなると尙見たいもので、小生も顏色を變へて、

「昔の戀人の寫眞だらう、片思ひの……」

と言つて遣ると、女は顏を紅くして、

「戀人ぢやないけれど、片思の人……」

と自暴氣味に言つて、其の紙包みを投げ出し候。投げ出されて見ると、最う見る氣も半分失せて、寢そべりながら包を開くと、中から一枚の寫眞と一枚の繪はがきが現れたり。其の寫眞は、七八年前に撮つたらしい伊井容峰の素顏の半身で、繪はがきは容峰の扮した片岡武男と、喜多村緑郎の扮した浪子とが、逗子の不動堂で別れを惜しむ所に候。

「こんなもの、そんなに大切なのかい」

「えゝ、伊井さんは妾の戀人なんです。十七八の素人の時から、妾、伊井さんに岡惚れしてたんです。此の寫眞の伊井さんに……」

S兄、新造や下新なんかは、總見とか何とか云つては、好きな芝居を見る機會も、月に二三回は有る由なれども、籠の鳥の女郎が身ては、芝居見物など思も寄らず。夜毎に變る仇枕、お客の口から種々の噂を聞いて、それて僅に慰めるのみ。考へて見れば可愛相に候。不憫なものに候。

大概の女郎の部屋には、美人の繪はがきを額にして、明け暮れ眺めて居るのを見受け候。吉原と云ふ小さな一區廓に押込められて、世の雨風と遠く隔つて居れば、女郎は何事も受身にして、それだけ弱味が多く候。お茶を引た藝妓の心細さよりも、お客の無い夜の女郎の味氣なさや如何ならんと思ひ遣られ候。

花里の樣な、勝氣な陽氣な女にも、人知れず包み隱す「寫眞」の哀話あり。彼等は身體の自由を失つて居るのみてなく、心の自由をも囚はれたる女に候。男に

荒んで、男を何とも思つて居ない女郎にも、「戀の饑餓」は淺からず。女郎は數多い女の中で、最も不幸にして、最も幸福なる者と存じ候。

取止の無い事のみ、近日拜眉を期し候。

▲君、花里から「みゝずのたはごと」を送つて下さい、と云つて來た。「德富健次郎」と云ふ著者の名を聞いて、「不如歸」を思ひ出したんだらう。「不如歸」の樣に、痛ましい涙の戀を描いてあると思つたのであらう。新橋堂で買つて、一冊早速送つて遣つた。

君は變な女だと云つたが、全く花里は女郎にしては、變な女の最も變な物である。小學校を卒業した丈けだと云ふが、手紙も相應に書くし、新小說、婦人世界、講談物も讀むし、新しい小說なども讀む。紅葉とか鏡花とか、靑々園とか默禪とかは、彼等の話題になつた所で、別に不思議とも何とも思はないが、花里は能く新しい作家の名を云ふ。谷崎潤一郎とか、長田幹彥とか、岩野泡鳴とか、正宗白鳥とか、森田草平とかは、花里が好んで語る名前である。泡鳴をアワナリと云ひ、白鳥をシラトリと云つたから、笑つて遣つたら、先生極りの惡い顏をして、悄氣た事もあつた。

僕が小說好きだから、花里とは話が能く合ふ。

「近頃の小說は、ちつとも面白く無いのね。讀で居てもハラ〳〵して、何だか苦しいわ」

など〻云つて居た。僕は紅葉や美妙の書いた小說は、皆ウソなんださうな。近頃の小說は、人間の心の底のホントの事を書くんだ、と說明して遣つたら、

「それが、自然主義と云ふんですか」

と云つて笑つて事もある。花里は君が變な女だと云つた通り、如何にも女郎にしては變つて居る。話をして居ても、少しも花魁らしくなく、娼婦と云ふよりは、母婦に生れた女らしく見える。何時も活々として、何も彼も悟つたらしい樣子をして居るが、時にはヒドく考へ込んで、吐息をつくことがある。お職でも張る樣な女だと、女郎を立派な一つの職業の如くに心得て、見えを張つたり威張り散らしたり、立膝なんかして毒

付くものだが、花里にはそれが無い。娼妓と云ふ一階級が、婦人界に於ても、世間に於ても、如何なる地位にあるか位の事は能く心得て、折々我と我が境涯を果敢しとも思ひ、淺間しとも思つて、苦しみ悶へる事があるらしく見える。

Ａ君、花里にとつては、金を湯水の樣に費やす大盡さんよりは、自分を知つて呉れるお客の方が、何の位頼りになるか知れない。自分と云ふものを、女郎扱ひにする男よりは、女郎としてゝない、生れた儘の女——山村さと——として取扱つてくれる男の方が、何の位頼母しいか知れないのである。

花里には三人の馴染がある。深川木場の材木屋の大番頭と、本郷西片町の先生と、京橋彌左衛門町の吉村さんと。金のある大番頭は、齢四十五六にもならう、髭の生えた先生は、三十八九のスラリとした美男子、色の白い吉村さんは三十四歳。この三人が三ッ巴になつて、一人の花里を取卷いて居る。

「みゝずのたはごと」を讀んだ花里の所感如何。その内、一所に行かうぢやないか。失敬。

Ｙ兄、久しく御不沙汰に打過ぎ居申候。會社の用事にて、長らく九州地方を旅行いたし居り、一昨夕歸京、久し振りに東京の空氣に觸れて、何とも云へぬ心嬉しさを覺え候。

花里を妻に娶る件に就き、いろ〳〵御厚配御禮の言葉も無御座候。昨夕、久し振て××樓に參り、本人が最後の覺悟を聞き候處、一年の後まで、生きて居るやら死んで居るやら、一寸先は闇の世だなど丶申して、頓と眞面目な話が出來ず。小生も馬鹿らしくなつて、暫くこれを歲月に委ねる事に斷念いたし申候。

如何に風變りの女と申しても、五年の長きを男の肌に荒んだ女なれば、妻として如何なるべきか、大に熟考を要する儀と存じ候。本人は年期が明けさへすれば、一文も御厄介は掛けずして、引取つて貰へる樣にしたいと申し居り候も、そんな譯にも參り申す間じく、殊に世間の思惑、同僚の手前、直ちに花里を妻にとは、

考へものとも存ぜられ候。

一年の後に至りて、二人の情思に何等の變化なくば、其の時の話にいたし候も、決して遲きに非ず。昨夕の所見に據れば、花里近來大に酒を嗜み、其の言動、何となく捨ばちの調子を帶び來り候。何うせ一度は斯る女の經ねばならぬ、一つの關所なるべきも、花里にしては餘りに遲い變化に候。何時もは小生の酒を、控へ目〳〵にと調子を取つたものが、近頃は自分から進んで、日本酒、ビールの滿を引いて、醉うて新造衆に當り散らす樣、我が親愛なる花里も、段々花魁かぶれがして來たのを悲しむ者に候。

こんな類の女といふものは、相手の男と面と向つては、何でもない顔をしたり、素振をしたりしても、男の友人など第三者に向ふと、如何にも相手の男を思つて居るとか、懸想して居るとか云ふ風に見せかけるのが、殆ど其の常套手段に候。花里と小生とは、戀仲としては露骨に過ぎるほど、何も彼も知り盡した仲なれば、今更第三者の兄等に向つて、小生の事を思はせ振りに彼是云ふ筈もなく、又云つた所で一々取上げる兄等でも無しと存じ候。されば花里と小生との件は、少年少女の痴夢でも取扱ふ樣に、こゝ暫く不問に附せられたく、二人の事は二人にて處理いたすべく候。それが責任でもあり、義務でもあり、又、兄等に對する二人の申譯かと存じ居り申候。

小生も齡が齡なり、國許には一人の老父あり、早く呼び迎へて家を成すの要あり。妻帶は目下の急務なれども、今暫くの間花里の傾向を見て居る積に候。あんな類の女は、如何に母姉らしく出來て居ても、家庭の人として適當なるや否や、考へるまでも無し。酒興の上にて相知るに至りし一女性を、妻にまでと思ふに至りし小生の痴想、御憫笑被下度候。

「名代部屋の客」だと申して、樓内の者等が笑話の材料とせし小生が、本部屋の客以上に傾倒せしを見ては、彼等も事の意外なる發展に、驚いた事と存じ候。小生も何時の間にか、期せずして深味へ入つたものに候。

御近狀如何、草々不一。

ｏ君、近頃新しい女の一人を囚へたと云ふぢやないか。お目出度う、大に若やいて發展し給へ。

私も彼の女と妙なハメになつて、變な心理狀態の幾日かを送つて居る。二十歲代の四五六と云つた頃は、戀をするのも一つの事業て、其所に感興が伴つて居たけれど、三十も最う四五と云ふ中年になつては、戀も大きな重荷になつて、苦しい汗が流れるばかりてある。

それても樂しい休息場はある。金が物云ふ廓ては、お互に敗殘者の部に屬する方だが、彼の女の樣な變り者を相手にして居さへすれば、そんな氣骨も折れなくて宜い。女郎と云ふものは不憫なもので、數多い男の中から、好き不好きを選る譯に行かず、買はれた男の中から僅に好い人を見出して、それに全力を注がうとする。其の點になると藝妓なんかは自由なもので、不見轉專門の他は、厭な男に身を任せる樣な事をしなくても濟む。藝妓の戀がビールなら、娼妓のは灘の生一本、華やかては無いが、しんみりとした味が深い。

ほんとの情は、藝妓よりも何よりも、女郎の方が深い。それもさうだらう。女を何しやうとすれば、廣い東京に何一つとして事缺かぬ中に、わざ〳〵吉原三界まで出掛ける必要は無い。藝妓連が墮落した上に、私娼の群は市内の何所にも出沒して、吉原よりも安價に、簡易に、平明に、男の慾望を充たしてくれる。そんな世の中に、時間と金錢とを惜まずに、吉原遊廓まで出掛けるのだもの、少し道理の判つた女郎になると、吉原に遊ぶ男を特志な方だと云つて、歡迎するのは當然てある。

「新橋、赤坂、下谷、濱町、蠣殼町、十二階下と、お關所が澤山あるのに、能く入らしたわねえ」

などゝ云ふ言葉を、能く新造衆から聞く。こんな事の判つて居ない女郎でも、一つ家に五年も六年も押込められて、浮世の波風を知らずに過した輩は、自然の傾向として男を懷しむ情が深い。好厭は別として、同じ男が初會から裏、裏から馴染となつて、逢ふ瀨の度を重ねる間には、眞の愛情も萌して來て、遂に離れ難

ない仲になるのが多い。彼の女と私とが、さうした仲だとは云はないが、さうした傾向になつて居る事だけは事實である。

O君、戀も大詰の幕を見る樣になつては駄目だ。何時も華やかな、海のものとも山のものとも判らない、三四幕目の頃が一番宜い。夫婦にならうとか、金の工面が何うとか、世間體が何うとか云ふ樣になつては、戀も夢現的から實世間的になり、空想的から打算的になつて、興會の過半を失つて了ふ。花里と私が、恰度さうした場合に遭遇して居る。斯うなると、戀も苦しい大きな重荷である。

君は新しい女を得た。私は古い女を得た。君のはこれからだけれど、私のは段々終局に近づいて來た。其の終局も、喜劇か、悲劇か、自分で自分の行末が判らない樣な氣がする。

自重してくれ給へ、私も自愛する。

下　「花里に送つた手紙」

電話をかけるのだけは、少し遠慮して貰ひたい。會社の給仕などが、ひやかして困る。

最う行くまいと思ふけれど、酒を飲で醉ふと、何時でもお前の事を思ひ起す。ほれてる筈は無いのに、おかしいぢやないか。

花里と云ふ女は、馬鹿だと思ふ。花魁の癖に廂髪なんかに結つて、素人らしい事ばかり云つて居る。今の時節だから宜い樣なものゝ、お客がお客だから好い樣なものゝ、昔の遊君はそんなんぢやなかつたさうな。少しは、花魁らしい氣持になつて見ては何うか。

お前より美しい女も澤山居るし、お前より親切な女も澤山居るのに、何うしてお前の事が忘れられないだらう。お前を馬鹿だと云つたが、俺も餘程の馬鹿だなア。何時も醉つてばかり行くから、大酒飲みと思ふか知らないが、酒でも飲まねば全く遣り切れないからなア。酒を飲で居る間だけは、不平も不滿も忘れて居て、天下が頗る太平なんだよ。

先日、歸途に借りた一圓、別封で返上する。利息は

又の日に出す事にして、婦人世界を一冊、別便て送る。お前の好きな下田歌子女史が、何か大に論議して居る樣子、能く讀て少しは怜悧にならなくちや、何時まて花里さんの花魁てもあるまい。鏡を見るべし。

社の用にて九州へ行くかも知れない。當分逢へないかも知れない。俺が行かなくても、木場と西片町て、景氣の好い事だらう。

お淸どんにも、電話を遠慮すべし、となっ

先日、Sさんが一人て行つた晩、下宿の二階に寢そべりながら、御身の事を思ひ浮べ候。

部屋が空いて居ないので、何時もお氣の毒だと云ふが、私はお前の部屋が大嫌ひ、簞笥やら長火鉢やら、衣桁の置いてある彼の部屋が、何だか嫌て堪らない。女房を持つた所て、お淸どんの樣な氣の利いた女中も置けまいし、それに世帶を持つた所て、お前の部屋ほどの生活も出來ないと思ふと、夫れが厭て堪らない。矢張り「名代部屋の客」は、私の人柄に相應して、氣が詰まらなくて宜い。

西片町よりは、木場の方が太ッ腹らしい。お前が身を任して幸福なのは、唯木場の番頭さんあるのみだ。齡は三人の中て一番上だけれど、彼んな人の方が、氣樂て宜いかも知れん。私なんかは、お前が空飛ぶ鳥になるまでの間、友達交際をするに過ぎぬ。お前が何れほど思つてくれ樣が、私が何んなに思つて見ても、二人は夫婦になどなれる仲てない。さう思ふと、行く先が見え透いた樣て、色も香も無いけれど、私はほんとの事を云ふ。死んても西片町や名代部屋なんかと、夫婦にならうなどゝ思つては不可ない……。

お客は大切におしよ、お前の樣な女にても、惚れる男があるのは、有難いと思はなくちや不可い。身は賤うても、心は淸く高く持つて、濁り江の臭味に溺れ無い樣にね。生意氣云ふ樣だけれど……。

その内に、また醉つて參るべく候。

拜復、度々の御手紙、拜見いたし候。

病氣したとのこと、餘り稼ぐからては無いか。時節柄、御自愛專一に祈り候。

會社の方でも、小生のこと大分問題になつて、御身との仲に就いても、取沙汰がある樣に候。何と云はれても詮方なし、當分謹愼して行かぬ樣にする積なれど、心も身も御身に囚はれたか、考へて見るまでもなく、不思議なほど、心持が變になつた樣に候。

絕世の美人と云ふても無く、稀有の妖婦と云ふても無いに、花里と云ふ女は、不思議な魔力を持つて居り候。手練手管などに乘る樣な小生てもなく、又月並の手練手管てお客を抱き込む樣な、そんな花里さんても爲いに、男は身も世もなく打ち込み候。

岡惚れの伊井蓉峰、あの寫眞の包みを見た時、何とも云へぬ哀れを覺え候。御身の樣な勝氣な陽氣な女も、矢張り苦海の女郎なり。小店の女が、淺草邊の小芝居のへボ役者に何して、その手紙を肌身離さず持つて居るのと、心根に何の異る所あらんや。

女郎の岡惚れ位、果敢いものはなく、哀れなものはなく、切ないものはあるまじ。御身にも見ぬ戀の一幕があると知つて、何となく哀れを感じたり。肉體は弄ぶに任せても、囚はれざる心こそ貴けれ。病氣になつては駄目、自重自愛くれ〳〵も祈り上候。

お清どん、お友どん、皆々へ宜しく、今度は何か美味いものを持て參るべく候。

「みゝずのたはごと」届いたか。田舍の事を書いてある本だ。何人の頭にも力强く響くことを、彼の作者一流の筆て書いてある。何時見ても好い本だ、三年後、五年後に讀ても、心を動かすべき本だ。大切にして、折々出してお讀みなさい。酒よりは美味い本だ。

お前に讀書癖があると云ふ一事は、何の位お前を懷しむ理由になつて居るか判らない。世間の女郎と云ふものは、無學て投げ遣りて、お客の財布を窺ふ位のものだが、お前にはそれが無い。女郎屋と云ふ浮華て、陽氣て、淫蕩て、それて居て陰慘て、沈欝て、病院みたいな所のある、何とも云へぬこんがらがつた空氣の

中に暮しながら、お前は何時も自分と云ふものを崩さず。忙しい間にも本の一つも讀まうとする、其の心根は得難い珍重すべきものである。お前はさう自覺して、當分、本を讀むことを忘れてはならない。

新聞も努めてお讀みなさい。其の日〳〵の續物ばかりでなく、讀て判る様な所は、殘らず讀む方が宜い。吉原の中に居ては、世間話の種になる位のものだけれど、これから世帶でも持つて、西片町の令夫人にでもなつて御覽、新聞學問も大變お役に立つから。「みゝずのたはごと」を、お前の様な女が愛讀すると知つたら、其の著者も定めて滿足だらうと思ふ。しみじみと讀て御覽、知らぬ間に、涙のこぼれる所があるから……。

今度は、別の小説でも送らう。

夫婦になると云ふ約束だけは、當分しない方が宜いと思ふ。お前も云つた通り、一寸先は闇の世の中、一年後の秋までに、二人ともピン〳〵して居るか何うか、考へて見れば少々心細い。それにお互の心が、何う變るまいとも限らぬ。起請誓紙には空事が多いとか。

Ｙさんがいろ〳〵盡力してくれるけれど、思ふ様に行かない。お前の方も同じだらうと思ふ。一年後の事だから、今から考へて置いても、決して早過ぎはしないけれど、いざとなればお互に考へざるを得ぬ。お前の方でも一生を委ねるに就ては、其の男に就ての希望もあらう。私の方でも、たゞの素人と違つた女を妻とするに就ては、いろ〳〵考へねばならぬし、世間並の故障もある。先づこの話は當分おヂャンにして、前の様に唯の馴染として、逢はうぢやないか。その方が、お互に面倒な小ゼリ合がなくて、氣樂で好い。

それは別として、一度お前を連れて、お前が見たいと云ふ帝劇を見せてやりたい。お前一人を連れ出すためには、私の一ヶ月の給料を棒に振らねばならぬと聞いて、實は悄氣返つて居る。そんな事は矢張り木場のお大盡に限る。何事も金がもの云ふ世の中だ。私なんかは、其所になると、實に腑甲斐ない。

お前が素人になるの日、私は何うなつて居るだらう。そんな事を思ふと、最う餘り逢はぬ方が宜い樣な氣持もする。病氣は最う快いのか。左樣なら。

一、吉村健吉氏が天民に提供した日記、手紙は、未だ此の他に十餘通あるが、深刻なもの、露骨なもの、他愛の無いもの、餘りに私事に渉つたものは、總てこれを採用しなかつた。採用しなければならぬものも、惜いかな、其の筋の忌諱を畏れて捨てた。

二、二人は終に夫婦にならなんだ。花里は一年後を待たず、この二月十五日、深川木場の番頭さんに落籍されて、本所の××町に化粧品屋を開業した。吉村健吉氏よりも、西片町の先生は非常に失望して、××樓へ來ては、白棊酒ばかり飮んで居るさうな。

三、吉村健吉氏は、香水を買ふ樣な顏をして、花里の新店に行つて見たと云ふ。其の時、花里は大きな廂髮に結つて、襟の附いた縞物の綿入に、大島飛白の羽織を着て居た。香水は男の方ならばと云つて、舶來の上等のを渡す時、ソッと手を握りしめた。

四、それから後は、未だ一度も逢はず、勿論文通などした事はない。別に何んとも思つて居ないけれど、世間が斯う何んだか俄に淋しくなつた樣で、居ても起つても居られないと云つて、吉村氏は冷たく笑つた。その笑つた顏には、ほんとに淋しさが漂つて居た。

五、以上の文字だけでは、花里といふ花魁の心持が、未だ十分に會得されないけれど、さうした女に關り合つた男――吉村健吉氏――の氣持だけは、朧ろ氣ながら讀むことが出來る。吉村健吉氏もこれを動機として、妻帶の用意でもしたら宜からうと思ふ。

この數日來、健康また勝れず、讀書、執筆二つながらものうし。僅に以上の到來物に依りて、責をふさぐのみ。次號には

「女八人」その五　十萬圓の奥樣

を記述して、悲慘なる狂婦人の運命を見んとす。婦人死して既に世に亡きも、遺孤某々等、現に人と爲りて京阪に在り。親しく材を仰いで、狂婦人が一顰一笑の跡を讀まん。

――天民生――

人物評論（三十七）

岡崎邦輔論

△岡崎邦輔氏



文學博士　三宅雪嶺

司令官に適當なのもあり、參謀長に適當なのもある。ナポレオンの如く如何なる司令官にも優り、如何なる參謀長にも優るのがあるが、それは所謂不世出なるものであつて、普通には良い司令官と良い參謀長と相合ふのを望むことになつて居る。良い司令官が良い參謀長を得ず、良い參謀長が良い司令官を得ぬのは各々にとつて一の不幸である。斯かることは軍隊のみでなく、他の方面にも屢々見ることがある。項羽

と范增と相離れて各々損したことは昔からいはれて居る。岡崎邦輔氏は斯く榮々しくいふ程のものでないが、良い參謀長として良い司令官を助けやうとしつゝ、都合よく事が運ばなんだ形がある。

氏は恐らく官僚として最も成功し得た人物であらう。若し早く藩閥の有力者に結托し、之に引立てられたならば幾年か前に大臣となつて居らう。或は第二の陸奥福堂となつたかも知れぬ。所が、福堂に倣ひながら福堂と藩閥との關係を辿らずして、福堂と政黨との關係を辿り、政黨によつて仕事を爲やうとした。政黨といふても、其事實的首領なる星亨氏によつて仕事を爲やうとした。星を援けやうとしたのは着眼の宜しきを得たものであつて、若し星が生き長らへて居るならば、氏も近頃のやうに去就に迷ふやうな事がなかつたらう。星の參謀長といはふか、秘書役といはふか、女房役といはふか、星の力を藉るれば已れの働きを延ばす丈けの事は出來る。處が星が死んで原敬氏が其代りの樣になつた。氏は原によつて事を爲さうとし、原も氏の才能を認め、相共にする事になつたが、星及び岡崎の關係と、原及び岡崎の關係と同じでない。星と岡崎と性格が大いに違ひ、相ひ補ふのであるが、原と岡崎とは相似た所が少くない。岡崎の考へたり計畫したりする所は大抵原も眼の着く所である。岡崎は特別に原を援けやうがなく、原も左程岡崎の智惠を借らねばならぬ事がない。從つて何うも星時代の如く面白く行かぬ。共に古河鑛業會社に腰を据ゑ、利害の上で密接の關係あるにしても、兎角原氏は政治上で岡崎無しに働かうとする。岡崎氏は可なり原氏の爲めに力を効して居る、いろ〳〵と世話した所がある。その人を見抜き、之によつて政界に働かうとした丈け、原の爲めに隨分骨折つたのである。原氏には其邊の事が分つて居るけれど、何分にも岡崎の智惠を借るやうな事が多くない。原に必要なのは松田正久氏のやうな不得要領で人を纏めるやうな人物である。岡崎のやうに頻りに劃策するものは却て面倒である。從來の交際もあり、岡崎の才幹をも認めて居るので不快を感じて相離るるといふに到らぬが、人の力を藉りて大いに手腕を揮はうとする岡崎氏にとつては甚だ面白くない次第である。

何か活動すべき種もがなと待ち設けて居る所に、憲政擁護、閥族打破といふ運動が起つた。茲で一芝居打たうとした。恰かも陸奥が西南戰役に乘じ、藩長に打擊を與へやうと試みたと同じく、民黨聯合の力を以て官僚に打擊を與へやうとした。政友會は雜多の分子より成り、官僚に對して歩調を一にするのが甚だ六つかしい。衝突する場合には何程かの分離を覺悟せねばならぬ。若し國民黨を引つけて置けば分離があつても衆議院に多數を制することが出來る。多數と極まれば分離する者もない。何處までも多數で押し通せば官僚に於て致方ないと考へ附けたのである。西園寺侯も閥族の仕打に不快を感じ、原、松田氏等もむざ〳〵位置を失つたのに業をにやし、何なら一戰ひしやうと思つて居るので、澁らうかといへばうなづく、大いに遣らうかといへばよろしいといふ。處で大陣笠扱ひされて、飛躍の機會を待つて居る尾崎氏を誘ひ出し、國民黨の犬養氏と轡を並べて正面より閥族打破の旗を飜して進んだ。閥族はいろい

ろと防禦策を講じたが、力協はずして城を明渡し、原、松田氏等薩派と結んで之を乗つ取つた。原、松田氏等もと權勢を得さへすればよいのであつて、意外に早く權勢を恢復し得たのでそれで滿足して居る、十二分に滿足して居る。折角到來した機會を捉へず、憲政擁護、閥族打破の名の下に戰を續けるのは餘計な事として居る、空論は益がない、局に當るに若くはない。何事をか得やうとするには或事を捨てねばならぬ。多少の犠牲は止むを得んのであると。斯くして薩派と結んで內閣組織が纏まり、岡崎氏は頓と手持無沙汰になつた。さりとて靑筋を立てゝ主義主張を爭ふ柄でないと認められて居る事はよく承知して居る。殊勝な事をいへば徒らに冷笑を買ふに過ぎぬのであるが、其儘にして居る譯にも行かず、尾崎氏に義理立てといふので、政友俱樂部を設けることになつた。此間頗る困却の躰たらくであつて、或人に向ては分離したとて相共にするものは五六名に過ぎぬといひ、他の人に向ては今少しく待てば五十名を得るは大丈夫であるといひ、兎角口が合はぬ、先に共々運動し來つた連中の一部は之を怒り、岡崎は不都合の人物、何をする積りであるか、相當の制裁を加へねばならぬといふ事になつた。腕力沙汰となつては流石の智惠者も面喰はざるを得ぬ。一先づ政友會と分離しやうといふ事になつたが、若し尾崎氏が星であるならば、岡崎氏は固より之に從つて盡力するのである。處が尾崎とソリを合はすのは可なり六つかしい。原氏とは面白からぬ事があるにしても一つ鍋を食つた間の事で、言はずして意の通ずる所があるが、尾崎氏とはさうは行かぬ。之を援けて骨折つたとて何の結果が得られるかも分らぬ。深みに入らぬ前に退かうとして俱樂部を離れ、次いで來るべき機會を待つことになつた。

が、之からどうする。直ぐと政友會へ這入らぬは尤で尾崎氏への義理立て許りでない、世間の思惑を考へた許りでない、這入りは這入つても今の位で政友會が纏つて行けば新たに働くべき足掛りがない。下手に往けば陣笠に馬鹿にされる事になる。然し山本首相と政友會といよ〱益々密接の關係になるか、或は遂に總裁となる譯に行かず別に總裁を求むることになるか、又は總裁なしに總務で黨務を扱ふことになるか、そこに疑問があるのみでなく、新政黨の出やう次第で面白い事が起らぬと限らぬ。先づ今暫らくじつとして見て居らうといふのが氏の現狀である。何れ何事をか爲すであらうが、氏の才幹を以て迷兒の姿となつたのは、賴るべき相當の人を得なんだのである。人の力によつて事を爲すは官僚に普通であつて、元勳元老の力を借ればなか〱幅が利くこと、松の木が高ければ蔦が何處までも上つて行ける樣なものである。氏は何處までも上れる蔦でありながら上るべき松を得なんだ。松があつたが生憎折れて了ひ、次に絡み縋いた松は枝振りが惡くて上りにくい。蔦として生れたものゝ不運である。氣の毒な事である。然し氏は今尙原に絡み着かうとして居るらしい。之に絡み着くが得策であるかどうか、外に一層適當なるものを見出すことが出來ぬか。主義主張の如きは氏について言ふべきでなく、其れ丈け思ひ切つた仕事が出來はせぬか。氏も次第に年が行く、一つ面白い思附きも出ぬであらうか。運不運があるにしても今の望

では竹中半兵衞といはれた氏も智惠の程知れたものである。半兵衞は秀吉の智惠袋となつて居つたが、餘り智惠の多いが爲めに忌まれ、隱遁を志したといふ事である。岡崎氏は忌まれる程に智惠があるか。半兵衞ば三十六で死んだ。岡崎氏はそれより餘程長生して居るが、それ程の智惠が出たとすべきであるかどうか。智惠負けせぬやうに望む。

△衣裳方、仕事師

田川大吉郎

◎僕は、男子の足袋は紺足袋に限るものと思つて育つた、白足袋は男子は穿かぬ筈のもの、白足袋を穿いて居る男子、縮緬の羽織を着て居る男子、肩の撫で肩の男子は、男子の中の女子である、男子の中の女子は、その本來の女子にも如かない、女子の中の男子にも猶如かないと謂つた風に教へられ、そのやうに思ひ切つて居た、而してそれだけ卑しみ蔑しんで居た。

◎僕の見た岡崎君は、先づそのやうなタイプの人であつた、本來ならば僕は岡崎君を蔑しまねばならぬ、所が、僕は、岡崎君を蔑しまぬのみか、心から敬して居る、おかしな譯だか、昔は、張良は容貌婦人の如しと謂はれた、それでも虎狼の秦に向ひ、博浪沙の一擊を試みた彼の、胆大心小の機略は當世雙ぶもの無つた、婦人の如き容貌の人侮るべからず、或は一代の智慧者は反つて婦人の如き容貌の人かも知れぬ、或は婦人の如き容貌の人から一代の智慧者は出づるのかも知れぬ、それは兎に角に、僕は岡崎君を見た時、彼も亦婦人の如く見ゆる智慧者の一人だなと思つた、無論、岡崎君の眼には一種の凄味がある、人一倍の鋭い光りがある、然しながら、その着物の着こなし振り、歩き振り、物の言ひ振り、笑ひ振り、肩腰の工合等からいふと、氏は所謂大股に歩いて、エラ相に構へて、豪傑笑ひをして、鬼面、虎鬚、嵩肩にて、人を嚇かす流の人では無い、氏は瀟洒の人、しなやかな人、やさしき人、要するに婦人型の人だ。

◎氏の坐談に巧みなことは、夙に定評がある、筆札も上手な方である、刀劍の鑑定もきゝ、書畫の趣味も饒かで、その室内の裝置は、玄關脇の二疊か三疊の部屋にまで行亘つて居て、そこにも細かにして上品な主人の趣向を見る、總じて、氏の家、その高大な當世風の門のない所、若くば門といふ門の無い所、玄關は流石に有つても、尋常の格子戸張で、あまりに氣取らな過ぎる所、而してその室の、淡い、遠い、品雅な裝ひには、相應に憂身をやつしたらしく、即ち、飾らざる所に凝つた飾りを盡くし、見事の掃除に、一點の塵を留めざる所、そんな所を、靜に考へ來れば、氏の風釆、面目、氣品、性格は略ぼ窺はれる、僕は、大體岡崎氏を解し得たやうに思つて居る。

◎去りながら、貴誌の問ひは、氏のそれらの全性格よりも、政友會に對する氏の今回の態度を如何に視るかの點に在らう、僕は、氏の政友會を去つたことを、氏の性格に不似合だつたと視て居る、從つて氏の政友倶樂部を脫したことを、敢て滿足だといふ譯では無いが、氏の性格から觀

て自然の成行だと思つて居る、氏が政友會に復歸するや否やは、要するに分らないけれど、復歸しさうなものだと思つて居る、それが、氏の閲歷に照らし、氏の才趣志向に照らし、然るべき事だと思つて居る、人は政友會を頻りに罵倒するけれど、而して僕も亦随分罵倒する一人だけれど、氏は、政友會のいゝ所を看取して居る一人で、且、その罵倒を冷殺する意氣も、見識も、超越的横才もある人である、氏は政友會に居ることを、決して居りづらく感ずる人で無い、感ずることもあらうが、悩む人で無い、但、氏には民黨聯合といふ病がある、その病み膏きがある、去れば氏は必らず政友會に復歸するともいへない、政友會に復歸することが、民黨聯合のために爲ると思へば復歸しやう、若し、民黨聯合の爲にならないとすれば、復歸しないといふやうな一片の野心はあるらしい、少くとも、そんな風な氣分、多算の人だと思はれる、そこに氏の戰ひの人で無いと、短所と目せらるゝ點がある、然し、その點も、僕から言へば、當世に珍らしき性格として、僕の興味を惹いて居る點である。

◎犬養氏は、明治以來の政界に、策士の稱を得た第一人であるが、僕は氏を策士とは思はない。無策といつては失禮であらうけれど、第一議會以後既に二十三四年の跡に、僕は、殆んど何等の策らしき行動を犬養氏の進退に認めて居ない、僕が、犬養氏を信じ重んずる點は反つてこゝに在る、僕は、犬養氏が所謂當世の策士で無い所を信じて居るのである、犬養氏の本領は、當節の流行語である高風淸節といふ字の方が、反つて當つて居るであらう、但、その高風淸節といふ字にも犬養氏本人は、多少をかしく思つて居るに相違なからう、新聞の文字は、いづれにしても當にならぬ、方向は間違つて居ないにしても、割引を要する、大割引を要する、それにしても、犬養氏は策士といふ方では無い、策は犬養氏の貴しとする所では無い、そこに爲ると、星氏は遙に縱横であつた、陸奥氏も亦縱横であつた、伊東巳代治氏もその幾分を發揮した、而して前後それ程の名は無いけれど、常に人の背後に隱れて、人前には立たなかつたけれど、深かれ淺かれ、絶えず何等かの謀計を凝らして、隱々の裡にの人あるを思はしめたのは、岡崎氏である、氏は所謂赫々の名無くして、冥々の功を收めた明治策士の一人である。

◎たゞ、今後如何に身を處すか、如何にして一代多算の身の終りを善くするか、それが問題である、多算の人なるだけ、氏はいろ／＼に考へて居るであらう、進んで人前に、破れ扇を張り叩くの人と爲るか、それも一策であらう、それとも永く背後の操縱者と爲るか、即ち姿を人前に顯すか、顯さないか、それが問題である、そのまゝ／＼政友倶樂部に加擔したのは、張り扇組の一人と爲つた譯であつた、今その昨日の非を悔みたとすれば、最早張り扇組には入らぬかも知れぬ、人前には立たぬかも知れぬ、相變らず、衣裳方として、仕事師として、黑ん坊として、背後の人として、兇策を暗々中に運らさんとするのであらう、それが、その天分に適すると思ひ決したのであらう、僕は、略ぼ此様に氏の將來を見て居る、但し時代の既に明治にあらざることは、氏たるものも注意せねばならぬ。

△小策士岡崎邦輔

鷺城學人

今まで影武者として知られた岡崎邦輔も、此間の政變以來俄に表面的の人物となり、更に今度政友俱樂部を飛出したので、所謂る問題の人になつた。俱樂部脫會は意外でも何でもなく、實は豫定の行動を取つたに過ぎぬ。最初犬養と尾崎を握手させ、政友會と國民黨とを結び付けたのは專ら岡崎のやうに謳はれて居るが、これは岡崎一人の働きといふのでなく、此大勢を作つたものは幾らも外にある、が何人も彼が策士の一人として憲政運動に貢獻するの大なりしを認める。併し一串した誠意と勇氣を以て事に當り得るか何うか、彼のいふ如く純理を政策の上に及して論ることなきを得るか何うか、これは甚だ覺束なく思はれた。犬養や尾崎は初めから彼を信用し、寧ろ信じ過ぎた傾がないではない。それも一面からいへば無理もない話で、岡崎は三十二萬圓の私財を擁し、齡ひ六十一に達し、而も其富を傳ふべき子もなければ孫もない、今度こそは眞劒になるであらうと誰しも考へぬではない、がそれは皮相の觀察で眞に岡崎を知るものは初めから信じなかつた。全然信じないまでも、確かに半信半疑の念を以て見たらしい。

山本內閣が出來て二十四人が政友會を脫黨するといふ一段になつて、岡崎の態度は俄に今までと打つて變はり、脫黨の意あるが如く意なきが如く、鈴々疑問の人たることを示した。餘儀なく脫黨したものゝ、兩方に足を跨げたやうに見えて頗る煮切らない。其後問題毎に政友會七分政友俱樂部三分の彩りが明かになり、總て政友會の利益を計るかに見えた。政友俱樂部の立場としては勢ひ山本內閣不信任案を提出せねばならぬのに、國民黨から度々交渉をしても政友俱樂部はこれに應じなかつた。俱樂部の中には不信任案に贊成なものもあつたに相違ないが、岡崎は何うしてもウンといはぬ、それでも國民黨は猶ほ一縷の望みを屬して居たが話が纏まらぬので結局生溫いことをしてお茶を濁さねばならぬ羽目に立至つた。民軍をして戰機を失はしめ、龍頭蛇尾に終はるを餘儀なくせしめた罪は、主として岡崎にある。

尤も岡崎の言つたり仕たりすることにも相應の理窟がありといへばある。第一彼は桂を正面の敵とし、復び政權を手にせしむるを欲しない。政友會を脫したのは一時大に困らせる手段に過ぎぬ、政友會を困らせるのはこれを改造し善導せんが爲めであつて、破壞する目的でない。然るに國民黨なり、政友俱樂部なりが、非政友的感情に驅られるのは、適々桂の新政黨を利するの結果となり、決して自分の本意でない。出來得べくば山本內閣を援け、權兵衛の頭を改造して民黨の主張を實行させ、自分の理想とする民黨大合同の連鎖になりたい。これをするには一先づ俱樂部を拔けて身を自由の境に置くに如くはない。第二には陸奧の政略係を勸めた頃から自由黨に關係し、星時代に至つて益々關係の深くなり、殊に星の沒後政友會が困つた時代にも隨分世話を燒いた。それほど深い因緣のあることゝて、單に私情よりいふも弊履を棄つるが如くするに忍

びぬ。岡崎が故郷の山川を望むの感ありといふのは此間の消息を漏らしたものであらう。殊に脱黨以來政友會の誰れ彼れから泣付かれるので、岡崎としては勢ひ情に囚はれることになる。昔時豐臣氏の末路に當つて、片桐且元は豐臣家からも德川家からも疑はれたが、其實一番豐臣氏の社稷の爲めに忠であつた。桂黨を德川氏とし、政友會其他を豐臣氏とすれば、其間に畫策して居る岡崎の立場は且元のそれに似た處があつて、苦衷の諒とすべきがないではない。

成程善意に解釋すればさうかも知れぬ、が凡そ物には表と裏とがある、表面だけを看ては事の眞相を捉へることが出來ぬ。岡崎は赤裸々の人でない、蓋もあれば底もある。世間では彼を策士とし、自分も策士を以て許して居るだけに、其言を聽き行を見て直ちにさうと信ずることが出來ぬ。岡崎が政友會を出たのは單に犬養に對する義理立で、原・松田其他の人々に對しても此事を明言し、進退を相談するものがあつても却て思ひ止まるやうに說得し、一人も同志を誘はなかつた。斯くして暫く西洋に行き息を拔く所存であつた。併し事情の許さぬ爲め洋行を見合はせたが、政友倶樂部を意のまゝに操縱し、陸奧時代から彼の手であるコワモテをする腹であつたらしい。處が政友倶樂部はなか／＼彼の考へ通りにならぬ。尾崎は王手飛車的に政友會を攻擊して地盤荒らしに掛るし、豫算問題では隨分思ひ切つた査定をするし、其他事每に本家との溝が深くなる許りで、政友會の出店のやうにして自分の爲めに利用せんとの策はガラリと外れたのである。

第二に見逃すことの出來ないのは岡崎と政友會との間に特殊の關係の存する一事である。特殊の關係とは他でもない利益上の關係を指すのである。岡崎の財源の半ばは關西から出て居る。政友會の勢力を利用して種々の事業を企てて居る。今日に至るまで彼が裏面に在ていろ／＼な運動事の爲めに懷ろにしたコンミツションも少くないが、小數黨ではこれが出來ぬ、何うしても大政黨の力を藉らねばならぬ。こんな關係から政友會に未練の殘るのは無理もない。

今日の岡崎には人聞きの惡ひ振舞もないが、前生涯は隨分暗黑の歷史に富んで居る。それが多く金錢に關した事柄である。今其祕密をスッパ拔くのは聊か氣の毒であるが、現在のみを語るのが岡崎の全班を傳へる所以でないと思ふから、勢ひ舊時代にも言ひ及ばねばならぬ。

彼は元と長阪邦輔といひ、和歌山藩の輕格士族の家に生れた。明治十三四年の交爲すこともなく、ゴロ／＼して居たので、叔父の陸奧宗光が時の和歌山縣令神山郡廉に賴み込んで邦輔を和歌山の警察署長にした。今でも彼は貴公子然とした風貌を具へて實際の年よりも若く見えるが、其頃は二十一二でもあり、殊に非常の美男子であつたから、婦女子にチヤホヤいはれ、自分も遊里に足を踏み入れて盛んに遊んだ。署長といつても月々の給料はいふに足らぬ。僅かな收入で遊蕩費を辦ずることが出來ぬから、賭博を默許して博徒から運上をとつたので、和歌山市内は賭博公行といふ有樣になつた。處が郡部の警察に骨がたい警部が居て博徒の一群をフン縛ると、博徒は罪に問はれる畏れがないと長阪署長と彼等

との關係を逐一白狀に及んだので、邦輔は當時の法律綱領に依て枉法罪に問はれ、八箇月間牢屋に投込まれた。出獄後海草郡岡崎村の岡崎家へ養子に行つた爲め戶籍上汚點のないことになつて居るが確に前科者である。

其後にも斯ういふことがある。高野山の或寺に多くの什書があつたのを、岡崎は同郷の山東直砥の手を經て宮內省に買上げてもらふ運動を試み、其間に在て二千圓を懷ろにした。二十五年和歌山で選擧運動をする時、陸奧から八百圓の運動費を取出し、それを途中で掏摸にすられたといつて復び八百圓の無心をしたが、陸奧は兒玉仲兒に依賴して一時立換へさせたことがある。其金は陸奧が死ぬ時漸く返濟したといふが、岡崎は運動費の二重取りをしたとて一時評判が惡かつた。此外にも或る後家から金を取つたとかといつて品性を非難するものもあつたが、それは事實であるか何うか知らぬ。假に事實であるにせよ其處まで詮議立をする必要はない。唯だ金錢の上に於ては昔も今も必ずしも奇麗でないといふことを證明して置けば足りる。

口は調法であるとはいへ、其言草には矛盾の廉が多い。二言目には政友會を改造するといふが、眞に反省せしめるのには此上二三十名も頭數を切崩してジタバタさせねば駄目である。國民黨や政友俱樂部は新政黨と行動を共にする傾きが見えるといふが、これは岡崎の杞憂で餘程頭が何うかして居る。犬養でも尾崎でも若し政友會がこれなら大丈夫といふまでに改悔するなら復び提携せぬとも限らぬが、恐らく新政黨とは未來永劫道伴れにならぬだらう、又たなるべき性質のものでない。近頃國民の政治思想に危險分子が含んで居るといふのは、何を指すのであるか、犬養や尾崎が危險思想を吹込むといふのであるか。彼は浪華節で天下が取れぬといつて居るさうであるが、閥族打破・憲政擁護の叫びが浪華節なら現に夫子自身は浪華節の勸進元となり、危險思想家の犬養・尾崎等と事を與にしたではないか。飛ぶ鳥は後を濁さぬといふに、自分の都合の爲めに國民黨や政友俱樂部を傷けるとは岡崎に似合ぬことである。それほど名殘りが惜しいなら初めから政友會を出ないが好い、又た俱樂部を出た以上は體の好いことをいはずに直に復黨する方が遙に男らしい。

岡崎は陸奧を學んで未だ及ばざるものである。陸奧は權略縱橫の策士で、膽力もあれば信念も强かつた。彼は長州が出たら破壞し、薩摩が出たら毀し、毫も其間に情實を許さなかつたから、人を使ふにも情實を以てしない、必要の時は極端に利用し、必要がなくなれば惜氣もなく棄て如何にも冷酷であつたが、總て男性的で、國策上の經綸もあつたし、大臣になつて經綸を行つて見ようといふ自信力もあつた。岡崎は策士でも型が小さい。其策の範圍は大にしては一黨一派、小にしては一身一家の外に出でぬ。自ら入閣して政見を實行するだけの勇氣もなく、又たそれだけの政見もない。謂はゞ一寸目先きの利く怜悧者といふに過ぎぬ。

岡崎は今後何ういふ策をするか豫測し難いが、大正維新の今日に必要なるは、小策士よりも主張の一貫し、至誠と骨力の具はり、而して立派に表裏の打てる政治家である。岡崎は少し許り表裏が出來るが肋骨が二

三本足りない。

△しつかりした男

法學博士 花井卓藏

彼是言ふ人もあるが、何と言つても今の衆議院では、岡崎の如きはしつかりした男である。しつかりした男といふと、鳥渡探し難いものである。學問が出來るとか、知識が有るとか、演説が巧いとか、文章が書けるとか云ふ人は相應にあるが、しつかりした男といふと中々見附からぬものである。昨年の冬より本年の春に懸けての政變は、種々なる人の努力に俟つたであらうが、兎に角桂内閣を崩壞する迄に漕ぎ附けたのは、偏へに岡崎がしつかりして、政友會と國民黨との連鎖を堅く握つてをつたからだとも言へる。九仭の功を一簣に缺いたのは殘念だが、在野黨としては無くてならぬ男であらうと思ふ。區々たる小毀譽小褒貶に拘泥せぬ所が此男の値(ねうち)だ。政友會を脱するも可し、政友倶樂部を脱するも可し。願はくば最後の晴れの舞臺として今一度芝居を打たして見度いものだ。

彼が政友倶樂部を脱したるは總て政友會に歸へるの前提であるなどと言ふ評判もあるが、如何にしつかりした男でも、人間は感情の動物だから、自分の舊巣は矢張り戀しいものに相違あるまい。だから夫れを好くした度いと思ふのも人情である。であるから彼が政友會に復歸するものと見て、今一度政變當時に見たやうにしつかりした所を繰返させて見度と思ふ。何うしても民間黨は政國兩黨の聯盟を堅くして、或は尠くとも、しつかりした人物のみで戰鬪力を養はれば、最後の勝利は得られはしない。斯かる場合の仕事は此男に限る。今の政友會のやうに、數さへ殖へれば玉でも瓦でも何でも擇ばぬと言ふやうな事では到底も駄目だ。

尚もう一つ僕が岡崎の爲めに言ふべき事は、臨時議會の召集である。昨年先帝御崩御の際、臨時議會を召集すべしとの議は、初め衆議院に於いて唱へられた處であつた。然るに中途一寸頓挫した。政友會の有力者なども——時は西園寺内閣であつたに拘らず——何ういふものか不召集の説に傾いた。岡崎や犬養大石其他吾々も加つて是非召集せしめ度いと言ふので苦心したのであるが、行き惱んだ。最後に内閣に書面を以て建議する事と成つて終に召集の事と定つたのであるが、此場合——或は間違つてをるかも知らぬが——岡崎のしつかりした掛合ひ振りが前議を翻へさすに與つて力が有つたのではないかと思はれる。當時内閣に提出したる覺書は僕等の書いた物であるが、秘密にすると言ふ約束であるから、今之を公にする譯には行かない。

僕は岡崎を知る深きものでは無い。然しながら其話し振りから遣り口から觀て、遣れば何でも遣れる男だと思うてをる。少くとも政友會にこんな男が十人も有つて、堅實に國民黨との結束に努力したなら、屹度面白い芝居が打てることと思ふ。岡崎が嘗て大臣病の患者が在野黨の前途を遮るものであると言つて、政友會の某々を罵つた事が有るやうに覺え

てゐるが、全く其通りだ。兎に角今後の我民黨は此男の力に俟つべき處決して尠く無からうと思ふのである。

△原に對する思はせ振り

曲肱政客

岡崎といふ男は、言ふ迄も無く、智の人である。最初に岡崎を引立てたのは、誰でも知つて居る如く星亨であるが、星といふ人は元來豪膽な、細い注意を拂はぬ人であつた。岡崎は謂はゞ小智の人であるから、此の人を助くるには最も嵌り役て、星の細君となつて能く働けたのだ。それから所謂星移り物換つて、原と一緒になつてからは、どうも旨くゆかぬ。原は元來用意周到、非常に細かく智慧の働く人で、智慧の點から云つても、岡崎の比では無い。岡崎の智慧は原の前では陳腐である許りでなく、實は原に取つて煩さいのである。そこで原も中心岡崎を畏敬せず、岡崎も原から優遇せられてをるとは思つてゐない。けれども岡崎の智慧の有る所は、隨分永くそれを忍んだのでも解る。それを忍ばぬと――即政友會の中心勢力に侮蔑せらるゝ事が世間に見えると――岡崎の價値が無くなる。そこで岡崎はそれを忍んで裏面に於いて原に貢獻してをると見せかけてゐたのだ。それで世間一般の人は矢張り岡崎を政友會中の有力なる策士と思つてゐたけれど、知る人ぞ知るで、岡崎の地位が星時代とは非常の懸隔が有つたのである。

そこで岡崎が此度の運動を起したのは、畢竟が何が原因でもない。憲政擁護閥族打破などといふ議論を眞面目に主張するなどいふとは岡崎の柄でない。だから今度又政友會倶樂部を脱會して、前の議論を喰むやうな事が有つても亦岡崎にとつては何の不思議も無い。それ程主義主張の堅固な男でも無ければ、又器も小さくない。前言を喰んで知らぬ貌をしてゐるくらゐ大きい所もあり、又人格の上よりそれを恥と思はぬやうな男だ。それにも拘らず今度公人として天下に我言を喰めぬと言うて一旦政友會を脱したのは、是れは何の事は無い、只原の思はせ振りを遣つたのだ。お前は平素俺を馬鹿にしてゐるが、今回は何うだ。俺も烏渡遣らうかな、俺が退いた曉に少しは俺の力量もお解りだらうと。それを原の御覧に入れやうといふ仕事なんだ。其の仕事が公の爲めに成つたか成らぬかは世間自ら定論有らうが、岡崎個人の方面からいふと、私は益々其前途を暗憺たらしめたものと見てゐる。

一體岡崎が尾崎、犬養などと到底一所に遣れるものぢやない。第一性行も一致せぬし、又犬養が岡崎の智慧を借りる必要の無いのは、原が岡崎の智慧を借りる必要の無いのより一層甚だしい。元來原と犬養とは能く似たタイプの男である。原は順境の犬養であつて、犬養は逆境の原である。そして犬養が逆境にある丈け、氣廻りのすることが原よりも甚だしい。すれば原と一緒に歩けぬ岡崎が犬養と一緒に歩ける譯がない。尾崎に至つては愚人だ。是れはもう論は無い。岡崎は其等の事を知らざるや

うな愚物でない。だから此二人と一時行動を共にしたのは只原に物を思はせ振りをしたので、岡崎徴つせばといふ丈けのことであらう。

岡崎は今後、結局は政友會に戻ることになるだらう。重く何かの機會に大に歓待して復黨させることになるだらう。それで今は氏の中休み中、謂はば辻堂の雨宿り中だ。いかなる機會に何といふ名目で以て戻るか解らないが、久しからずして戻るには極つてゐる。さてその戻つた曉は如何と言ふに今度は原に賣れざるのみならず、一般の黨人にも重んぜられまいと思ふ。政友會の立て前として、いかに智慧が有つても、學問が有つても、出たり這入つたりする人間には重きを置かぬ。そこで岡崎は只の普通の人となつて――其俗務を名聞だけで――空名の中に數へ入れられる位置に立つて、煩悶して終る外は無からうと思ふ。

岡崎は内からも外からも餘程原を助けた心算りでゐる。内にしては原の經濟、外にしては原の黨内に於ける勢力に力を添へたと思つてゐる。そこで原の地位勢力の昇るに從つて、岡崎も相當の位置を贏ち得られるものと思つてゐたらうが、原は眞に敬意を拂はぬから岡崎は未だ酬いられたりと思うてゐない。白首相知猶按劍、朱門先達笑彈冠、草色全經細雨濕、花枝欲動春風寒、の感があつたらう。要するに私は今回の岡崎の擧動を以て全く原に對する思はせ振りに過ぎぬと見てゐる。

△高士の風ある人

小川平吉

拜啓度々御足勞相掛失禮仕候

岡崎君に付ては取立て〻御話申候程之事も無之候へ共只一點申上候は同君が世上之所謂策士以外に高士の風ある事に御座候。この高士の風がツマリ今回の脱會に至りたる所以かと存候、申上候迄も無之今回兩崎初め諸健兒之脱會は其意氣に於て壯とすべきもの有之候は勿論なれども政治家としての名分論より觀れば何の理由も無之ツマラナキ事に有之候兩崎氏は政界の形勢を觀るの明も有之カクスレバカクナルと云ふ事は百も承知せる人なれば氏にして眞の政治家たらば勿論脱會などせらるる氣遣はなかりしならんが一種の義氣は氏をして尾崎氏等と進退を共にせしめしものに可有之候。

右一寸心付の點以紙上申上候草々不盡

△小型の陸奥

匿名氏

岡崎邦輔は小型の陸奥宗光と見たら間違なからうと思ふ。陸奥伯は岡崎よりも學問があつた。又總ての規模が岡崎より大きかつた。そして殊に果斷であつて、自ら決行する力があつた。さらいふ點に於いては岡崎

は到底も陸奥伯に及ばぬやうに思ふが、タイプは大變に能く似てをる。世間では伯父甥といふものもあるが、年が違ふ所からさういふので實際は從兄弟同志であるやうに聞いてをる。

陸奥伯は若い時分は非常の才子で、寧ろ輕薄どころでなくて、眞に國家を憂ひて、どうかして有力な味方を得て、天下の政を料理せねばならぬといふ慾望と熱誠を示した。又一方に於いて、文明的の政黨を組織して見度いとの計畫もあつたやうである。私立學校などに對しても餘程親切な考を抱いてをつた人で、人才の養成には一方ならぬ趣味を有つてゐた。死ぬる前には輕薄才子などいふ評判は全く消え失せたのであつた。岡崎なども矢張り輕薄才子と思はれて來た。是れは陸奥も岡崎も餘り智慧が多く、智慧の方面のみが多く顯れる所から、或は道德上缺點あるかの如く思はるゝのであらうけれど、然し智慧も年を取るに從つて圓熟して來て、一方の眞面目なる方面も追々と顯れて來るであらう。

今日では氏を以て策士とか何とか言ふけれども、今度の政變に就いても政友會に止つてをれば或は何かの親任官ぐらゐには成つたかも知れぬが、犬養と尾崎とに義理立てをして脫會したのだ。岡崎の考では、憲政擁護閥族打破といふとは、桂内閣を倒せばそれで濟んだと思うてをるに違ひない。然るに犬養尾崎の御相伴をして脫會したのは全く二氏に對する義理立てと思ふ。此上二氏と行動を共にせよとか、憲政運動の勸進元をせよとか强ふるのは氏に取つては無理な注文である。兎に角犬養尾崎に義理立てをした丈けでも彼が世間で言ふ如き輕薄才子でない證據であらうし、又星亨死んで今日迄十年間星一派の間に於いて、岡崎が先づ黨派を纏めてをる一の要素と成り、又仲間の人も岡崎を先輩と立てゝ互に懇親を破らずして來た事を見ても、故人星亨に厚きのみならず、又其一派の人にも厚い所があるに因ると思ふ。

且氏は非常に才氣が勝つてをる爲めに少しも馬鹿げた所がなく、拔目がなく、話をせんとすれば此方が話さぬうちから已に其の話さんとする事に感付いてをるといふ風なので、或意味では怖いとか、危ないとか思ふ者もあるであらう。然し是れから晩年に至れば追々情誼とか誠意とかいふ方面も表れて來て、陸奥伯に於けると同樣、世間の評判も違ふやうになるだらうと思ふ。

△智慧倒れ、策倒れ

早川鐵冶

岡崎邦輔の憲政擁護運動の動機は、一遍大臣に成り度い爲めであると此前に本誌で批評したとあるが、事實それもあつたゞらうと思ふ。然しながら岡崎君と一緒に政友會を脫して政友倶樂部を作つたのは、所謂浮世の義理で、元々犬養や尾崎と行動を共にする人でない。一體あんな憲政運動などいふ事はデマゴーグの遣ることで先生には出來ない。第一辯が無い、第二に自分の思ふ事を無遠慮によう言はぬ人だ。それに餘程綱巧

振つた人だから、デマゴーグのやうな眞似は出來ない。

然し先生が今度政友倶樂部を組織したり、又それを出たりしたのは、私は所謂策士の策倒れ、智慧者の智慧倒れでないかと思ふ。若し僅かの間に政友會を脫會して、直ぐ復黨するぐらゐなら、初めから倶樂部などを作る必要が無いのだ。彼の時に尾崎と別れて、自分は政友會に止つてをるべきであつた。尾崎は正直で、今日でも憲政運動などを遣つてをるがあの儘では政友會とは感情が面白く行かぬであらう。現に先日茨城の政友會支部では同志會よりも知つて政友倶樂部に反對したらしい。さうして見ると岡崎君が政友倶樂部を組織した本旨とは大分違つて居る。岡崎君は倶樂部を以て政友會の出店として、新政黨に走る者を妨ぐつもりであつたが、尾崎のやうな遣り口では其目的がガラリと外れることになる。それで先生が政友會を脫したのは第一のしくじりで、僅か一ケ月許りで又政友會へ復らうとするのはいかにも無意味で、非常の失策だと思ふ。何れ洋行でもして來て、多少の新智識を得てから政友會に入るといふ段取りにするであらうが、一遍出戻りした先生を政友會が果して內閣大臣の役割に持つて行くか何うか一寸六つかしい。そこへ行くと智慧も淺いし、器も小さな元田の方が却つて悧巧に働いた。先生は到頭大臣を贏ち得た。先づ御成功と申上げねばならぬ。私をして考へしめたならば一旦政友倶樂部を組織した以上は、暫らくそこに止つてをつて、議會閉會後洋行して歸つて來て、歐洲の政局を見て大に感ずる處あり、小黨分裂しては能くないとか何とか理屈を捏ねて——そこは先生策士だから何とか旨い理屈が有るだらう——さういふ口實で以て政友會に復歸すべきであつたと思ふ。今度の遣り口では無策な早川よりも却つて策が拙かつた。

然しながら政友會も過半數を失つて、今度の議會でも豫算案が一票二票に依つて通過するかしないかといふ苦い境に立つたのだから、先生も此處で頻りと氣を揉み出して倶樂部の黨議に反するやうな事もせなくてはならなかつたらうし、又一人や二人を政友會に返した。それで岡崎君が政友會に復歸するだらうといふとは餘りに早く知れ過ぎて了つて、智慧の有る岡崎君としては少しヘマになつたと思ふ。先生ももう少し智慧の無い新政黨にでもお入りになつて居たら、黨首とでもなつて大臣に成れる機會が有つたかも知れぬ。要するに今度の一件はどうしても智慧倒れ策倒れと評するの外はない。

△破壞よりも調和の得意な人

子爵　秋元興朝

岡崎氏とは古くから交際つて居るけれども、細かい事はよく知りませんよ。誰も知つて居る通り陸奥伯の親戚であつて、先づ伯に引立てられた人で、伯が洋行する時分に一緒に亞米利加に行つて何か學校に入つてゐた。歸つてから伯に隨いて居たが表立つては世の中に働かず、先づ陸奥を自由黨に關係つけさせた位の事であらう。それから星に見出されて、

尾の參謀長として大いに働いたのである。

世間では岡崎といふ人を策士といつて居るが、元、破壞主義の人でなく、又論客でもなく、事を纒めて行く方の人である。自由黨と陸奥伯と結ばした事も、若くは伊藤公と自由黨を結ばした事も、又其期間は短かつたにせよ今度政友會と國民黨とを結ばした事でも總て事を締める方の事で、破壞的の反對の人である。正々堂々と議論をするといふ事よりは、よく事情を斟酌して、圓滿に事を纒めて行かうといふのが氏の得意とする所である。ナニセ今日の事情には表面からも裏面からもよく通じて居る人であるから、其等のいろ〳〵の事情を酌んで仕事をする事が得意である。といつて事情を知るといつても只實業家や何かの如く只利益の方面にばかり眼を着けるではない。元來が極く政治の好きな人だ。されぱといつて侃々諤々の論議をするでもなく、又大義名分の爲めに殉ずるといふ方でもないが、又それを度外視するでもない。いはゞ正論と俗論との間を調和さして仕事をするのがあの人の手腕であらうと思ふ。

あの人は大抵の事に一寸趣味を持つて居る人で、芝居も見れば角力も見る。又書畫刀劍も見れば家も作るといふ方であるが、然し其方に大變に深い趣味があるといふでもなく。つまり好きでなく嫌ひでもないといふ位の程度である。酒も餘り飮むでもなく、先づ好きといへば婦人位でありませう。一括していへば現代的の事が好きで、遠い將來を觀て理想を押し立てゝ進むといふよりは現今の時勢は此位の所に歸着するだらうといふ事を察して、自分の力で其處へやらうといふ人であらうと思ふ。

要するに破壞よりも調和の人。正論と俗論の間に立つて仕事をしやうといふ人であつて、或方面には大いに必要な人と思ふ。



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

簡易佛教講義録

毎月一回一日發行
一部金十八錢(郵税共)
六冊金一圓(郵税共)

●大正二年四月一日第一號發行

本書は本派本願寺法主大谷光瑞猊下の經營せらるゝ佛教中學各教師の分擔講義を編輯せるものにして、文章は平易に、而も四號活字總假名附なれば、佛教の大意を知らむとする人は、何人にも極めて能く理解せらるべし、されば現世來世の得脱に煩悶する者は、本書に據て必ず一大慰安を得べし

●發行所

兵庫縣武庫郡岡本村

二樂莊出版部

(中付一の一)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

坪内逍遙博士譯

沙翁傑作集

洋裝天金頗美本口繪及木版密畫數個入

正價各冊金壹圓參拾五錢　郵税各八錢

◎新刊發行◎

ジュリヤス、シーザー

沙翁の傑作中政治的興味を中心とせる者は、是れ。千古の英雄シーザーが末路の史實を材として波瀾重疊の男性的悲劇を織成せる者は是れ。我國に於ては三十年前該撒奇譚の上梓以來廣く世に知られたり逍遙博士今や全く其譯筆を新にして之を純然たる現代語に譯し將に文藝協會公演の臺本とし帝國劇場に上せんとす就中ブルータス、アントニーの演說は政爭熱の熾んなる今日一段の興感を以て玩讀せらる可也

九版　ハムレット

三版　ロミオとジュリエット

三版　オセロー

再版　リヤ王

發兌

東京牛込早稲田　早稲田大學出版部　振替東京一一二三

東京神田表神保町　合資會社冨山房　振替東京五〇一番

(中付一の二)

此の廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

滋養強壯劑
ソマトーゼ



老いて愈々若く、若くして、既に老ゆる人あり。斯の如きは營養の良不良に因る故に老ゆるも若く若きは愈々若からんとする人は常に

滋養強壯劑
ソマトーゼ

を服用して營養を佳良ならしめよ。

(説明書進呈)

神戸市明石町
横濱市山下町
バイエル會社

(中付一の四)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

和歌

尾上柴舟選

○　　安井竹美

おりたゝむ奈良の都の春の土汝の心はしづかならまし（故郷にゆきし女に）

眼とづれば若草山のまろさなどまざまざうつり君ははるけし

ふるさとへかへるも汝が十七の春のあはれの一つならまし

眼ざめては乳房いだかむ夜もあらむ嫁ぐと母にいらへたるのち

○　　渡邊紅影

福壽草べつこう色にふくらめりひそかに春が我が家に來る

靜やかに春かはらみし朝霧に包まれて鳴く小鳥よ小鳥よ

ねずみ色の校舍の屋根にふりそゝぐ春の小雨の明るさに泣く

かろやかにねざめ心にひびき來る柱時計の朝の秒音

たよりなきねざめ心がひろごりて君をまたなく思ひつゞくる

○　　松岡友孝

明るさに部屋の埃の浮きて見ゆ午後の日さしのながき今日かな

春立てば梅の花咲く寺に居て二十を越えぬいと安らかに

うら若き僧の衣を吹く風のながれて薫る紅梅の花

けふもまた昨日の如くつゝましく法華經誦みぬあはれさびしき

○　　丸山英

木がくれに君を待つ間のつれ〴〵に鳥よ來啼けと口笛を吹く

はすかひに物に拗ねたるさまに居る宴(うたげ)の席の端なる一人

よく戯(ざ)るゝ女の如く舷に笑ひさゞめく春の波か

な

○　大木多喜男

落ちつかぬ若き心をもてあまし草原に今日もまろびねをする

草の香の身にまつはれる寂しさを抱きて一人かへる夕ぐれ

悲しみを誘ひて街に灯がともる窓際にひとり物を思へば

○　丸岩銀水

あらひ髪後にたれて縁端にてがらほしつつおもふゆくすゑ

さしぐめるかほをあぐれば庭の木が涙にうつりあをうひろがる

○　池山青穂

悲しくもかゝる思ひをたくみたることを旅なる母は知らじな

ほろ〳〵と涙こぼして泣く面のあきらかにみえて寒き宵なり

○　田尻夢外

ふるさとの野にちかづけどいかにせん愛の中なる冷たきおん身

おもひては車窓にきたる野や山のごとくにめぐりめぐり去るかな

○　木村花水

春の日は暮れなむとして立ち淀み青き愁ぞ谷を包める

春の夜は林檎の淡き匂にも似てこゝろよくなみだ流るゝ

○　往田湖村

かゝはりもなき人のごとく別れけりあまりつれなき別れなりしかな

天地はあまりにひろしさびしさのやるかたなさになみだぐまるゝ

○　水上勇次郎

何かしらまち居る如く雪の夕鳥あちこち寂しくとまれり

○　妹尾夢笛

懐に両手さし込みキラ〳〵と輝く星を見るさむさかな

○　伊藤しげ子

三月前の反古にふとしも見出てたり今日の思をさながらの顔

○ 蘭香女

汽車のゆく線路の如くながき夜も君に文かくまに明けにけり

○ 須賀米男

おど〱とこゝろ躍らせ逢ひにける其のかみの日か柳芽ぶけり

○ 石原星戸

風の日の灯ともし頃のこゝろなほ生くてふことを疑はて居り

○ 藤井艶

うす青きすじのうかびし君が手にさびしき色のうつる夕ぐれ

○ 藤原白鷗

無き事も噂せらるゝ昨日今日君が顔など描かるるかな

○ 川添唇花

本船の赤き灯に降る春の雪冷たき砂に立てば眼に入る

○ 萩野誠二

花咲かぬ二月を暗きわが家に人も知らざるわだかまりあり

○ 遠藤寒村

連峰の中にひときはやゝたかき山頂の雪に光れる夕日

○ 山下源吉

つかれたる現代びとに唯一なるねむりをさへも奪はれしとや

○ 小田須奈雄

自我を捨て悲しみを棄て物言へばあらぬ小唄も口すさまるゝ

○ 中川三朗

人は皆つひに入る可き此の土を安らに沓めり朝な夕なに

○ 狩野蓼村

吾が爲めに母も泣くなり我も泣く吾が此の世こそはかなかりけれ

○ 深井要

くだものゝ甘きにほひのたゞよへる悲しき部屋に寝ざめてありけり

○ 藤井紫朗

男等の知らぬ世界に廣々といと誇りかに住める君はも

○　伊東音次郎

大空のくまなく晴るゝその事も我の願の一つなりけり

○　冷吉

うらうらと日のさしくれば我が心何思ふ事のあらざるものを

○　山田一雄

物曰へば死ぬといひつゝうちわめく親の一人を持つが悲しき

○　伊藤錄

日曜の午前の書斎しづけくて納戸の母のちさきせきかな

○　花村勘六

忘れめや藪を出て來し祖母の目の圓き眼鏡も手の鈴蘭も

○　素木しづ

煙草屋の女とならん襟かけて黒繻子の帶しめて見まほし

○　齋藤塘花

三崎なる山の畑の春さびし目にあをあをと灘の水脈

○　中島紅歩

困じはてぬ今宵もすねて染分の總簪(ふさかんざし)を君まろめける

○　齋藤郁雨

かくてわれ生きてし行かば何となるその淋しさを思ふこのごろ

○　梅野美草

靜かなる河に浮びてのぼりゆくいかだいかだに春の日がふる

○　宮本桂花

浪今しうらぶれし子を誘ふごとうすら笑ひて岸邊にぞ寄る

○　勝又杏堂

生ュ甲斐のなきを知りつゝ生きて居る我が此の頃の心のさびし

○　加藤爲子

うとましきあらがひもなしあらがはむ術しらぬ身となりしこの方

○　時鐘三郎

默し居る親子の心いさかひのはてたる家の暗きともし灯

○悲しさの極みかあはれこのこころわたつみの底の如く靜けき　木村隆吉郎

歌稿輻湊のため次回に廻せるもの過半なり諒せられたし
應募和歌は東京小石川區原町百十五番地尾上柴舟宛の事

俳句

暖　高田蝶衣選

たぐり渡しの小屋暖かに魚干せる　明兮
泥染の絣所家並暖かに　同
澪標の舟蟲や干潟暖かに　同
虹梁の浮彫や天女暖かに　同
牧も名所の一となり旗亭暖や　浮碧樓
溫室窓の開閉に暖を蜂とべる　同
河馬を見連るゝどよめきに交り暖な　同
暖や霽れし檜原を金堂へ　黎白
燒野暖かに雨す聽講疲れし日　同
病起踏めば暖し埃破る草　同
暖や馬具師が家の埃り物　晃漾
紅蟹の藻に色よさの暖き　同
草暖かに長途の素足うとましき　同
二つ井を一つ埋めて暖き　朱雀
一石一字書きて沈け佛事暖き　同

酢に游ぐ貝暖き膾皿かな　同
蜂去ぬを地に撒く酒や暖かに　花馭史
臼挽の粉よれひねもす暖かに　同
箕埃をまゝに厨事や暖き　同
湖光浴びて書に對す暖き亭　銀竹
寺の大觀暖に並む烏に盡く　同
鷲を見ぬ日は暖き湖のさゝら波　滿峰
粉場埃る篩ひ仕事や暖き　同
日時計に合せ打つ社皷暖き　雲洞
暖や片道徒歩を午後よりす　同
暖や延べ來し溝の泥揚げも　竹梅
糠雨の野末にはれてあたゝかき　同
放下師の眠るも寺のあたゝかに　銀杏庵
溫泉の煙山を掩ひて暖き　同
井ほとりの散り藁や鷄も暖に　逗子王
暖や浚渫船物焚ける煙　同
土のふくらみ何の日出ん畑ぬくき　柳子
橋の人語暖に霧の脚切るゝ　同
揮毫日の暖き一間芳墨に　鶉衣子
草廬猶慈母あれば歸臥も暖に　同
とろ火にて煮ゆる藥や暖き　芳葩

暖や雨を寄せ來る南雲　同
暖き淨境や草に遊ぶ龜　芳潮
漁に濁る湖の色風あたゝかき　同
暖う反れ節の鞭を炙り矯む　邱妻
暖う仰ぎ見る巣かへ蜂の群　同
船泊りの尻切れ淵曉あたゝかに　鬼囚
納仕舞の暖くさを主は馬逸す　同
鳥さしの黐のびもよし暖に　漁火
長藪をぬけて旅茶屋あたゝかき　同
染めかへし蚊帳干す日殊に暖き　雀背
雨の度石肥ゆる思あたゝかに　同
湯槽干して相撲見る休暖き　句瑠璃
繻子帶に見ゆる埃も暖き　同
芽麥臼乾す戸もあたゝかの飴屋哉　天行子
鋸の齒を磨ぐ日旋風も暖に　同
暖や名物歌に殘る宿　六絲生
花木のみ伐り殘されて山暖き　同
ぬぐ足袋に風暖や里がへり　稻塢
蜘蛛の巣に花一片や暖き　南舟
浦風にならぶ小舟や暖き　陽岳
暖き日や湘南に移居の報　寒星

雨毎に赤む燈暖き　北斗青
暖や不時漁を祝ぐ沛祭　北鴉宮
暖き日和や桑を植え歩るく　省三
暖や掻きもせぬ水車口の草　桂仙
出郷を花散り名殘り暖く　碧疑滴
木挽く音も澁暖に濱を前　可致是
暖や苫屋の煙陽炎へる　飛雪
恩賜館暖に松の花粉とぶ　茶六
暖や湖上に鳥の影も見て　茶の門
煉瓦所暖かう煤煙いすら吐く　楊杞子
一雨毎のぬくさ蒲公英褪せし色　岡郎
聴法のつゝぬけ耳や暖き　思案
繭を破る蝶顆し園は暖に　鬼舟
同紋會ある町寺や暖に　蓮湖
杉垣の伸びたる刈るや暖に　蝶羽
姫茗荷の根分すれば蜥蜴暖に　水響
淺川の音もゆるみて暖かや、　南柯
繪馬掛けて安堵暖や鳥語るにも　空鳥
畔の杉伐る人や斧音暖に　雪魚

春雜吟

椿寺の夕闇に行路病者かな　蓮湖
釣瓶縄換ふ人寄りに蜂飛べり　同
伴へるは梨園の人か青を踏む　同
野茶屋ほとり臙見たり竹の秋晴れて　双柊子
欸乃もうなづかる里名竹の秋　同
松を見越しに淡雪の染場庭ら見し　同
虎杖や川挾む晒村の晴　明兮
虎杖や丘開墾に古碑得たり　同
蕨縄綯ふ山郭や虎杖　同
餘技のみに知らるゝ名行く春を佗ぶ　銀竹
贈られしもの春寒う他へ贈る　同
春ゆく日の上陸僧と揖し別る　同
淫僧も死せば哀れや落椿　芳葩
森椿こゝ暮れ早をとざす庵　同
かばかりの庵に人住む椿森　同
下を潜る水吸ふ石か陽炎へる　茶の門
藪の榎は鳥巣に枯れて陽炎へる　同
忘れ戸さしに出て梅林の斜月見る　桂仙
春祭の旗寒う風鳴りもして　同

屐菜連れのきらびやかを野は陽炎へる　鶉衣子
鹽田照りを陽炎ひぬ海は眠る晝　同
嫁ぐ君に返歌欲りす夜蛙鳴く　芳潮
寂さも放談の後や歸雁過ぐ　同
腹稿成りて垂れこまむ居に花挿しつ　雨翹郎
人のやつれを訪へば掃く椿夕白う　同
村芝居なる大ふれや爐の名殘　邱要
冴え返る徑なり涯の椿寺　同
凧に耽れば籠鳥は軒に春を鳴く　北斗青
賤が煙に凧浮くや海も凪げる里　同
姉の尼庵辭せしが椿眼に殘る　楊杞子
陽炎へる冠紐いみじく垂れにけり　同
冴え返る舳を押し汐の大搖れに　花駁史
雪解日和を鳴く鳥や佛間掃ひ居り　同
噴井あふれを風呂場にひくや花の宿　茶六
明日を塞ぐ夜の爐に鼎坐吟の人　同
野の梅や出村の家の疎ら建ち　飛雪
緩くまふ水車の光る春の川　同
小旋風の草光る長閑長嵩も　句瑠璃
花の山死美人のごと暮れにけり　同
月の柳を過ぐ煙濱に貝や燒く　黎白

窯場撰ぶ草山めぐり温む水　同
櫓めく酒亭あり鄕は白魚時　一箕
女學校舍の庭廣う群蝶流れけり　同
町並は更けて灯に積む雪淡し　竹美
淡雪の暖簾のかげの女かな　同
拾臼にいつ栖みし蛇や雉子見しい　六泉水
艶竹に刻る句や火鉢陽炎へり　同
藪の雨を聞く春寒の坊泊り　國郎
病み癖を病まぬ消息に春惜む　同
穀倉に忘れ提灯春の月　逗子生
棄いじりの手荒も癒えて溫む水　同
情に泣いて理に拾つ友や春寒し　珊春
法衣未だ身になじみ得ず春寒し　同
種馬所廣き門建つ木の芽晴　冲雲
木の芽ふく船寄り場荷に暮るゝ人　同
木の芽料理の亭出しが倩灯し待つ　浮碧樓
居室更ゆ日鉢楓芽ほぐれず　同
一鄕の草餅日牛馬市も張る　鬼四
菜ひき跡を鷄あそぶ草餅の宿　同
陽炎や誕生日を母屋に寄り炊ぐ　蝸牛
連翅亂るゝ中に立つ暮春退舍人　黎白

爽明き日の朝雨晴れて囀れり　愚案
月下更に紅梅の香をのせんとす　寒星
雨に寢て晴るゝ花の夜明しけり　朽葉
地震ありし今朝淡雪の使かな　稻塢
芋は芽を赤う吹くに籠を掃き立てつ　天行子
朝々の顏うつし井や水温む　雀背
宿場泊りせしが春雨しきりなる　銀杏庵
春雨や訪ひ寄れば目刺匂ふ宿　秋灘子
淺瀨探るに投石もしつ靑柳　北鴉宮
酒庫前の荷造りに仰ぐ春の月　蒼瞑
佛像刻むに日永かり軒も晴れまさる　碧疑滴
山一町持てば長者や花の里　朱雀
涅槃曇りの花菜路牛に孤着せて　失名

悼僧

解け去つて本來空や雪佛　・蝶羽

霧島山麓の溫泉にて

霧峯に對す溫泉上りを山燒繪の如し　水響

課題 若葉(十五句)晝寢(十五句)……五月五日〆切
夏山(十五句)紙魚(十五句)……六月五日〆切

注意　各題別紙、淡路國釜口村高田蝶衣宛中央公論句稿と表記の事

評論

希臘新帝即位

希臘の賢君ゲオルギオス一世は三月十八日午後五時十五分サロニカに於て兇手に殪れ給ひぬ、在サロニカ市倫敦タイムス通信員は現場の光景を語りて曰く、皇帝は人民を信ずる深かりしかば、唯だ一名の侍從武官を隨へて散歩し給ふこと屢々なりき、當日もフラングーリス大佐を伴ひ、歩行中、希臘軍の勝利、サロニカ、ヤニナ占領等を語り、その五十年の治世に光彩を副ゆるものなるを欣び、明日獨艦ゲーベン號訪問を樂む旨を説き給ひしが、此言終れる時、兇漢背後に迫り二歩の距離より皇帝を射撃したり、大佐は兇漢を捕へ、皇

帝は病院に送られしかど、途中絶命し給ひしなりと。

希帝の崩御は、歐洲諸皇室の上に悲雲を投げたりき、何ぞや、帝は各皇室と御親緣深く在ませしを以てなり、蓋し帝は丁抹王家たるシュレスウィヒ、ホルスタイン家に生れさせられ、現丁抹皇帝と英國皇帝とは其姻たり、露國皇帝の叔母君を皇后とし給ひ、又皇太子妃に獨帝の愛妹ソフヰア内親王を容れさせ給ひしを以て也、事情斯くの如くなれば、希臘王國は常に歐洲列强の保護と同情とを受け、一八九七年希土戰爭の大敗に際してさへ、甚しき屈辱を蒙ることあらざりき、加ふるに仁德の資、溫厚の質、眞に小王國の良君なりしに、今や斯人却て刺客の手に斃る、誰か人事の意外なるに驚かざるものあらん哉。

然かも吾人は哀風の裡、春花に接するの感ある一事あり、他無し、希臘皇室の地位大に安固となりたること是也。

顧みるにゲオルギオス一世は世襲的君主にあらず、一八六三年希臘國民議會の選擧したる所也、然るに一八九七年希土戰爭以來、大に民心を失ひ、就中四五年前テオトキ、ラリイ、マウロミカリス等諸内閣相繼げる時代に在りては、軍隊皇室に服せず、ゾルバス將軍等を中心とする陸軍協會が現皇室排斥を企て、一九〇一年皇太子の陸軍元帥を始め諸親王の軍職剝奪を定め、政府及議會を壓迫して、之を容れしめたる如き、實に暴戾甚しきものなりき、當時皇帝も屢々退位の意を漏らされ、英國軍艦の如き、事變惹起の際、皇帝を助けん爲め希臘近海に滯在せることすらありき、然かも今や是れ皆な過去の一夢なり、一九一〇年十月希代の良政治家ヴェネセロス氏、クリートより入りて内閣を組織したる以來、皇室と軍隊及人民との關係改善せるのみならず、今回對土戰役の大勝は、皇太子(今や皇帝)の名聲をして隆々たらしめたるにあらざる乎、從つて今日誰か亦希臘皇家の基礎も牢乎抜く可からざるを疑はん哉。

新帝コンスタンチノス陛下は、父帝崩御後、直ちに雅典(アテン)府に急行し、議會に於て即位の宣誓をなせしが、宮城議會間多大の群集、歡呼新帝の萬歲を祝し、熱烈の光景人を驚かしむるありき、新帝齡正さに四十六、所謂働き盛り也、吾人は遙かに其國土膨脹の機に處して、誤らず、往古の希臘を復活せしむるに至らんことを切望して止まざる也。

佛國政界の變調

一月大統領選擧以來、分裂の勢甚しからんとする佛國共和諸黨こそ、洵に醜態の極みなれ。

一月二十一日ポワンカレー氏に代り首相となりたるブリアン氏の內閣は僅かに五十六日にして顚覆したり。是れ何故ぞ、表面こそ選擧法改正案に對するクレマンソー氏一派の反對あり、上院に於て同案否決を見るに至れる爲めなりと雖も、實際の原因は更らに深大なり、何ぞや、大統領ポワンカレー、首相ブリアン諸氏の調和政策か、ク氏以下共和黨中の極端派の意見と背馳し、玆に一大溝渠を劃するに至れる也。

調和政策とは他無し、是迄軍國主義者、帝政派、羅馬敎會其他保守主義者に加へたる激烈なる壓迫を幾分減少せんとするもの是也、蓋し一八七五年佛國が新憲法を制定し共和政體を建設するや、帝政的傳說强かりしを以て、壓迫的政策も必要なりしと雖も、今や帝政黨無力となり、政敎分離も成功し、共和政治牢乎磐石の如く也、從つて幾分從來の態度を一變し、極端なる帝政派にあらざる一部右黨、保守黨、中立派には政權を分與するも弊害ありと思惟せられざるを以て也、然かもコムベ、クレマンソー等元老政事家の意は則ち之に反す、思ふに今後の佛國政界や漸く多事なる可きを疑はざる也。

ブリアン內閣の後を承けたるはバルツー內閣となす、バ氏は正さに五十二歲、一八八九年下院議員となり一八九四年デュピュイ內閣の土木卿たり、爾後サリエン、ブリアン諸內閣に內務、司法の椅子を占めたる人、議院の懸引に熟し、機敏の名あり、然かも氏も大體に於てポワンカレー、ブリアン一派の人たるを免れず、竊かに恐る、そのブリアン內閣の覆轍を履みて、不幸短命に終ることあらざるかを。

論より證據、三月二十六日バ氏が新內閣の政策を代議院に說明し、信任投票を求むるや、贊成二百二十六票、反對百六十二票、棄權百六十六票なりき、何ぞ棄權者の多きや、知らず是れ何の意味ぞ。

今や對獨的陸軍擴張を始め、重要問題蝟集せり、短命內閣相繼ぐが如きあらば、斷じて佛人の慶事と言ふ可からざる也。

巴爾幹の形勢

三月十八日より四月十七日迄に巴爾幹形勢の小變動など來せるものは、アドリアノーブルの陷落（三月二十六日）及び在チャタルヂャ土勃兩軍休戰約定（四月十四日）是也、ア府の土耳其司令官は善戰、支ふること六箇月なりしも、遂に敵せず、降服しぬ、玆に於て乎土耳其政府は益々講和を急ぐの必要を見、列强の斡旋を好機とし、屈服の決意をなすに至れりき。

然かも猶巴爾幹問題には幾多の難關無き能はず、何ぞや、列强はスクタリをアルバニヤ自治州の領土とす可く決定したりしかど、黑山國王は退位の決心を持して迄スクタリを爭はんとすれば也、次ぎに勃牙利と希臘とは共に伊太利の意見を無視しエジオン海諸島に發展せんことを熱望すれば也。又た土耳其に向つても領土割讓以外償金を獲得せんと希望しつゝあれば也。

知らず斯くの如くにして講和談判開かるゝとせん乎、其前途は猶暗黑分子無しと言ふ能はざる也。

排日案通過

四月十五日、米國加利福尼亞州議會下院、十六對五十四の多數を以て排日的土地所有權案を通過す、其内容下記の如し、

一、市民たる意志を表せざる外人並に市民たる資格なき外人が株式の過半數を有する會社は加州に土地を所有することを得ず
二、相續、賣買又は訴訟の結果土地を所有したる外人は一年以上土地を所有するを得ず
三、外人は五ケ年以上借地するを得ず
（註、日本人は歸化するを得ず故に市民たる意思を發表することを許されず）

顧みるに民主黨議員サンフオド等が排日案を加州議會に提出せるは、本年一月十三日なりき、然るに幾多時日の餘裕あるに係らず、我政府は之が妨止策を講ぜず、我が在桑日本總領事の如き、樂觀的報告をなして賜暇を求め、一日も早く難地を去らんとするに汲々たりき、而して問題急なるや、桑港領事館に責任者無きの醜態を演出せりき。

米人の暴戻は固より言語に絶へたり、然かも誰か亦た我が外務官吏氣質の劣等なるに驚駭せざるものぞや

（備考排日案は猶上院を通過するを要す、然かも形勢頗る危しと傳へらる）

ウヰルソン大統領の責任

排日案通過するや、米國大統領ウヰルソン氏は語つて曰く、予は該法案を可とする能はず、然れども遺憾ながら加州に干渉するの權能なし、切に日本人が此點を了解せんことを望んで止まずと、

何ぞ其聲の愀々として悲きや、恨らくは是れ一國元首の威嚴を全うするものゝ言にあらざることを、大統領斯くの如くんば、條約を奈何せん、對外義務を奈何せん。

西班牙皇帝と法王

四月中旬、吾人を驚かしたる報道二あり、西班牙皇帝アルフォンゾ十三世、觀兵式の歸路、無政府黨員に射撃せられんとし、辛うじて免れたること其一、羅馬法王ピウス十世、氣管支炎を病み、肺炎に變じ、重態に陷れること其二、

西班牙は無政府黨の本場、此事敢て怪むに足らず、唯だ最近寛仁の政治振り、見る可きものありたるアルフォンゾ帝の弑害計畫起りたるは、如何なる仁政も無政治主義者を緩和する能はざる明證也、ピウス十世は正さに七十九の高齡、清魂何時塵界を離れんも期し難し、然かも在位十年、堅固の信仰を恃んで佛蘭西諸國政府と爭ひ、屈服せざりし勇氣に至ては、歐米の信徒齊しく景仰す、即ち其位に在つて其位を辱しめず、今に於て死期至ると雖も、恐らくは遺憾なかる可き也。

南北離隔せんとす

宋教仁暗殺以來、袁世凱と南方國民黨との惡感漸く甚しからんとす、爲めに一旦民國承認を決定したる米國すらも、之が實行を躊躇すといふにあらずや。

如何なる行懸りあるにせよ、建國匆々、兄弟相爭ふ斯くの如きは、四億萬蒼生の一大不幸也、誰か今日の支那に達人無きを悲まざるものぞや

新刊批評と紹介

△トルストイ

中澤臨川著
東亞堂發行

「彼は眞に生きんが爲めに生きた人で」「昔から彼ぐらゐ眞の意味に於て生きた人は殆んど無い」とは著者が杜翁の一生に下したる鐵案にして、恐らく又翁ほどすべての人に共通せる感情と思想とを深く弘く經驗せる人は稀なるべし。翁は人間界に起りたる、又起るべき殆んどあらゆる思想感情を味ひ、嚙み碎き、加之之を嚥み下し、消化して、自己の肉と血と骨とを作り上げたり。夫れ故に翁の生涯は萬人の鏡なり。我等の生活の善惡美醜は直ちに翁が鑄上げたる明鏡――秋の大空の如く、深くして澄みに澄みたる明鏡の上に映る。翁は數百倍大いなる我等にして、我等は數百分の一に小なる翁也。幾多天才の事業と性行とは我等凡人と天地隔絕す。只ルッソーと此翁とは、我等と血を同じうせる親戚の如く感ず。なつかしき、何事をも打明け話の出來る叔父さんの如くして、而かも世界の何人よりも貴くして偉いなる人格よ！　我等は翁の一生を憶ふ時、無限の感謝と無限の鞭韃とに逢ふ心地す。

中澤臨川氏は恐らく日本に於ける最も深き露西亞研究家にして、殊に杜翁の研究に至つては世界のトルストイアンに比しても遜色なかるべし。氏が如何に深き同情と洞察の眼を以て杜翁の生涯を讀吠し且つ批判したるかは、本誌の數月に亘つて掲載せられたる杜翁論之を證して餘りあるが、此編述に其等を一纏めにして、訂正增補せるもの、殊に卷頭に書き加へたる一章の如き何等の名文ぞ。近來の名著として江湖に推薦すると同時に、之を歐文に譯して日本にもかゝるトルストイ研究家あるを世界に知らしたき心地す。（定價一圓三十錢）

△倒敍日本史

吉田東伍著
早稻田大學出版部發行

古に精しくして今に粗なるは一般歷史書の弊也。現代の眼を以て古代の史蹟を見るは人間心理の常態にして、又歷史の要は、最も現代及び現代に近きことを知るにありとは吉田博士の持論なるが如し。例敍日本史は即ち此主張に基いて、先づ現代より遡つて古代に及び、現代に精しくして古代に粗なるの方針にて敍述したるものにして、多少倒敍よりも倒册に近く著述よりも編纂といふの嫌なるが如きを覺ふるも、兎に角國史界に於ける空前の大册にして、最も粗なる古代史の如きも、現に出版せられ居る如何なる古代史よりも精しといふを以て見ても其大出版物たるを推するに足るべし。今出版せられる「國政發展編」と「憲法制定編」丈けについて見れば其出來榮必ずしも感服すべからざるも、德川期、中古、上古と遡るに從つて恐らく博士獨自の學殖と識見とを見るに至らんか。我等は全部の出版を待て更に精評することあるべし。（定價各册一圓三十錢）

△ベルグソンの哲學

錦田義富譯
警醒社發行

最近思想界の大立物たるベルグソンの哲學思想を解り易く紹介せんとしたものである。全篇上下に分ち、上を直觀の哲學、下を流動の哲學と題し、前者は認識論上、方法論上の、後者は形而上學、實在論上の議論が載つてゐる。素より小册子であるから此書に依つて完全を望むことは出來ないが、比較的能く理解せられ統一せられて、ベルグソン哲學の大體を窺ふに至極適當なる良書である。（定價七十錢）

△烙印

小宮豐隆著
春陽堂發行

論壇の人として知られた豊隆氏が創作壇に踏出した第一歩である。「盛夜」「影」「芝居茶屋」「烙印」の四篇を收む、中に就いて「烙印」は最も力の籠つた作であつて、デリケートな筆で以て、即いたり離れたりしてゆく男と女との氣分を芳醇な空氣の中に描き出したものである。此方面に於ける作者の手腕の尋常でないことを證してゐる。(定價八十錢)

△畜生道　平山蘆江著　籾山書店發行

文筆專門の人でない著者の小說として多大の興味がある。「公判」「畜生道」「長者町」「二黑の巳」及外四九篇の短篇を輯めたものである。素より傑れた物といふわけにはゆかないが、皆取り〴〵に面白い。寧むらくは著者の如き人に依つて、今の文學者が好んで開拓するやうな限られたる狹い範圍を超えて廣い人生の局面を描出して貰ひ度いものである。此意味に於いて本書は更に意義を新たにして、我文壇に歡迎せらるべき價値を有つてあらう。(定價壹圓)

△日本精英　幸田露伴著　聚精堂發行

本書は日本人物の精英を取りて、其面目風丰を傳へんとしたるものなり。乾坤二册に分れて千六百頁の大册。日本史上の精英は殆ど餘す處なく收めらる。據るに史實を以てし、雄渾の筆、一讀卷を措く能はざらしむる者あり。之を人名辭書と見るは抑も末ならんも而も亦座右に缺くべからざるを信ず。(定價金五圓)

△佛國革命とナポレオン　奈翁會編纂　隆文館發行

奈翁伞傳の第二卷として發行せらたもの。此篇最も興味ある佛國革命を背景として奈翁の即位に至る迄を叙す。蓋し靑少年の必讀すべきものたるを疑はず。(定價壹圓五十錢)

△ジユリヤス・シーザー　坪內逍遙譯　早稻田大學出版部發行

沙翁のジユリヤス　シーザーを博士が現代語に譯せられたものである。博士の此事業は今更之を稱揚するのは愚である。其韻語と言ひ其用意と言ひ、今の我文壇に於て到底得難き收獲である。原書を讀み得ざる者は勿論此書に依つて沙翁の妙味を味ふを得べく、原書を讀み得るとなす者も亦此書に依づて大に敎へらるゝ所有るであらう。(定價壹圓三十五錢)

△漫遊人國記　角田浩々歌客著　東亞堂發行

逍遙博士此書に序して曰ふ。此漫遊人國記は諧趣と詩趣とを等分にしたる一種の日本文明史論なり。哲學的說明を加へたる本邦史蹟の活動寫眞なり。」と。蓋し在來の粗漏杜選の人國記とは異り、鋭利なる觀察を以て日本各地を踏破し、行く處歷史に科學に哲學に、あらゆる事象を發堀して讀者の眼前に展開せらる。讀者は坐ながらにして遊行の興味と、知らず識らずの中に新たなる知識とを修得すべし。(定價三圓)

△大日本閨門史　白柳秀湖著　東亞堂發行

本書は婦人を中心として見たる日本歷史である。事件の裏面には必ず婦人の有るあり。女子の覺醒、女子の解放を叫ばるゝ今日、日本歷史の糸を辿つて、其糸を操つてゐた婦人を硏究するは時を得たる企と謂ふべきである。(定價二圓五十錢)

△現代思想講和　大住嘯風著　丙午出版社發行

本書は混亂せる近代の破壞思想懷疑思想から甦らしめんために、最近

思想界の大立者、ゼームス、オイケレ、ベルグソンの哲學思想を紹介したるものである。先づ初めに現代思想の因つて起る原因と徑路とを明にしたるなど同情あり親切ある遣り方である。文章極めて平易、何等哲學的知識を有せざる者にも充分理解せらるゝやうに書かれてゐる。即何人も必讀すべきものであらう。(定價壹圓廿錢)

△三井と三菱　大塚豐治著　實業之世界社發行

我邦實業界の二大黨三井三菱とを論評したものである。岩崎家の歴史發達、三井家の沿革、兩者の比較から日本財界の狀態を知ることが出來る。(定價壹圓六十錢)

△歐米の政黨政治　田中萃一郎撰　籾山書店發行

憲政擁護の聲今日盛に聞ゆと雖も、憲政の眞意義は尙未だ一般に知られざる如し。此時に方つて歐米の政黨政治を說いて我日本の現狀を刺戟せんとす。國民一般の一讀すべき書たり。(定價八十錢)

△國家と宗敎　小崎弘道著　警醒社發行

政治と宗敎との關係より說き起して我國從來の政敎制度を論じ、三敎會同の意義に及び、附錄として神佛基三敎の現況等を載す。(定價八十錢)

△偉傑の雄飛　箕作元八著　博文館發行

偉傑とは誰ぞ、ハンニバルである。此書はハンニバルを中心として羅馬の發展を說いたものである。本書は西洋史新話の第四冊として發刊せられたもので、興味を中心にして西洋史を習得することを得る、靑年必讀の良書である。地圖を附し、年表を附して五十五錢は至廉也。(定價五十五錢)

△明治天皇聖德錄　土方久元著　實業之日本社發行

明治天皇の御聖德を傳ふる者多しと雖も、此書に及ぶ物無かるべし。此書は土方伯が親しく陛下に咫尺して、其御明德に感激し奉りたる物語を輯めたるものなれば、今眼の當り陛下の御聖德を仰ぎまつるが如き心地す。(定價四十五錢)

△A New English-Japanese Dictionary　實業之日本社發行

中學及び高等學校程度の學生の實用を主眼として編纂したもので、誠多に用ふることなき專門語の如きは必ずしも語數の多きを誇りとせず。普通の讀書作文に必要なる程度に止め、其方面の叮嚀懇切を旨としたのが本書である。(定價二圓)

寄贈を受けたる新刊書尙數十種あれど頁數超過の爲め之を次號に紹介することとなれり

嶋崎藤村氏著

小說集 微風

綠蔭叢書第四編

熱き地の息に混じて凉しき微風は通ひ來る―斯くも複雜無條理にして矛盾に滿たされたる、殆んど名狀し難き生涯は、作者をして本書の創作に筆を執らしめたりと云ふ。短篇の集と云ふと雖も、中に『幼き日』の如き百二十頁を超えたるものあり。

平福百穗畫（口繪三葉）

初版即日賣切

再版發賣

後の新片町より

藤村氏海を踏んで遠く遊ばんとするに當り、置土産として遺されたるは即ち此の一卷也。柳橋七年の僑居、不斷の苦作の傍らに、其の折々の感想を錄せるものにして、藝術に對し、生活に對する靜思瞑想の結晶と云ふべく、著者の天才的閃光は、一字一句の間に輝きて、斷章數十片皆深奥の意味を語らざるはなし。何人にも興味多き感想記たると共に、文藝入門者が座右の侶として敎へらるゝ所多かる可きを疑はず。

新刊

袖珍三百六十頁

定價金六拾錢

郵送料六錢

破戒

綠蔭叢書第一編

著者が詩より物語に轉ぜる長篇の第一作。新文藝の先驅として世を騷がせたるもの也。久しく品切の處今回新たに製版を了へ增刷發賣す

▼紙數五百八十頁▲定價八十錢

▼鏑木淸方氏口繪▲郵送料八錢

春

綠蔭叢書二編

全一冊

價金九拾錢

郵稅八錢

家

綠蔭叢書三編

全二冊

七拾五錢宛

郵稅八錢宛

東京麹町區飯田町三丁目二十五番地

新潮社

電話番町二二二三番

振替東京一七四二番

(中付二の一)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

尤も優逸なる理化學參考書

理學士柴田初次郎　理學士田邊尙雄、佐藤政資共著

理論解說 最新物理學精義

【新刊發賣】

洋裝菊版
クロース上製
正價金壹圓廿錢
郵送料拾二錢

本書內容の特色

本書は高級受驗學生の參考書として更に進んで斯學を專攻せんとする諸君の爲めに理化學全般の理論を尤も有効且つ容易に理解せしめん事を期したり。

一、物理學上化學上の法則定義其他必要なる事項は細大漏さず悉く本書に輯めたり。

一、行文は優麗にして平易明快解釋說明は懇篤丁寧にして且つ正確なり。

一、序列の方法は文部省新教授細目に依り且つ一章毎に練習問題として三十五年以降の官立學校入學試驗問題を分類排列して詳細なる解答を附せり。

一、說明の眞率周到にして義理の明晰なる解法の合理的にして一貫せる系統を具へたる挿圖の精密にして豐富なる復習問題の夥多なる現代他に其比を見ず。

理學士田邊尙雄　山口敏共著

理論解說 最新化學精義

【新刊發賣】

洋裝菊版
クロース上製
正價金壹圓卅錢
郵送料拾錢

發行所　東京市神田區南神保町一　振替口座東京一九二三三　日進堂書店　電話本局二五四一番

正に是れ◎現代文華の精英

文藝倶樂部

五月號

正價 廿五錢 郵税二錢五厘

◎新講談＝籠釣瓶……錦城齋典山

△夏の行商……岡本霞城
△魚餌捕り……いちよ
△演藝當座帳……鬼太郎
△子供芝居……鷹阿彌

●東京の女琵琶師……高橋江生
●五郎十郎蝶六……曉江
●いかもの通信……閑太郎
●角界一ト昔……一味清風
●行司と呼出し……竹の島人
●攝津大椽の隱退擧行……中谷青霞

小說

繁野の柩……宮崎三昧

楔子……西村醉夢

寄席の女……井澤弘

△有樂座女優劇……一白生
△櫻陰時事……秋湖
△人參物語……白松庵
△本町誌……思案外史

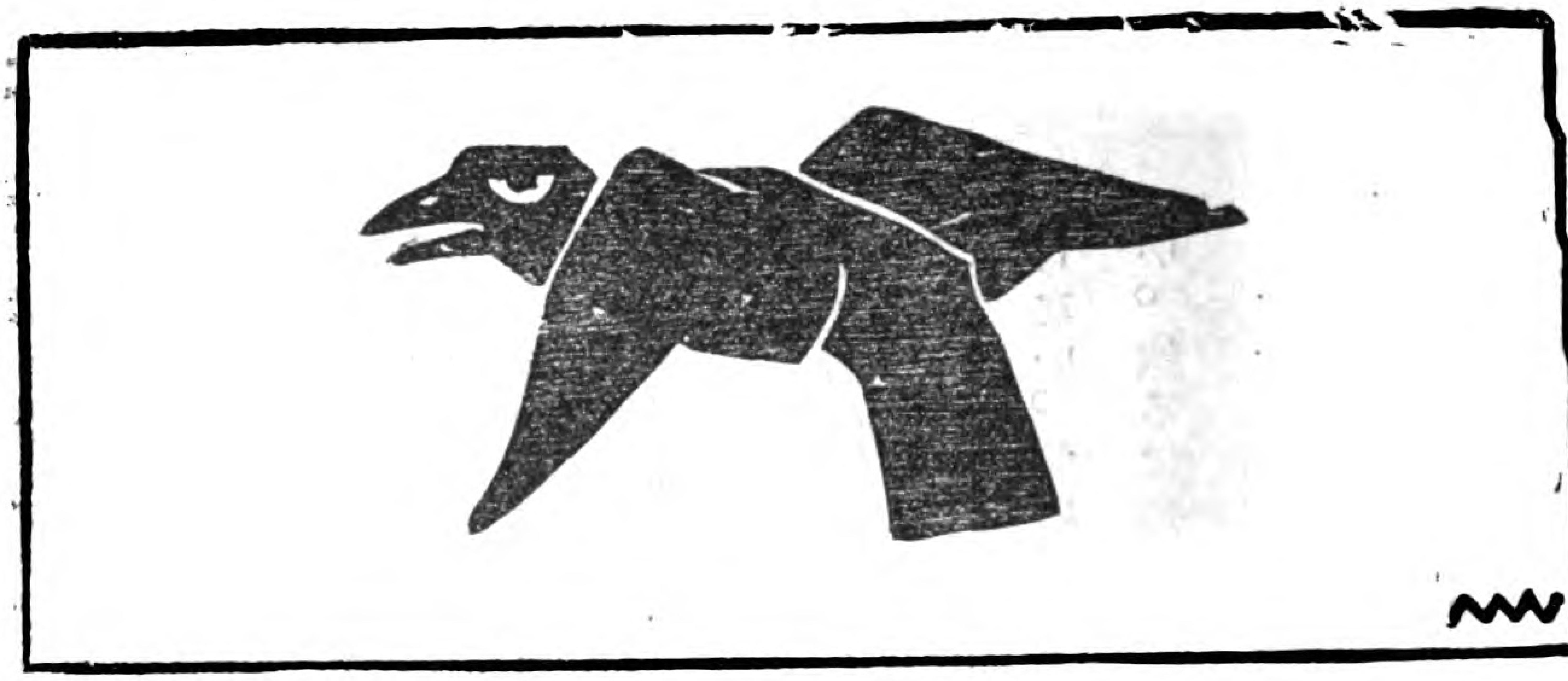
●元祖景物圓喬……草生
●諒闇中の神樂師……迎月子
●花柳界覺え帳……おはる
●六町吹流談……江澤春霞
●四國中國の旅……迎子
●思伊豆修善寺嘶……尾上梅幸

◎落語＝粗忽の引越……柳家小さん

(中付二の四)

博文館 (東京日本橋區本町 振替東京二四〇番) 取次(全國各書店)

[illegible]店舗及卑猥なる賣品の[illegible]は謝絶す



廢墟

小川未明

一

だらけたやうに自然が姿を取り亂して、赤や、白の色彩が良一の眼にはみだらな女が着物の前を崩して、下着を露み出して坐つてゐるやうに見えました。不思議な感覺が血管をめぐり始めて、何となく眠むいやうな押へ切れない盲目の鬱勃たる感情が、時々頭を曇らして夢心地のやうにするのを感じました。良一はいかなる場合にも自分の意識といふものを明かにしてゐたかつた。頭は常に透徹して、何を見ても、何を聞いてもよくはつきりと分り、また其れに對して一々批評が加へられるやうにしてゐたかつた。而して自から自分の頭の好いといふことを誇つてゐたかつたのであります。だから春が來て、かういふやうな不安な感覺を感じますと、寧ろ彼の冷酷な、寒い、神經も細胞も竦んでゐた

冬の方が却つて好かつたやうな氣がいたします。其の癖、彼は寒さは人一倍强く感ずる。冬が春より好いといふ理由はないといふのを知らぬのではありません。

良一は今迄枯れてゐたやうな木に、若々しい綠色の芽が萠して來たり、今迄霜柱が立つて肌が凍傷を起して石のやうに堅かつた地から、何の草か知らないけれど黃色な芽を生いて來始めたのを見ると、其處に大きな力のあるといふことを感じなければならなかつたのです。かういふやうに申し合せて、すべての地の胎內から隱れてゐる力が現はれて來る。それは不思議でないか？　たとへばどうして、あの灰色な、枯れたやうな木の枝から、あんなうす紅の美しい花が咲くであらう。あんな色彩は、何處に隱れてゐるのだらう。また同じいやうな灰色の枯れたやうな木の中でも、ある他の木から、白い花が咲く、またある他の木からは眞紅な花が咲く、何處にそんな色彩が隱れてゐたのだらう……あの灰色の枝を手折つて、中を裂いて見ても、たゞ白いばかりであつて、何處にもあんなやうな白や紅の色彩は見付からない。此の黑い濕り氣のある地を堀つて見ても、何處にもそんなやうな色彩は拾ひ出すことが出來ない。然るに每年春になれば、其等の枝から美しい花が咲く、其等の色彩は何處に隱れてゐたのだらう……これが不思議でならなかつた。

良一には、このすべての物の胎內に隱れてゐる力が現はれる春に對して、また特別の恐怖が感ぜられたのであります。それは自分の胎內に隱れてゐる病氣が、いつ外に發して來ないとも限らなかつたからであります。每年今頃の自然は、眼の前に美しい色彩ばかり生むのでない。恐しい病ひも隱れてゐる場

處から大膽に歩き出して來るのだ。黒い醜い姿をして人間の肉を喰ひ、靈魂を喰ひ、すべての者の生を嚙み詛しにかゝるのである。……かう思ふと春の來たといふことが、良一の心に暗い影を投げてゐます。

良一は自分を理性の勝つた、よく自分を制して行くことの出來る人間だと信じてゐます。而して、自分ばかりは他の人のやうに氣が狂ふことがない。たとへ幾分の遺傳はあつても、この澄み切つた頭の批評力を曇らすことは出來なからうと信じてゐます。彼は成たけ自分の體をある烈しい動搖の裡に置かないやうに心掛けてゐます。彼は賑かな巷の中を避けたばかりでありません、內的に自分の感情が狂ひ始めた時、冷かに理性で其れを押へて行くことに力めてゐたのであります。而して自分にはそれがなし遂げられる如く感じてゐます。彼は孤獨の生活を選びました。孤獨の生活が人間のすることゝして適してゐるとは思はない。けれど少なくも自分にとつては幸福であるからと信じてゐたのであります。男と生れて來て、年頃になつてゐても女と結婚をして樂しく二人で棲まないといふことは不自然であるとは考へてゐました。けれど家庭といふものを作り、いろ〳〵の他人との關係が出來るに從つて、複雜な感情を經驗せなければならぬ、また、眠つてゐる感覺を呼び起すといふことは、それはちやうど金魚の入つてゐる裂のついた硝子球を振つて、中に入つてゐる水を烈しく搖るやうなものゝやうに考へられて、何時靈魂の入つてゐる器が破壞するかも知れぬやうに不安に考へられたからであります。それで、自分の精神の持主である自分は、其の裂の入つた弱い器を成たけ動かさないやうに、一處に昵として置くやう

に、自分といふものをすべての煩雜から避けやうとしました。すべての關係から離れて靜かに置かうとしました。良一はこれが智識あり、自衞を知る人の取る手段であると考へ、またかうしてよく感情を制して行くことの出來る自分を自から尊敬する念を禁じ得なかつたであります。

二

良一はだらけた春の壓迫に堪へられない時がたび〳〵あつた。徒らに心臟の皷動が熱い波の押し寄せるやうに高くなつて、息苦しく迫つて來るやうな抵抗の出來ない本能の力を感じました。彼は自からこの盲目の自然力を感じながら考へたのであります。この怖しい魅力があつて、すべての生物は繁殖をして行くのである。生物として生れて來た上は、この力の支配を受けないものは一つもない。この熱い力の體內に燃えないものは一つもない。不可抗の力である。然るに此の力に打ち勝たうとするのは不自然である。自然はあらゆる色彩で誘惑して、この芳醇な酒のやうな香氣ですべて意識を醉はして盲目にしてしまふ。而してたゞ生殖の作用を營ましむるのである。曾てはかり知るとの出來ない快感の豫測と、奇怪な想像をもつて胸に迫つて來るのである。而して何人も遂に碎かれてしまふ。これが卽ち生の快樂であれば、人間其物の究極の幸福でもあるのだ。これあるがために生物は存在してゐるともいつていいのである。何のために生殖の作用を營むかといふやうなことは畢竟考へ得られないことであるが、生物はこれを中心として生活してゐるといふことは爭はれない事實である……と考へたのでありました。

年頃となつて男て女を持ち、女て男を持つてゐるものはこの苦しみから脫がれる筈てある。而して不自然にも熱烈に本能が要求しつゝあるのをなし遂げない人々が苦しみ、悶え、憂欝に日を送つてゐる譯てある。本能の力は常に原始的てある。道德とか生活のためとかいふやうな口實は人間が曠野の中に設けたみすぼらしい力のない垣根のやうなものてある。本能の荒れ狂つた時は、この垣根を破つて縱横に走つて、平等に人間も、動物も、あらゆる區別のないたゞ自然の產物として生物といふもの丶位置に引き戾してしまふのだ。虛僞といふものを排して眞の姿に歸らうとする。けれど此の社會ては、其の虛僞を保つために人間が苦しい努力をつゞけて行かなければならないと思ひました。

良一は自分の禁欲を主張してゐるのは、この虛僞のためばかりてない。自衞のためてあると信じてゐたのてあります。彼は目を擧げて若い男や、若い女が道德と習慣に支配せられて、この苦しい本能に驅られながら、身を悶えてゐる有樣をしみ〴〵と見てゐるのてありました。往來を步いてゐて、熱い吐息を吹いて行く女を見たばかりてありません。眼が燃えるやうに光つて、體が炎を浴びてゐるやうに波打つて、蛇の如くのたくり狂ふ本能に身形も構はず、人前も構はず囈言をいふて行く年增の女も見たのてありました。良一はかういふ種類の男や女を見るのが、何となく自然性の殘忍を思ふうちにも、少なくも自分にとつては面白かつたのてあります。

『己ればかりは、この力に支配されないぞ。もつと春がだらけて、人々が狂ふて、狂ふて燃えるやうな苦痛を經驗すればいゝ……』と心のうちて思ひました。良一は、かうしてみんなが我慢がし切れなく

なつたなら、きつと其處にも此處にも獸のやうな行爲を臆面もなくやるやうになるだらう……また其處にも此處にもこんなやうな男と女との關係が見られるだらう……いつか此の社會全體から道德といふものが滅びてしまつて、野獸の群りのやうな世界と化つてしまふだらう……春がます〳〵だらけて、物狂はしくするやうな紅や、紫や、白の强烈な色彩が、自然にも、人間にも、入り亂れて多くの若い者の胸の血を躍らしてくれゝばいゝ。而して全く盲目とさして、思慮といふものを頭の中から奪つてくれゝばいゝと思ひました。良一はかうした世界の中で、自分ばかりは一人强いて狂ひ暴れる本能の力を意志の力で押へ付けて、常にはつきりとした頭でゐたいものだと空想に耽つてゐたのでありました。

良一は、自分ではかう考へたり、思つたりしてゐたけれど、窓の外の世界が靜かに、しかも生溫るく日の光りに蒸れて眠つてゐるやうに、心のうちにはたへず本能の生溫るい霧が漲つてゐるやうに體內には、何等か鬱勃とした、暗い、而して物狂はしい感情が頭を擡げてゐて、機を見て破裂しかゝつてゐるのでありました。

良一は哲學の書物を讀んでゐたけれど、此頃はもう書物に氣が落付かなくなりました。彼は時々眤と瞪と室の中のある一點に据えて、茫然として何か空想に耽つてゐるのであります。而して哲學上の問題について、考へるやうな氣になれなかつたのです。また生活のために譯しかけてゐる美學の書物など、だん〳〵手に附かなくなつて行くのです。良一は學校にゐる時分から自分は終生獨身でゐなければならぬと決心しました。而して成たけ感情をそゝるやうな問題から外的にも內的にも遠ざかつて、心を平靜に

して行かなければならない。自分には怖しい精神病の遺傳があるのだから〻考へて來ました。それて、自から强いて色慾といふことから遠ざかつて、頭を智的な哲學問題に埋沒しやうと思ひました。出來るものなら自分といふものを石のやうな冷かな性格に改造しやうと思ひました。

三

良一は、今まで氣に付かなかつた下女室てする物音まで耳を澄して聞くやうになりました。

彼は往來を歩いて、多くの女を見なくとも、家にゐて無智の二十歳の女が、本能の力に胸のうちて苦しみながら人知れず悶えてゐる有樣を眺めることが出來たのてありました。晝間空までが倦怠して欠伸をしてゐる吐息のやうに、窓際に落ちて來る生溫かな風は、彼女をうつら〳〵と居眠りに陷らした。女はだらしなく口を開いて、頭髮の澤山な大きな頭が、心地よささうに前後に搖らいてゐる。健康な脈管を流れてゐる血液は、さながら此の女の春を思はせるやうに、美しいうす紅の色彩が花のやうに、皮膚を色つけてゐる。良一は、忍び足をして障子の破れた穴から、裡の樣子を見守つてゐたのてありました。

良一は走つて窓際に行つて、氣を散らして、他のことを考へやうとして外の景色を眺めました。暗い、しんめりとした重々しい空氣は、沼のやうに木々の葉の繁り合つた靜けさが譯もなく自分の心臟の鼓動をはつきりと耳に聞くやうな氣がして、言ふことの出來ない不安に襲はれたのてありました。良一は、始めのうちは往來て、女に厭らしい考へから眼を付けたり、家にゐて下女の室を覗いたりすることを、理想を抱いてゐる男のする行爲として耻かしいと思つたのてす。而してこんなことは自分以外に誰れに

も分る筈がない。こんなことは自分獨りが知つてゐるばかりで、他人に知られずに濟む、而して小さな輕い卑しむべき行爲に過ぎないのだといふ位に考へて自からも許してゐたのでありました。

けれど此頃では、なんて本能の力をそんなに卑しまなければならないのだといふやうな疑問が頭に起つたので、それについて良一はいろ／＼と考へたのです。けれど、どうしても、今迄自分の考へて來たやうな其人の見識とか、學問とか、身分とかいふものは一向價ひのない、空虛な信仰であつたやうな氣がいたしました。而して、本能といふものは、たとへそれがどんなに是迄人間が卑しいとか醜いとか言つて來たものであつても、自然力として、動物として生れて來た者が經驗する事實として、打ち消すことが出來ない。而してなんてそれを人間が卑しいとか尊いとか言ふやうなことが出來るだらうと疑つたのです。いはゞ人間には、自然の力に價値の差別を付けたり、善とか惡とかいふ權利も、智識もないものではないかと考へるやうに至つたのです。本能を呪ふ人間は、生れながら本能の渦中に呼吸してゐる人間でないか？ かう考へると、良一は自分の卑しいと思つた行爲も今は決して卑しい行爲でない、其の本能の要求に滿足を與へるのが生きてゐる間の自分のなすべき務めである……とかういふやうに考へたのでありました。

下女の名はお靜といつた。良一は二人で一つの家に棲んでゐたのでありました。異性に對して、特に隔てをつけてゐた良一は碌々お靜と物を言つたことがありません。而して、物を言ふ時は、必ず嚴格に命令するやうに言つたのです。こんな場合にも彼は自分の腹と口との相違を感じたのでありました。良

一はすべての女から馴々しく話をしかけられるのを恥辱のやうに感じてゐたのです。彼は自分を考へる時は常に寂しく孤獨に高く立つた山の姿を目に描いてゐました。而して女の甘い誘惑によつて、馴々しく、仲間の中に引き入れられるのを恐れてゐました。自分はどうしても終生孤獨でゐなければならないのだ。かういふやうに考へると寧ろすべての女から、辛く、情無くしてもらひたかつた。彼は女の誘惑が自分の理性を亂すものだとして人一倍恐れてゐたゞけ、女の甘い誘惑をしみ〴〵と身に感ずることが出來たのであります。女の挑發的な表情や、眩惑的な色彩が他(ひと)一倍強く感じたのでありました。

良一はかうしてすべての女性と關係を絶つてゐても、尚ほ自己の本能は滿足出來ると知つたのであります。彼は本能の滿足は必ず觸覺によらなければならないものでない。良一には、觸覺よりも、聽覺よりも、嗅覺よりも、味覺よりも、寧ろ視覺によつてこの滿足が得られるやうに考へられたのであります。觸覺は、度を過した時には、もはや何等の感覺を與へない。聽覺は、容易に心を倦ましめ疲れさしてしまふ。獨り視覺によつた本能の滿足は無限に得られるものであると考へてゐたのでありました。

良一は視覺を樂しますためには、どんな恥辱も甘んじて受ける氣がしたのであります。他人は自分を見て卑しいと思つたとて、自分は決してさう思はない。自分がさう思はなければそれで自分は安心しなければならん。他人がどういはうと、自分の我(エゴー)がそれを認めなければ差支ないといふやうに感じてゐます。

良一は別に用もないのに、お靜のゐない時を見計つて下女室の裡に入つて行つた。而して安い油の香

りが、日蔭の三壁に逃げ處もなく、空氣の裡に重々しく漂つてゐるのを思ふ存分に吸ふたのであります。而して、其のあまりに取り散らしてあつた汚れた着物や、下襦袢などを、呢と心ありげに眺めてゐたのです。而して思ふ存分に視覺の力のつゞく限り、本能の欲望を滿足し、空想してゐたのであります。けれど良一は、決して其等の物に手を觸れやうとはしなかつた。そんな穢ないものに手を觸れるのは手が汚れるのを恐れたのでない、寧ろ空想の美が破壞されるのを恐れたのであります。垢染みた布に觸れた時の氣味惡い冷覺が、氷を摑んだやうに指頭が戰ひるであらう……空間を隔て見れば、其等が堪らない程快感をそゝるのである。良一は他人の品物に用もなくして忍び込んで來て手を觸れるのは盗むといふ心以外にはなすべきことでないといふやうな癖見を持つてゐたが、ついに其様な考へも打ち壞して、だらりと下つてゐた襦袢を手に取つて眺め、眺めたばかりでない嗅ぐといふことが一層奇怪な本能を滿足させることが出來るやうに感じて犬のやうに室の内を狂ひ廻つた。而して瞬間の後に怖しい慌しさを覺えて眼を四邊に配つて警戒した。彼は力拔けのしたやうな失望と自からを嘲ける私念に全身を支配されて、急に幻滅の惡冷たい悲しみを味つた。

「己は、氣が狂ひかけてゐるのかも知れない」と小聲で心に問ふて見るやうに言ひながら、やはり自分は視覺の滿足に甘んじてゐなければならぬと思つた。

良一は食事の時膳に向つて、お靜に給仕をさせました。而して彼女の平たい大きな、何の特徴もない平凡な顔を、隙を見はからつて眺めたのです。而して心のうちで「彼女の顔には性慾以外何の考へてゐ

るところもない」といふやうなことを考へてゐました。良一はちやうど十五六の少年のやうに、理由もなくはにかんで、無智な（人間としてもずつと自分より劣等だと考へられる）下女に對してすら顏と顏を合はすのを憚つた位でありました。而して物を言ふ時には、きつと嚴めしい命令的な言葉しか出て來なかつた。其の言ひ方が自分でも、主從の關係をはつきりと付けたやうな、權利義務を主張したやうな、いやに階級的な言葉であると思つたのでありますが、どうしてもそれを改めて、滑かに如才なく言ふことが出來なかつた。なんて、かう平氣に言はれないのか、自分でも分らなかつたのであります。良一はそのたびに心と口とは常に一つであるものでないといふことを知つたのです。意識的でなく、無意識的に。

　良一の眼は、かうして餌に飢ゑた狼の眼のやうに、平凡な、彼れ自身考へるが如き性慾以外に何も考へてゐない女の顏に止つてゐたばかりでない。汚れて脂じみた着物の前がはだけて、扁平な厚みのある、幅のある胸のあたりに止ることもありました。而して、尙ほ眼はそれでも喰ひ足りないやうに慌しく焦立つて、彼女の圓味を持つた驚くべき程偉大と强壯とを思はせるやうな膝頭に、燒き付くやうに喰ひ入つたのでありました。而して女がしばらくも靜止せずに體をだるさうに動かしてゐる。微動する。肉の運動を見逃さないと思つてゐた。口は締りなく開いて、白い齒が見えて、氣が遠くなつて行つた。而して眼ばかりが怪しい光りを放つてゐた。遂に良一の頭は昏亂して、胸が塞がるやうに息急しくなつて來た。彼の心が全くの野獸に化し終はせたなら、理性が感情を押へて幾分かの勝利を制し得なかつたなら、

彼は前後を忘れて女を其處に押し倒したか知れなかつた。

良一は自分の室に歸ると、徒らに哲學書を見詰めてゐた。字の並んだ行がぼんやりと浮き出て、それがだん〳〵朦朧となつて幾つかの黑い線がぼやけてごつちやになつて、全くの白紙になつて見える程、呢として眼を机の上の書物に晒らしてゐました。而して、自分といふものゝ價値を考へて見た。此の世の中では、人生のために、またある大きな自から信ずる事業のために働いてゐる人間がある、其等の人人に比較して目下の自分といふものを考へて見た。而して自分を卑しいとはどうしても思ふことが出來なかつた。却つて、この本能の悶えを感じない人は、自由を束縛せられてゐる人の如く考へた。けれど良一は、世間には多くの人々が、考へると直ちに實行してゐるやうに、女といふものと妥協することが出來なかつた。たゞ鏡に映る人影を見ることだけを許された、あの哀れな運命を持つて生れて來た機織女のやうに、自分は視覺によつて本能の悶えを癒すといふことだけしか許されてない人間の如く考へられた。

彼には、色情性發狂の遺傳がある。だから目に見えない、何處かに隱れてゐる怖しい病氣が、今にもある刺激と混亂によつて暴裂して自分の身を滅ぼしはしないかと思つてゐたのでありました。

『どう考へて見ても、自分は長く生きてゐて、生其物の幸福を味はなければならない。』と良一は心のうちで常に考へてゐたのでありました。

ある當然死刑となるべき重罪犯の囚人が、其の情婦から差し入れてくれた毛布に附いてゐた一筋の細毛を見出して、奇怪な想像を逞うすることが出來たゝめに、殆んど狂喜して、覺えず叫んだといふことを、しば〳〵良一は思ひ出した。而して、人間の想像とか空想とかいふものは其れ程の快樂を自身に持ち來たすものであるといふことを知つたのであります。

良一は、獨りでゐる時にも、お靜の貌を幻に描いた。道を歩いてゐる時にも彼女の體量のある身體を縁板の上に運ぶ時に、鈍然と立てる底力の籠つた響きと太つた肉の揺れる憂欝な腰付きとを眼に描いたのでありました。……良一は、ふと道の上に立止つて考へた。

『かういふことばかり自分は考へてゐるが、いつたい自分は何うしたのだらう……』とかう心のうちで言つて、彼は眼前に開いた空虚を見詰めて無限の寂寥に襲はれたのであります。

春は、都會の上に垂れ下つてゐて、大空の眞の色を隱したやうに、太陽の光りまでうるんで見えました。遠近に、瓦葺の市街の屋根が重なり合つて、鱗のやうに光つてゐます。彼方には寺がありさうな、小高い丘には木々を彩つた緑色の衣を被せたやうに若葉が見えます。而して、人は白く乾いた道の上を、自分よりいづれも高尚な理想を抱き、もつと生活に密着した、有益なことを考へながら歩いてゐるやうに思はれました。

良一は、この春の光りの漲り渡つた廣い往來の上に立止つて、我が心の救ひを求めるやうに、『……？　……？』と神のやうに權威ある靈界の偉大な戰鬪家の名を呼んで見やうとして其の名が

思ひ出せなくて惑ひました。また胸の中で、幾人となく悲劇的な孤獨の生活を送つた作中の人物の名を繰り返して見ました。けれど何の役にも立たなかつた。遠く時代を隔つたり、空間を異にしてゐた、其等の人々と自分とは何の繋がりも持つてゐないといふことを知りました。

』自分といふものはたゞ獨りである。自分といふものは絶對である。自分のすること、また心のうちで考へること、其れは自分獨りが認め、また自分獨りが價値ありと信ずる以外に比較し、模倣すべきものがない筈である。其處に自己の絶對といふことが言へる筈である。自分は、人の知らない遺傳があり。他人と同一に語ることの出來ない境遇にゐる。而して、常に女に觸れてはならないと信じてゐる。本能を癒すに最も直接に効果のある觸覺を避けて、視覺によらなければならぬやうな經路を踏んで來た。而して、今は直覺と、敏感に、火の如く熱く燃え、刃の如く凄く磨ぎ澄された瞳は、自分にまた他人の測り知ることの出來ない快感と、想像を呼び、而して異常な情慾の天地に導いて本能の滿足を遂げしめてくれるのであるといふことを知つたのです。良一は、自分といふものを考へると、現在自分が生きてゐるために、最も多くの幸福を有形にも無形にも逐ふ必要があると感じたのであります。而してやはり、犬のやうな（時に自からをさう思ふことがある）眞似をして嗅ぐことのかはり、情慾を渇する心に滿足を與へるやうな卑猥な書を賣る店を探して町の中を歩き廻はりました。

良一は、晩方橋の上に立つて、水を見下しながら考へた。袂の中にあるあの繪を買ふた時の光景が一目に浮んで來た。自分を刑事でないかと疑つた番頭の顏付や、眼付が、まだ忘れることが出來なかつ

た。またうす暗い店の隅て、不思議に興味をそゝつた、毒々しい色彩の繪を幾枚となく並べて見せられた時、どれもこれも欲しくなつて、皆んな買ひ取らうとしたが、金の不足てあつたゝめに撰擇に迷つて、しばらく決心が付かなくて氣がいら〱した時の自分の見苦しい有様を、第三者に立つて見るやうな氣がして、思はず顔が赤くなつたのてありました。

『しかし、あの番頭は自分を何處のものだとも知つてゐない。而して、もう今頃、あゝいふ客が來たといふことも忘れてゐるだらう……』と思ひかへして自からを慰めてゐるのてありました。水の上には落日の名殘がうす紅くほんのりと映つてゐた。何者にも末路があるといふやうな悲哀を語つてゐるやうに思はれた。

　良一は道を歩きながら、電車路を過ぎた時に、ふと自分が過つて轢き殺されたと假定する。而して警官が來、檢事が來、醫者が來て自分の死骸を改めて何處の者だらうとしらべた時に、袂から、この繪端書が出て來たなら……獨り巡査や醫者ばかりてはない其處に黒山の如く集つてゐた人々は、自分を見て何と思ふだらう……卑しい、馬鹿者だと思ふに相違ない。しかし自分は、もう死んでゐるのだから、自分の死骸が、どんなに辱(はづかし)めを受けてゐるとも、冷笑を浴びせられてゐるとも知らなからう……から思つて、良一はまた偶然の死といふやうな場合を想像して、胸を躍らしてゐたのてありました。彼は、何といつても、やはり自分の行爲を秘密にして、それを人に知られるのを憚つてゐたのてあります。すべての理想家といふやうなものには、實行の伴はない、一面卑劣な處があるやうに……。良一は、人

目を盜んで袂から繪書を出して、眺めながら、ある滿足を感じて都會の夕暮方の町の中を歩いてゐました。すべての物音は彼にとつて少なくも目下の自分の幸福を讃美してゐるやうに聞き做されただんだんあたりが暗くなりつゝある。

良一は甚い神經衰弱にかゝりました。讀むことも、書くことも出來なくなつた。

五

音のない氣味の惡い靜けさが、この世界にも、また良一の心にもやつて來た。一時浮かれた春の體は疲れて、死んだもののやうに深い深い休息に陷入つてゐたやうに、地球の皮膚の上を飾つた、いろいろのふやけたやうな紅い花や、白い花や、紫色の花は、雨に腐れ、風に散つて、而して梢の上から奇麗に洗ひ去られてしまひました。たゞ晝間でも寂然として、うす暗い木下暗が地肌の色を濃して、何處を見ても青く、しんめりとした、音のない世界となりました。毒々しく麥は、闇の中に延びて、風に吹かれてねばり氣のある波のやうに搖れてゐる。今迄、原に來て立つて眺めると遠くに見られたいろいろの建物が、繁つた青葉や若葉に隱れて見えなくなつた。さながら水底に沈んでゐる都會のやうに、音もなくしんめりとして、うす青い色に包まれて見えました。此頃の良一には、殊にさう感じられたのでありました。

良一の血管を蛇のやうにのたくり廻つた、感情の狂ひは止つて、急に空怖しいやうな沈默と寂寥とが、

肉に喰ひ込む蟲のやうに心を襲つて來た。良一は、花が散ると共に心を惹き立てやうと思つても、非常に疲れてゐる人のやうに滅入つて、氣持がぼんやりとして、神經を消磨し盡したやうに筋肉に痺びれを感じて、眼は開いてゐて太陽を見ても、心の裡は眞暗であつた。ちやうど廣い胸の野原に行き渡つた闇の中て、蠟燭の火のやうな小さな心が竦んで、震へてゐるのを感じたのでありました。空洞のやうな空から、杜斷れて落ちて來る風が、青葉の上を襲ふやうに、良一はしみ〴〵と淋しい心持を味ふといふよりは、不安な空虛の中に坐つてゐるやうな感じがしたのでありました。

地の胸に深く隱れてゐた種子は、やうやく此の季節になつて黑い土を破つて、黃色な芽を生ふくやうにあらゆる病ひは、此の沈默の季節の裡に目に見えない處から頭を擡げて來るのでありました。讀むことも、書くことも出來なくなつた良一は毎日、獨りである前に知ることとの出來ない凶い事件の起る前兆のやうな、空虛と、沈默の日を暗い不安な心持て送つてゐるのでありました。窓の外には黑く葉が繁つて、三疊の室はうす暗く、下女は夜となく晝となく居眠りをつゞけてゐました。

だら〴〵となだらかな丘があつて、丘の上には一面に細かな芝が、敷物を展べたやうに生いてゐました。良一はその柔かな芝の上に腰を下して、丘の下にあつた製紙場の庭を見てゐました。白い幅の廣い紙が大きな板に張られて、幾つとなく日當りのいゝ砂利土の廣場の中の柵に立てかけてあつた。日は、白い紙の上に瞬きもせずに眩しく光つてゐた。たへず粗末なブリキ葺の家根の低い小舍の中では、車の

廻る響きがうなつてゐるやうに聞えて來ました。良一は何の考へもなく眼を丘の下の製紙場の庭に落してゐると、いろ／＼の風をした若い女が、時々小舍の中から出て來て、日陰になつた板を日當りに移してゐました。十五六から三十近くまでの女が、出たり入つたりしてゐた。良一は、是等の身形も構はずに働いてゐる女は、僅かな給金を貰ふために、かうして朝此處に來て、日が暮れると家に歸つて行くのだらう……どんなやうな家に住んで、どんなやうな男と戀をしてゐるだらう……それとも生活に追はれて戀をするだけの心に餘裕もないのであらうかと考へてゐました。

彼方に目を向けると、こんもりとした若葉の森があります。其の森の頂きを越へて、遠くに黒い町の高い煙突が見えてゐたのでありました。良一はしばらく其の黒い煙突に目をとめると、其の煙突が、この沈默な自然にも、心に空怖しい空虚を感じてゐる自分にも、ある共通した、しかし言葉で言ひ表はすことの出來ない一種の不安を語るやうな、また凶兆を語つてゐるやうな象徴（シムボル）のやうに見えてゐたのでありました。良一はしばらく、丘の上に獨り腰を下したまゝ、彼方のこんもりとした若葉の森と其の黒い煙も吐かない煙突とを眺めてゐました。この景色は、何となく良一にコローの繪畫で見た風景を思はせるやうな趣があつたのであります。

黄色く燃えた太陽は、南にありました。而してこの世界は明るくあつたにかゝはらず良一の心は暗かつた。而して何處に自分はかうして坐つてゐるのかといふやうな考へもなく、靜かな陰氣な、夢を見てゐるやうな氣持がしてゐたのであります。

燕が一羽、空を飛んで、こんもりとした若葉の森の頭の上に翻つて、黒い煙突を過ぎつて矢のやうに驅けて、眼界の外に逸して白い紙で張り詰めたやうな空に見えなくなつた。

六

良一は、茫然として故郷に歸つて來た。都會を遠く離れた故郷にも、同じいやうな春がありました。もはや何處となく、初夏の頃とも思はせるやうな、白い、柔かな、無神經であるとは思はれないやうな雲が、大空に浮んでゐます。而して彼方の地平線から轉げ出して來て、毬のやうに、此方の地平線に隱れ込むやうに思はれました。雲は、下の藁屋も、野菜圃も見下してゐるやうに思はれました。圃には、眞黄色な瓜の花が、星のやうに咲いて、圃の中に立つて眺めた良一の瞳に燒き付くやうに映じました。黄色な星のやうな瓜の花！　さう思つて、しみ〲と眺めると、日の照り付けた厚みのある白い毛の生いた葉には油を流したやうな光りがある。其の光りの中から、今まで忘れられてゐた子供の時分の記憶や、祖母の顔や、いろ〱の昔の日の光景が浮んで來て、微笑んでゐるやうに思はれたのであります、

良一は、故郷に歸つて、この自然に對した時の追懷がたゞ一つ自分を喜ばせた位のものでありました。彼は家の人々とも碌々口も開かず、毎日のやうに村から少し隔つた城跡に來て、廢墟に殘つた石に腰をかけて、茫然として日を送つてゐたのであります。漫々とした空を、日は遲々と歩いて、頭の上を音なく通つては彼方の桑圃の中に沈みかゝりました。たゞ、默つて灰色の大きな人が立つてゐるやうにも思はれる石垣の壊れた土手——黒い衣服を着た尼さんが、首垂れて祈りを捧げてゐるやうな古い疎らな松

の木——南の方を見ますと、彼方の空の垂れ下つてゐる處までは、幾百里かある。而して其處にはやはり人が住んでゐるだらうといふやうな物淋しい感想が浮んで來ました。北の方を見ると、幾分かうす青い色をしてゐる空の彼方には、其の空の下に海があるだらうといふやうな物悲しい感想が浮んで來ました。たゞ、溜息のやうに生温かな風が、このからんとした音のない廢墟を通ります。心ある人間が此處にかうして腰をかけてゐるといふことを知つてゐない如く、——無心なものを——この默つた土手や、木や、石をかうして今迄幾十年の間吹いて來た如く、やはり今も吹いてゐるといふやうに思はれました。

良一は赤い燒けた鐵彈のやうな日が、力なく西の地平に沈む頃、桑圃の中の白い道を歩いて我家の方へ歸りました。彼は都から歸つてから、何をするともなくはや半月になる。毎日のやうにこの城跡に來て、默つて日を暮らしてゐました。良一は自分の毒のある體を、靜かに動かさないやうにしてこのすべての病ひの芽ざす春の季節を無事に過したいと思つてゐたのであります。而して、自分の亂れた頭を恢復して、もとのやうな、冬の頃の冴え切つた頭にして、何を聞いても、何を見ても、また何をしてもはつきりと印象が頭に刻まれるやうに、頭の中の鏡の曇りを拭き取らうと思つてゐたのであります。

赤い日の影を顔に受けて、下々見詰めながら、桑圃の中を歩いて來ると、ふと後方の方で自分を呼ぶやうな聲が、寂然とした音のない天地にしたやうな氣持がしました。良一は立止つて振り向いて見ました。けれど誰の姿も見えなかつた。たゞ灰色の大きな巨人のやうな——幾百年となく其處に立つてゐた死といふものを知らない——默つた、考へ顔の廢墟が目に映りました。また其處から少し隔つて、黒い

衣服を着た尼さんが首垂れて立ちながら、天に祈りを捧げてゐるやうな松の木が夕日の光りを浴びて立つてゐる姿が眼に映じたばかりであります。良一は、氣の迷ひだと思つて、また下を向いて桑圃の細い道を歩き出したのであります。また、日が暮れました。

眞晝頃になると、家の前の圃の瓜圃には眞黄色な星のやうな花が幾つも咲きました。ちやうど靑い空に出た金色の星のやうてあります。良一は、また毎日のやうに圃の中に立つて、この眼を射るやうな幾つかの黄色な花を見詰めました。かうして何を考へるとなく、たゞ獨り天地の中に自分一人が立つてゐるのだと思はれた時、隣の癲癇持の女房が、また子供を擲つて泣かしてゐます。其の子供の火のついたやうな泣聲は、針線(はりがね)のやうに耳を貫いて來るのでありました。而していつしか自分の頭の中の考へは、この火のついたやうに泣く子供の聲に集注せられて、其の泣聲が燒點となつて、自分に何も他のことを考へるのを許さなくさせました。自分は他に氣を移さうと思つても、どうしても其の泣聲にいつしか耳を傾けなければならないやうになつて、其の泣聲の聞えて來る間は、自分の思想は束縛されて他に移すことが出來なかつたのであります。

其の子供の泣聲は、いつまでも止まなかつた。良一は、心が其の泣聲に掻き亂されて、いつしか眼にも、見てゐる自然が其の苦しさうな泣聲と同じい色の赤い色で彩られて、今にても火が付いて木も、草も燃え始めさうになつて見えて來ました。而して、耳には、ぴり〳〵と針線で、刺すやうにます〳〵鋭

く感じられて、自分までが氣が茫然として來るのを覺えました。良一は心のうちで、苛酷な子供の母親を憎んだ。而して心のうちで、自分が其の癇癪持の苛酷な女に死刑を宣告して、慘殺してゐる光景を描きました。それでもまだ子供の泣聲は容易に止みさうでなかつた。良一は、其の子供が泣いて、泣いて咽喉から血を出して死んでしまへばいゝと思ひながら、田舍の無智な、どうしても趣味に於て、すべての生活に於て自分とは調和の出來ない人々を心のうちで呪ひながら、家内の者にも默つて、毎日行く廢墟の方へと歩いて行きました。大分遠くなるまで、後の方には隣の子供の泣聲が聞えてゐたのでありま す。

どんよりと日の光りに蒸されてゐる桑圃の方を見ながら、良一は石の上に腰をかけて空想に耽つたのであります。

良一は子供の時分に、父に連れられて、彼方の村に住んでゐる叔父を訪ねて行つたことがあつた。其の時父が此の桑圃を通つた時に物語つた昔話があります。維新前のことであつた。此の茫々として荒はてた桑圃に家老の家があつた。ある年の眞夏のことで、しかも草木の葉が飴のやうに輝く、烈しい暑さの日であつた。其の眞晝頃、奥坐敷に眠てゐる奥方を、家老が家傳の銘刀を拔き放つて、これを右手に携げながら、拔足をして忍び込んで、女の體を眞二つにしてしまはふと切り附けた。けれど手許が狂つて、奥方は、額際に血を浴びながら、『あれ――』と叫びを上げて、裏庭に驅け下りて、桑圃まで驅けて來た。白光りを放つて地面は燒けるやうに熱かつた。奥方が素跣て、髮を亂して走つて來るのを、

『己れ逃がすものか？』と家老は、後から血刀を振り上げて追つて來て、女が石に躓いて倒れたのを、追ひ付いて思ふ存分に滅多切りをして其場に慘殺した。血は、日に燒けた桑の葉や、切株や、白く乾いた地面に流れて、日の色までが腥くなつて見えた。而して、其の日家老も、其の刀で切腹して死んだ。原因は分らなかつた。未だに分らない。もとより永遠に分らない。其れて其の家は絶へてしまつた。

父は、かういふ話をして、かう付け加へて良一に聞かせたのてあります。……多分氣が狂つたのだらう……。其の家老の家は、此の桑圃の中にあつたのが今は跡形もなくなつてしまつた。……良一は、子供の時分に父から聞いた話を思ひ出して、茫々として、たゞ日の光りに葉の光つてゐる桑圃を眺めてゐました。而して、彼方て、眼の前て、家老が、奥方を慘殺してゐる光景を眼に描いてゐました。さう思つて太陽の光りを仰ぐと、やはり腥く、血に塗れたやうに赤く爛れてゐる如く見えたのてあります。

また良一は、子供の時分にも、この城跡によく友達と遊びに來た時には、まだ澤山の松の木のあつたことを思ひ出した。而して或日のこと町から來た材木商が、松の木を買つて、自分の買つた木に蟲が食つてゐないやうに、神主を連れて來て祈つてゐるのを見たことがあつた。白い衣物を被た神主が、鉢卷をして、これから切らうとする松の木の根許に御酒を供へて、神主が熱心になつて祈禱を捧げてゐました。而して、祈禱が終ると木挽が二三人かゝつて、大きな鋸て、其の木を挽きにかゝりました。而して、暫らくはたゞ木の切られて行く、鋸の目の磨れる音が聞えてゐたのてありました。やがて、大きな音が、

荒れた城の中を占領してゐる寂寥を破つて、大きな松の木が倒れた時に、蟲が中心を根許から頭の先まで喰つてゐたと見えて、高い木の幹は、三つばかりに胴折れがしてしまつた。其時、材木商が聲を出して泣いたのを思ひ出した。……良一は、かうしたさま〴〵の空想に耽つてゐます。土手の上にも下にも、一面に草深く茂つて、いろ〳〵の雜草が思ふ存分に伸びてゐました。けれど誰も其れを刈り取るものもなければ、草は安心して、肥え太つてゐました。中には、白い鳥の毛のやうな花を毬のやうに附けた草もありました。中には紫色の太い莖に、心臟形の大きな縮れた赤味のある葉を開いた、何となく、怖しい毒を有つたやうな草もありました。而して、一種の重々しい、魔醉させるやうな臭ひが何處ともなく、日の光りに蒸されて空氣の中に漂つてゐました。

この蒸し暖かな五月の日の光りの中に、怖しい幻影の見える廢墟の麓に、しかも魔醉させるやうな草の香りの中にかうして、いつまでも良一は呢としてゐたなら、頭の中に、胸の底に、體の何處かに、隱れてゐる病ひが、醱酵されて、いつとなしにびく〳〵と頭を擡げて來はしないかと思はれた。……良一は自分で、さう思ひながら、やはり毎日のやうに、この廢墟にやつて來ました。

もう、良一は幾日も家の者とも、また村の者とも口を開いたことがありません。

全く、默つて、唖のやうに、たゞ赤い太陽と灰色の衣物を着た巨人のやうな壞れかゝつた石垣と、黑い喪服を着た尼さんの立つて天に祈りを捧げてゐるやうな姿が、どういふものか自分を惹き付ける、不思議な魅力を持つてゐる様に感じられて、誰れ一人見ない、また人家一つ見えない城跡にやつて來た。

——石の上に打ち上げられた人魚のやうに、いつ爆烈するとも分らない火藥のやうな不安な體を横へてゐる。——と良一は自分で思ひながら、廢墟の石の上に腰をかけてゐました。今日も、また昨日も。『早く、危險性を帶んでゐる春が去ればいゝ。而して二たび健康の體に復して都に歸りたい。』と、心のうちで祈つてゐた。

——一九一三、四作——

脚本

戀を知る頃（三幕物）

——禁無斷興行——

谷崎潤一郎

人物

仲太郎　日本橋馬喰町邊の木綿問屋の子

下總屋三右衛門　仲太郎の父

お政　仲太郎の母

おすみ　柳橋待合香川の主婦、三右衛門の妾

おきん　おすみの娘

利三郎　下總屋の手代

おしげ　仲太郎の乳母

お寅　下總屋の小間使

お初　下總屋の小間使

お花　香川の女中

外に仲太郎の學校朋輩三人

時　明治二十年頃

所　第一幕、淺草代地
　　第二、第三幕、日本橋馬喰町

第一幕

待合香川の内部。舞臺左手に六疊程の一と間――其處が帳場になつて居る。部屋の左側の襖に添うて帳場格子を置き、傍の柱にいろいろの通帳、狀挿などを掛け、其の眞上、天井に近く神棚を設ける。部屋の後ろは土藏に續き、正面の觀音開きの左に齋金の袋に包んだ三味線二た棹、左に茶簞笥。茶簞笥の上に鏡臺、置時計を置き、其の前に長火鉢が、後ろ向きに据えてある。部屋の右側は障子、其の外は廊下を隔てゝ風呂場の入口の板戸に對す。廊下の奥に梯子段が正面を向いてかゝつて居る。

春の彼岸の中日の午後二時ごろ。

（と書きに用ふる前後左右縱横等は、特に指定せざる限り、凡べて正面の觀客を標準とす。）

第一節

おすみ　おきん　お花

おすみ、實際は三十七八なれど、三十前後にしか見えぬ艶なる年增。漸く今、朝飯を濟ませたところらしく、獨り長火鉢に凭れ

て新聞を讀んで居たが、やがて其れを膝に投げ、煙管に烟草をつめながら甲高く呼ぶ。

おすみ　おきんちやん、どうしたの。まだ見付からないのかい。

おきん　いゝえ、わかつてよ。おッ母さん此れぢやないの。土藏の中より答へながら、重箱を抱へて出て來り、觀音開きの前に立つ。母に似て更に美しく艶なる女。年齢十七歳。背高く、顔しまり、眼から鼻へ拔けさうな悧巧な容貌の爲め、却つて二つ三つ老けて見える。きびきびした言葉遣ひ、活潑な擧止、何處かにお轉婆らしき所あり。髪を島田に結ひ、襟のかゝつた縞お召の綿入を着る。素足。

おすみ　あゝそれ、それ。それへお萩が幾つぐらゐ這入るだらうね。

おきん　さうだわね。重箱の蓋を開き、一寸目分量で勘定する。内のは大きいから、そんなに澤山は這入らないわ。

おすみ　お前御苦勞だが、其れを持つて、ちよいと一とつ走り馬喰町まで行つて來ておくれ。今の内なら多分旦那も居らッしやるよ。お口汚してございませうが、折角內で拵へましたからッて……母が伺ふ筈でございますけれど、二三日加減が惡くッて臥せつて居りますからとか何とか云つてね。

おきん　今日はあたし嫌よ。

おすみ　何故さ。

おきん　何故てゝ。……誰か女中をお遣んなさいな。

おすみ　いつも馬喰町だと喜んで行く癖に、可笑しな人だね。女中を遣るッたつて、お信はさッき藏前へ持たしてやつたし、お花は手が明かないし、お前が行つてくれなけりや、外に使ひがありませんよ。

おきん　だからもう直きお信が歸つて來たら、持たしてやれば好いぢやありませんか。重箱を傍に置いて、長

火鉢の横へ崩れかゝるやうに立膝して据わる。

おすみ　それでも好いけれど、お前これから何處かへ出掛けるのかい。今夜は旦那も入らッしやるし、内に居た方がいゝだらう。

おきん　誰も出掛けると云やしないわ。……あたし、實は少しおッ母さんに話があるの。今日は人も居ないするから、丁度好い折だと思つて。

おすみ　また此の間の話かい。

おきん　えゝ、まあさうよ。今夜旦那が入らつしやるなら、是非おッ母さんから相談して貰ひたいと思ふの。

おすみ　お前も分らないね。あの話は此間云つた通りだから、今持ち出しちや工合が惡いんだよ。おッ母さんの方にだつていろ〳〵都合があるんだから、ちッとは考へてくれなくちや。ぽんぽんと、煙管を火鉢の角へはたいて投り出すと、右の手で猫板に頬杖をつく。お前だつて、今年はまだ十七ぢやないか。何も今直ぐ嫁に行かうと云ふのぢやなし、旦那もあらかた承知して居らッしやるんだから、あんまりせつかない方がいゝだらうと思ふ。

おきん　おッ母さんの方にどんな都合があるか知れないけれど、あたしの方にも都合があるの。

おすみ　生意氣な事をお云ひでないよ。お前に何の都合があるんだい。ほんとにお前ぐらゐ親子の情愛の薄い人間はない。いくら榮耀榮華がしたいからッて、親の傍に居るのが、そんなにも嫌なものかね。

馬喰町へ引き取られゝば、成る程大家のお孃樣にや違ひないけれど、あゝ云ふ堅儀の大店にはなかなかやかましい仕きたりがあつて、とても内に居るやうな氣樂な譯には行きませんよ。嘘だと思ふならまあためしに二三日行つて御覽。一人息子の仲太郎さんは居るし、奉公人は多勢だし、お前のやうな自墮落な女に、半日と辛抱は出來やしないから、お上さんはあゝ云ふ如才ない人だから、そりや口では「おきんを引き取つてやりたい」の何のッて云つて居るものゝ、何がアテになるもんかね。又旦那だつてさうさ、いくら主人の威光でも、妾の産んだ子を連れて來て、直ぐと仲ちやん同樣にさせちや内のしめしが付かないから、當分小間使ひと一緒に働かせる位が關の山さ。……子供の癖にお前は一體焦り過ぎるよ。嫁に行くまでは、別段内の子で居たつて差支へないんだし、一日も遲い方が私の爲めにもなるのだから、其處をよく考へておくれな。

おきん　おッ母さん、あたしや何も、樂がしたいからッて賴むんぢやないのよ。どうせ引き取られるなら、遲かれ早かれ同じ事だから……右手を懷に入れ、左手にて同じく猫板へ頰杖をつき、睨み返すやうに母の顏を見る。

おすみ　それが同じ事ぢやないんだつてば。實のところ、私の方でお前でも養育して居なければ、さうさう旦那から引き出す譯に行かないから、此方の魂膽が大分狂つて來るぢやないか。内の爲めだと思つたら、お前だつてそんな不人情は云へないだらうがね。どうも私や、お前に男でも出來たのぢやないかと思ふ。

おきん　冗談にもそんな事を云つて貰つちや困りますよ。冷然たる調子。

おすみ　大變に激して來る。そんなら何も、お前のやうに急ぐ道理がないぢやないか。誰かお前に入れ智慧をする奴があるんだらう。

おきん　入れ智慧なんかされるあたしぢやなくつてよ。――おッ母さんにそんな事を云はれるに付けても、あたしや内の稼業が嫌で嫌で仕樣がないの。一日だつて、こんな商賣を見て居るのは嫌だわ。それよりか、早く堅儀な内へ引き取られて、小間使ひても何でもいゝから、キチンとした暮らしをして見たいの。籍なんぞ孰方(どつち)にあつても構はないわ。

おすみ　へん、どの面(つら)下げて、お前にそんな立派な口がきけるのだい。ちッと自分の不斷の行積(ぎやうせき)を見るがいゝや。――あんまり親を馬鹿におしてない。

おきん　だからいゝわよ。どうしてもおッ母さんが承知してくれなけりや、あたしの方にも考へがありますから。つんとして母の傍を去り、左方の帳場の机の前に据わつて、何か卷紙へ徒ら書きをしながら、あたしや、今迄にも隨分内の爲めになつた積りなんだから、此のくらゐの事を聽いてくれても好いと思ふわ。人の事を男があるの何のと云ふけれど、おッ母さんだつて馬喰町へ知れたら困る事がありはしなくつて? 若しもあたしが意地惡く出たら、どうする積りなのか知ら。

おすみ　稍不安の眼つき、お前は親を強請(ゆす)る積りなのかい。大(だい)それた娘もあるもんだね。そんな眞似をすりや、私ばかりかお前だつて立ち行かなくなるんだよ。

おきん　えゝ、そりやおッ母さんばかりに苦勞をさせやしませんとも。

おすみ　勝手にしやがれ。強く云ひ放ちたれど、猶不安の表情にて、暫く無言の儘相對して居る。

お花、湯殿の戸を開け、襷がけで兩手の先から湯氣を出しながら、廊下に現れる。

お花　襷を外づして障子際に畏まる。おかみさん、お風呂が沸きましたが、お召しになりませんか。

おすみ　さうさね。茶箪笥の上の置時計を顧る。まだ二時半だね。私やもう少し後にしよう。

おきん　そんならあたし、先へ這入るわ。立ち上つて、衣類を帳場に脱ぎ棄てゝ、長襦袢一枚になる。

おすみ　お花に向ひ、それからね、お信が歸つて來たら、此のお重へお萩を入れて、馬喰町へ届けるやうに左樣云つておくれ。

お花　はい、畏まりました。重箱を受け取つて座敷を通り拔け、左方の襖より去る。

おきん　風呂場の入口に立ち、廊下越しに部屋の方を振り返つて、おッ母さん、今の話はよく考へて置いて下さいな。もう此れッ切り頼みませんから。

おすみ　知らないよ。どうでも勝手にするがいゝさ。お前のやうな奴は、あたしの子だとは思はないから。

おきん　ふゝん、と嘲けるやうに鼻で笑ひ、湯殿へ這入つて、中からぴしりと板戸を締める。

第二節

おすみ　おきん　三右衛門　利三郎

三右衛門、利三郎、左の襖を開けて部屋に這入る。三右衛門は五十一二歳の太つた男。柔和な容貌。老舗の旦那らしい、澁い服裝。利三郎は二十七八歳の體格の立派な、少しく苦味走つた美男。髮を奇麗に分け、鹽無地の琥珀の羽織に地味な結城の綿入を着、お召の前掛をしめて居る。右の手に土産の折を提げて、部屋に這入るとおきんの脱ぎ棄てた衣類に眼を着け、わざと其の傍へ据わる。

おすみ　おや、入らッしやいまし。大さうお早いんですね。自分の席を三右衛門に讓り、おきんの衣類を蔵の中へ投げ込んで、かひ〴〵しく茶を入れ、菓子を出しなどする。

三右衛門　あゝくたびれた。伸びをして、どしんと臀餅を舂くやうに据わる。

おすみ　利三郎に煙草盆を與へながら、利三どん、今日は旦那のお供ですか。

利三郎　へえ、どうも御無沙汰を致しました。今日はお彼岸のお寺參りで、今戸まで行つて參りました。

おすみ　長火鉢の横へ据はる。あゝさう。お天氣が好くつて結構でしたね。こんなに暖かぢや、そろ〳〵お花見に間もありませんね。

利三郎　左樣でございますな。もう四五日立つたら上野あたりはぽつぽつ咲き始めるでございませう。あ、それから此れはおかみさんにお土産。と折を渡す。

おすみ　まあ何ですか有難う。折を手に頂いて見る。おや、それぢや山谷へお廻りなすつたの。久々で重箱の饅が頂けますよ。ほんとに有難う。折を茶簞笥の上に載せる。

三右衛門　鰻を喰ひたさに大廻りをして、くたびれたこと、くたびれたこと。どうも春先は、天氣がいゝと埃が立つてかなはない。手拭を出して顔を撫でる。もう風呂が沸いて居るんだな。

おすみ　えゝ、たゞた今おきんが這入つた所ですよ。こんなに早く入らつしやると知れたら、誰も入れずに置きましたつけ。

三右衛門　彼奴は長湯だから、待つて居たら容易な事ぢやない。どれ顔だけも洗つて來よう。立ち上つて、廊下から湯殿の戸をあけ、中を覗き込む。其隙間から湯氣が廊下に流れて來る。

おきんの聲　おや、御免下さいまし。何時入らつしたんですの。

三右衛門　今來たんだよ。顔を洗うんだから、一杯汲んでおくれ。

おきんの聲　風呂場の湯氣の中より　あたしもうすぐ上りますわ。

三右衛門　お前のもうすぐは何時の事だかアテになるもんか、まあいゝから、半日でも一日でもゆつくり漬かつて居るがいゝ。

おきんの聲　あら隨分よ。おほゝゝゝ。

三右衛門湯殿の戸を締めて中に這入る。

第三節

おすみ　利三郎　三右衛門

利三郎　ちよいと御免下さい。腰を屈めておすみの前を通り、廊下に出て板戸の前へ兩手をつき、わざと高調子に、えゝ旦那。

三右衛門の聲 風呂場より 何だ。

利三郎 私はお先へ御免を蒙りますが、別段お店へ御用はございませんか。

三右衛門の聲 あゝ、どうも今日は御苦勞だつた。別に用事はないが、ゆつくりして御膳でも喰べて行つたらよからう。

利三郎 いゝえどう致しまして、もう今日は充分に頂きまして、まだお腹が一杯でございます。

おすみ 火鉢の傍に据わつたまゝ、聲をかける。 でもまあ利三どん、いゝぢやないか。一とッ風呂浴びて、ゆつくりして行くさ。めつたに來るんぢやないんだから。

利三郎 へえ有難うございます。また一段と高調子になる。おきんちやん、どうぞ御ゆつくり。今日はお目に懸りませんが、これで御免蒙ります。

おきんの聲 冴え冴えした調子。あらさう、それぢや左様なら。

利三郎 お金の挨拶を聞くと、部屋に戻つて、おすみの前に畏まる。やどうもお邪魔致しました。

おすみ まあ、利三どん。いゝからもつとゆつくりしてお出てなさいな。

利三郎 折角でございますが、いづれ又……

おすみ 立たうとする利三郎の手頸を捕へて、まあさ、そんなに世話を燒かせるものぢやないッたら。

利三郎迷惑さうに控へる。

おすみ ほんとに久し振りなんだから、用がなかつたら遊んで行つて下さいよ。旦那もお前さんの事は、

若いに似合はず、店中て一番役に立つッて、そりやいつも褒めて居らつしやるんてすよ。仲太郎さんはまだあの通りの子供だし、此の上ともお前さんが骨を折つて、精々旦那の片腕になつて下さらなくちや、お店の方もお困りてせうからねえ。

おきん　湯上りの體へ長襦袢を纒ひつゝ手拭を口に咬へ、風呂から上つて、つかつかと部屋の中へ這入り、母と利三郎との間に立つ。水の滴るやうな艶なる姿。お母さん、あたしの着物は何處へやつて？

おすみ　藏の中にあるだらう。

おきん　さう……利三どん、ちよいと御免なさいよ。直ぐに着物を着ようとはせず、茶簞笥の上から鏡臺を下ろして其處に据え、長襦袢のまゝうづくまつて化粧を始める。其様子を利三郎はまじまじと眺めてゐる。

三右衛門　風呂場の戸を半ばあけて、裸體の上半身を廊下に出す。おい、誰でもいゝから、ちよいと背中を流してくれ。

おすみ　おや、あなたお湯へお這入りになつたの。

三右衛門　うむ、おきんが珍らしく氣を利かして、早く上つてくれたから。

おすみ　それぢやあたしが流しませう。……利三どん、ぢきに旦那がお上りになりますから、ほんとにゆつくりして行つてね。

利三郎　どうも飛んだ御厄介になります。

おすみ、着物の裾からげて風呂場に去る。

第四節

おきん　利三郎

おきん　化粧をしながら、小聲にて、利三どん、お前隨分だね。たまに内へ來たのに歸る歸るつて、それほど私が嫌なのかい。

利三郎　そんな嫌味を云ふもんぢやないぜ。あんまりぐずぐずしてゐると、却つてお上さんに氣取られるから、わざとあゝ云つたのさ。此處の内へは久し振りだが、お前とは三日にあけず逢つてゐるぢやないか。

おきん　だなら、そろそろ鼻に附いて來たんだらう。人がお湯へ這入つて居て知らなけりや、逢ひもしないて歸らうなんて、隨分薄情な話さ。あたしや、體もろく〱洗はないで飛び出して來たんだよ。

利三郎　湯殿に居たつて知れない事があるもんか。話聲ぐらゐ聞えたらうに悠々と長湯を遣つてゐるから、わざと挨拶に行つてやつたんだ。そんな事を云ふなら己は歸るぜ。煙草入を腰にさして立ち上る。

おきん　あれ、利三どん、男の前掛を摑み、無理に据わらせる、ちッと話があるんだから、まあ怒らないで居ておくれ。

利三郎　強つて歸りたかないけれど、お前があんまり解らないからさ。

おきん　あたし、いよ〱近々に馬喰町へ引き取られるの、實は今日ね、少し惡かつたけれど、おッ母さ

んをおどかして置いたから、大概うまく行きさうなのよ。さうしたら、朝から晩まで毎日お前の顔が見られるわね。お前の方ぢや御迷惑かも知れないけれど‥‥

利三郎 驚いたる樣子にて、膝をつめよせる。おきんちやん。お前本當に私の事を思つて馬喰町へ行くのかい。

おきん お前に會ひたくなかつたら、誰が醉興にあんな窮屈な所へ行くものかね。今のやうにお互ひに離れて居ちや、遇ふと云つても二日置きか三日置きだし、それもほんの一時間か二時間だもの、あたしや、まどろつかしくつて、焦れたくつて、仕樣がないよ。それに第一、人の目を盜んで、お前が道樂でもして居やしないかと思ふと、心配で〱ならないから‥‥

利三郎 其心配は此方(こつち)てする事(こツ)た。馬喰町へ引き取られた日にや、お前はかりにも大家のお孃樣。其の時になつて棄てられたつて、奉公人の悲しさには、主人の娘へ手も足も出されやしないだらう。ほんとにおきんちやん、浮氣をすると承知しないぜ。欄杆の上より女の膝を抑へていつまでも抓つてゐる。

おきん 抓るならたんとお抓りよ。抓られながら、兩手を頭に伸ばして、平氣で髮の恰好を直してゐる。そんなに私を疑ぐるなら、證據を見せて上げようか。

利三郎 漸く手を放す。どんなに證據を見せたつて、疑心すればそれ迄よ。

おきん いゝえ。此れは極く極く內證だけれど、お前が聞いたら、きつと安心する事なの。

利三郎 何だい、それは。

おきん おッ母んと妾の外には、世間て知らない事なんだから、ほんとに人に喋舌られちや困るのよ。

利三郎　大丈夫だ。

おきん　低く囁く。實はね、利三どん。あたしや旦那の子ぢやないんだよ。

利三郎　えッ、そんなら一體誰の子なんだ。

おきん　利三郎の耳元に口を寄せて、ひそ〱と告げる。ね、だけど、默つてゐて下さいよ。

利三郎　うむ‥‥急に不快な顏つきをして塞ぎ込む。

おきん　利三どん、あたしやお前が可愛いばかりに、飛んだ事を云つてしまつた。何卒愛憎をつかさないんでおくんなさいよ。媚びるやうにニツコリ笑つて、着物を取りに藏へ這入る。

利三郎は腕組みして考へ込んで了ふ。

第二幕

下總屋の奥の間、舞臺の右手に母屋の座敷があつて、左方の裏庭に臨む。庭の後ろは建仁寺の塀を圍らし、稍左手に木戸口が付いて居る。木戸口より更に左、庭の隅の方に滿開の櫻が二三本植わつてゐる。座敷の正面の緣側から、飛石が母屋の庇と櫻の植込の間を分けて木戸口に續く。

座敷は主婦のお敏が小間使ひなどと針仕事をする所。あまり新しい普請ではなく、柱、緣側の板の色など、如何にも舊家のそ

れらしくてかてかと拭き込んである。部屋の後ろは腰張りのある壁、右は好い加減古びた二枚の唐紙で劃られ、庭に面する左方と前方とは中硝子の障子を開け放つ。子供の徒らと見えて、壁や唐紙や障子のところ〴〵に、落書きがあつたり、穴が開いたりしてゐる。座敷の中央に大きな長火鉢が縦に置いてある。四月の上旬の午後、うらうらとした眠さうな日が、障子や庭に照り輝く。

第一節

三右衛門　お政　お寅　お初

お政。五十格好のでつぷり太つた女。長火鉢の右に据わり、くけ台、裁板、反物の切れなどを前に置いて、頻りとこてを炙つてゐる。お政の右に、前方へ半圓形をなして、お寅とお初とが居ならび、裁縫をしてゐる。末座のお初は半分體を正面の縁へ乗り出し、鴨居際に据わりながら、開け放つた障子に背を凭せかけ、左向きに俯向いた姿勢を取る。お寅もお初も年配は二十前後。

お政　お初や。其處の障子を締めておくれ。あんまりさらさらして上氣せるやうだ。

お初　ほんとにお暖かでございますね。立ち上つて、左の縁側の障子を締めて來る。今日はお仕事をして居りますと、何だか眠くなつて參りますよ。

お政　お前達を連れて一遍お花見に行かうかね。仲太郎が行きたがつて、毎日せびつて困るから。

お寅　お店の人達は、此の間多勢で出かけたんでございますつて。利三どんでも、庄どんでも、みんな眞紅に醉拂つて、踊りをおどりながら歸つて參りましたつけ。

お初　男は美しいわねえ。

三右衞門登場

三右衞門　お政居るか。聲をかけながら、右の襖を開けて、忙しさうに這入つて來る。

お政　何か御用でございますか。

三右衞門　着換への襦袢を出してくれ。體がねばねばして氣持が惡い。懷から手拭を出して、脇の下の汗を拭く。今日はいやに暖いな。馬鹿に手足のだるい日だ。

お政　お寅、六疊の簞笥の二番目の引出しに、旦那の御襦袢が這入つてゐるから、持つて來ておくれ。

お寅　畏まりました。襖より去る。

お政　あなた。今日お澄さんが、おきんを伴れて來るとか云ふ話ぢやありませんか。

三右衞門　緣側に彳み、兩手を背中に組んで庭を眺めつゝ。うむ。何でも今日は日が吉いから、連れて來ると云つたつけ。

お寅襦袢を持つて來る。

三右衞門　座敷へ上り、お寅の方へ背中を向けて着物を脱ぎ、襦袢を着換へさせて貰ひながら。お澄も承知して居るのだから、連れて來たら當分みんなと一緒に仕事でもさせて置くさ。今迄が今迄だから、ちッと堅儀に仕込んでやらないと、當人の爲めにもなるまい。着換へ終ると、長火鉢の左へ中腰に据わつて話し出す。お寅は元の席へ直る。

お政　彼の娘の事は、奉公人も大概樣子を知つて居ますし、それぢやあたしの氣が濟まないけれど、ま

あ暫く辛抱して貰ひませう。

三右衛門　當人だつて樂をしたいと思ふなら、今から内へ來たがる譯もないだらう。もと〱堅儀な女になりたいから、奉公させる氣で强つて引取つてくれと、斯う云ふ向うの口上なんだから、此方も其氣て仕込んでやるさ。

お政　お貞や、お初も其積りて、つまらない遠慮なんかしないやうにね。

お貞 お初　はい。

三右衛門　名前を呼ぶにも矢つ張今迄通り、おきんちやんと云はしたらいゝだらう。

お政　だけど、伸太郎があの通りの徒ら者だから、奉公人の積りておきんを打つたり蹴つたりしやしないかと思ふと、あたしや其れが苦になりますよ。もうそりや、必ずやるんですからね。此間だつて、まあどうでせう。お初の背中へ煮えくり返つた薬罐を投げつけたんでせう。もう少して大火傷をさせる所なんですよ。女中だらうが、店の者だらうが、氣に入らないとお構ひなしにいぢめるもんだから、庄吉なんぞ、大きな體をしておいおい泣き出すツて騷ぎなんですと。彼の子のお蔭て、内の奉公人は生傷の絶えた事がありませんよ。

三右衛門　ふゝん。（鼻先で輕く笑ふ。）徒らて困つたもんだな。今日はまだ學校から歸つて來ないのかい。

お政　えゝ、もう追ッつけ歸つて來るてせう。いつもお友達の子供を四五人も連れて來て、庭で鬼ごつこをするやら、座敷へ上つて來て芝居をするやら、そりや大變な騷ぎてすよ。遊ぶのも好いけれど、

まあ御覧なさい、部屋の四方を見廻す。此の通り壁でも唐紙でも障子でも、みんな穴だらけにして了ふんですからね。

三右衛門　ちつと戸外で遊ぶやうに云ひつけたらいゝぢやないか。

お政　それが彼の子はをかしいんですよ。内に居ると大威張りの癖に、外へ出ちやしどみッ貝て、からッきし、意久地がないんですから、なか〳〵戸外へなんぞ出るものですか。たまに遊びに行くと、直きに誰かにいぢめられて、めそめそ泣いて歸つて來ますよ。だから、學校の先生なんぞ、ちつとも彼の子の徒らを知りやしません。いつかも私が遇つたら、大人しくッて結構なお子さんですッて、褒めちぎつて居るんです。尤も感心に學校の成績だけは好いやうですけれど。

三右衛門　格別勉强もしないやうだが、學問の方はさう嫌ひでもないんだらう。まあいゝさ。十二や十三であまりいぢけて居ても困るから。

お政　外の奉公人なら兎に角、おさんに傷でもさせた日には、ほんとに私が中へ立つて弱りますよ。

三右衛門　子供の事だし、何も様子を知らないんだから、奉公人の積りで少しは無理も云ふだらうさ。店の者にしろ、女中にしろ、仲太郎に餘計な智慧をつけないやうに、お前からよく云ひつけて置くがいゝぜ。いづれ知らせていゝ時が來れば己が話して聞かせるのだから。

お政　さうですね。お前達も仲太郎に下らない事を敎へちや困るよ。

お初　はい。お賓と共に頷く。

お政　坊ッちやん、おきんちやんは實はあなたの姉様ですよ、なんて、隨分云ひかねないからね。

お寅　まさか、お上さん、大丈夫でございますよ。

三右衞門　どれ、伸びをしながら立ち上り、襖の彼方へ去る。

第二節

お政　仲太郎　お寅　お初　仲太郎の學校朋輩三人。

仲太郎、年齡十二三歲。色の白い、體格のきやしやな、神經質らしい瓜實顏の少年。紺盲目縞の筒袖の綿入に、小倉の角帶前掛を締め、學校の徽章のついた制帽を冠り、素足に雪駄を穿いてゐる。學校の歸りと見え、鞄を肩から左腋にぶらさげ、右手に清書の双紙を携へて庭の木戸口から駈け込む。その後より同じ年配の三人の子供も續いて這入つて來る。

仲太郎　唯今！　活潑に云ひながら、椽側に腰をかけ、鞄と草紙を座敷の中へ投げ込む。お ッ母さん、何かお菓子をおくんな。……君々、みんな此方へ來給へ。と友達へ應く。

三人の子供　小母さん、今日は。異口同音にお政に挨拶し、仲太郎とならんで椽へ腰をかける。

お政　仲太郎や、

仲太郎　え、なあに、腰かけたまゝ母を振り向く。

お政　なあにぢやありません。鞄やお双紙をこんな所へ投り出す人がありますか。そんなお行儀の惡い

事だと、學校の先生に叱られますよ。——今おッ母さんがお菓子を持つて來て上げますから、今日は戶外(おもて)でお遊びなさい。

伸太郎　あゝ、

お政襖の外に去る。

伸太郎　草履を脫いで、緣側に上る。僕はこれからお藏へ行つて、玩具箱を擔つて來るから、君達も一緒に來て手傳つてくれ給へ。

お寅　こわい目をして伸太郎を睨める。坊ちやん。今おッ母さんが仰つしやいましたでしよ。今日は戶外でお遊びなさいましつて。

伸太郎　だから皆(みんな)に手傳つて貰つて、玩具を持つて戶外へ行くんぢやないか。誰が內で遊ぶと云つたい。生意氣云ふない。いきなりお寅の肩を蹴る。

お寅　よろ〱と倒れながら、そら、また亂暴をなさいますね！

お初　それぢや、玩弄を持つて入らしッたら、戶外(おもて)でお遊びなさいましよ。

伸太郎　構はないからみんなお上りよ。

子供の一　あゝ、上つてもいゝかい。

伸太郎　構やしないつてば、大きな箱が三つも四つもあるんだから、君達みんな來て手傳つておくれ。

子供の二　よし來た！

子供の三　一、二、三！

子供三人、同時に椽へ駈け上り、仲太郎の後ろへついて、どや〳〵と襖の蔭へ馳せ去る。

第三節

お寅　お初　おしげ

おしげ、左右の手に菓子皿とお茶盆を持ち、子供等が開け放した襖の一方から這入つて來る。年齢五十一二歳の實直らしい老婆。

おしげ　坊ッちやんは？

お寅　今お藏へ玩弄を取りに入らつしやいました。

おしげ　おや、さう。正面の椽側へ菓子と茶を置き、お初と差向ひに鴨居際へ蹲踞る。

お初　ばあやさん、今日からおきんちやんが奉公に來るんですつて？

おしげ　さうだとさ。奉公だか何だかアテになるものか。半年も立つたら、内のお嬢様になり濟ます氣なんだらう。

お初　ほんとに其の氣なのかしら。

おしげ　其の氣に違ひないぢやないか。あんな自墮落な娘が堅儀な奉公をしたいなんて、誰が眞面目に受取

るもんかね。大體お澄さんと云ふ人が、なか〳〵喰へない女なんだから。

お寅　おきんちやんだつて、蟲も一匹殺さないやうな顏をしてゐるけれど、どうして油斷がならないんですとさ。たまにお店へ來ると、猫を冠つて、面の憎いほど利巧な口をきくぢやありませんか。

お初　それだのに又、内のお上さんはあんまり捌け過ぎて居らつしやるわね。

おしげ　全くだとも。彼の娘が嫁にでも行く時なら格別、今から引き取つて世話をするには當らないやね。たとへ旦那の血を受けて居たつて、籍が這入らないうちは、私や決してお孃樣とは云つてやらないから。

お寅　籍が這入つても、お孃樣とはちよいと云ひ難いわね。

お初　坊ツちやんもあたし達ばかりいぢめないて、ちつとおきんちやんをいぢめるといゝ。

おしげ　そりや今に直ぐ始まるさ。

お寅　好い氣味、好い氣味。器量の好いのを自慢にして、別嬪てございと云ふやうな顏をして居るから、鼻の頭でも引搔かれたら大騷ぎだらうね。

おしげ　冗談は兎に角として、お寅どんも、お初どんも、坊ちやんに餘計な事を喋舌らないでおくれよ。

お寅　誰が喋舌るもんですか。

お初　ばあさん、大丈夫ですよ。

第四節

仲太郎　三人の子供　おしげ　お寅　お初

四人の子供　やつしよい、やつしよい。仲太郎を先に立てゝ、大きな二個の玩具箱を二人宛にて肩に擔ぎながら、再び座敷へ戻つて來る。めいめい玩具の鎧を着たり、刀を佩びたり、鉢卷をしたりして居る。

仲太郎　玩具箱を一時にガラガラと座敷のまん中へ打ち撒け、裁縫の道具だの、反物だのを蹴散らかして、采配を振ひながら女中に命令する。おい、此處で戰さごつこをするんだから、みんな彼方(あつち)へ片附けておしまひ！

おしげ　そら、又そんな解らない事を仰つしやる。今日は戸外でお遊びなさる御約束でしよ。

仲太郎　いやだい、いやだい。

おしげ　いゝえ、おッ母さんの御云ひ附けですから、何と仰つしやつてもいけませんてすよ。第一、其處(そこ)邊(ら)を無闇にお歩きになると、針がありますから危なうございます。

仲太郎　危いから片附けろと云ふんだよ。何だい婆あ！グズグズ云ふとこれだぞ。玩具の刀を突きつける。

おしげ　そんな眞似をなすつても、ばあやはちつとも恐(こわ)かございませんよ。まあ、此れを御覽なさいまし、折角火熨斗(ひのし)を掛けた物を。こんなに皺だらけになさいましたね。宜ろしうございます。そんならもうお菓子も何も差上げませんから。蹴散らかした反物を揃へ、打撒けた玩具類を一々拾つて箱の中へ入れ始める。

仲太郎　おい、人が折角出した玩具を、何だつて收(しま)つちまふんだい。馬鹿、馬鹿。と怒鳴りながら、刀にておし

げを散々に打つ。

おしげ　此處はみんなが仕事をする所ですから、こんなに散らかしては置けません。打たれながら平氣で玩具を集めて居る。

仲太郎　よし、そんなら、斯うしてやる。いきなり刀を投げ棄てゝ火鉢の中の燒鏝を掴み取り、お重の襟元へ着けやうとする。

お貞　あれ、坊ちやん、飛んでもない。

お貞とお初、あはてゝ仲太郎の傍へ駈け寄り、後ろから抱き止める。

おしげ　仲太郎の見幕を見て仰天し、いきなりこてを奪ひ取る。まあ、坊ちやん何をなさるんです。此れて火傷をしたら、ばあやは死んて了ひますよ。

急に仲太郎は大聲を擧げて泣き出し、三人をつきのけて再び玩具箱を引くり返し、座敷中の物々手あたり次第に投げつけ蹴散らかして、死に物狂ひに暴れ廻る。三人の子供はアツ氣に取られ、暫く手持無沙汰て見物して居たが、やがて一同こそ〳〵と庭へ下りる。

子供の一　仲ちやん、それぢや又後て遊びに來るよ。

子供の二　左樣なら。

子供の三　あばよ。

三人逃げるやうに木戸口から出て行く。

おしげ　ほら御覽なさい。坊ちやんがあんまり解らない事を仰つしやるから、お友達がみんな歸つて了ひましたよ。

お寅　さあ、早くお友達の所へ行つてお遊びなさいまし。

仲太郎　いやだい、いやだい。お前が行つて、お友達を連れて來なきやいやだい。今度はお寅の頭へ跳びつき、髮の毛を散々に亂る。

お寅　あれエ！、坊ちやん御免なさい。勘忍して下さいよッ！

おしげ、お初、しきりに仲太郎を制して居る。

お政の聲　襖の蔭より、仲太郎！いたづらをすると、お藏の中へ入れて了ひますよ。

おしげ　そらおッ母さんが入らつしやいました。お藏へ入れられると大變ですよ。漸く仲太郎を欺し賺(だま)かして、庇(かば)ふやうに抱き締めながら、坊ッちやんは決してお徒(いた)なんぞなさいませんですよ。此の通り大人(おとな)て、御機嫌が宜しうございます。お寅どんも、お初どんも、早く其處を片附けてお了ひ。

お初　はい、はい。

お寅　まあ痛かつたこと。

兩人、座敷を片附けて再び仕事に取りかゝる。仲太郎は椽先のおしげの膝に腰かけて、菓子皿を眺めながら、まだシクシク泣いてゐる。

第五節

お政　仲太郎　おすみ　おきん　おしげ　お寅　お初

お政　おすみ　おきん登場

お政　おすみとおきんを案内して、襖を開ける。さあ、此方へお這入り。どうも此の通り散らかつて居て。

おすみ　御免下さいまし。

お政　さあ、さあ、ずつと此方へ。

お政は火鉢の左側へ、おすみ親子は右側へ据わる。おきんの服装はわざと質素に、銘仙の矢絣を着て髪を銀杏返しに結ふ。仲太郎は氣むづかしさうな顔つきで、じろ／＼とおきんの様子を見て居る。

おすみ　坊ッちやん、相變らず御機嫌で、結構でございますね。ばあやさんどうも御無沙汰を致しました。

おしげ　坊ちやん、ちよいと下りて下さいまし。仲太郎を膝から下して襖に据わらせ、改めて挨拶する。私こそ、つい、つい存じながら御無沙汰致しました。いつもお變りがなくつて結構でございます。

おすみ　有難う存じます。また此度は娘が、御厄介に成りますので、御承知の通りの不束者でございますから何分お頼み申します。

おきん　何卒ばあやさんお願ひ申します。お澄と共に叩頭する。

おしげ　いゝえ、私なんざ、もう年を取つて居りますから、却つて皆さんの御世話にばかりなるのでございますよ。

おすみ　お貞とお初に向ひ、あなた方にも、何分お願ひ申します。もう何でございますよ、仕事なども一向存

じませんのですから、皆さんの妹だと思召して、御遠慮なしにつけつけと仰つしやつて下さいまし。

おきん　どうぞ何分……母と共にお辭儀をする。

お初　いゝえ、私共こそ……お貞と兩人、丁寧に頭を下げる。

おきん　仲太郎を見て、愛嬌よく笑ひながら、　坊ちやん、此の頃は毎日お天氣で宜しうございますね。もうお花見に入らつしやいましたか。

仲太郎　まだ行かないの。大人しく椽側に据はり、陰欝な眼つきで頻りにじろじろと親子の様子を見る。

おきん　おや、それはいけませんね。御一緒に觀音様へお供致しませうか。

仲太郎含羞(はにか)むやうに笑ふ。

おすみ　今度おきんさんが御奉公に上りましたから、何卒可愛がつてやつて下さいましよ。

仲太郎默つて頷く。

お政　仲太郎はおきんちやんを覺えて居るかい。

おきん　お店へ伺ひました時に、二三度御目に懸りましたから、御存知で居らつしやいませう。

お政　さうかい、お前覺えて居るかい。

仲太郎　ちよいと頷き、稍暫くもじもじして。　去年も會つたし、今年のお正月も會つたよ。

おきん　あゝ、さうでございましたつけ。よく覺えて居らつしやいますこと。

おすみ　ほんとに物覺えが好くツて居らツしやいますことね。學校も大さうお出來になるさうぢやござい

ませんか。

お政　いくら學校で褒められても、內へ歸ると徒らばかりしますから、何にもなりませんよ。

おすみ　學校さへお出來になれば、少しぐらゐお徒をなすつても仕方がございません。……それでは私はもう御免を蒙ります。どうも皆さん、とんだお邪魔を致しました。

お政　まあいゝぢやありませんか。お構ひ申しませんけれど、御飯でも食べてゆつくりなすつたら。

おすみ　いゝえ、どう致しまして。手前共は夜が商賣でございますから、今頃からそろ〳〵忙しくなつて參ります。

お政　さうですか。それぢやあんまりお早々樣だけれど……立ち上つて、おすみを送り出さうとする。

おすみ　勝手に失禮致しますから、もう何卒此處で……いゝえ、それでは恐れ入ります。皆さん御免下さい。

お寅とお初は仕事をしながら、輕く會釋する。お政、おきん、おしげの三人、おすみを送つて退場。

第六節

仲太郎　おきん　お寅　お初　子供三人

仲太郞は緣側に臥ころんで、菓子を摘まんで居る。

お初　おきんちやんは十七だと云ふけれど、ませて居るから、十九か二十ぐらゐに見えるね。

お寅　いやに「坊ッちやん」とか何とか云つて、小憎らしいッたらないよ。好かない娘だねえ。

お初　ても彼の人は器量がいゝから仕合せさ。

お寅　坊つちやん、あなたおきんちやんがお好き？それともお嫌ひ？

仲太郞　好き。下を向いて、微かな聲で云ふ。

お寅　いやな坊つちやんですね。あんな人を好くんぢやありませんよ。

おきん座敷に戻る。

おきん　お寅の傍へ殊勝らしく兩手をつき。お寅どん、ちつとお手傳ひ致しませうか。一向氣が付きませんですから、御遠慮なく御用を仰つしやつて下さいまし。

お寅　はあ、もう直き仕事を仕舞ひますから、さうしたら此處を掃除して頂きませう。

おきん　畏りました。手持無沙汰に、ぼんやりと据わつて居る。

仲太郞は菓子を喰べて了ふと、鞄の中から讀本を抽き出して緣側に開き、再び臥ころんで高らかに朗讀し出したが、やがて、さも熱心さうに默讀し初める。

おきん　坊ちやん、御勉强でございますか。ほんとに大人で宜しうございますね。仲太郞の傍へ寄り添ひ、首を並べて讀本を覗き込む。

伸太郎　此れ何て云ふ字？　讀本の面を指しておきんに訊ねる。

おきん　私にお聞きになつても駄目でございますよ。坊ちやんの方が餘程よく御存知て居らッしやいましよ。

伸太郎　でも僕、此の字を知らないんだよ。

おきん　よくは存じませんが、其れは躑躅と云ふ字ぢやございませんか。

伸太郎　さう、有り難う。又教へておくれ。

おきん　私こそあなたに教へて頂きませう。

お初　坊つちやんはまあ、急に大人におなんなさいましたね。

子供三人再び登場。木戸口を半分開けて顔を出し、口々に叫ぶ。

子供の一　伸ちやん、まだ泣いてるの。

子供の二　用がなければ遊ばないか。

子供の三　戸外て鬼ごッこをしないか。

伸太郎　今日はもう遊ばないよ。子供の方を振り向きもせずに答へる。

お初　もうお掃除てすから、ちつと戸外て遊んて入らッしやいまし。

伸太郎は矢張默つて讀書してゐる。お寅とお初は仕事を片附け始める。

子供の一　それぢや又あした、左様なら。

子供三人、木戸口を締めて、バラバラと戸外へ駈けて行く。

お寅　勉强なんぞめつたなさらない癖に、坊ッちやんは、今日はどうかして居るよ。お初と共に裁縫の道具を抱へて立つ。それぢやおきんちやん、お掃除をお願ひ申します。

おきん　はい、畏まりました。

お寅、お初、おきん退場。おきんは箒木とはたきを持つて直ぐに戻つて來る。

おきん　坊ちやん埃が立ちますから、ちよいとお退きなすつて下さいまし。

伸太郎　あゝ。

伸太郎雪駄を穿いて庭に出て、櫻の木の下に蹲踞まつて又讀本を開く。

おきん　御勉强の御邪魔をして、相濟みませんね。

おきん掃除に取りかゝる。漸く日が暮れて、庭の面稍暗くなる。

第七節

伸太郎　おきん　利三郎

利三郎、左の櫻の木蔭から葛籠を擔いて庭へ歩み來る。臀を端折つて、麻裏草履を穿いて居る。

利三郎　おきんちやん、お前の荷物が屆いたぜ。葛籠を緣側に下ろして腰を掛ける。

おきん　おや、どうも憚り樣、掃除の手を止めて男の背後に立ち、蹴るやうに膝頭で其肩を突く。

利三郎　止しねえ、止しねえ、頤で仲太郎の方を示し、たしなめるやうな眼つきをする。

おきん　子供に何が解るもんかね。

利三郎　おきんちやん、今日は何時ごろ御いでになつたのか、一向存じませんでしたな。荷物が届いたので、漸く私は承知しました。お店の方にもたまに御用がございませうから、ちつとお顔をお見せなさいまし。嫌味らしく云ふ。

おきん　嘸々御邪魔でございませうが、此れからちよい〱伺ひますとも。——済みませんけれど、ちよいと手を貸して、荷物を彼方へ運んで下さいな。意味ありげな眼をする。

利三郎　よし來た。坐敷へ上る。

おきん、利三郎と一緒に葛籠を襖の彼方へ運び去る。

仲太郎は獨りになると、急に讀本を懐へ入れ、立ち上つて櫻の幹に凭れつゝ、二人の影を見送る。

お金、利三郎再び登場

おきん　右足を痛めたと見え、跛を曳いてる。おゝ痛かつた。御覧な、お前があんまり邪慳に押すから、葛籠の角でいやと云ふ程打つちまつた。

利三郎　庭へ下りて椽側へ腰を下ろす。もう別段御用はありませんか。

おきん　あゝ、ちよいと待つて。庭下駄を穿き、椽に腰かけて利三郎の右に居並び、耳元へ口を寄せて何かひそひそと囁く。時々仲太郎をちらりと眄めに見る。

仲太郎櫻の幹に凭れ、俯向いて佇みながら、折々おきんの様子を窃み見る。いつの間にかおきんの右足の小指先から、血が滲し

く流れ出して居る。

利三郎　女の呻きを聞きながら、ふと下を向いて足元を見、吃驚する。おい、お前の足から血が出てるぜ。

おきん　おや、道理であたしや痛い痛いと思つたッけ。ほんとに亂暴な人だつたらないよ。帯の間を搜りながら、お前さん、紙を持つて居ないかい。

利三郎　懷を搜る、さあ生憎己も持つて居ない。

仲太郎ひそかに懷より讀本を出し、頁を二三枚むしり取つて、二人の傍へ駈けて來る。

仲太郎　僕が紙を持つて居るよ。結はいて上げようか。おきんの足元に跪き、傷口へ紙片を卷かうとする。

利三郎　あわてゝ、仲太郎の手を拂ひ除けようとする。いゝえ勿體ない。紙さへ下さればそんな事をなさらなくつても宜しうございます。

おきん　まあ、利三どん、もう少し話があるんだから。仲太郎を抱き起さうとする利三郎の首たまへかぢりつき、又耳元へ口を寄せて、坊ちやん、どうも濟みません事ね。上の空に云ひながら、足を仲太郎に任せ、更に衛語の言葉をつゞける。

利三郎　うむ、うむ、頻りに頷く。そんなら明日の晩だな。

おきん　あゝ、きつとだよ。忘れると聽かないよ。漸く男を放す。坊ちやんどうも有り難うございました。まあ勿體ない。あなたに直して頂いちや、此の足が曲つて了ひますよ。

仲太郎、餘念もなく傷口へ紙を卷きつけた後、今度は庭下駄の血を拭かうとする。

おきん　いゝえ、もう其れで澤山でございます。仲太郎を抱き起す。

利三郎　坊ちやん、あなたは好い子だから、私達が内證話をしたなんぞつて、誰にも仰つしやらないで下さいよ。若し云ひ附けると、利三郎はあなたを淋しい所へ掠つて行つて、非道い目に遇はせますよ。

凄い眼をして睨める。

おきん　利三どんは恐い人ですから、云ふ事を聽かないと大變ですよ。

仲太郎　誰にも云ひ附けやしないよ。それからあのね、さつきお貞とお初が、おきんの惡口を云つて居たよ。

利三郎　何と云つて居りました？

仲太郎　生意氣だとか、何とかつて。

利三郎　へーえ、おきんと顏見合はせる。

おきん　此れだから子供は正直だねえ。

利三郎　あんまり睨まれないやうに用心しねえ。どれ彼方へ行かうか。

利三郎庭の左へ消える。

おきん　あ、それからちよいと、……利三郎の後を追うて去る。

仲太郎、血に染まつた讀本の紙片を悉く拾ひ上げて懐に入れ、緣先の柱に倚りかかつた儘、憧れるやうな眼つきで恍惚とおきんの後ろ影を見送る。

第三幕

第一場　三右衛門夫婦の居間
第二場　下總屋裏二階
第三場　同物置小屋

第一幕より一と月ばかり過ぎた四月下旬の或夜

第一場

三右衛門夫婦の居間――正面の右半分は床の間、左半分は押入。中に箪笥が列べてある。坐敷の左側の壁は腰の低い窓に斷られて、其れへ障子が嵌まつて居る。右側は襖。床柱の前に、長火鉢を縦に置く。其左右へ夫婦の相對して据わるべき場所に坐蒲團一對。坐敷の中央、程よき所へ置ラムプを立てる。

第一節

仲太郎　おきん

おきん　獨り押入の前へ据わり、五六枚の着物を疊んで、一々簞笥の抽き出しへ收めて居る。仲太郎左手の襖を開け、あたりを憚るやうにおづおづおきんの傍へ近寄る。一ヶ月以前に比べると、血色青褪め、手足が痩せて、恐ろしく陰欝になつてゐる。

仲太郎　小聲にて、おきん、僕に何か用があるの。

おきん　ゑゝ、濟みませんが、またお使ひに行つて下さいな。

仲太郎　利三どんの處へかい。

おきん　度び度びすみませんねえ。——坊ちやん、あなた鉛筆と紙を持つて來て下さいませんか。

仲太郎　あゝ。

おきん　誰かに見付からないやうにね。

仲太郎、足音を忍ばせて出て行き、罫引の西洋紙と鉛筆を持つて來る。

おきん　どうも憚り樣、ちよいと待つて下さい。

二三行すらすらと走り書きして紙を細く疊み、鉛筆と一緒に仲太郎へ渡す。

おきん　利三どんにね、此の鉛筆で裏へ返事を書いてくれろッて、そうッと賴んで下さいよ。あたしが此處に居るうちに、早く行つて入らつしやい。

仲太郎　直ぐに來るから、待つておいで。

仲太郎再び退場。五六分過ぎて戾つて來る。其間におきんは簞笥を始末して了ふ。

仲太郎　好い鹽梅に、獨りて臺所に立て居たよ。と返事を渡す。

おきん　（默つて手紙を受け取り、一通り讀み終ると、火鉢の中へくべる。）坊ちやん、御苦勞様でございました。ほんとにあなたは好いお子さんね。明後日（あさつて）は私がおしげどんの代りに、水天宮様へ連れて行つて上げますよ。

仲太郎　あ　きつとだよ。お前が居れば、おしげなんぞ居なくつてもいゝよ。——お前と僕と、それから利三どんも內證で連れて行かう。

おきん　さうしたら坊ちやんの好きな物を何でも買つて上げますよ。

仲太郎　また此の間のやうに、三人でお茶屋へ行かうね。

おきん　おほゝゝゝ。（低く嬌らしく笑ふ。）どれ、私はまだ御用がございますから。（立ち上がつて、後から附いて來ようとする仲太郎を振り顧り。）坊ちやん、あなたは此處に居らッしやいな、あんまり私にくッ附いて居らッしやると、何かの時に都合が惡うございますから。

おきん退場。

第二節

お政　仲太郎　おしげ

おしげ、おきんが去ると間もなく入り來り、胡散らしく部屋の中を步き廻る。

おしげ　坊ちやん、あなたはさつきから、此處にお獨りで居らッしやるんですか。

仲太郎　あ　、（曖昧に云ふ。）

おしげ　たさうきな臭さうございますこと、まさか火戯をなさりやしないでせうね。

仲太郎　あゝ。

おしげ　いやでございますよ、外のお徒と違つて、恐うございますからね。

（おしげ、暫くあたりを見廻した後、何事か決心したるものゝ如く、ぴたりと仲太郎の傍へ据わる。）

おしげ　坊ちやん、ちよいと其處へお据わりなさいまし。（儼然たる調子。）お話がございますから。

仲太郎　なあに、（微かに答へて、不承無精に据わる。）

おしげ　私はね、急に田舍の方に用事が出來ましたから、今晩お暇を戴いて、行つて參ります。尤もお宅の事が心配でございますから、明晩か明後日はきつと歸つて參りますよ。

仲太郎　ゆつくり行つておいで。

おしげ　有り難う存じます。就きまして、坊ちやんにお伺ひ致したい事がございますが、どうぞ隱さずに仰つしやつて下さいましよ。

仲太郎　うむ……

おしげ　あなたは何か、おきんの身の上に就いて、誰かからお聞きになつた事はございませんか。

仲太郎　（意外の表情。好奇心を起したらしく、キッとおしげの顏を見守る。）おきんの身の上つて、どんな事？

おしげ　（稍安心したやうに、）いゝえ、お聞きにならなければ宜しうございますが、此の先、若しおきんの身の

上について、誰がどんな事を喋舌つても、決して本當になすつちやいけませんよ。

仲太郎　氣遣はしげに、だけど、おきんの身の上に何か變つた事があるの。

おしげ　何も變つた事はございませんよ。

仲太郎　おきんはいつまでも内に奉公して居るのかい。

おしげ　えゝ、まあ當分は奉公するでございましよ。冷淡に云ふ。それからね、坊ちやんさつきあなたは臺所て、利三どんに何を渡して居らしたんです。

仲太郎　愕然たる様子。なんにも渡しやしないよ。

おしげ　いゝえ、嘘をおつきになつても駄目でございます。ばあやは蔭て見て居りましたから、ちやんと存じて居ります。

仲太郎　なんにも渡しやしないッてば。

おしげ　睨み付けるやうにして、そんな事はございますまい。

仲太郎　知らないよ、知らないよ。一生懸命に打ち消しながら、立ち上つて逃げようとする。

おしげ　まあ坊ちやん、お待ちなさいまし。手頸を捕へて、無理に引き据ゑる。一體あの手紙を頼んだ者は女でございますか、男でございますか、誰にも申しませんから、私にだけ、内證て仰つしやつて下さいまし。

仲太郎　……默つて俯向く。

おしげ　そんなら私が中てゝ見ますから、中つたら「うん」と仰つしやつて下さいましな。

伸太郎　………

おしげ　ほんとに剛情なお子さんですねえ。ばあやは坊ちやんのお身の上を思つて、お尋ねするのでございますから、ちよいと一と言、聞かして頂けませんか知ら。

伸太郎ますく下を向いて口を噤む。

おしげ　それぢや。どうしても聞かして下さいませんの?、困りましたねえ。……坊ちやん、あなたはかりそめにも此處の内の御主人でございますよ。其れが奉公人に頼まれて、手紙の使いをなさるなんて、そんな間違つた話がございますか。頼む人間も頼む人間ですけれど、あなたはあんまり意久地がおあんなさらない。此の頃は先のやうにお徒をなさいませんし、大人になつて結構だと存じて居りましたが、あんな眞似をなさる位なら、まだしも徒らの方が餘つ程始末がようございます。

お敏登場

お敏　スラリと襖をあけて、おしげや、お前今夜出掛けるなら、早くしないと遲くなるよ。

おしげ　はい、有り難う存じます。なあに田舍と申しましても川崎在でございますから、汽車に乘れば直ぐでございます。

お敏　伸太郎がどうかしたのかね。長火鉢の左に据わる。

おしげ　實は唯今、お叱言を申し上げた所でございます。

お敏　どうしたんだい。

おしげ　いゝえね、先程私が勝手許の暗闇に蹲踞んで居りますと、坊ちやんが利三どんを捕へて、頻りに何かこそこそ話をして居らッしるんです。どうも其の御樣子が、誰か女中に賴まれて、着け文の取り次ぎでもなさるらしく思はれるんでございますよ。ところが唯今いくらお伺ひ致しましても、覺えがないとばかりて、本當の事を仰つしやつて下さいません。

お敏　伸ちやんさうかい。誰に賴まれてそんなお使ひをしたのだい。別にお前を叱るんぢやないのだから、おッ母さんに教へておくれ。

伸太郎追ひ追ひと涙ぐむ。

お敏　お前に手紙を賴んだのは、内の人かい、それとも近所の人かい。

伸太郎　内の人ぢやないの。

お敏　それぢや近所の人だね。

伸太郎頷く。

おしげ　しかし、どうも私は内の者だらうと存じますよ。

お敏　だつて、まさか奉公人なら此の子に賴めやしないだらう。お前に心當りでもあるのかい。

おしげ　さあ、此ればかりは外の事と違ひますから、しッかりした證據がなければ、申し上げられませんけれど。

お敏　伸ちやん、近所の人ッて、一體誰だね。名前を云つてお聞かせ。

仲太郎、とうたうシクシク泣き始める。

お政　何もお前、泣かなくつてもいゝぢやないか。

おしげ　泣ッきなさらないて、本當の事をばあやに聞かせて下さいましな、いゝお子さんてございますこと。

仲太郎、大聲を擧げて泣き出す。

お政　それぢや、もういゝから彼方へおいて、此れから誰に賴まれても、そんなお使ひをするのぢやありませんよ。

仲太郎、泣きながら出て行く。

お政　內の女中の事てさへなけれや、此の話はまあ此處だけにして置かうよ、何も若い人をキズ者にさせるてもないからね。

おしげ　左樣てございますか。

お政　だが仲太郎は此の頃大さう元氣がないね、あんな子ぢやなかつたんだが、何處か體の加減ても惡いのか知ら。

おしげ　どういふもんてございますかねえ。手ても足ても傷々しい程お瘦せになりましてすよ。それに顏色のお惡い事ッたら。

お政　近々に、お醫者に見て貰ひませうよ。

おしげ　それが宜しうございますね。――さて、私は此れからそろそろ出かけると致しませう。お上さん、先程はまたいろいろお土産を有り難う存じました。

お政　いゝえ少しばかり。――それぢや、明日の晩か明後日歸つて來るんだね、お前が居てくれないと、内の方も忙しいから。

おしげ　はい、明後日迄には必ず歸つて參ります。

お政　あたしも兩國まで、ちよいと買物に行つて來なくッちや。火鉢の抽出しから紙入れを出して帶の間に挾み、おしげと共に立ち上る。

お政、おしげ退場

第二場

下總屋裏二階――舞臺左の奥に、藏造りの總二階。（二階の床は舞臺の床と同一の水平面にあり。）正面の窓に四枚の雨戸が締つて居る。窓の外は廣い物干し場が、舞臺の前方へ續く。二階の屋根の頂邊に火見櫓を設け、其れへ物干し場から梯子が通じて居る。

物干場の床下より瓦葺の平屋の一と棟が舞臺の右の端へ伸びて居る。瓦葺の後ろに、一段高く土藏の屋根、庭の立木の梢など見える。

陰暦晦日の星多き空。

第一節

仲太郎　おきん　利三郎

おきん、窓の戸を内より一枚密かに繰り開け、眞暗な二階の部屋から物干しへ這ひ出る。やゝ暫く周圍を見廻した後、梯子を攀ぢて火見櫓へ登つて行く。やがて仲太郎が一つ雨戸の隙間から物干しへ現れ、平屋の瓦葺の上へ飛び下りたかと思ふと、腹這ひになつて、物干しの床下へもぐり込み、其處にぢツと隱れて居る。

利三郎、二階の屋根の向う側から登つて來たと見え、ひよつこりと火見櫓へ現れる。

おきん　闇に透かして男を見ながら、低く呼く。利三どんかい。

利三郎　うむお前もう來て居たのか。大變待たせて濟まなかつたな。

おきん　なあに今來たところだよ。ひつたりと男に寄り添ふ。あゝ嫌だ、嫌だ。あたしや此處へ來てからもう一と月になるけれど、毎晩こんな思ひをして逢ふくらゐなら、二層倍、内に居る時の方がよかつたつけ。

利三郎　それ見なせえ。だから己の云はない事ちやない。何も酔興にこんな所で女中なんぞ働くには當らないぢやないか。綺麗な手足が汚れるだけでも勿體ねえ。

おきん　そんなうまい口をお叩きでない。

利三郎　だが、あんまり色氣のない話さ。世が世ならば私風情の及びもつかない、下總屋のお孃樣ともあらう者が。……

おきん　後生だからそれだけは止しておくれ。お孃樣でもお姫樣でも、あたしやお前の女房だよ。

利三郎　有り難い仕合せでございます。梯の欄杆に腰をかける。

おきん　利三郎どん好い加減にしないかね。止さないと往來へ突き落とすよ。

利三郎　どつこい、危ねえ。あわてゝ、欄杆から腰を上げる。今お前に殺されちや、犬骨折つて鷹に取られるも同然だ。

おきん　だけれどね、お前に心變りでもされたら、あたしや生かしちや置かないよ。

利三郎　それなら未だしも、お嬢様になり濟ました曉に、「下郎は口のさがなき者」て、ぽんと打ち首にされやしないかな。考へて見りや、どつちにしても己の命はあぶないものだ。

おきん　お前、そんな事を眞面目で云ふのかい。

利三郎　まあ、どうでもいゝさ。――時に物干しへ下りても大丈夫だらうか。

おきん　今夜は二階に誰も居ないの。此處は寒いから下へ行かう。先へ立つて、梯子を降り始める。

利三郎　眞暗だから、踏み外づしちやいけないぜ。

おきん　あいよ。

兩人、物干しに立つて、手すりに凭れつゝ喃々と語る。仲太郎は床下に身を縮めて、熱心に耳を澄ます。

利三郎　今夜は大さう靜かな晩だな。お上さんは居らッしやるのかい。

おきん　さつき女中達をつれて、廣小路へ買ひ物に出掛けたつけ。

利三郎　おしげどんは？

おきん　田舍に用が出來たつて、急に暇ヶ貰つて行つたよ。明日の晩か明後日の朝には歸て來るんだと。あたしや彼奴が大嫌ひさ。

利三郎　何だか煙つたい婆あだな。己も彼奴は癪に觸つて居るんだが、何しろ内の古顔だから、喧嘩をすると此方に損が立つばかりだ。

おきん　ところでね、利三どん、此の間の話ね。と云ひかけて、あたりに氣を配り、更に低い皺嗄れた顔へ聲となる。あたしや今夜がいゝと思ふよ。

利三郎　此の間の話つて？

おきん　今更になつてお恍けてないよ。ほら、男の耳へ口を寄せる。丁度おしげが居ないから、今夜が一番都合がいゝ。

利三郎　身の毛の竦つやうな風をする。其の話はもう少し待つてくんねえ。下手をまごつくとお前も己も命がないんだから。

おきん　いやだよ此の人は、此の間あれ程約束をしたのぢやないか。

利三郎　約束はしたが、ハッキリと受け合つた譯ぢやない。

おきん　そんなら、お前不承知かい。

利三郎　不承知ぢやないけれど、何もそんなに急く事はなからうがな。

おきん　いゝえ、お前と私の間柄が世間へパッと知れてからだと、餘計に嫌疑を受けるから、遣つてしま

ふなら今のうちだよ。

利三郎　しかし、兎に角大恩を受けた主人の子だらう……打ち萎れて云ふ。

おきん　此の場になつて、恩の義理のと愚痴をこばすお前の心が、あたしやつく／＼恨めしい。此れさへうまく行けば、お前もあたしも一足飛びに、大家の後繼になれるのぢやないか。

利三郎　だがおきんちやん、よく考へて見ねえ。うまく行つたら仕合せとして、若しも露顯をした日にはどうする氣だい。惡い事に限つて、しまひにきッと何處からか尻が割れて來るものだぜ。

おきん　今のうちなら誰が私達を疑ぐるものかね。それに彼の子には、いろ／＼内證を掴まれて居るし、追ひ追ひ分別がつき始めると、さうさう此方の道具には使はれて居ないだらうからね。

利三郎　内證と云つたつて、手紙の使を頼んだぐらゐが大した心配にもならないぢやないか。

おきん　それぱかりぢやないんだよ。さつきお前と私が路次で話をして居たのを、すつかり立ち聞きして了つたらしいのさ。彼の子は此の頃、始終あたしの後ばかり追つかけて居るんだからね。

利三郎　……腕組をして考へて居る。

おきん　あたしとおッ母さんとて旦那を欺して居る事も、みんな彼の子は聞いたらうよ。十三と云へば相當の話の解る年頃だもの。

利三郎　…………

おきん　利三どん、お前もう少しシッカリおしよ。彼の子の口から大事が洩れたら、二人共立つ瀬がな

いぢやないか。ほんとにあたしが可愛いと思ふなら、どうか決心しておくれ。

利三郎　……相變らず腕組をして溜息をつく。

おきん　そんなに考へて居るのなら、何もお前にお頼み申しません。あたし一人でも遣つて見せるから。つんと拗ねて、二階座敷へ去らうとする。

利三郎　おい、おい、ちよいと待ちねえ。

おきん　何さ。と再び戻つて來る。

利三郎　仕方がない、お前一人に罪を背負はせちや己の心が濟まないから、どうでも云ふなり次第にならう。

おきん　そんなら承知してくれるのかい。利三どん、濟まないね。惡い奴に引掛かつたと思つて、勘忍しておくれよ。

利三郎　今夜のうちと云つたところて、一體どういふ手筈にするんだ。

おきん　彼の子は私の云ふ事だと何でも聞いてくれるから、夜中にそうッと誘ひ出して、物置小屋へ連れて行かう。

利三郎　大丈夫連れて來られるかい。

おきん　おしげが居ないから安心さ。

利三郎　證據が殘らないやうに、よく氣を附けて貰はうぜ。

おきん　何て殺したらいゝだらう。

利三郎　刄物だと血が出て困るから、一層の事細紐て、な。屍骸は己が今夜のうちに裸にして行李へ詰めて、濱町河岸からおもりを附けて投げ込んで了ふ。

おきん　それぢや、きッとだよ。

利三郎　うむ、しかし、あんまり寢覺めがよかあねえな。――そんなら又あとで會はう。火見へ登つて行く。

おきん　利三どん、ちよいとお待ち。時刻は何時頃がいゝの。男の後を追うて櫓へ登る。

利三郎　さうだな、二時頃にしねえ。己も其時分に物置へ忍んで行くから。

利三郎火見を下りて屋根の向うへ消える。

第二節

仲太郎　おきん

仲太郎、二人が屋根へ登つた樣子を見計らひ、床下から物干しへ這ひ上つて、欄杆の隅にうづくまる。

おきん、利三郎に別れて、櫓から物干しへ下りて來る。

仲太郎　おきんかい。うづくまつた儘、聲をかける。

おきん　吃驚して、おや坊ちんやてすか、いつ此處へ入らッしやいましたの。

仲太郎　今、

おきん　何しに？

仲太郎　たつた獨て淋しいから、此處て考へ事をして居たの。

おきん　夜露があたると毒てございますから二階へお這入りなさいまし。

仲太郎　お前も這入んな。

おきん　えゝ、私も這入りますよ。實は先程洗濯物を置き忘れたものてございますから、それを取りに參つたのてございます。仲太郎を連れて、二階へ下りようとしたが、ふと思ひついて立ち止まる。あ、坊ちやん、坊ちやん。

仲太郎　なあに、

おきん　あなたは私の言ふ事を何てもお聞きになりますか。

仲太郎　あゝ聞くよ。

おきん　それてはね、今夜夜遲くね、お父さんにもおッ母さんにも內證て、私が好い所へ連れて行つて上げませうか。

仲太郎　あゝ。

おきん　其代り、此れは其の時迄誰にも仰つしやらずに居らッしやるんてすよ。

仲太郎　うむ、お前僕の部屋へ誘ひに來てくれるのかい。

おきん　左樣でございますね。どう云ふ都合に致しませうか知ら。——坊ッちやんは、今夜はおしげどんが居りませんから、獨りてお蒲團へお休みになりますの。

仲太郞　あゝ。おしげが居ない時は、僕はいつても、おッ母さんのお部屋の隣へ獨りて寢るよ。

おきん　そんなら、好い時分に起しに行つて上げますから、大人しく私のあとへ附いて入らッしやい。人が眼を覺ますといけませんから、お內を出て了うまて、決して一と言も口をお利きになつちやいけませんよ、戶外へ出たら、直ぐに私が好いお召し物を着せて上げますから、お寢間着のまんまて宜しうございます。——あなた、私が起しに參つたら、お寢恍けにならないて、早速起きて下さいまし。

仲太郞　僕は寢ないで待つて居るよ。

おきん　ては私が唯今申し上げた事を、きッとお忘れなさらないやうにね。寢間着のまゝて、口を一と言もお聞きにならないて、默つて大人しく私に附いて入らッしやるのよ。

仲太郞　うん、

おきん　おわかりになりましたか。

仲太郞　うん、

おきん　暫く無言にて、まじまじと少年の顏を見守る。坊ちやん、あなたは本當に感心なお子さんね。私の云ふ事は何ても聽いて下さいますのね。

仲太郞　思ひ切つたる樣子。僕はお前が死ねと云へば、何時(いつ)てゝ死ぬよ。

おきん　驚きを紛らす笑ひ、おほゝゝゝ、まあなんて可愛い事を仰つしやるのでせう。（勞はるやうに頭を撫でゝやる。）さあ、それでは下へ參りませう。

おきん、伸太郎を伴ひて二階へ這入る。

第三場

下總屋裏手物置小屋――舞臺左手の奥に母屋の勝手口。それより右、母屋の右側に片庇の物置小屋が附いて居る。小屋の入口に一枚の板戸。

舞臺前面右方に大いなる堀井戸、圓形の石の井戸側、流し。

舞臺左の端より板塀が左方の奥に連なり、母屋の背後へ伸びてゐる。

眞夜中。

第一節

おきん　利三郎

利三郎は頬冠りをして臀を端折り、小屋の板戸の前に跣足で立つ。おきん、粗い絣の袷にフランネルを重ね着して、伊達卷を締め、麻裏草履を穿く。少し髪が亂れて居る。利三郎と並んで、板戸の傍に佇む。

兩人とも小聲にて語る。

利三郎　さあ、見つからないうちに早く連れて來ねえ。

おきん　もう支度はすつかり出來たのかい。

利三郎　うん、道具は一切小屋の中に入れてある。

おきん　すぐに起して連れて來るから、お前も小屋に隱れておいて。

利三郎　よし、よし、頷いて小屋へ這入り、中から板戸を締める。

おきん、拔足差し足、板塀と母屋の間を左の奥へ去る。舞臺、稍暫く寂寥。

第二節

仲太郎　おきん　利三郎

おきん、仲太郎の手を引いて、再び戻つて來る。仲太郎は久留米絣の寢間着を着て、草履を穿いてゐる。

おきん　坊ちやん、お寒いのでございますか、大さう顫へて居らッしやいますね。

仲太郎　もう口をきいてもいゝのかい。

おきん　此處まで來れば大丈夫でございます。――小屋の前へ來て、密かに板戸を開け、眞暗な中を指さす。さあ、お寒うございませうから、ちよいと此の中へお這入りなさいまし、私が好いお召し物を着換へさせて上げます。

仲太郎　小屋の奥を覗いて見ながら、何だか人が居るやうだね。

おきん　いゝえ、誰も居りは致しませんよ。此の中へ這入つて、ちやんとお召し物をお着換へになりましたら、さつきお約束をしたいゝ所へ連れて行つて上げませうね。

仲太郎　僕は何だか恐くなつた。

おきん　何にも恐い事はございませんよ。ね、坊ちやんはよく言ふ事をお聞きになりますね。

仲太郎　お前も一緒に這入るのかい。

おきん　えゝ、えゝ、這入りますとも。誰が坊ちやんを置いてき堀にするもんですか。

仲太郎　這入らうとして躊躇した儘、入口の敷居上に後ろ向きに立つ。眞暗で恐いから嫌だあ。

おきん　退路を防ぐやうに、仲太郎の背後を擁して、利三どん、もう好いから遣つておしまひな。

忽ち小屋の奥で、どたんと云ふ物音。同時に仲太郎は暗中へ引き擦り込まれる。おきん、井戸端へ驅けて來て、警戒するやうに周圍を見廻す。小屋の中にて仲太郎の呻く聲。

利三郎の聲　小屋の中より、おい、もう濟んだぜ。

おきん　小屋の入口へ戻る。うまく行つたね。

仲太郎、屍骸となつて、小屋の外へ運び出さる。利三郎は頭、おきんは足の方を抱へて、仰向きに地面へ臥かす。利三郎の頬冠りをして居た手拭が、屍體の頸部へ殘酷にくいくびれ込んでゐる。

利三郎　小屋の中から、柳行李と細縛を持ち出す。早く其奴を裸にするんだ。

おきん　あいよ、着物を剝いで、赤裸々にする。

利三郎、おきんと共に痩せた屍體を行李に詰め、細紐を十文字にからげる。

利三郎　おい、其の着物を一と纏めにして、裏の古井戸の底へ沈めて了ひねえ。己は此れから、濱町河岸まで行つて來やう！　あゝあ、可哀さうに、飛んだ殺生をして了つた。

茫然と行李を見下ろして佇む。

おきん　お蔭で二人共樂が出來ると云ふものさ。こんな惡事をしたからには、お前も一生私を見棄てないでおくれ。

物凄く笑つて、媚びるやうに男の手を執る。

——（幕）——

○定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但清國を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但　新年號春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金口座は東京三十四番なり、これにより御送金の方は外に登記料一錢を加へらるべし、然らざれば送金額より差引くにより殘金は端錢となりて却て面倒となるべし

一郵券代用　必ず一割増の事

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢　（集金委托料及送達料）
一金五圓迄　金七錢

一受領證請求は必ず返信料金を要す

大正二年四月廿八日印刷納本
大正二年五月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　藤本兼吉

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一一九　電信略號ハンセイ

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE HANSEI-SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
大正二年四月廿八日印刷納本
大正二年五月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論五月號（第二十八年第六號）